15.05

中公文庫

ビートルズを聴こう

公式録音全213曲完全ガイド

里中哲彦
遠山修司

中央公論新社

CamScannerでスキャン

はじめに

英国北部の港町、リヴァプール出身の4人の若者がレコード・デビューしたのは、1962年10月5日のことだった。

彼らは「ザ・ビートルズ」と名乗り、メンバーのうち、ジョン・レノンは22歳、リンゴ・スターは21歳、ポール・マッカートニーは20歳、ジョージ・ハリスンはまだ19歳だった。グループの解散宣言をしたときも、メンバーは全員まだ20代だった。

このわずか7年半の活動期間のうちに、ビートルズは「かっこいい」の基準をすっかり変えてしまった。もちろんそれは、容姿やしぐさ、笑顔やユーモアのセンスの要素も大きかったわけだが、彼らの楽曲こそが「かっこいい」との印象を強烈に与えたのだった。

ビートルズがポピュラー音楽の地平を広げたとはいえ、それまでの音楽と無関係であったわけではない。ロックンロール、リズム＆ブルースはもちろんのこと、イギリス民謡、インド音楽、クラシックからも大きな影響を受け、その要素を貪欲に取り込むことで、独自のサウンドをつくりだしたのだ。

こうして彼らは斬新な作品を次から次へと生みだしたが、それを可能にしたのは、定型化された循環コードからの逸脱と、転調をもくろむ変拍子の意外性である。

従来の音楽的な「申し合わせ」をいともやすやすと超えるこ

CamScannerでスキャン

目　次

はじめに　3

1 **PLEASE PLEASE ME**
プリーズ・プリーズ・ミー　13

2 **WITH THE BEATLES**
ウィズ・ザ・ビートルズ　33

3 **A HARD DAY'S NIGHT**
ア・ハード・デイズ・ナイト
（ビートルズがやって来るヤァ！ヤァ！ヤァ！）　53

4 **BEATLES FOR SALE**
ビートルズ・フォー・セール　71

5 **HELP!**
ヘルプ！（4人はアイドル）　93

6 **RUBBER SOUL**
ラバー・ソウル　113

7 **REVOLVER**
リヴォルヴァー　133

8 **SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND**
サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド　153

9 **MAGICAL MYSTERY TOUR**
マジカル・ミステリー・ツアー　171

CamScannerでスキャン

10 THE BEATLES (THE WHITE ALBUM) 189
ザ・ビートルズ(ホワイト・アルバム)

11 YELLOW SUBMARINE 229
イエロー・サブマリン

12 ABBEY ROAD 237
アビイ・ロード

13 LET IT BE 261
レット・イット・ビー

14 PAST MASTERS VOLUME ONE 279
パスト・マスターズ Vol. 1

15 PAST MASTERS VOLUME TWO 305
パスト・マスターズ Vol. 2

あとがき――「私の好きな曲」対談 327

原題索引 341

邦題索引 345

CamScannerでスキャン

凡　例

◎アルバムについての基本データは、次の略号を用いて示した。
収録時間（Length）は Ⓛ
プロデューサー（Producer）は Ⓟ
録音スタジオ（Studio）は Ⓢ
ジャケット・デザイン（Cover Designer）は Ⓓ
ジャケット撮影（Cover Photographer）は Ⓒ
となっている。

◎曲についての基本データは、次の略号を用いて示した。
作者（Writer）は Ⓦ
録音日（Recorded）は Ⓡ
曲の長さ（Length）は Ⓛ
リード・ヴォーカル（Lead Vocal）は Ⓥ
となっている。なお、作者は姓、あるいは姓名を原語で示し、
ヴォーカルには4人のファースト・ネームを用いた。
（　）内はバッキング・ヴォーカルを示している。

CamScannerでスキャン

ビートルズを聴こう

公式録音全213曲完全ガイド

Ticket to The Beatles

The Complete Guide to the 213 Official Recordings

里中哲彦　遠山修司

A TALK ABOUT THE BEATLES' SONGS by TETSUHIKO SATONAKA and SHUJI TOHYAMA

CamScannerでスキャン

We thought that
if we lasted for two to three years
that would be fantastic.

2、3年もてばすごいなって、みんなそう思っていたんだ。

— Ringo Starr

CamScannerでスキャン

スタジオで再現されたライヴ・ステージ

ポピュラー音楽史に残る重要な一日といえば、このアルバムが録音された1963年2月11日。ここからビートルズの物語が始まった。ビートルズはこの日、アルバムに収録する10曲をおよそ10時間でいっきにレコーディングした。たった2トラックだったにもかかわらず、ビートルズはレヴェルの高いパフォーマーであることを証明したのだった。

「おおぜいの観客がビートに合わせて足を踏みならすようなライヴの雰囲気をつかむことはできないにしても、"小利口な"ビートルズになる前のサウンドをもっとも近いかたちで知ることができる音源」とジョンが語っているとおり、ライヴ感覚あふれるデビュー・アルバムとなった。イギリスのヒット・チャートでは、30週連続1位を記録。ビートルズの名をイギリス国内に知らしめた。

ビートルズが、現役時代に公式に発売した曲は、全部で213曲。解散後に発表された〔フリー・アズ・ア・バード〕や〔リアル・ラヴ〕などを含めると、公式発売曲は278曲。その大いなる遺産の最古層を占めるのがこのアルバムだ。莫大な埋蔵量を秘めた、原石としてのビートルズがここにある。

ジャケット写真は、当時のＥＭＩレコード本社ビルのバルコニーで撮影。新しい時代の到来を告げるかのような4人の笑顔がまぶしい。『青盤』の愛称で親しまれているベスト・アルバムのジャケットも、まったく同じ場所の同じ構図で、同じ写真家によって撮影されたが、メンバーどうしの不和状態が続いていた時期だった（1969年5月)。解散直前にここで顔をそろえたことは、彼らにとって感慨深いものであったにちがいない。

CamScannerでスキャン

1. I Saw Her Standing There

アイ・ソー・ハー・スタンディング・ゼア

Ⓦ McCartney / Lennon

Ⓡ 1963年2月11日 Ⓛ 2分52秒 Ⓥ ポール（ジョン）

里中 ポールによる「ワン、トゥ、ツゥリ、フォーア！」のカウントとともに、ビートルズのアルバムの歴史がはじまりました。いまなお人気のあるロックンロール・ナンバー。ミドル・エイト（サビ）のポールは、元気ハツラツ。あふれんばかりの若々しさを感じます。

Eメジャーの曲。初期のビートルズは、頻繁にこのキイで演奏している。〔プリーズ・プリーズ・ミー〕や〔オール・マイ・ラヴィング〕なんかもそうですね。

アタマのWell, she was just seventeen / You know what I mean（彼女は17歳になったばかり。何をいいたいかわかるだろ）は、「彼女はもう立派な女。アレができるってわけ」という意味。

解散後の1974年、マジソン・スクエア・ガーデンでおこなわれたエルトン・ジョンのコンサートに特別ゲストとして登場したジョンは、「僕を棄てた婚約者、ポールの曲をやります」と冗談をかまして、この曲を歌った。ジョンの、ポールに対する屈折した愛情を感じました。

遠山 テイク12の演奏が採用されましたが、カウントの声（ポール）だけは第9テイクからとられました。プロデューサーのジョージ・マーティンがライヴ感をだしたかったことがわかります。

知ってましたか、これ、ポールが16歳のときにつくったんですよ。You know what I meanの部分はジョンのアイディアですが、あとは基本的にポールの手によるもの。当時の練習場所となっていたポールの自宅（20 Forthlin Road, Allerton, Liverpool）で書かれ

CamScannerでスキャン

ました。〔オール・マイ・ラヴィング〕〔ワン・アフター・909〕〔ホエン・アイム・シックスティ・フォー〕などの名曲もここで生まれました。現在は、ジョンが幼少期を過ごしたミミ伯母さんの家(251 Menlove Avenue)とともにナショナル・トラストの管理のもと、一般に公開されています。

2. Misery

ミズリー

Ⓦ McCartney / Lennon Ⓛ 1分47秒 Ⓥ ジョン、ポール
Ⓡ 1963年2月11・20日

里中　ビートルズが前座をつとめたことのある女性歌手ヘレン・シャピーロ(当時16歳)のために書かれた曲。でも、歌詞が「暗すぎる」という理由で彼女のマネージメント・サイドに断られた。

「惨めだよ」(ミズリー)と歌っているけど、カラッとした陽気さがあふれていて、いかにも好青年の恋といったところ。Without her I will be in misery(彼女がいなけりゃ、惨めなままだよ)、なんて歌っていますが、避暑地でひと夏のロマンスを経験した、初々しい青年のつぶやきにしか聞こえない(笑)。

声質の違うジョンとポールが2人で歌っているんですが、一緒に歌うと、うまく融合して、まるで一つの声のように聞こえてしまう。ジョンがポールになり、ポールがジョンがなったような不思議な感じを受けます。まるで互いの声を"交感"しあっているみたい。

遠山　人気歌手のヘレン・シャピーロが、自分たち(ジョンとポール)のつくった曲を歌ってくれたら、創作活動に弾みがつくと考えて、公演先の楽屋でつくりはじめたようです。結局、そのツアーに同行していたケニー・リンチという男性歌手が録音

CamScannerでスキャン

(63年3月)することになった。ケニーは、レノン=マッカートニーの作品を最初に取りあげたアーティストになったわけです。それにしても、この時期、多忙だったはずなのに、他人のための曲までつくっていたとは驚きです。

おっしゃるとおり、「ミズリー」(惨めな気持ち)なんていっていますが、悲愴感がまったくないし、思いつめてもいない(笑)。失恋の痛手からすぐに立ち直れそうな爽やかな歌いっぷり。前奏でジャラーンと入り、途中でもアクセントをつけているピアノは、プロデューサーのジョージ・マーティンによるもの。あとでオーヴァーダビングしました。ほどよい隠し味になっています。

3. Anna (Go To Him)

アンナ

Ⓦ Arthur Alexander
Ⓡ 1963年2月11日 Ⓛ 2分54秒 Ⓥ ジョン(ポール、ジョージ)

里中　鼻にかかった素晴らしい歌声。まだ20歳そこそこなのに、すでに大人の色艶がある。"泣き"もお見事。ジョンはデビューのとき、もうすでに完全にできあがっていたんですね。天賦の才を感じる。疑う向きは、ジョン以外の歌手がこの曲を歌うのを聴いてみるといい。思わず、プッと吹いちゃいますね。比較の対象にさえならない。

歌詞の「僕」は、恋人(アンナ)にそっけないというか、恋そのものに冷ややか。You say he loves you more than me (君はあいつのほうがもっと愛してくれるという) / So I will set you free (だから自由にしてやるよ) / Go with him (やつと一緒に行きな)という利己的な歌詞にジョンは魅かれたのでしょうか。

はじめてこの歌を聴いたとき、for a girl を「フォー・ア・ガー

ル」ではなくて、「フォルガー」と発音しているのが、どことなく英国人のきちょうめんさを感じました(笑)。
遠山　アメリカのR&Bシンガー、アーサー・アレキサンダーが62年に発表した曲のカヴァー。全米のヒット・チャートで68位。そんなに有名な曲じゃなかった。でも、ビートルズの手にかかると、オリジナル以上の仕上がりになってしまう。オリジナルを真似るんじゃなくて、オリジナルが秘めている曲の力をうまく引きだしている。こういう曲を見つけだす、ビートルズの嗅覚には感心せずにはいられません。

それにしても、ビートルズが選ぶカヴァー曲って、ほんとうに幅広い。有名なものもあれば、よくもまあこんな曲を探してきたな、と感心するような曲まである。ロックンロールだけではなく、ミュージカルの挿入歌なども取りあげたりするんですから。若いころから、彼らは幅広いジャンルの音楽に触れ、かつそれを楽しんでいたということですね。

4. Chains
チェインズ

Ⓦ Gerry Goffin / Carole King
Ⓡ 1963年2月11日　Ⓛ 2分23秒　Ⓥ ジョージ(ジョン、ポール)

里中　リード・ヴォーカルはジョージ。初々しさが感じられます。というより、コーラスのジョンとポールが堂々としすぎているといったほうがいいのかな。やさしい2人の兄貴に支えられて、ジョージの声がはじめて披露された。ジョージ、19歳の春でした(じっさいは冬の寒い日だった)。

Chains(鎖)/ My baby's got me locked up in chains(あの娘は僕を鎖でしばりつけてしまった)が歌の出だし。「君のことが好きなんだけど、彼女の愛の鎖(Chains of love)でがんじがらめにされて

しまっている」とモテ男ぶりを嘆いている。若いジョージにふさわしい可愛い曲です。聴きどころは、ジョージ、ジョン、ポールの3人によるコーラス。絶妙なハーモニーにうっとりしてしまう。

遠山　録音の直前にレパートリーに加えられたこともあってか、ジョージはかなりナーヴァスになったようです。声に緊張が宿っている。3声コーラス、いいですね。ジョージがいちばん下、ジョンが真ん中、ポールがいちばん上です。見事なハーモニー。

オリジナルは、クッキーズ（ニューヨーク出身のガール・グループ）のヒット曲。ジョンとポールが敬愛するゴフィン=キングの作品です（キングとは、のちにシンガー・ソングライターとして有名になったキャロル・キングのこと）。オリジナルは女性ヴォーカル・グループによるものなのに、絶妙のアレンジで、まるで彼らのオリジナル曲のように仕上げている。

ビートルズはなぜガール・グループが歌う〔チェインズ〕をカヴァーしたいと思ったんでしょう。そもそも、自分たちが歌ったらこうなるという発想がどこからでてきたのか。結果、レコーディングしたカヴァー曲が、ことごとく彼ら自身の名曲になった。こんなところにもビートルズの怪物ぶりを感じます。

5. Boys

ポーイズ

Ⓦ Luther Dixon / Wes Farrell
Ⓡ 1963年2月11日　Ⓛ 2分24秒　Ⓥ リンゴ（ジョン、ポール、ジョージ）

里中　リンゴのヴォーカル。リード・ギターの間奏に入る直前に"All right, George!"と声をかけるノリのよさ。すると、ポール、リンゴ、ジョンが、叫び、叩き、弾く。ジョージもそれに負けじと、ギター・テクニックを披露する。ライヴ感がすごくあり

ますね。ソロになったリンゴは、まるでステージで隠居しているような、緊張感のないだらけたヴォーカルを披露していますが(失礼)、この〔ボーイズ〕は気合いが入っています。

遠山　60年代に人気のあったアメリカの女性グループ、シュレルズのヒット曲のカヴァー。4人の仲よし兄弟による演奏という感じ。ここまで聴いてきて、なにより僕が感心するのは、プロデューサーのジョージ・マーティンによる曲目構成。1曲目のリード・ヴォーカルはポール、2曲目はジョンとポール、3曲目はジョン、4曲目はジョージ、そしてこの5曲目がリンゴとくる。ファブ・フォー（すてきな4人）を紹介しようというもくろみがあったことがわかります。

下積み時代も、ビートルズはこの曲をよく演奏していました。「ヴァップシュヴァップ・ヴァプヴァプシュヴァップ」というコーラス部分が、「ボブウォーラー・ボブボブウォーラー」になって、観客も大合唱したそうです。ボブ・ウォーラーというのは当時、故郷リヴァプールのキャヴァーン・クラブでDJをつとめていた音楽通で、ビートルズを「フェノミナン」(現象)だと形容した最初の人。ポールは、99年の12月にキャヴァーン・クラブで演奏した際、ステージから「きょうは観客の中にボブ・ウォーラーがいてくれることがうれしい」と語ったほどの人物。

キャヴァーン時代にヴォーカルをとっていたのは、ピート・ベスト（リンゴの前のドラマー）。偶然にも、リンゴもロリー・ストーム＆ザ・ハリケーンズにいたころから、自身のレパートリーにしていました。それもあってか、ここでも抜群のノリですね。

6. Ask Me Why

アスク・ミー・ホワイ

Ⓦ McCartney / Lennon
Ⓡ 1962年11月26日　Ⓛ 2分24秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　これは、ジョンがほとんど書いた。ヴォーカル面から見ると、このころのジョンは、表現力の点においてポールを大きく引き離していますね。見事な歌いっぷりです。

I can't believe it's happened to me（こんなことが自分の身に起こるだなんて信じられない）とか、My happiness still makes me cry（幸せすぎて泣けてくる）などという歌詞は、愛に飢えていたジョンの内面を見るかのようです。

それにしても、ジョンのしゃがれた声、いいですね。憂いを含んだかすれ声がたまらなく魅力的。若い娘だったら、きっとジョンの"追っかけ"をやっていたと思う。だって、「アイ、アイアイアイ」だよ（笑）。失禁寸前。いや、失神寸前。こんなふうに耳もとでささやかれて、三角関数や微分積分の問題を解いていられるとしたら、若い娘の風上にもおけない。

遠山　では、風下においておきましょう（笑）。そう、これがジョンのヴォーカルなんです。ここから3枚目のアルバム『ア・ハード・デイズ・ナイト』にかけて、ジョンのヴォーカルはさらなる進化を遂げる。弱冠22歳の若造とは思えない色っぽさ、ワイルドさ、したたかさがあります。僕も当時のリヴァプールに住む若者だったら、男でも、間違いなく"追っかけ"に加わっていましたね。

62年のライヴでよく演奏していた曲。ジョンのお気に入りの曲でした。英国では〔プリーズ・プリーズ・ミー〕のB面として発表されています（63年1月11日発売）。ジョンのヴォーカルに魅了させられますが、ジョージのシンプルなギターと、リンゴ

CamScannerでスキャン

の軽快なリム・ショット（打面の皮を留めている輪状になった縁の部分を叩く打法）もいい隠し味になっています。そこへも耳を傾けてほしい。

7. Please Please Me

ブリーズ・ブリーズ・ミー

Ⓦ McCartney / Lennon
Ⓡ 1962年11月26日　Ⓛ 2分00秒　Ⓥ ジョン、ポール（ジョージ）

里中　タイトルについてひとこと。最初の please は「どうぞ」という意味の副詞で、次の please は「喜ばせる」という意味の動詞です……よく質問を受けるものですから。

さて、ジョージ・マーティンは、すごい若者たちを檻（おり）から放ってしまった、といまさらながらに思います。この歌には、ビートルズがビートルズになっていく萌芽があちこちにみてとれる。楽曲、ヴォーカル、コーラスはいうまでもなく、自分たちでつくった音楽をすっかり自分たちのものにしている。圧倒的な迫力の2分間です。

あろうことか、モノラル・ヴァージョンとステレオ・ヴァージョンで、ジョンは歌詞をそのつど変え、ステレオ・ヴァージョンでは「カモン、カモン」を笑いながら歌っている。それもこれから本格的にデビューしようというときにですよ。この天才歌手には、緊張とか正調とか、そういう観念がないんだろうか。

遠山　ジョンは「カモン、カモン」の前の部分の歌詞を間違えて歌っているんです。あの笑いは、照れかくしなんですよ。

1989年にアビイロード・スタジオでおこなわれたインタヴューで、ポールは「これはもともとロイ・オービソンのスローなナンバーみたいな曲だった。ところがジョージ・マーティンが、テンポを上げてもっと速く、と尻を叩くように演奏を急がせた

結果、このような形に仕上がった」と語っている。ジョージ・マーティンとビートルズによる最初の化学反応がこの曲だった。結果、英国で初めて全国規模の大ヒットになりました。

マージービーツのビリー・キンズリーも、「〔プリーズ・プリーズ・ミー〕をはじめて聴いたときの衝撃はいまも忘れられない。買ったばかりのレコードを擦り切れるほど何度もくりかえし聴いた」といっていました。こういう衝撃が、英国全土に走ったんです。

8. Love Me Do

ラヴ・ミー・ドゥ

Ⓦ McCartney / Lennon
Ⓡ 1962年9月11日 Ⓛ 2分19秒 Ⓥ ポール（ジョン）

里中 記念すべきデビュー曲。凡作、凡演と評する人がいるけど、そうかなあ。たしかにひとりで歌うときのポールの声は、ちょっとフラついているように聴こえますが、ジョンが歌に加わると哀切が漂いはじめ、歌の主人公は小心者ではあるが生真面目な男ではないか、と思えてくる。そう考えると、ポールの自信なさげな歌いっぷりもわかるような気がするんだけど。

Love me, do. はいわゆる命令文で、最後の do は動詞を強調するための助動詞。Do love me. といってもいい。つまり、「ぼくのことを好きになってよ、お願い」とか「愛してよ、ねえ」という意味になる。また、I'll always be true（ずっと誠実なままでいるよ）は、要するに「裏切ったりしない」とか「浮気なんてしない」という意味で使われている。

遠山 ポールが10代のころに書いた曲。ミドル・エイトをジョンが手伝っています。ジョージは、この曲がラジオから流れてくるのをはじめて聴いたとき、「体じゅうがゾクゾクした」そう

CamScannerでスキャン

です。

音源は、62年6月6日のピート・ベスト（当時のメンバー）がドラムを叩いたヴァージョン（『アンソロジー1』収録）、9月4日のリンゴのヴァージョン（『パスト・マスターズ Vol. 1』収録）、9月11日のアンディ・ホワイト（セッション・ドラマー）のヴァージョンの三つがあります。シングルではリンゴ版が使われましたが、アルバムのほうはこのアンディ版が使用されたため、リンゴは相当に傷ついたようです。

もともとジョンがリードをとっていましたが、ハーモニカを吹きながら歌うのは無理だとジョージ・マーティンが判断、急遽ポールに替わったんです。ポール本人も、緊張のあまり声が震えてしまったことを認めています。哀愁漂うブルージーなハーモニカは、元メンバーの故スチュアート・サトクリフに捧げられたものとされています。

9. P. S. I Love You

P. S. アイ・ラヴ・ユー

Ⓦ McCartney / Lennon
Ⓡ 1962年9月11日 Ⓛ 2分02秒 Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　いい曲ですね。楽器がなくても、メロディがなめらかだから、アカペラでもいけそう。圧巻は、ポールのリード・ヴォーカルに、ジョンとジョージのコーラスが流れるように絡んでいくところ。まさに黄金のトライアングル・コーラスです。まるで魔法を見るよう。ユニゾンをやっているかと思いきや、いつのまにか3声コーラスに変わる。ひじょうにテイストがいい。この曲を聴くと、早くからビートルズが一流のコーラス・グループであったことがよくわかります。このときのパーカッションは、またしてもアンディ・ホワイト。リンゴのヴァージョン

はあるのでしょうか。

故郷（もしくは家）に残してきたいとしい恋人（もしくは妻）を想う手紙調の歌詞。P．S．は postscript（追伸）の略。だから、P. S. I love you は「追伸――愛してるよ、君だけを」になる。

遠山　好きな相手への誠実な気持ちを丁寧に歌った、やさしさに満ちあふれた曲で、僕のお気に入りの一つ。ジョン、ポール、ジョージの順に入るコーラスにしびれます。シングル盤〔ラヴ・ミー・ドゥ〕のB面に収録されました。

ＥＭＩのオーディション用に急いで書かれた（62年）といわれていますが、まさにマジックですね。落ち着きのある軽快なリム・ショットを披露しているのは、セッション・ミュージシャンのアンディ・ホワイト。リンゴは淋しくマラカスを振っています。リンゴの腕に不安を抱いていたジョージ・マーティンの意向でそうなりました。リンゴは長いこと、このことを恨みに思っていたようです。残念ながら、この曲のリンゴ・ヴァージョンは存在しません。

10. Baby It's You

ベイビー・イッツ・ユー

Ⓦ Mark David / Burt Bacharach / Barney Williams
Ⓡ 1963年2月11・20日　Ⓛ 2分35秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　これ、〔雨にぬれても〕をつくったバート・バカラックが作曲してるんですね。荒々しいジョンの声がバート・バカラックの曲を歌うなんて……と思いきや、これが数あるカヴァー・ヴァージョンのなかでも指折りの出来ばえ。バラードを歌わせても、ジョンは、なんていうのか、声そのものによる感情表現で歌いきってしまう。この曲でも、ジョンのセクシーな声が際立っています。

CamScannerでスキャン

You should hear what they say about you（みんなが君のこと、何ていっているか知っているかい）/Cheat, cheat（嘘つき、嘘つき）とジョンが歌うと、Sha, la, la, la, la と可愛いコーラスが入る。なんともゾクゾクするというか、くすぐられますね。

遠山　原曲はバート・バカラック、マック・デイヴィッド、バーニー・ウィリアムズらによる共作です。〔チェインズ〕や〔ボーイズ〕同様、これもシュレルズの歌。このアルバムには、シュレルズのカヴァーが3曲も入っています。

録音は、63年の2月11日、夜のセッションもいよいよ大詰めを迎えるころ――あの名唱〔ツイスト・アンド・シャウト〕の前――つまり最後から2番目におこなわれました。

レコーディングの9日後、2月20日、プロデューサーのジョージ・マーティンは5人目のビートルとなって、はじめてチェレスタ（鉄琴のような鍵盤楽器）を演奏してビートルズに加わっている。マーティンはビートルズの「先生」のような立場でしたから、こうした"職域を超えた行為"もゆるされたというか、生徒たち（ビートルズ）にも歓迎されたようです。初期のビートルズにおけるジョージ・マーティンの貢献は大きなものでしたが、マーティンはビートルズ側に1ポンドすら要求しませんでした。

11. Do You Want To Know A Secret

ドゥ・ユー・ウォント・トゥ・ノウ・ア・シークレット

Ⓦ McCartney / Lennon
Ⓡ 1963年2月11日　Ⓛ 1分56秒　Ⓥ ジョージ（ジョン、ポール）

里中　ジョンの曲。幼いころに母ジュリアがよく歌ってくれたディズニー映画『白雪姫』（1937年）の挿入歌〔I'm Wishing〕からインスピレーションを得たようです。

ジョンによれば、「ジョージのために書いた曲」とか。地味な曲ですが、ビートルズらしい変調がほどこされていて、聴くほどに好きになりました。後半、2本のスティックを叩き合わせる拍子木打ちが聞こえてきますが、しかるべきときにしかるべき音が入っていると思わせます。リンゴ、やるね。

レノン=マッカートニーの曲をジョージが歌ったのは、これ以外では、3枚目のアルバム『ア・ハード・デイズ・ナイト』に収録されている〔すてきなダンス〕のみです。

遠山　結果的にジョージが歌うことになりましたが、ジョージのために書かれたというよりも、ジョンが「歌詞があまりに甘ったるくて気恥ずかしいから」という理由でジョージに歌わせたというのが真相のようです。シンシア（ジョンの先妻）が妊娠してしまったので、極秘のうちに結婚したジョンが、そのときの自分の気持ちを歌にした曲といわれています。1962年当時、ポップ・アイドルが結婚しているというのは人気に影響がでるので、隠しておく必要があったんです。だから「ぼくの秘密を知りたいかい？」なんです。

曲が書かれたのは、マネージャーのブライアン・エプスタインが所有していたリヴァプール市内のタウンハウス（36 Falkner Street）です。上品な石畳と赤い扉が印象的な、古き良き英国を思わせる落ち着きのある家で、いまは所有者は代わりましたが、現存しています。住むところに困っていたジョンとシンシアに、ブライアンが「ハネムーン代わりに」、その"隠れ家"を提供したんです。

12. A Taste Of Honey

蜜の味

Ⓦ Ric Marlow / Bobby Scott Ⓥ ポール (ジョン)
Ⓡ 1963年2月11日 Ⓛ 2分01秒

里中 正直、好きになれなかった。というより、がっかりしました。芝居がかった歌いっぷりにもなじめなかった。ジョンも気に入らなかったようで、A taste of honey を A waste of money (お金のムダ) と歌っていたこともあるようです (笑)。スタンダード曲をカヴァーするのはいいんです。でも、ロックンロール・バンドがこんな甘ったるい曲をやらなくてもいいじゃないかと……。いまは「これもビートルズ」と思えるようになりましたけど。それにしても、どういう意図でこの曲を選んだのでしょうか。下積み時代のハンブルクのクラブでは客のリクエストに応えるためにいろんなタイプの曲をやっていたといわれていますが、これもそんな曲の一つだったのでしょうか。

遠山 いろいろといわれています。ポールが、こうした曲も歌える、というところを見せたいと思ったからとか……。なにしろ、ポールは〔ベサメ・ムーチョ〕(『アンソロジー1』収録) まで歌える"よろずヴォーカリスト"なんですから。あるいは、採用に「ゴー」を出したのは、幅広い購買層を視野に入れたブライアン・エプスタインのアイディアかもしれません。しかし、いちばんの理由は、ポールが単純にこの曲が大好きだったからだと思います。デビュー前のハンブルクのステージでは、「ロックが好きではないお客さんのために」と前口上を述べて歌っていたそうですよ。当時、全身ロックンローラーだったジョンは、いやいやながら演奏していたようです。

オリジナルは、60年にブロードウェイで上演された同名のミュージカルのテーマ曲。最初はインストゥルメンタル (演奏の

み）だったのですが、歌詞を入れて歌ったレニー・ウェルチという黒人歌手のヴァージョン（62年9月）をビートルズがカヴァーしたんです。トニー・ベネットやベンチャーズなどもカヴァーしていますね。日本では、中尾ミエがカヴァーしました。

13. There's A Place

ゼアズ・ア・プレイス

Ⓦ McCartney / Lennon
Ⓡ 1963年2月11日 Ⓛ 1分49秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中 またしても、ジョンのヴォーカル。圧倒されます。ジョンが哀愁を帯びた声で、In my mind there's no sorrow（僕の心に悲しみはない）とつぶやくと、ポールとジョージが Don't you know that it's so（そうだよ、わからないのかい）と応じる。There'll be no sad tomorrow（悲しいだけの明日なんてない）と叫べば、ふたたび Don't you know that it's so（そうだよ、そのとおりさ）となぐさめる。この掛け合い、もうメロメロ（笑）。

もう一つ興味をひかれるのは、There is a place where I can go（僕には行く場所がある）/ When I feel low, when I feel blue（滅入っているときや憂鬱なとき）/ And it's my mind（それは僕の心の中さ）の部分。ジョンは、早くも自分の心と対話するという内観的な歌詞を書いている。ロック・ミュージックがこうした歌詞を持ったことはそれまでなかったのではないでしょうか。

遠山 63年2月11日、ビートルズはわずか10時間ほどでデビュー・アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』収録の10曲を録音しましたが、その記念すべき日の1曲目を飾ったのがじつはこの曲なんです。基本的にはジョンが書いた曲ですが、ポールによれば、ミュージカル『West Side Story』（1961年）の挿入歌〔Somewhere (A Place for Us)〕からインスピレーションを得てつくった

The Beatles were the first white artists to ever admit that they grew up and honed themselves on black music.

ビートルズは、ブラック・ミュージックを聴きながら育ち、
自分たちの技術を磨いてきたということを認めたはじめての
白人アーティストだった。

— Smokey Robinson

Rock 'n' roll meant it was real;
everything else was unreal.

ロックンロールだけが本物で、
ほかのものはすべてウソっぱちだった。

— John Lennon

CamScannerでスキャン

Beatles Album 2

WITH THE BEATLES

ウィズ・ザ・ビートルズ

1963年11月22日リリース

33分24秒　ジョージ・マーティン　アビイ・ロード・スタジオ　ロバート・フリーマン

SIDE A	SIDE B
1 It Won't Be Long	8 Roll Over Beethoven
2 All I've Got To Do	9 Hold Me Tight
3 All My Loving	10 You Really Got A Hold On Me
4 Don't Bother Me	11 I Wanna Be Your Man
5 Little Child	12 Devil In Her Heart
6 Till There Was You	13 Not A Second Time
7 Please Mister Postman	14 Money (That's What I Want)

CamScannerでスキャン

カヴァー曲がオリジナルを超える

このセカンド・アルバムがリリースされた日、アメリカでジョン・F・ケネディ大統領が暗殺された。いまふりかえると、世界のヒーローがアメリカ大統領からイギリスのロック・バンドになった象徴的な出来事のように感じられる。あらかじめそのことを知っていたかのように、アルバム・ジャケットの4人は、黒い服を着て、まるで厳粛に事態を受けとめているといった風情だ。

デビュー・アルバムと同様、オリジナル8曲、カヴァー6曲で構成。ソングライティングにおける才能を開花させながらも、ビートルズは依然として"黒っぽい"音楽に惹かれていた。6曲のカヴァー曲のうち、5曲がモータウンを中心としたブラック・ミュージックである。

ビートルズの音楽的なルーツのひとつにR＆Bがあった。特筆すべきは、そのどれもがオリジナルを超えるパフォーマンスになっていることだ。二重録音（ダブルトラッキング）の手法を取り入れて音に厚みが増したこともあるが、ひときわ際立っているのはジョンの色艶のある声だ。初期ビートルズにおいて、ジョンのヴォーカルがいかに大きな魅力であったかを、このアルバムは見事に伝えている。

4つの顔がハーフ・シャドウ（顔の半分が影）になっている写真は、ハンブルク時代の友人で女性写真家のアストリット・キルヒャーが使っていた手法である（撮影したのはロバート・フリーマン）。撮影はコンサートツアー中の1963年8月22日、英国南部の海辺の街ボーンマスのパレス・コート・ホテルの一室でおこなわれた。アイドルが微笑みを浮かべていないジャケットは、画期的な"事件"でもあった。

1. It Won't Be Long
イット・ウォント・ビー・ロング

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年7月30日 Ⓛ 2分11秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　不意を衝かれます。いきなり「イウォビロンイェー」という名の流星がぶつかってきたという感じ（笑）。「何だ、これは？」と思っているうちに、流れ星に連れ去られてしまう。コール＆レスポンス（掛け合い）のうまさにウットリしながら、思わず頬もゆるむ。

It won't be long till I belong to you は「もうすぐだね、君との生活が始まるのは」という意味ですが、二つのことに注目していただきたい。一つは、be long が belong と同じ発音になっているということ。もう一つは、It won't be long の後ろに Yeah! Yeah! Yeah! が入っているということ。Yeah! Yeah! Yeah! といえば〔シー・ラヴズ・ユー〕ですが、このころよりビートルズは Yeah! Yeah! Yeah! がたいそう気に入っていた様子。ポールの父親は「Yes, yes, yes にできないのかね」と小言をいったそうですが。

遠山　もともとはシングル用に書かれた曲ですが、思うような仕上がりにならなかったので、アルバムの1曲目にもってきました。それにしてもこの"つかみ"は衝撃的ですね。ジョンの声が炸裂しています。いまでこそ、いろんなミュージシャンがいきなりシャウトから歌いだすという手法をとっていますが、もとはといえばビートルズがやりだしたこと。これは大きな声でいっておきたい。

ビートルズの専売特許というべき"Yeah!"が、効果的に用いられたのもこの曲がはじめて。この表記もいまとなってはあたりまえのように使われていますが、当時の公序良俗に照らしていえば、大人たちが口にするような言葉ではありませんでした。

ジュリアン・レノンがデビュー・アルバム『ヴァロッテ』を出した翌々年（1986年）、日本公演でこの曲を熱唱しています。ジュリアンも好きだったんですね。また、かのニール・ヤングがはじめて人前で歌った曲もこれだったそうです。

2. All I've Got To Do

オール・アイヴ・ゴット・トゥ・ドゥ

Lennon / McCartney

1963年9月11日　Ⓛ2分01秒　Ⓥジョン（ポール）

里中　もう最初の6秒でノックアウト。ジョンの歌唱力はほとんど奇跡です。恋するせつない気持ちを、諦観と倦怠が入り交じった大人の声で歌いあげる。ジョンはこのとき22歳。願わくば、もっとはやくデビューさせたかった。

スモーキー・ロビンソンの影響を受けた曲だといわれています。スモーキーはスモーキー・ザ・ポエット（詩人スモーキー）といわれるほど、魅力的なメロディにぴったりの歌詞をつけるのを得意とした人。たとえば、スモーキーがつくった「ザ・トラックス・オヴ・マイ・ティアーズ」の歌詞には、随所にライム（*rhyme*）がちりばめられている。「ライム」というのは「韻を踏む」ことですが、そこでも face / place / trace / という単語を使って見事な歌詞をつくっている。

All I gotta do is whisper in your ear（僕はただ君の耳もとでささやくだけ）/ *The words you long to hear*（君の待ちわびている言葉をね）の部分では、ear と hear がライムしています。

桑山　ご指摘のとおり、スモーキー・ザ・ポエットを意識して書かれました。とはいえ、曲調のほうは、前作『プリーズ・プリーズ・ミー』でカヴァーしたアーサー・アレキサンダーの「アンナ」の影響を受けていますね。

ジョンはまた、アメリカというマーケットを意識して書いたとも語っています。米国の若者たちというか、彼らの生活様式をイメージして歌詞を書いたようです。出だしに Whenever I want you around / All I gotta do is call you on the phone（キミに会いたくなったら、電話するだけ）という歌詞がありますが、当時の英国の若者たちは、電話をそんなに気軽に使っていません。電話はまだ広く英国社会に浸透していなかった。英国の若者たちは、アメリカのまぶしいほどのきらびやかな生活に憧れていた。ジョンをはじめ、ビートルズのメンバーも例外ではありませんでした。これは、そんな時代の曲です。

3. All My Loving

オール・マイ・ラヴィング

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年7月30日 Ⓛ 2分06秒 Ⓥ ポール

里中　アメリカのＴＶ番組『エド・サリヴァン・ショー』（1964年2月9日）に出演して、生演奏でこの曲をやっているんだけど——しかも一曲目ですね——多くの人にそのパフォーマンスを観ていただきたい。ポールが素晴らしいのなんのって。ジョンの3連符を刻むリズム・ギター（リッケンバッカー325）と、間奏で披露するジョージのチェット・アトキンスふうのギター（グレッチ・カントリー・ジェントルマン）も、曲をイキイキさせるのに貢献しています。

歌詞は、家を離れなくてはならなくなった「僕」が、妻（恋人）に毎日欠かさず手紙を書くことを誓うというもの。All my loving, I will send to you（ありったけの愛を君に送るよ）とポールはやさしく軽快に、かつまた快活に歌っています。

遠山　ビートルズ時代もそうですが、いまもポールはライヴで

取りあげています。『オフ・ザ・グラウンド』を発表したあとの93年のワールド・ツアーから、ライヴではかならずといっていいほど歌っています。ジョンが「これは残念ながらポールの曲」といって悔しがったほどの名曲。

63年の5月の半ばから6月の初旬にかけて、ロイ・オービソンを迎えておこなった全英ツアーのあいだにつくった、とポールは述べています。メロディを最初につくって、そこに歌詞を乗せていくのがポールのやり方ですが、この曲だけはまず歌詞ができて、そのあとにメロディをつけたようです。

ここでは、ポールのひとり二重唱を聴くことができる。いわゆるダブルトラッキングと呼ばれている手法で、最初に録音された演奏を再生しながら、同じ歌詞をもう一度歌って重ねています。ダブルトラッキングは、ジョージ・マーティンたちがつくりだしたトリックで、声に厚みがでるので、ビートルズのメンバーはたいそう喜んだようです。

4. Don't Bother Me

ドント・バザー・ミー

Ⓦ George Harrison

Ⓡ 1963年9月11・12日　Ⓛ 2分26秒　Ⓥ ジョージ

里中　ジョージによる初のオリジナル曲。失礼ながら、完成度はあまり高くありませんね。歌詞がメロディにうまく乗っていない。

とはいえ、自分の曲が採用されて、ジョージはさぞうれしかったでしょうね。でも、これ以降、『ヘルプ!』の〈アイ・ニード・ユー〉までぷっつりと途切れてしまう。果たして、その間ジョージはどんな思いで過ごしたんだろうか。ジョンとポールという曲づくりの天才がいつも傍らにいるという心理状態を想

わないではいられません。曲を書かなかった、いや発表できなかったジョージを誰が責められるか。ジョージにいわせれば、それこそ Don't bother me.（僕にかまわないでくれ）だったのではないでしょうか。

遠山 相手がジョンとポールでは勝ち目はありませんね。ジョージ・マーティンは「もしジョージがビートルズにいなかったら、別のバンドのリーダーとしてどんどん曲を発表していただろう」とかばっています。

ジョージが病気を患ってツアーを休んでいる最中に書かれました。手紙で「なぜジョンやポールのように曲を書かないのか？」と尋ねたビル・ハリー（『マージー・ビート』誌編集長）への返答ともいわれています。

デビュー前には、〔イン・スパイト・オヴ・オール・ザ・デインジャー〕などの作曲者としてジョージの名がクレジットされたことがありますが、単独で書いたのはこれがはじめて。本人は、自伝『I Me Mine』のなかで本作品にふれて、「あれは僕が生まれてはじめて書いた曲だった。僕にも曲が書けるかどうかをためす練習の意味でね。だから、それほどすぐれた曲というわけではないんだよ」と語っている。でも、「まずまずの佳作」という評価を僕は与えたいですね。演奏についていうと、ポールのベースに注目していただきたい。その技巧がすでに「並」でないことがよくわかります。

CamScannerでスキャン

5. Little Child

リトル・チャイルド

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年9月11・12日、10月3日 Ⓛ 1分45秒 Ⓥ ジョン、ポール

里中　どうってことない平凡な曲だけれど、ジョンが歌うからこそサマになっている。曲が弱くても、自分が歌えばなんとかなると思っていたんでしょうね。じつに賢明な判断です。ほかの人が歌ったら、たんなるバブルガム・ミュージックとして一顧だにされることもなかったでしょう。

Little child (お嬢ちゃん) / Won't you dance with me (僕と踊ってくれないかい) という歌詞にも見えるように、女の子をダンスに誘う曲。little child は呼びかけの言葉で、「可愛い子ちゃん」とか「お嬢ちゃん」という感じ。もちろん歌詞に深遠さはまったくない。ジョンもポールも、短時間で「さっと書きあげた」ことを認めています。

演奏面で際立っているのは、やはりジョンのハーモニカ (ダビングして録音)。でも、ハーモニカを吹きながら歌えないから、これ、ライヴじゃできないよね。ライヴ向きの曲なのに。それにしても、初期のころ、ジョンはハーモニカをよく吹いていますね。

遠山　リンゴのために書かれましたが、リンゴが〔アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン〕を歌うことになったので、ジョンがリード・ヴォーカルを引き受けました。ということは、リンゴの歌は2曲もいらないと判断したことになります。あ、これは聞き流してください (笑)。

録音がよくないですね。というか、演奏にメリハリがない。ギターの音はほとんど聞こえないし。ピアノはポールが弾いていますが、精彩を欠いた演奏になってしまっている。ジョンの

ヴォーカルとハーモニカだけに頼っているという感じがする。
特筆すべきは、おっしゃるとおり、ジョンの力のこもったハーモニカ。初日に2テイク試みたものの、仕上がりが気に入らなかったので、ジョンは翌日また録音し直している。前作同様、このセカンド・アルバムでもハーモニカの印象が強いのですが、ハーモニカが入っているのはじつはこの曲だけなんですよ。

6. Till There Was You

ティル・ゼア・ウォズ・ユー

Ⓦ Meredith Willson
Ⓡ 1963年7月18・30日 Ⓛ 2分14秒 Ⓥ ポール

里中　ブロードウェイ・ミュージカル『ザ・ミュージック・マン』(1957年) の挿入歌。なぜ、またミュージカル・ナンバーを歌ったのか。これも、ポールが、ただ歌いたかったからなんでしょうが、ポールがジョンと違うのは、いや、ほかのロック・ヴォーカリストと異なるのは、こうしたジャズ・コードのスタンダードをいとも簡単に歌ってみせることですね。フィルムでの、もの哀しげな小犬が歌っているような表情もいい。
これは録音がいいですね。メリハリが利いていて、歌と合ったさまざまな楽器の音色が楽しめます。ジョージのガット・ギター、リンゴのボンゴにも耳を傾けていただきたい。
遠山　前作『プリーズ・プリーズ・ミー』で、年配者ウケのするスロー・バラード〔蜜の味〕が取りあげられたように、本アルバムではジャズのスタンダードが採用されました。ポールがこういったたぐいの曲を好んだ理由は、ジャズ・ミュージシャンだったお父さん (ジム) の影響でしょうね。聴いていると、なんとなくホッとしませんか。こうした曲も含めて、「これがビートルズ」なんです。

CamScannerでスキャン

歌もギターも、61年にペギー・リーがカヴァーしたヴァージョンを参考にしています。ポールはこの曲をハンブルク時代から歌っていました。

63年11月4日のロイヤル・ヴァラエティ・パフォーマンスでも、英王室の人たちを前にして演奏しています（『アンソロジー1』収録）。この曲で、「王室の人たちにも好かれるビートルズ」をうまく演出したわけです。ポールはこのとき、「僕たちも大好きなアメリカのグループ、ソフィー・タッカーが録音している曲」だと紹介して、客席に座る上品な年配者の笑いをとっています。ソフィー・タッカーは往年の歌手（女優）で、それをわざと「グループ」と勘違いすることで笑いを誘ったのです。

7. Please Mister Postman

ブリーズ・ミスター・ポストマン

Ⓦ Holland / Dobbins / Garrett / Gorman / Bateman
Ⓡ 1963年7月30日　Ⓛ 2分34秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　この曲、最初に聴いたときからずっと好き。モータウンの黒人女性グループ、マーヴェレッツのヒット曲（1961年）です。カーペンターズのカヴァー（75年）も好きだけど、ジョンさまのヴォーカルに匹敵するものはないでしょう。ざらついた声による熱唱。そして、ポールとジョージの、ドライヴ感のある美しいコーラス。オリジナルを超えていますね。ビートルズは、原曲がイミテーションに思われるほど、アレンジがうまい。

Mister Postman, look and see（郵便屋さん、よく見てほしいんだ）/ If there's a letter, a letter for me（僕宛ての手紙があるだろ）と切実な声で歌うジョン。ハンブルクでの修行時代、恋人シンシアからの手紙を待ちわびていたころの若いジョンをつい思い浮かべてしまう。なんだか胸が熱くなりますね。

CamScannerでスキャン

さて、電子メールよりも手紙を好む私としましては、世界各国の郵政省にこの場を借りてひとこと申し上げたい。この歌とエルヴィス・プレスリーの〔Return to sender〕(62年)を郵政事業振興のテーマ・ソングにしていただき、手紙文化の衰退に歯止めをかけていただきたい(笑)。

遠山 英国人にとって、郵便配達ものの歌といったら、誰でも知っている〔Postman Pat〕です。これもテーマ・ソングの一つに加えておいてほしい(笑)。

さて、マーヴェレッツのものは、『ビルボード』誌において、モータウン・レコード初の全米1位に輝いた記念すべき曲ですが、やはりジョンのヴォーカルのほうがいい。感情移入が並外れていて、ひじょうにスリリングに仕上がっている。これをA面の最後にもってきたアルバム構成もいい。

それから、カーペンターズのヴァージョンも素晴らしい。ビートルズのヴァージョンを聴いて触発されたそうですが、ジョンを向こうにまわして、あえて録音したとはあっぱれです。しかも、その出来ばえは見事というしかない。若者よ、カーペンターズも聴け。

8. Roll Over Beethoven

ロール・オーヴァー・ベートーヴェン

Ⓦ Chuck Berry
Ⓡ 1963年7月30日 Ⓛ 2分44秒 Ⓥ ジョージ

里中 いわずと知れたチャック・ベリーの名曲(1956年発表)。これ、最初のうちはジョンが歌っていたそうですね。でも、か細いジョージの歌声も、軽快なリズムと合っている。手拍子もライヴ感があって、「ビートルズはこんな感じでステージでも演奏していたんだ」と思わせます。気の利いた着想です。

CamScannerでスキャン

タイトルにもある roll over（転がる・寝返りをうつ）は、roll over in one's grave（墓の中で寝返りをうつ）という常套句から取られている。「死んだ人が墓の中で寝返りをうつ」ということは、「安らかに眠りにつけない」ということを意味している。だから、Roll over, Beethoven, and dig these rhythm and blues は「ベートーヴェン君よ、墓場で寝返りをうちながら、このR&Bを楽しんでくれたまえ」となる。もともと dig は dig one's own grave（みずから墓穴を掘る）のように「掘る」とか「（物を）掘りだす」ですが、俗語では「気に入る・楽しむ」（「ほしいものを掘り出す」から）の意味で用いられる。チャック・ベリーはその二つをうまく掛けて使っています。才気を感じますね。

遠山　チャック・ベリーを「偉大なロック詩人」と評するほど、ジョンは彼のロックンロールを好んでいました。57年から61年まではジョンの持ち歌でした。おそらく歌いすぎて飽きちゃったんでしょうね。62年からはジョージに任せるようになりました。

演奏に疾走感があるのは、やはり手拍子。この歌はビートルズのライヴでは欠かせないナンバーでしたが、観客もこんなふうに手拍子を打っていたんでしょうね。ジョージのヴォーカル、いいですね。オーヴァーダビング（同じメロディを2回歌っている）ですが、軽快さは失われていません。

エリック・クラプトンとともに来日したときの公演（91年）でも、この曲を軽快にフィーチャーして、うまく盛りあげていました。

CamScannerでスキャン

9. Hold Me Tight
ホールド・ミー・タイト

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年9月12日 Ⓛ 2分29秒 Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　デビュー前にポールが書いた曲。ライヴだったら楽しい曲になるんだろうけど、スピーカーをとおして聴くとあまりパッとしません。あるいはまた自分で演奏して歌えば愉快なんだろうけど、吟味の耳を傾けると、どうってことない平凡な曲に思えてしまう。このアルバムの「箸休め」という感じがする。ポールのヴォーカルも、キイが合っているようには思えないし……ごめんよ、ポール。

歌詞もたわいない。恋人に、Hold me tight（しっかり抱きしめて）と繰り返すだけ。お粗末。もともとは『プリーズ・プリーズ・ミー』に収録される予定だったとか。しかし、デビュー・アルバムでは採用されず、このセカンド・アルバムにおいて陽の目を見た。この曲がボツになったおかげで、〔ツイスト・アンド・シャウト〕という名品を鑑賞する幸運に恵まれたわけです。〔ホールド・ミー・タイト〕よ、ボツになってくれてありがとう（笑）。

遠山　61年のライヴでは、すでにやっています。63年ごろまでは繰り返し演奏していますから、ファンからのウケがよかったんでしょうね。全編をつうじて手拍子が入っていると、ライヴ感もあるし、温かみが感じられます。なんだか会場の熱気まで曲をとおして伝わってくるようです。

里中さんはあまり感心するところがないようですが、僕はマージー・ビート（リヴァプール・サウンド）のノリを感じます。たしかに、パワーのあるロックンロールでもなければ、イキのいいポップ・サウンドでもない。でも、控えめに、いろんな要素が混ざり合っている。その調合の按配とライヴ向きのノリに、僕

CamScannerでスキャン

はマージー・ビートのエッセンスを強く感じます。

余談ですが、ポールは同じタイトルの、まったく違う曲を、自身のバンド、ウイングス（Wings）の時代に発表しています（アルバム『Red Rose Speedway』収録）。

10. You Really Got A Hold On Me

ユー・リアリー・ゴッタ・ホールド・オン・ミー

Ⓦ William 'Smokey' Robinson　Ⓡ 1963年7月18日、10月17日
Ⓛ 3分00秒　Ⓥ ジョン、ジョージ（ポール）

里中　めずらしくジョンとジョージが二人だけで歌っている。スモーキー・ロビンソン＆ザ・ミラクルズのヒット曲（1962年に発表）。ジョージはスモーキーの大ファンだった。それで、ジョージはこれを、ジョン兄さんと歌いたかったのかな。ライヴでも何度も取りあげています。主旋律を歌うジョンに引っぱられて、ジョージがハーモニーをつけていますが、ツイン・リード・ヴォーカルといってもよいでしょう。

料理のしかたもうまい。原曲は気品を感じさせますが、ジョンとジョージは自然な感じで歌っている。これもオリジナルを超えていると思う。

歌詞は、You've really got a hold on me（すっかり君のとりこになっちゃった）というものですが、Hold me（抱きしめて）というフレーズのあとのリズム・ブレイクで、Tighter（もっと強く）と叫ぶアイディアは素晴らしい。映画『レット・イット・ビー』でも登場しますね。ジョージが歌いだすと、ジョンが嬉々としてすぐさま叫びだす。ほんとうに好きなんですね、この曲が。

遠山　このアルバムではカヴァー曲が6曲入っていますが、うち5曲がモータウンを中心とするブラック・ミュージックです。そして、この〔ユー・リアリー・ゴッタ・ホールド・オン・ミー〕

は代表的なモータウン・ソング。リードをとっているのはジョンですが、ハーモニーをつけるジョージがいてこその作品。知ってましたか、ジョンとジョージのデュエットは、この曲だけなんですよ。貴重な1曲。ジョージとやろうと思いついたジョンの勘が当たりました。

イントロの、ジョージ・マーティンのピアノに重なるジョージのギター。これもいい味を出しています。ポールはオリジナル・ヴァージョンで演奏しているベーシスト、ジェームズ・ジェマーソンのプレイをうまく真似ています。オリジナルが発表されて、わずか半年後にこうした見事なアレンジをしてみせたビートルズ。やはり、さすがというべきでしょう。

11. I Wanna Be Your Man

アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1963年9月11・12・30日、10月3・23日
Ⓛ 1分56秒 Ⓥ リンゴ（ジョン、ポール）

里中　レノン=マッカートニーの曲を、太い声でリンゴが歌っている。曲がシンプルなのは、ドラムを叩きながら歌えるようにと配慮されたのでしょう。

そういえば、ローリング・ストーンズもこの曲をやっていますね。こっそりいうと、ミック・ジャガーのほうがやっぱり上手（笑）。ビートルズ・ヴァージョンでは、ジョージのイントロのベンディング（弦を上下に動かして音程を変える演奏法で、日本では「チョーキング」といわれている）、そして間奏のギターがいいですね。とくにオクターヴ奏法（1オクターヴ離れた2つの音を同時に弾く演奏法）には耳を奪われる。

歌詞は、I wanna be your lover, baby（君の恋人になりたいな）/ I wanna be your man（君の彼になりたいんだ）ではじまり、ほとんど

CamScannerでスキャン

これに似たようなことを、同じリズムに乗せて繰り返しているだけ。シンプルにもほどがある（笑）。

遠山　これはジョンとポールが、ストーンズにプレゼントした曲。ストーンズのマネージャーだったアンドルー・オールダムに頼まれて、ストーンズの前で曲のアイディアを披露、まだ書きかけだったこの曲をその場でささっと仕上げてプレゼントした。結果、ストーンズのセカンド・シングルとしてリリースされた〔アイ・ウォナ・ビー・ユア・マン〕は、ＵＫチャート12位のヒットになった。二人の曲づくりの能力に大いに刺激されたミック・ジャガーとキース・リチャーズはそれ以降、オリジナルの曲づくりに励むようになりました。

ミックはいいノリで歌っていますね。でも、ミックはドラムを叩きながら歌っているわけじゃないから、そのハンディキャブを考えていただきたい。ということで、やっぱりリンゴの勝ち（笑）。〔ボーイズ〕と並んで、ライヴでもリンゴの主要レパートリーの1曲となり、66年の日本公演（武道館公演）のときも歌っています。

12. Devil In Her Heart

デヴィル・イン・ハー・ハート

Ⓦ Richard Drapkin
Ⓡ 1963年7月18日　Ⓛ 2分25秒　Ⓥ ジョージ（ジョン、ポール）

里中　まったく無名の、Ｒ＆Ｂの、黒人の、ガール・グループ、ドネイズが歌った曲のカヴァー。しかもヒットしなかった曲。よく見つけてきたなあ。

掛け合いがいいですね。二人の兄さん（ジョンとポール）が She's got the devil in her heart（あの娘の心には悪魔が棲んでいるんだぜ）とささやくと、リード・ヴォーカルの弟（ジョージ）が No, no,

this I can't believe（いや、そんなこと信じられないよ）とつっ返す。She's gonna tear your heart apart（きっとおまえの心を引き裂いてしまうよ）と耳打ちすれば、No, no, nay will she deceive（そんなことないって。だましたりするもんか）とつっぱねる。ジョージ、可愛いね。

遠山　ビートルズは多くの曲をカヴァーしましたが、その中でももっとも知られていない曲でしょうね。ビートルズは、マネージャーのブライアン・エプスタインが経営するレコード店ＮＥＭＳ（ネムズ）に頻繁に足を運び、新着のレコードを、それこそ片っ端から聴いていた。この曲は、そうしたなかで"発掘"されたものでしょうね。

ビートルズがカヴァーしなかったら、僕はドネイズに出会うことはなかったと思いますが、じっくり聴いてみると、このオリジナル曲（1962年発表）もなかなかいいんですよ。僕はどちらも好んでよく聴いています。じつをいうと、ビートルズがカヴァーした曲のなかで、僕はこの曲が〔ツイスト・アンド・シャウト〕に次いで２番目に好きなんです。

原曲は〔(There's A) Devil In His Heart〕ですが、ビートルズは〔Devil In Her Heart〕としています。歌詞も人称代名詞を変えて、男性の視点から歌っています。ジョージのリード・ヴォーカルが魅力的なのに加えて、ジョンとポールが絶妙のハーモニーで盛り立てている。ここが聴きどころ。

CamScannerでスキャン

13. Not A Second Time

ナット・ア・セカンド・タイム

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年9月11日 Ⓛ 2分05秒 Ⓥ ジョン

里中　「僕」をさんざん泣かした恋人が、気が変わって「僕」のところにのこのこ戻ってきた――そんな内容の歌詞。Not a second time（もう2度とごめんだよ）とジョンが繰り返す。憂いのあるメロディに、哀愁を帯びたジョンの声が寄り添う。

歌と同じメロディをピアノで単純に弾くジョージ・マーティン。ピアノとユニゾンになったシンプルなベースを奏でるポール。そして、堅実な8ビートのドラミングを印象づけるリンゴ。とりわけ、リンゴはこの曲で目立たないうまさを披露しています。

リンゴは控えめなドラマーですが、聴き込むにつれて、だんだんその卓越した技巧に舌を巻くようになった。リンゴはじつに器用です。

遠山　そこがデビュー目前に解雇されたピート・ベストとリンゴの違いですね。ピートはドラムが下手だったからクビになったという説がまかりとおっていますが、そうではありません。ピートのドラムはドスをきかせるようなバスドラと、やたらにシンバルを鳴らす「これぞロックンロール」というドラミングが売りもので、ハンブルクやリヴァプールで派手なステージをくりひろげていた当時のビートルズにはぴったりでした。じっさいマージービーツ（1963年にデビュー、66年に解散）のトニー・クレインやビリー・キンズリーは、「あの当時、どのバンドもピートのようなドラマーを欲しがっていた」と回想しています。しかし残念ながら、美しいバラードをつくるようになったジョンやポールの曲には合わなかった。

その点、シンプルかつ正確にリズムを刻めるうえに、〔She Loves You〕の曲の頭のところで見られるような、ちょっと遅れて入ってくる繊細なリンゴのドラミングは、ジョンとポールがつくる曲のテイストにぴったりで、ビートルズが向かおうとしていた音楽の方向性と合致していたといえます。

14. Money (That's What I Want)

マネー

Ⓦ Berry Gordy / Janie Bradford Ⓡ 1963年7月18・30日、9月30日
Ⓛ 2分47秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　Now give me money（さあ金をくれ）/ That's what I want（俺がほしいのはそいつさ）と歌っている。その歌いっぷりがすさまじく、思わず耳を奪われます。

原曲の I need money（金が要るんだ）を、ジョンは Now give me money（さあ金をくれよ）に替えて歌っていますが、「ふてぶてしいだろ。それがどうした。文句あるか」という感じでシャウトしている。オリジナルはちょっとラテン調ですが、こういう曲はこんなふうに歌うんだよ、といわんばかりに、ジョンは歌詞をうまくロックさせている。ジョンの絶叫が素晴らしいのはいうまでもないけど、またしてもジョージ・マーティンがピアノで曲全体をタイトに締めている。マーティンがいかにビートルズに信用されていたのかがよくわかります。というか、当人はもうビートルズの一員になった気分だったのではないかなあ。

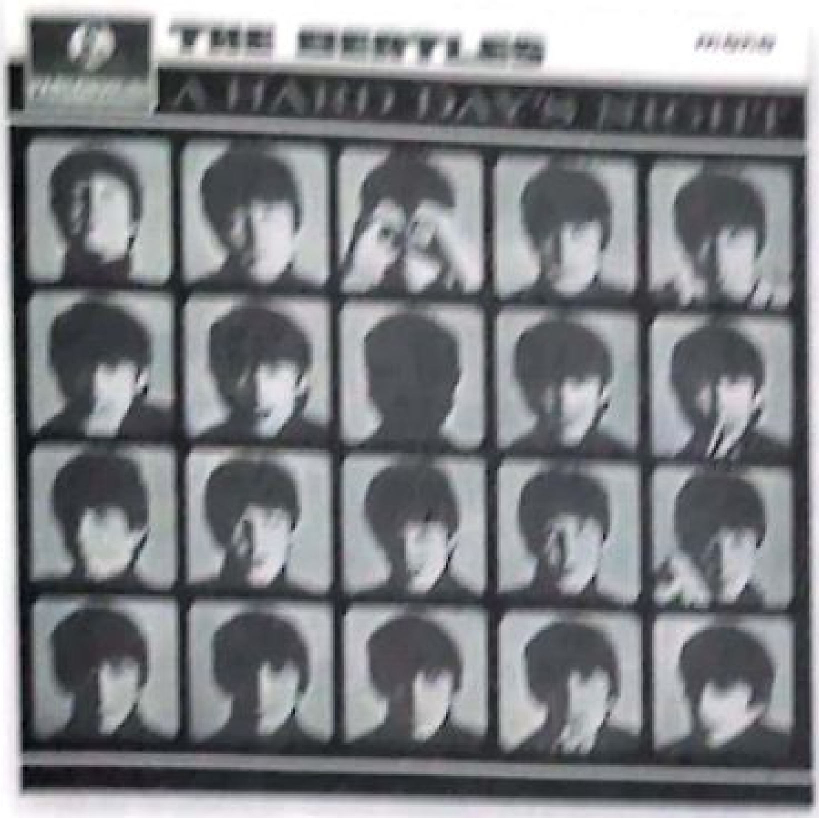
遠山　R&Bシンガーのバレット・ストロングがそこそこヒットさせた曲（1959年）ですが、ジョンのドスの利いたパワフルなヴォーカルと比べると、まるでオリジナルがどっちかわからなくなります。ジョージ・マーティンのピアノは、曲全体の箍（たが）をしっかりと締めていますね。それからポールとジョージのコ

CamScannerでスキャン

ーラスも荒っぽくて、ジョンのシャウトと並走している。

アルバムのラスト・ナンバーをジョンの歌で締めくくるという構成が前作からつづいていますが、これは、この時期のバンドを牽引していたのはジョンだという証しです。

ステージでは60年から演奏していますが、62年のデッカ（Decca Records）のオーディション（残念ながら不合格）でも演奏している。また69年、カナダのトロントでも、ジョン率いるプラスティック・オノ・バンドが取りあげている。デビュー前から解散後まで、ジョンはずっとこの曲が好きでした。



Beatles Album
3

A HARD DAY'S NIGHT

ア・ハード・デイズ・ナイト
（ビートルズがやって来る ヤァ！ヤァ！ヤァ！）

1964年7月10日リリース

30分13秒　ジョージ・マーティン　アビイ・ロード・スタジオ　ロバート・フリーマン

SIDE A	SIDE B
1 A Hard Day's Night	8 Any Time At All
2 I Should Have Known Better	9 I'll Cry Instead
3 If I Fell	10 Things We Said Today
4 I'm Happy Just To Dance With You	11 When I Get Home
5 And I Love Her	12 You Can't Do That
6 Tell Me Why	13 I'll Be Back
7 Can't Buy Me Love	

CamScannerでスキャン

燦然と輝くソングライティングの才能

初の主演映画『A HARD DAY'S NIGHT』のためにつくられた作品集。邦題は『ビートルズがやって来る ヤァ！ヤァ！ヤァ！』だった。このタイトルは、当時日本ユナイト映画に在籍していた水野晴郎（のちに映画評論家）が、ちょうど同じころに日本に入ってきた宣伝用の短編フィルム『ビートルズ・カム・トゥ・タウン』のタイトルと間違えてつけてしまったもの。「ヤァ！（イェー！）」を3回繰り返しているのは、〔シー・ラヴズ・ユー〕を意識してのことと思われる。

すべてオリジナル曲で構成。うち10曲をジョンがつくった。ジョンの曲づくりの才能と声の魅力が爆発したアルバムといってよいだろう。残りの3曲はポール。恋人のジェーン・アッシャーからインスピレーションを感じて、いまもなお愛される名曲をものにした。とかく映画との関連において語られることが多いアルバムだが、ソングライティングの才能を高く評価するファンもいて、「隠れた名盤」といわれている。

4トラックで録音された初のアルバム。「ひとつのトラックが気に入らなければ、全体に手をつけず、そこだけ手直しすれば済む」（ジョージ・マーティン）ので、ベーシック・トラックが録れたら、あとは残りのトラックに何度でも"上書き"することが可能になった。これによって複数の音源が組み合わされ、ビートルズのサウンドに幅と奥行きがもたらされることになった。

多くのバンドが進歩よりも現状維持を望んで人気を衰退させたが、ビートルズはミキシングやアレンジに興味を示すことで、荒削りなロックンロール・バンドから、アーティスティックなロック・バンドへと変貌してゆくのであった。

1. A Hard Day's Night

ア・ハード・デイズ・ナイト

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1964年4月16日 Ⓛ 2分29秒 Ⓥ ジョン、ポール

里中　イントロの「ジャーン!!」は衝撃的でした。ジョージの12弦ギター、ジョンのアコースティック・ギター、ジョージ・マーティンのピアノを一斉に鳴らした音。ビートルズの楽曲にくわしいチャック近藤氏によると、コードはGsus4-7らしい。奇抜というものをスタイリッシュに変容する力を、ビートルズはすでに内包していましたね。

とても疾走感がある。聴いているほうは、あれよあれよという間に連れ去られてしまう。ジョンとポールのリードが入れ替わるところは、スリル満点の快走を楽しむ気分。また、ジョージによるエンディングのアルペジオは、きらびやかな流星の尾のよう。

歌詞はというと、これが笑える。a hard day's... ときたら、ふつうはa hard day's work（きつい一日の仕事）を連想しますね。ところがリンゴは、「きつい一日だった」と思ったとき、すでにあたりが暗かったので、後ろにnightをくっつけてIt's been a hard day's night.（きつい一日の夜だったなあ）といってしまった。これが周囲に大ウケ。言葉の慣習を無視したリンゴの言葉づかいは、ジョンに「リンゴイズム」（リンゴの語法）と名づけられるようになった。結果、ジョンは〔ア・ハード・デイズ・ナイト〕という名曲をつくることができた。

遠山　ビートルズ初の主演映画の主題歌で、映画のオープニングとエンディングで使われています。映画の冒頭は、ビートルズがファンから逃げるシーンで始まりますが、バックに流れるこの曲とひじょうにマッチしていて、多くの人たちに鮮烈な印

CamScannerでスキャン

象を与えました。撮影はロンドンの地下鉄メリルボーン駅の横の路地（ボストン・プレイス）でおこなわれましたが、いまも残っているので、ぜひ疾走してみてください（笑）。

自分がつくったパートは自分が歌う、というのがジョンとポールの暗黙の取り決めでしたが、この曲ではポールが歌っている When I'm home... の部分もジョンがつくりました。

2. I Should Have Known Better

恋する二人

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年2月25・26日 Ⓛ 2分41秒 Ⓥ ジョン

里中 64年2月25日、アメリカで大成功を収めたビートルズは、帰国してすぐこのアルバムのレコーディングを開始します。この曲も初日に録音されました。で、その日はたまたまジョージの21歳の誕生日。いやあ、若いね。ジョンだって、まだ23歳。

多忙な日々のなかでつくりだされたこの曲は、"やっつけ仕事っぽい"感じがしますが、ジョンの若い魅力のほうがまさっています。ジョンは、声自体にせつなさを宿しているでしょ。だから、明るい曲を歌っても、どこか哀愁をひきずってしまう。明るさのなかの暗さ、喜びのなかの悲しみ。実人生の体験やら記憶やらが、心情となって声に乗りうつったよう。

この曲を聴くと、声に艶があるだけでなく、音域もかなり広いことがわかる。And when I ask you to be mine（僕のものになってほしいと言うと）/ You're gonna say you love me too（君も僕を好きだと答えてくれる）の高音のところにはしびれますね。

遠山 ジョンの元気のいいハーモニカに導かれる軽快な曲。それから、「オーオゥ」とか「ハハハーン」など、ジョン独特の節まわしも登場する。

映画では、いたずら好きのポールのおじいちゃんを閉じ込めた列車の貨物車両でトランプ遊びに興じている場面で使われている。ジョンが犬の頭をなでるところ、それから"ポールのおじいちゃん"の横に座ったパティ・ボイド（のちのハリソン夫人）が髪で口もとを押さえながら無邪気な笑顔を見せるカットがいい。映画の最後のコンサート・シーンでもこの曲が流れますが、このときのジョージの、12弦ギターを弾きながら脚を小刻みに動かすしぐさがたまらない。アルバムに収録されたジョンの声はダブルトラッキングで録音されていますが、映画ではジョンとポールの2人で歌っています。

3. If I Fell

恋におちたら

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1964年2月27日　Ⓛ 2分18秒　Ⓥ ジョン（ポール）

里中　この曲で注目すべきは、ジョンとポールの二重唱。楽器が何一つなくても、聴きごたえがあります。というか、1964年の段階において、彼ら二人はソングライティングのコンビとしてだけでなく、デュエットの歌い手としても最強だったのではないでしょうか。聴いていて、しばし陶然となるときがある。ジョンとポールのヴォーカルは、1本のマイクで録音している。お互いの呼吸をうまくはかっていたんですね。これは仲のよい二人じゃないとなかなかできないこと。

If I fell in love with you（僕が君と恋におちたら）/Would you promise to be true（裏切らないと約束してくれるかい）という歌詞に見えるように、恋に臆病な自分の気持ちを告白している。

遠山　複雑なコード進行と予期せぬ転調を駆使して、繊細でメロディアスなバラードをつくりあげている。驚嘆に値する作曲

能力です。それを彼らはさりげなく歌っている。しっとり聴かせてくれます。激しいロックンロールだけでなく、バラードも歌えるのがジョンとポールの強み。僕はうっとりとしすぎて、しばし思考が停止したことがあります。ほんとうに心を奪われるメロディです。

また映画の場面の話になってしまいますが、フロア・ディレクターにドラムを触られてご立腹のリンゴを、なだめるように茶目っ気たっぷりに歌い始めるジョン。そして、それに合わせて演奏を始める3人。すると、不機嫌にドラムを叩きはじめたリンゴの顔に明るい笑みが戻る……。この場面に象徴されるように、ビートルズって、ほんとうに仲のいいグループだったんですよ。当時のスタッフに取材すると、口々に「彼らはほんとうに仲がよかった」っていう。

ビートルズはこのむずかしい曲をライヴでも取りあげている。その様子は『ザ・ビートルズ・スーパー・ライヴ！』(The Beatles at the Hollywood Bowl) で聴くことができます。

4. I'm Happy Just To Dance With You

すてきなダンス

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1964年3月1日　Ⓛ 1分55秒　Ⓥ ジョージ（ジョン、ポール）

里中　ジョージもいい歌をつくったなあと感心していましたが、あとでレノン=マッカートニーの曲だと知ってがっかりしました。でも、ジョージらしく、小ぢんまりとうまくまとめています。もうちょっと感情を込めて歌ってもいいと思うけど……。ジョンはのちに、みずから歌う気になれなかったと発言している。歌詞が子どもっぽくて、自分が歌うほどの曲じゃないと思ったからでしょうかね。There is really nothing else I'd rather do（ほ

かにしたいことなんて何もない) / 'Cause I'm happy just to dance with you (君と踊っているだけで幸せなんだよ) というような無邪気な歌詞。

オーゥオゥというジョンとポールのコーラスもいいけど、ジョンによるリズム・ギター (リッケンバッカー325) のストロークも印象的です。単純だけど、ノリがいい。

遠山　「日曜日は休み」と決めていたビートルズが、はじめて日曜日にレコーディングした曲。翌日3月2日から映画『ハード・デイズ・ナイト』の撮影が始まる予定だったので、映画で使う曲のレコーディングを終えておきたかったのでしょう。この日、ビートルズはこれに加えて、〔ロング・トール・サリー〕と〔アイ・コール・ユア・ネーム〕の3曲を収録しています。

このアルバムのなかで、唯一ジョージがリード・ヴォーカルをとる曲。ダブルトラッキングで歌を重ねている。ジョンのギターがいい。聴いているだけで、なんだかウキウキしてきます。

映画のなかでは、ビートルズがこの曲をスタジオ演奏しています。バックには3匹の虫が飾られていることにも注目。カブト虫 (beetle) を意識しての演出でしょう。日本盤のアルバム『ビートルズがやって来る ヤァ! ヤァ! ヤァ!』のジャケット写真は、この曲を演奏しているときのもの。

5. And I Love Her

アンド・アイ・ラヴ・ハー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年2月27日　Ⓛ 2分28秒　Ⓥ ポール

里中　ポール自身、「はじめて納得のゆくバラードをつくることができた」と語っているとおり、ビートルズの初期を代表する美しいバラードに仕上がっている。

CamScannerでスキャン

ポールの甘ったるくないヴォーカルも聴きごたえがあるけど、ガット・ギター（ジョージ）の音色とボンゴ（リンゴ）の小気味よいリズムがともに波長を合わせ、曲の質感をそこなわないようにうまく共鳴しあっている。とくに間奏のギター・ソロでは、一つ一つの音をしっかり押さえ、要所要所でビブラートをかけて丁寧に演奏している。映画では、スタジオでのリハーサル・シーンで歌われていますが、ジョージとポールの美しい構図にも注目していただきたい。

歌詞では、倒置構造を含んだ最後のパート、Bright are the stars that shine, dark is the sky（暗い夜空に輝く星のように）/ I know this love of mine will never die（僕のこの愛はいつまでもつづく）/ And I love her（彼女のことを愛しているんだ）が素晴らしい。

遠山　ポールには当時、ジェーン・アッシャーという恋人がいて、ポールはアッシャー家に居候をしていた。この曲は、その家でつくられました。ジェーンがインスピレーションの源泉であったことは間違いないところですが、ポールはそうではないと否定しています。ポールはけっきょくジェーンと別れてしまったので、自分にそう言い聞かせるようにしたのでしょう。

ポールが21歳のときに書いた曲ですが、50年経っても経年劣化していませんね。いまもライヴでこのイントロが流れると、客席から歓喜のどよめきが起こる。

アルバム『ア・ハード・デイズ・ナイト』で、ポールは3曲しか自作曲を発表していませんが、どれも感嘆のため息がでるほど美しい。このアルバムはジョンの魅力が頂点に達したアルバムだといわれていますが、ポールがジョンとの距離をちぢめる最初の一歩を踏み出したアルバムということもできます。

6. Tell Me Why

テル・ミー・ホワイ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年2月27日 Ⓛ 2分06秒 Ⓥ ジョン（ジョン、ポール、ジョージ）

里中　ジョンのヴォーカル。この曲を聴いた人で、「テル・ミー・ホワイ……」と口ずさまなかった人なんているんだろうか。思わず、ビートルズに参加したくなります（笑）。それにしても、抜群のノリで歌っています。調子づいたのか、ジョンはリードを二つ重ね、さらには、掛け合いのコーラスにも参加。ひとりヴォーカル三重唱。まさに疾風怒濤の2分6秒です。

元気のいい歌いっぷりとは裏腹に、歌詞はいかにもジョンらしく未練がましい。Tell me why you cried, and why you lied to me（なぜ泣いたのか、なぜ嘘をついたのか、ちゃんといってみろよ）と恋人を責めるも、'Cause I really can't stand it（こんな仕打ちは我慢できない）/ I'm so in love with you（こんなにも君を愛しているのに）とすがっている。ものごとを悲観的に眺め、嫉妬をあらわにして、辛辣な言葉を投げつける。そういう歌詞を書く傾向がありますね。

遠山　映画のなかでテンポの速い曲がもう一つ必要になり、ジョンが大急ぎで書きあげた。ポールは、ジョンと妻シンシアのケンカがこれをつくらせたのではと推測しています。

ライヴで歌う姿を見たかった。ジョンの声を三つ重ねて録音しているので、レコードどおりにライヴで再現することは不可能なんですが、映画のなかで演奏しているところが観られますので、それでガマンしましょう。そういえば、あの観客のなかに子どものころのフィル・コリンズ（ジェネシス）がいるんですよ。

丁寧に聴くと、メンバー全員の演奏技術が高いことがよくわかる。とくにリンゴ。ドラムから始まるイントロがたまらなくいい。後半のブレイクのときもそうですが、スネアとタムのコ

CamScannerでスキャン

ンビネーションには思わず耳を奪われます。

7. Can't Buy Me Love

キャント・バイ・ミー・ラヴ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年1月29日、2月25日、3月10日　Ⓛ 2分11秒　Ⓥ ポール

里中　ビートルズの数ある大ヒットの一つ。イギリスでは予約だけで、なんと100万枚を超えた。また、全米チャートでは5週連続1位という快挙を達成している。「イェー、イェー、イェー」ではなく、「ノノノォ、ノォー」と歌ってもウケまくった。

ポールの曲。歌っているのもポール。最初、出だしはギターだったようですが、いきなり歌から入ったほうがインパクトがあると助言したのはプロデューサーのジョージ・マーティン。この歌の躍動感は、そのひとことでキマった。ジョンが、ポールのソングライティングの成長ぶりに対抗意識をもつようになったのはこの曲だといわれている。

遠山　64年のビートルズは全米を制覇して世界に飛翔していく年ですが、この曲がビートルズをいっきにスターダムに押し上げたといってもいいでしょう。

さて、タイトルの「キャント・バイ・ミー・ラヴ」は「僕の愛はお金では買えない」という意味。日本の英語の先生たちはあれこれと述べていますが、リヴァプールの人たちは所有格の「my」をあんまり使わないんです。「キャント・バイ・マイ・ラヴ」というべきところを、「キャント・バイ・ミー・ラヴ」といってしまう。This is my car.（これは僕の車だ）はThis is me car.となる。myという所有格を「me」にしてしまう。理由は、「meだと気どって響くから」だそうです。もちろん楽曲によっては〔All My Loving〕のように「me」ではすわりの悪いものもありますから、

そのあたりは臨機応変に使い分けていますけど……。

映画では、重い鉄の扉をバンッと押し開けて、明るい外へと飛びだしていくシーンで使われている。あたかもビートルズの飛翔を象徴するかのよう。ビートルズも出演したことのあるロンドンのハマースミス・オデオン（現在のハマースミス・アポロ）の裏口で撮影されました。

8. Any Time At All

エニイ・タイム・アット・オール

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年6月2日　Ⓛ 2分10秒　Ⓥ ジョン、ポール

里中　B面は映画未使用の曲ばかり。そのB面のトップがこれ。勢いがあるというか、健康的というか、元気が満ちあふれている。

歌詞は、Any time at all（いつだっていいよ）/ All you gotta do is call（好きなときに電話をおくれ）/ And I'll be there（すぐにそっちへ行くから）と恋に熱心な気持ちを吐露するラヴ・ソング。電話をくればすぐに駆けつけるという歌詞は〔オール・アイヴ・ゴット・トゥ・ドゥ〕に共通する。そのころの電話といえば固定電話で、それもやっと普及しはじめたばかり。とはいえ、離れたところにいる恋人の声を聞くのはいろんな不自由があった。1964年はそんな時代でした。

歌い出しは、またしてもジョン。スネアとバス・タム一発だけの強烈なイントロのあとに歌いだす。怒涛のヴォーカル。またも、連れ去られる感覚にとらわれます。日ごろは冷静沈着な私ではありますが（笑）、もう完全に思考停止。ジョンの声に身をまかせるしかない。遠山さん、ゴメン、あとお願い。

遠山　Any time at all とコーラスが3回くりかえされますが、2

CamScannerでスキャン

回目はポールが歌っています。3回ともジョンだと思い込んでいる人がたくさんいますが、よく聴いてみてください。"ジョン"が乗りうつったポールが2回目を歌っている。2回目のAny time at allはキーが高すぎて歌いにくかったので、ポールが代わって歌ったんです。ポールが歌う部分があっても、曲はジョン・レノン一色に染まっていて、どこを切ってもジョンが出てくるという具合。

もともとの発想は、前作『ウィズ・ザ・ビートルズ』に収録された〔イット・ウォント・ビー・ロング〕で、そのコード進行を応用しているといわれています。ギターとピアノにも耳を向けてほしい。こんなノリのいい曲で、ガット・ギターで低音部をうまく支えているのはジョン。ジョージの12弦ギターとシンクロしているピアノはジョージ・マーティン。

9. I'll Cry Instead

ぼくが泣く

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年6月1日 Ⓛ 1分44秒 Ⓥ ジョン

星中　飛ばしつづけるジョン。まったく休まない。だから、あっという間に歌い終えちゃう。リズムに乗せられること、たったの1分44秒。ロカビリーっぽい要素のあるカントリー調の曲ですが、ジョンが歌うと軽い感じがしないのは、声自体に説得力があるからでしょうか。

歌詞の内容はかなり過激。恋人にふられ、泣きたい気持ちがこみあげてくるが、人前では泣けやしないからこっそり泣くんだとつぶやき、立ち直ったらこの怒りを女という女にぶちまけるという内容。And when I do you'd better hide all the girls（そのときは女という女を隠しておいたほうがいいぜ）/ 'Cause I'm gonna

break their hearts all around the world（世界中の女の心を傷つけてやるからな）/ Yes, I'm gonna break 'em in two（ハートを真っ二つに引き裂いてな）/ and show you what your loving man can do（恋に狂った男がどんなことをしでかすか見せてやる）/ Until then I'll cry instead（けれど、それまでは泣くしかないけど）と、恋にやぶれた、いじけた男の妄想を並べる。

それから、タイトルの〔ぼくが泣く〕はヘンですね。なんだか、「ぼく」が他人の代わりに「泣く」ように聞こえる。せめて、〔いまは泣くだけ〕というような題に変えてほしい。

遠山　4人が広場を走りまわるシーンのために書かれましたが、リチャード・レスター監督がポールのつくった〔キャント・バイ・ミー・ラヴ〕のほうがふさわしいと判断したため、けっきょくボツになりました。この曲を気に入っていたジョンは、映画に使われなかったのをとても残念がったといいます。

そこで、映画がリヴァイヴァル上映された82年、亡くなったジョンの出演場面をつけ足そうというアイディアが浮上、本編がはじまる前に、この曲と映像がおまけのような形で追加されました。

10. Things We Said Today

今日の誓い

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年6月2日　Ⓛ 2分35秒　Ⓥ ポール

里中　ポールの歌。メロディもいいけど、歌詞も見逃せない。Someday when we're dreaming, deep in love, not a lot to say（いつの日か言葉もいらないほどの深い愛のなかで一緒に夢をみる日が来たら）/ Then we will remember things we said today（僕らが思い出すのは二人が交わした今日の言葉）とくる。

CamScannerでスキャン

それと、日本語のタイトルはたいていが失笑を禁じえませんが、〔涙の乗車券〕と……この〔今日の誓い〕は名訳です。

遠山 このアルバムで注目すべきは、初の全曲オリジナル・ナンバーで構成されたアルバムであるということ。そして、全13曲中10曲をジョンがつくり、ポールのつくった曲はわずか3曲ですが、その3曲がどれも珠玉の作品だということ。

というわけで、ポールの3曲のうち、3曲目がこれにあたるわけですが、いまもって風化しませんね。まったく飽きがこない。1989年から90年にかけておこなわれたポールのワールド・ツアーでも取りあげられています。ポールは「スタジオに入っていろいろな曲を演奏してみたら、この曲が意外にもライヴ向きであることに気がついた」と語っています。

ポールが当時の恋人ジェーン・アッシャーとカリブ海で過ごしたときに書いた曲。ポールもジェーンも、別れたあとも、二人の恋物語をいっさい暴露しない。楽しかったことも語らないし、悲しかったことも口にしない。二人の恋は二人にしかわからない。どんな結末をむかえようともお互い黙っていようね、というのが「今日の誓い」だったのではないでしょうか。この曲を歌うときのポールは、若い日の恋を懐かしんでいるにちがいありません。Me, I'm just the lucky kind（そう、僕は果報者）と歌っていますが、なにごとにおいてもいさぎよいジェーンと知り合えたポールこそ、「ラッキー・カインド」でした。

CamScannerでスキャン

11. When I Get Home

家に帰れば

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年6月2日 Ⓛ 2分15秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中 〔マスタング・サリー〕で有名なウィルソン・ピケットのヴォーカルを意識したヘヴィーな作品。プロでも、この曲は歌うのがむずかしいといいますね。もっと平板な曲にして、歌いやすくしてもよかったものを、ジョンは暴れる曲の首ねっこを無理やり押さえつけて、強引にねじ伏せて「一本」とっている。

歌詞は、I got a whole lotta things to tell her（彼女に話したいことがたくさんあるんだ）/ When I get home（家に帰ったらね）で始まり、Come on, let me through（さあ、もう行かせてくれ）/ I got so many things I gotta do（僕にはやることがたくさんあるんだ）/ I've got no business being here with you this way（こんなところにいてあんたの相手をしている暇なんかないんだ）と報道陣らしき人たちに向かって叫ぶ。当時のジョンの素直な気持ちだったのでしょうか。

遠山 この曲もジョンの心の内が反映されていますね。それにしても、すさまじいヴォーカル。間奏がないから、よけいにそう感じるのかもしれません。

64年2月の、熱狂が渦巻くアメリカ公演中に書かれたというところに僕は注目しているんです。彼女の待つ家に早く帰りたいという内容は、仕事で家を空けてばかりだったジョンの偽らざる心境だったにちがいありません。ジョンはシンシアと結婚して一年ちょっとしか経っていなかったし、ジュリアンの誕生からわずか一年たらずでした（ジュリアンは63年4月8日生まれ）。このころ、ビートルズはアメリカも制覇して、超多忙の毎日を送っていた。とうぜん、ふつうの夫、ふつうの父親がやっていることができなかった。そういう不満がジョンのなかでくすぶ

CamScannerでスキャン

っていた。さりとて、ビートルズを離れることはできない。ジョン自身も父親不在の幼少期を過ごしていますが、結果的にジョンもまたそれに近いことをジュリアンに対してやってしまった。そうした事実に、ジョンは苛(さいな)まれていたのではないでしょうか。

12. You Can't Do That

ユー・キャント・ドゥ・ザット

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年2月25日、5月22日　Ⓛ 2分33秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　ジョンが吠え、ポールが叫ぶ。ジョージがギターをつまびき、ジョンがリズムをかき鳴らす。とりわけジョンによる間奏のカッティング・ソロは聴きどころですね。複数弦をベンディング（チョーキング）しているなど、曲にぴったり合っている。もちろんリンゴもしっかりと並走する。これが、ビートルズ。

歌詞は、出だしから強烈な内容。I got something to say that might cause you pain（おまえは嫌がるかもしれないが、言わなきゃいけないことがある）/ If I catch you talking to that boy again（今度あいつと話しているところを見つけたら）/ I'm gonna let you down（ぐうの音(ね)もでないようにしてやる）/ And leave you flat（コテンパンにしてやるからな）と、みずからの独占欲をさらけだしている。タイトルの〔You Can't Do That〕は「そんなことをするなよ」という脅し文句。ジョンに何があったんだろう。

前曲〔When I Get Home〕についての遠山さんの解説を聞いていて思ったのですが、いわゆる「情報」と「知識」というのは別ものだということがはっきりとわかった。情報通はオタクになれるけど、知識人にはなれない。知識人は豊かな感受性と明晰

CamScannerでスキャン

な分析によって練りあげられたのびやかさがある。そういう人の解説を聞いていると、曲もまた味わい深くなります。というわけで、この曲の解説もお願いします。

遠山 恐れ入ります。毎日のように家を空けているジョンが、自分が留守のあいだに妻のシンシアが浮気をしているのではないかという妄想にとりつかれて書いた曲だといわれている。

ジョンは筋金入りの「ジェラス・ガイ」(嫉妬深い男)で、それが昂じて、恋人に対して疑心暗鬼になったり暴力をふるったりした。ヨーコとつきあいはじめたころも、自分が理解できない日本語をヨーコが使うだけで露骨に嫌がったそうです。これは、そんなジョンの一面がはっきりと出ている曲ですね。

13. I'll Be Back

アイル・ビー・バック

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年6月1日 Ⓛ 2分20秒 Ⓥ ジョン(ポール)

里中 アルバムの後半は躍動感をあんまり感じないけど、こうして全部とおして聴いてみると、やはり後半も名曲ぞろいですね。さながらジョン＆ヒズ・ビートルズという感じがしないこともないけれど……。このころのジョンは、ほんとうに脂がのっている。このアルバムを「ビートルズのベスト・アルバム」に挙げるファンが――もちろんジョンのファンですが――いるのもわかるような気がします。

ジョンは「いい曲だが、ミドルがいま一つ」と発言していますが、アコースティックなアレンジもポールのコーラスも素晴らしい。ミドル・セクションだって、いい仕上がり。『アンソロジー1』では、2種類のアウトテイクを披露していますが、ワルツっぽく演奏していたものを、試行錯誤を重ねてここにたどり

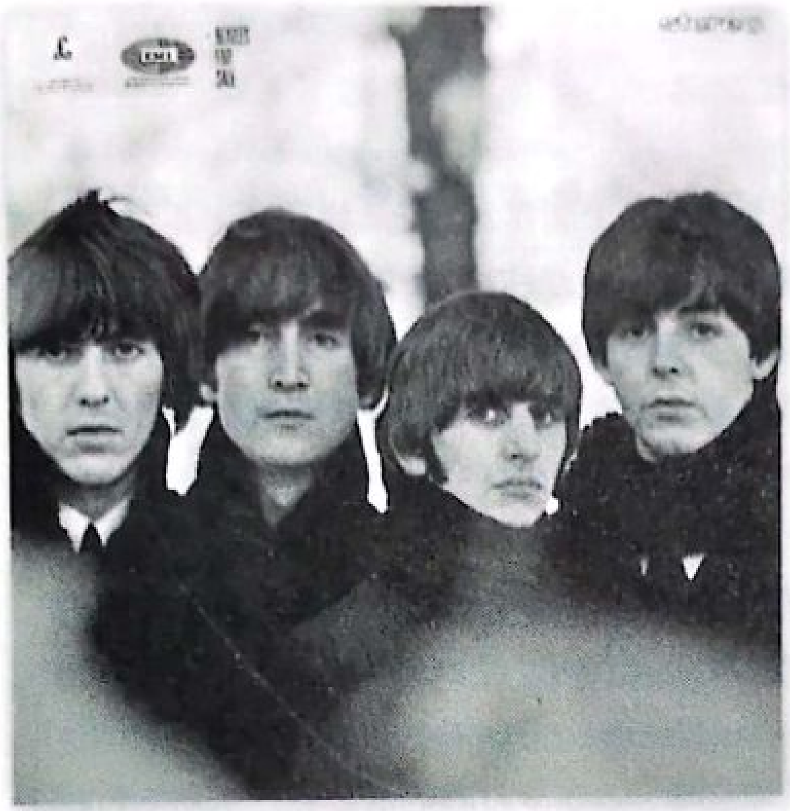
CamScannerでスキャン

ついたということに気づかされる。
　歌詞の最後のヴァース、Oh you, if you break my heart I'll go (僕を悲しませるんだったら出ていくよ) / But I'll be back again (でもまたきっと戻ってくるだろうな) は不意を衝かれるフレーズです。ジョンらしい諦観的な達観を感じます。

遠山　いったん家に帰って、女を叱りつけて、また戻っていく——これが最後の3曲のテーマだと勘違いしている人もいるようですが、最後のこれは久しぶりに再会した実父(アルフレッド・レノン)のことを曲にしています。
　父アルフレッドとは、5歳のときからずっと会っていなかった。そして突然、父は有名になったジョンの前に姿をあらわした。そのとき父アルフレッドは、ホテルの調理場で下働きをやっていた。映画『ハード・デイズ・ナイト』の撮影中のこと(1964年4月)でした。じつに18年ぶりの再会。曲はそのあとに書かれました。ジョンは「俺が成功するまではなんの音沙汰もなかったくせに、マスコミを使って脅迫めいたやり方で俺の人生に入り込んできた。はじめは会うのも嫌だった。結局、自分が折れて面倒をみることにしたんだけどね」と語っている。たんなるラヴ・ソングとして聴いてもいいのですが、父親のことを歌った曲として聴くと、味わいもまた変わってきます。それにしても、ジョンの声、訴えかけてきますね。

CamScannerでスキャン

Beatles Album 4



BEATLES FOR SALE

ビートルズ・フォー・セール

1964年12月4日リリース

Ⓛ 34分13秒　Ⓟ ジョージ・マーティン　Ⓢ アビイ・ロード・スタジオ　Ⓒ ロバート・フリーマン

SIDE A	SIDE B
1 No Reply	8 Eight Days A Week
2 I'm A Loser	9 Words Of Love
3 Baby's In Black	10 Honey Don't
4 Rock And Roll Music	11 Every Little Thing
5 I'll Follow The Sun	12 I Don't Want To Spoil The Party
6 Mr. Moonlight	13 What You're Doing
7 Kansas City / Hey, Hey, Hey, Hey	14 Everybody's Trying To Be My Baby

CamScannerでスキャン

ずば抜けた音色センス

超過密スケジュールのなかで制作された4枚目のアルバム。収録曲の半数近くをカヴァー曲が占めている（オリジナル8曲、カヴァー6曲という構成）。"BEATLES FOR SALE"は「ビートルズ、ただいま売り出し中」という意味。クリスマス商戦にかけたユーモアのあるタイトル。しかし、ジャケットには、「売り出し中」にしては憂鬱そうな4人が写っている。

アメリカを"制覇"したビートルズはこの時期、肉体的にも精神的にも疲労を感じ始めていた。それは〔アイム・ア・ルーザー〕の「ピエロみたいにはしゃいでいても、この仮面の下にはしかめっつらが潜んでいる」という自嘲的な歌詞にもあらわれている。

とはいえ、ソングライティングの力は相変わらず健在だし、カヴァー曲をどういう音色で彩るかというセンスはずば抜けている。とくに〔ノー・リプライ〕と〔アイム・ア・ルーザー〕では、悲観的で内省的な歌詞をロックのサウンドにうまく乗せているし、〔ロック・アンド・ロール・ミュージック〕におけるヴォーカル（ジョン）と演奏は、ビートルズが「並」のロックンロール・バンドでないことを十分に証明している。

アルバム・ジャケットは『ウィズ・ザ・ビートルズ』と同じく、ロバート・フリーマンによってロンドンのハイド・パークで撮影された。4人が首に巻いている黒のマフラーは、ハンブルク時代の友人アストリット・キルヒャーがメンバーに頼まれて編んだもの。ビートルズは世界的な成功を収めたあとも、ハンブルクの友人たちとの交友を続けていた。

CamScannerでスキャン

1. No Reply

ノー・リプライ

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1964年9月30日 Ⓛ 2分14秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中 前奏なし。いきなり This happened once before... とかます。ジョンのアイディアでしょうか。やがて、ポールが合流。そして、If I were you からサビに向かって、手拍子とスネアの連打をバックにしていっきに盛りあがる。名曲。ビートルズ、大丈夫。安心しました。

歌詞はというと、彼女の家を訪ねても居留守をつかわれ、電話しても出てもらえないというもの。I tried to telephone（電話をかけたよ）/ They said you were not home, that's a lie（君は留守だっていわれたけれど、そんなの嘘だ）/ 'Cause I know where you've been（君がいたことを知っているんだから）/ And I saw you walk in your door（君が家に入って行くのを見たんだもの）と告げたあと、思いきって I nearly died（あのときは死にたい気分だったよ）と胸の内を明かし、No reply（返事がないんだよ）と叫ぶ。ジョンの"泣き"には、ほんとうにしびれます。

遠山 物語仕立てになった失恋の歌。ジョンの果敢な冒険心を感じます。ザ・レイズのヒット曲〔シルエッツ〕にインスピレーションを感じて書いたと述べていますが、電話を小道具に使ったところなど、チャック・ベリーの詞のつくり方にかなり影響を受けているような気がします。パワフルなヴォーカルのなかに、もの悲しさを感じさせる。こういうところがジョンのすごいところ。アルバム・ジャケットのイメージにぴったり合った曲ですね。

当時、レノン=マッカートニー作品の版権を管理していたノーザン・ソングスの社長、ディック・ジェイムズはこの曲を聴い

て、曲としてひじょうにまとまりがあることや、歌詞が若者のそれではないことに、感心することしきりだったそうです。イギリスでは、留守番電話のメッセージの後ろで流す音楽として、いまも人気があるって知ってました？

2. I'm A Loser

アイム・ア・ルーザー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年8月14日 Ⓛ 2分30秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中　ジョンのヴォーカルと、ジョージのリード・ギターが聴きどころ。あ、ハーモニカも忘れてはいけませんね。63年まではハーモニカの音色がよく聴こえてきましたが、64年の録音になると、ハーモニカが使用されているのは〔恋する二人〕とこの曲だけ。

歌詞を見てみましょう。I'm a loser, I'm a loser（ぼくは負け犬。みじめな負け犬だ）/ And I'm not what I appear to be（見かけとは裏腹にね）とか Although I laugh and I act like a clown（ピエロみたいにはしゃいでいても）/ Beneath this mask I am wearing a frown（この仮面の下には不機嫌な顔がひそんでいる）という内面を吐露した歌詞は、ジョンがむやみに大声をあげるだけの単純なロックンローラーでないことをあらわしています。

And so it's true pride comes before a fall（うぬぼれていると失敗するぞ）という箴言（しんげん）を含んだ歌詞のあとで、I'm telling you so that you won't lose all（君もいい気になっていると、なにもかもなくしてしまうぞ）と聴き手に向かってお説教までしている（笑）。

遠山　この時期、ビートルズが、いや、とりわけジョンがもっとも注目していたのはボブ・ディラン。とりわけディランの書く歌詞に影響を受けていた。ジョンは、自分が感じたことを、

自分の言葉で、素直にあらわしていいんだと思い至るようになる。本人も認めているように、ジョンはこれ以降、歌詞に自分の内面を反映させていく。ジョンはこの時期を「僕のディラン時代」と呼びましたが、ライヴでこの曲を歌うときは、ハーモニカ・ホールダーを首にかけ、ギターとハーモニカを一緒に奏でるディランの格好まで真似ていた。ハーモニカもこれまでと違って、ディランを意識したフォーク調の奏法ですね。

とはいえ、ジョンはまだディランに会ってはおらず、このレコーディングを終えた2週間後の8月28日、ニューヨークのホテルで、ビートルズはディランとはじめて対面することになりました。

3. Baby's In Black

ベイビーズ・イン・ブラック

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年8月11日 Ⓛ 2分04秒 Ⓥ ジョン、ポール

里中 ワルツのリズムを取り入れた、ジョンとポールのデュエット曲。こっそり真似してみると、ひじょうに歌いづらい。というのは、主旋律がまるでこよりのように、ジョンになったりポールになったり入れ替わるからでしょうね。ビートルズのコピー・バンドがこの曲をやるのを聴いたことがあるけど、いやあ、ヘタだった。坐っていたイスからずりおちそうになった(笑)。ジョンはこのとき23歳、ポールは22歳だけど、卓越したデュエット歌手でもあったことがよくわかります。

歌詞の内容は単純だけど、Baby's in black and I'm feeling blue（あの子の黒い服が僕をブルーな気分にさせる）のように、blue に「沈鬱な」という意味をもたせて、「あの子」の着ている black（黒）の服と対比させている。「黒い服を着た女の子」とは、なに

CamScannerでスキャン

やらいわくがありそう。
遠山　ジョンの新居（サリー州ウェイブリッジ）で書かれました。といっても、ジョンがひとりで書いたのではなく、ポールとの共作です。ライヴでもビートルズは好んでよく演奏していました。やはりコーラスにはぜったいの自信があったのでしょうね。日本公演の際にも演奏されています。

里中さんが感づいたように、いつも全身黒づくめだった、ハンブルク時代の友人アストリット・キルヒャーのことを歌ったものだと僕は確信しています。アルバム・ジャケットで4人が首に巻いているマフラーはアストリットが編んだものですし、この年（64年）、ジョンは亡くなったスチュアート（元ビートルでアストリットの恋人）の実家（リヴァプール）を訪ねてもいる。ジョンはこの時期、有名になっていくいっぽうで、昔の友人を偲ぶ気持ちがふくらんできた。She thinks of him and so she dresses in black（彼女はあいつのことを想いつづけて、喪服のような黒い服を着ている）の「彼」は、間違いなくスチュアートのことです。

4. Rock And Roll Music

ロック・アンド・ロール・ミュージック

Ⓦ Chuck Berry
Ⓡ 1964年10月18日　Ⓛ 2分30秒　Ⓥ ジョン

里中　たまらなく胸を熱くさせるノリですね。ジョンのヴォーカルは、まさに熱唱というにふさわしい。チャック・ベリーの名曲をカヴァーしたものですが、オリジナルよりまさっている。完璧に自分のものにしてしまっている。これを超える〔ロック・アンド・ロール・ミュージック〕を私はいまもって聴いたことがない。

ジョンといえば、エルヴィス・プレスリーの〔ハートブレイ

ク・ホテル〕との衝撃的な出会いから語られることが多いけど、楽曲づくりのうえで敬愛していたのはチャック・ベリー。ジョンは「チャック・ベリーはロックンロールの代名詞だ」と述べ、「時代を超えた偉大な詩人」とか「僕のヒーロー」とか、最大級の賛辞を贈っている。いっぽうチャック・ベリーは、ジョンが暗殺されたのち、「ジョンは俺のことを自分のヒーローだといってくれたことがあるけど、ジョン・レノンこそが俺のヒーローだったんだ」と述べた。「自分とカネしか信じない」とつねづね語っていたチャック・ベリーがそう語っている。自分とカネのほかに、ジョンのロック魂を、己れが信じるものに加えたんです。

遠山　チャック・ベリーが57年9月に発表した曲。ジョンは、クオリーメンのころからずっとライヴで歌ってきました（59年から66年まで）。

ヴォーカルは、最初から最後までジョンただひとり。エンジン全開で、吠えまくっている。ジョンの真骨頂ここにあり、という印象を受けます。その後ろでノリのいい速いリズムでピアノを弾いているのはジョージ・マーティン。正真正銘の「一発録り」でキメました。彼らが高い演奏技術をもっていたことがわかります。この曲は、武道館コンサート（66年）のオープニング・ソングでもありました。また、ビートルズのドキュメンタリー作品『コンプリート・ビートルズ』（84年）で、最初のクレジット・タイトルが流れるところに使われています。多くのファンがこのヴォーカルを気に入っている証しです。

CamScannerでスキャン

5. I'll Follow The Sun

アイル・フォロー・ザ・サン

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年10月18日 Ⓛ 1分47秒 Ⓥ ポール (ジョン)

里中　一転、小川のせせらぎのようなメロディが流れてきた。ポールは内面の心情をうまく音に乗せています。みずみずしい感性がそこかしこに感じられる。耳を澄ますと、いつのまにかジョンの声が寄りそっている。

歌詞の内容は、恋する人のもとを去る男の歌。とはいっても、そこはポール、すぐさま明日に希望をつないでしまう(笑)。One day you'll look to see I've gone (ある日きみは僕がいなくなったことにふと気づくだろう) / For tomorrow may rain (明日は雨になるかもしれない) / So I'll follow the sun (だから僕は太陽を追っていくよ) だなんて歌っている。悲しみからの立ち直りがはやいというか、生来ポールは楽天的なんでしょうね。

遠山　これ、ポールが16歳のときにつくった曲なんです。病気で学校を休んだ日に、タバコをくわえ、窓の外を眺めながら書いたそうです。サビの部分はレコーディングに際して書き直したそうですが、大部分は当時のままです。

ドラムスは入っていませんが、リンゴは自分の太ももを手で叩いてレコーディングに参加しています。これに関しては「ボンゴではないか」という説もありますが、ボンゴなら反響音があるはずです。ジェフ・エメリック (エンジニア) は、リンゴの膝のあいだにマイクロフォンがセットされているのを目撃したと述べています。

英国では葬儀の出棺の際に音楽を流しますが、それは故人が好きな歌であったり、故人のイメージにあった曲であったりするんですが……〔アイル・フォロー・ザ・サン〕を選ぶ人もけっ

こう多いそうです。ちなみに、出棺の際に流される曲のナンバー・ワンは、モンティ・パイソンの〔Always look on the bright side of life〕です。葬儀においても、英国人はユーモアを忘れません。

6. Mr. Moonlight

ミスター・ムーンライト

Ⓦ Roy Lee Johnson
Ⓡ 1964年8月14日、10月18日 Ⓛ 2分33秒 Ⓥ ジョン(ポール)

里中　最初の「ミスタァーアアアア……」というシャウトがどうもダメ。この曲をよくとばしていました。ごめんよ、ジョン。いまでもこの曲が流れてくると、意識的に聴き流してしまいます。ふたたび、ごめんよ。

歌詞は、月光(ムーンライト)を擬人化して、恋人との仲を取りもってくれたムーンライト氏に感謝の気持ちを寄せるというもの。Mr. Moonlight(ムーンライトさん)/ You came to me one summer night(ある夏の夜、あなたは僕のもとにやってきてくれた)/ And from your beam you made my dream(そして、光の束で僕の夢をつむいでくれた)/ And from the world you sent my girl(この地上で彼女にめぐりあわせてくれ)/ And from above you sent us love(天上から僕らに恋を芽ばえさせてくれた)と歌っている。

遠山　オリジナルは、ドクター・フィールグッド&インターンズです。う〜ん、じつは僕も、ビートルズらしさを感じないので、あんまり真剣に聴いてこなかったです。ダブルでごめんよ、ジョン(笑)。8月14日に4テイクを録音していますが、うまくアレンジできなかった。そこで2か月後にまた挑戦している。かなり苦労したようですね。別のテイクを『アンソロジー1』で聴くことができますが、演奏もどことなくチグハグで、まとまりがない。ジョージの単調なギター・リフと、ポールの印象

深いハモンド・オルガン、これらを気に入るかどうか。このことも曲の好き嫌いを左右するんじゃないかと思います。

ハンブルク時代のライヴ音源にもこの曲が残っていることからも、ジョンはデビュー前からこれを好んで歌っていたことがわかります。冒頭のシャウトはありませんでしたが。

7. Kansas City / Hey, Hey, Hey, Hey

カンサス・シティ～ヘイ・ヘイ・ヘイ・ヘイ

Ⓦ Jerry Leiber / Mike Stoller / Richard Penniman
Ⓡ 1964年10月18日　Ⓛ 2分31秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ポールも血が騒ぐと、ジョンと同様、野獣化しますね。ポールは甘いバラードを歌うのもお手のものですが、絶叫型のロックンロールもオリジナル以上に激しくシャウトしてみせる。まったく、すごい野獣をブライアン・エプスタイン（マネージャー）は世に放ったものです。

歌詞を見てみましょう。I'm gonna Kansas City（カンサス・シティへ行って）/ Gonna get my baby back home, yeh, yeh（俺のベイビーを取り戻すんだ）と威勢のいいことをいう。というものの、彼女が出て行ってからずいぶん経つし、ベイビーはどうも気にくわないことがあるようだと思い至る。すると、すぐに考え直して、I'll say bye, bye, bye, baby, bye, bye（わかったよ、ベイビー、バイバイだ）と言い放ってしまう。優柔不断というか、あっさりしすぎている（笑）。恋人に逃げられるのも当然です。

遠山　ジェリー・リーバーとマイク・ストーラーのコンビ（エルヴィス・プレスリーのヒット曲の作者として知られる）が52年につくり、リトル・ウィリー・リトルフィールド（R & B シンガー）が歌った曲で、59年にウィルバード・ハリスン（R & B シンガー）が「カンサス・シティ」として大ヒットさせている。それをリト

ル・リチャードが、自分でつくった「ヘイ・ヘイ・ヘイ・ヘイ……」以下の部分をつけ加えて歌ったんです（59年）。ビートルズがカヴァーしたのは、このリトル・リチャードのヴァージョン。

ポールはこの曲を61年から62年にかけてのライヴで取りあげている。63年にはBBCラジオのセッションでも歌いました（『ライヴ!! アット・ザ・BBC』収録）。64年のカンザス・シティ公演（9月17日）でも取りあげています。93年に発売されたライヴ・アルバム『ポール・イズ・ライヴ』にも収録されていますが、その音源はカンザスでのライヴのものなんですよ。

8. Eight Days A Week

エイト・デイズ・ア・ウィーク

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年10月6・18日　Ⓛ 2分42秒　Ⓥ ジョン、ポール（ジョージ）

里中　まず、タイトルありき。題名が先に決まって、あとで歌詞をつくったようです。しゃれたタイトル・フレーズはどこからきたのでしょう。

さて、エンディングでだんだん音が小さくなっていくフェイド・アウトはよくある手法でしたが、イントロで音が大きくなるフェイド・インはそれまで誰もやったことがない意表をつくアイディアでした。彼らの旺盛な好奇心がみてとれますね。

Hold me, love me, hold me, love me（抱いて、愛して、放さないで、愛して）/ I ain't got nothing but love, babe, eight days a week（僕にあるのは愛だけ。1週間ぶんの愛をあげる）のところのグルーヴ感。早くもビートルズのサウンドだとわかりますね。

そういえば、むかし五月みどりが〔一週間に十日来い〕という歌をヒットさせまして、「一週間に八日、キミのことを愛し

ている」という歌詞は……つまり、その……「一週間に十日来い」の二番煎じではないかと……。

遠山　音楽を幅広く聴いてきた彼らも、さすがに五月みどりまでは聴いていないでしょう（笑）。

曲のタイトルは、あまりの過密スケジュールに悲鳴をあげたリンゴの「週に八日も働いている気分だ」というひとことからきているという説と、ポールを乗せた車の運転手が発した言葉だという説の二つがあります。もともとは映画『ヘルプ！』のタイトル曲として書いたとジョンは回想しています。

イントロの、迫りくるフェイド・インには胸のざわめきを覚えます。手拍子も効果的に使われ、音に厚みと温かみを加えています。ビートルズらしさが出ている曲ですね。ヴォーカルはジョンがとっていますが、曲づくりにおいてはポールの力によるところが大きいようです。ポールは2013年の「アウト・ゼア・ツアー」のオープニングをこの曲で飾っています。

9. Words Of Love

ワーズ・オブ・ラヴ

Ⓜ Buddy Holly
Ⓡ 1964年10月18日　Ⓛ 2分12秒　Ⓥ ジョン、ポール、ジョージ

里中　バディ・ホリーの曲（57年6月発表）。これ、エコーがかかっているから声がわかりづらいですね。ジョン、ポール、ジョージの3人で歌っているのかな。ある資料によると、ジョンとポールの2人ということになっていますが、ジョージの声も入っているように思えるんですが……。

ジョンはバディ・ホリーが大好きだった。人前でメガネをかけるのを嫌がったジョンが、黒ぶちメガネをかけ始めたのは、ひとえにバディが黒ぶちメガネをかけていたからでしょう。ジ

ョンにとって、バディ・ホリーはアイドル的な存在だった。ビートルズはバディ・ホリーの曲を16曲レパートリーにしていますが、公式録音したのはこの曲だけ。

そのバディ・ホリーはエルヴィス・プレスリーに影響を受けて、クリケッツを結成。ギター2本、ベース、ドラムという編成をつくった。ヒカップ（しゃっくり）唱法で人気者となったものの、チャーターしたプライヴェート飛行機がアイオワ州のとうもろこし畑に墜落して、22歳の若さで亡くなってしまった。実質の活躍期間はわずか2年たらずでした。

遠山　3人の声が入っていますね。ビートルズは58年から62年にかけて、ジョンとジョージのツイン・ヴォーカルでステージにのせていましたが、この録音ではポールの声も入っています。

ところで、オリジナル・ヴァージョンを聴いたことがありますか。めずらしくオリジナルに忠実に演奏されています。バディ・ホリーへのリスペクトなのでしょうね。クオリーメンのころ、1958年ですが、彼らは自主制作でバディの大ヒット曲〔ザットル・ビー・ザ・デイ〕をレコーディングしています。これは、『アンソロジー1』で聴くことができます。

ジョンだけでなく、ポールもバディ・ホリーが大好きで、全楽曲の著作権を所有しています。

10. Honey Don't

ハニー・ドント

Ⓦ Carl Perkins
Ⓡ 1964年10月26日　Ⓛ 2分55秒　Ⓥ リンゴ

里中　ご存じ、カール・パーキンスの曲。ロックンロールの不滅曲〔ブルー・スエード・シューズ〕のB面として発表されまし

CamScannerでスキャン

た（56年1月）。ビートルズが彼の作品をとりあげたのは、この曲と〔マッチボックス〕〔みんないい娘〕の3曲。

歌詞は、僕をヌカ喜びさせては他の男とも遊ぶ尻軽女に、Well honey don't（心にもないことを言うなよ）とたしなめる歌。ヴォーカルの主は、もちろんリンゴ。軽快感というよりウキウキ感が出ていて、たのしい楽曲に仕上がっている。曲中でジョージを紹介するのも、軽いノリがあってのこと。

注目すべきは、ジョージのギター（グレッチ・テネシアン）。ギター小僧だったころのジョージを思い浮かべずにはいられません。

遺曲　カール・パーキンスといえば、リンゴとジョージ。とくにジョージは、ビートルズとしてデビューするまえの一時期（60年）、ステージ・ネームとしてカール・ハリスンと名乗っていたこともある。ビートルズは12曲のパーキンス・ナンバーをレパートリーにしていましたが、公式に録音したのは里中さんが言及した3曲だけ。その後、『アンソロジー』が発売されたので、現在は8曲のパーキンス・ナンバーを聴くことができます。

そういえば、2002年11月にロンドンのロイヤル・アルバート・ホールでおこなわれたジョージの追悼コンサートでもリンゴが歌っていました。これは、リンゴとジョージの思い出の曲。リンゴはジョージのギターが忘れられなかったのでしょうね。ビートルズのライヴでは、ジョンが歌うこともあり、ジョンのヴァージョンはアルバム『ライヴ!! アット・ザ・BBC』に収められています。迫力満点で、こちらも素晴らしいですね。

CamScannerでスキャン

11. Every Little Thing

エヴリ・リトル・シング

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1964年9月29・30日 Ⓛ 2分01秒 Ⓥ ジョン、ポール

里中 小品ですが、いい曲ですね。目立たない名曲といっていい。メロディもいいし、気の利いた小細工もいい。それにしてもビートルズは、曲にまぶす隠し味がひじょうにうまい。この曲でも、「ドドン」ととどろくティンパニーが妙味となっている。この当時、ティンパニーを入れるという発想をもったロック・バンドが、ビートルズ以外にいただろうか。ビートルズの、サウンドに対する果敢ともいえる好奇心を感じないではいられません。

歌詞は、Every little thing she does（どんなささいなことでも、彼女のすることは）/ She does for me, yeah（すべて僕のため）というオノロケもの。タイトルもここから取っている。じつにいいテイストです。

遠山 出だしをジョンがつくって、タイトル・フレーズで始まるサビの部分などは主としてポールがつくりました。でも、ジョンがリードを歌うというめずらしい曲となりました。

サビの部分でがらりと変わる曲調は、ポールが「並」ではないソングライティングの才能があることを見せつけています。また、この部分のハモリは、ジョンとポールならではですね。ジョンが下ですが、ひじょうにうまい低空飛行を見せている。

録音に関していうと、寝坊してレコーディングに遅刻したジョージの代わりにジョンがリード・ギターを担当した、とこれまで伝えられてきましたが、そうではなく、ジョージの部分は"不在"のまま録音して、翌30日のセッションで、あらためてジョージの12弦ギターによるイントロとソロを加えて録音し

ています。また、30日には、ポールの低音で奏でるピアノとリンゴのティンパニーが追加録音されました。ポールは2度目のピアノ挑戦(初回は〔リトル・チャイルド〕で披露)、リンゴは初めてのティンパニーでした。

12. I Don't Want To Spoil The Party

パーティーはそのままに

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年9月29日 Ⓛ 2分32秒 Ⓥ ジョン(ポール)

里中 いじけた歌詞にぴったりの、ジョンのすねた甘い声。よく聴くと、ジョンのリード・ヴォーカルの後ろにもう一つジョンの声がする。調べてみると、重ね録音(ダブルトラック)をやっているんですね。

パーティーに来るはずだった彼女がどういうわけか来ない。浮かない顔をしているのもナンだから、彼女を探しながら帰るよ、という内容。最初のパートでは、I don't want to spoil the party so I'll go(パーティーを台なしにしたくないから帰るよ)/ I would hate my disappointment to show(浮かない顔を見せたくないんだ)/ There's nothing for me here so I will disappear(ここにいてもしょうがないから、僕は消えることにするよ)/ If she turns up while I'm gone please let me know(あとで彼女が姿をあらわしたら知らせてくれ)と歌っている。

演奏は、ジョンによるイントロのアコースティック・ギター、それからジョージによる間奏のチェット・アトキンス奏法が光っています。

遠山 ミドル・エイトではポールが加わりますが、やはり印象深いのはジョンの、傷ついた自分を憐れむ物憂げなヴォーカル。「ジョンのダブルトラックではなくて、ジョンとジョージによ

るヴォーカル」という説もあるようですが、ジョンのダブルトラック説のほうが有力です。

歌詞の内容は、ジョンの個人的な経験をつづっている。というわけで、この曲は大半をジョンがつくりました。とくにThough tonight she's made me sad（今夜は悲しい思いをさせられたけど）/ I still love her（それでも彼女のことが好きなんだ）/ If I find her I'll be glad（どこかで彼女を見つけたら、それだけでうれしいよ）/ I still love her（やっぱり彼女が好きさ）のパートがいいですね。アレンジのセンスにさらに磨きがかかったというべきでしょう。

13. What You're Doing

ホワット・ユー・アー・ドゥーイング

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1964年9月29・30、10月26日　Ⓛ 2分31秒　Ⓥ ポール

里中　ポールの手による美しいメロディに、リンゴによる力強いバスドラとティンパニーが曲に厚みをもたせています。全体的にシンプルなんだけど、控えめな味つけがそこかしこにちりばめられていて、ビートルズのアレンジのうまさに舌を巻く。でも、セッション最終日までもつれこんだことを考えると、苦心して仕上げたようです。

歌詞もポールが書いている。Please stop your lying（嘘をつくのはやめろ）/ You got me crying, girl（僕を泣かせないでくれ）/ Why should it be so much to ask of you（このくらいのことは聞いてもいいだろ）/ What you're doing to me（僕をどうしようっていうんだい）という歌詞。恋人の嘘に泣かされて苦しんでいるという内容はポールらしくない。ジョンの影響でしょうか。

遠山　ポールが、このアルバム用に新たに書きおろしました。リード・ヴォーカルもポール。この時期、ポールはいろいろな

曲調、そして歌い方を試すようになってきている。でも、録音を3日にわたってくりかえしているところを見ると、かなり手こずった様子。この曲を「不完全な作品」という人がけっこういますが、僕はうまくまとめあげていると思います。I've been waiting here for you（ここでずっと待ってるんだ）への移行などは、ポールの試行錯誤というか、果敢な挑戦ぶりが感じられます。『ラバー・ソウル』に収められた名曲〔ドライヴ・マイ・カー〕につながる萌芽がみてとれます。

間奏は、ジョージのリッケンバッカー12弦とジョージ・マーティンのピアノ。いい味だしていますね。それにしても、ジョージは2月にアメリカでリッケンバッカー360/12を手に入れてからというもの、12弦ギターばかり弾いていますね。そうとう気に入った様子。

14. Everybody's Trying To Be My Baby

みんないい娘

Ⓦ Carl Perkins
Ⓡ 1964年10月18日　Ⓛ 2分23秒　Ⓥ ジョージ

里中　アルバムの最後を飾る曲。ジョージが大好きなカール・パーキンスの歌（1957年発表）です。楽しそうに歌い、得意げにギターを弾いている。後半になるにしたがって調子があがり、とくにエンディングのところでのソロはお見事。61年のギグからジョージは自身のレパートリーにくわえていますから、十八番なんですね。原題の訳は「みんなボクの彼女になりたがるんだよ」ですが、このうぬぼれた歌詞がなんともいえずほほえましい。

ビートルズのメンバーはみんな、「キング・オヴ・ロカビリー」（The King of Rockabilly）と呼ばれたカール・パーキンスが好きだっ

た。ポールは「カール・パーキンスがいなかったら、ビートルズは存在しなかった」とまで語っている。

遠山　ふたたびカール・パーキンスの歌が登場しました。ビートルズが取りあげたパーキンスの曲は3曲ですが、これで最後になりました。64年、カール・パーキンスはイギリスを訪れているんですが、その折にアビイ・ロードのスタジオに招待された（6月1日）。ビートルズはそこで〔ハニー・ドント〕〔マッチボックス〕〔みんないい娘〕などを、作者のまえで披露しています。ビートルズとエルヴィス・プレスリーはしっくりいかなかったけど、カール・パーキンスとはみんな仲よくなりました。

85年にアメリカのＴＶ局が企画したカール・パーキンスの〔ブルー・スエード・シューズ・ア・ロカビリー・セッション〕のスタジオ・ライヴに、当時めったに人前に出なかったジョージが出演してこの曲を歌いました（リンゴも出演）。ポールも81年にカール・パーキンスと一緒に〔ゲット・イット〕をレコーディング、ポールのアルバム『タッグ・オヴ・ウォー』に収録されました。「みんなカール・パーキンスのベイビーになりたかった」というわけ。

CamScannerでスキャン

I still believe all you need is love,
but I don't believe that just saying it
is going to do it, you know.

愛こそはすべて、といまでも思っている。でも、
それを口にするだけで、愛のある世界が実現するとは
思っていない。

— John Lennon

CamScannerでスキャン

They used us as an excuse to go mad,
the world did, and then blamed it on us.

みんな、騒ぐ口実に僕たちを利用した。
世界中どこでもそうだった。で、あとになって
それを僕たちのせいにしたんだ。

— George Harrison

世界各地で巻き起こった"ビートルズ騒動"に関して。

I thought you could embrace rock and still hold on to the
old values, including songwriting craftsmanship.

作曲の技法など、昔ながらの価値観を手放さずに
ロックをやり続けていくことはできると思った。

— Paul McCartney

CamScannerでスキャン

Beatles Album 5

HELP!

ヘルプ！（4人はアイドル）

1965年8月6日リリース

Ⓛ 34分20秒　Ⓟ ジョージ・マーティン　Ⓢ アビイ・ロード・スタジオ　Ⓒ ロバート・フリーマン

SIDE A	SIDE B
1 Help!	8 Act Naturally
2 The Night Before	9 It's Only Love
3 You've Got To Hide Your Love Away	10 You Like Me Too Mu32ch
4 I Need You	11 Tell Me What You See
5 Another Girl	12 I've Just Seen A Face
6 You're Going To Lose That Girl	13 Yesterday
7 Ticket To Ride	14 Dizzy Miss Lizzy

CamScannerでスキャン

泉のように湧きでる曲想

1965年に入っても、ビートルズは多忙だった。主演映画『ヘルプ！ 4人はアイドル』の撮影をしながら、本アルバムを制作しなければならなかった。その間、多くのインタヴューや写真撮影に応じ、茶目っけを出しながら、こぼれるような笑顔をふりまいた。メンバーはすでに自分たちのイメージづくりに関心はなかったが、「4人はアイドル」を演じなければならなかった。

アルバム『ア・ハード・デイズ・ナイト』と同様、A面は映画『ヘルプ！』のサントラ、B面は新曲とカヴァー曲という構成である。泉のように湧きでる曲想。サウンドを探求する旺盛な好奇心。音楽的才能の萌芽がそこかしこに見える作品集として、いまも多くのファンに親しまれている。

特筆すべきは、多重録音ができるようになって、担当する楽器が固定的でなくなったこと。ポールがリード・ギターを弾いたり、ジョンがエレクトリック・ピアノを奏でたりするようになった。これによって、ビートルズのサウンドに新たな地平が広がった。また、〔ヘルプ！〕〔ザ・ナイト・ビフォア〕〔恋のアドバイス〕などによって、コーラス・グループとしても頂点をきわめることになった。

ジャケット写真は、ロバート・フリーマンが撮影。これまではアルプスで撮影されたといわれてきたが、実際はトゥイッケナム・フィルム・スタジオ（ロンドン近郊）で撮られた。フリーマンは当初、手旗信号で「HELP」のスペルをつくるというアイディアを持っていたが、構図がよくなかったので、その案を断念。たんに絵になるポーズが採用されることになった。

CamScannerでスキャン

1. Help!

ヘルプ！

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1965年4月13日 Ⓛ 2分18秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　素晴らしいヴォーカル。見事なコーラス・ワーク。きめこまやかな演奏。そして、なにより高い音楽性。驚異というより、むしろ奇跡。最高傑作の一つです。最初から最後まで聴き手をぐいぐい引き込んでいく。

映画の主題歌用につくった曲ですが、すでに名声は手に入れたものの、プライヴァシーも人間らしい生活もなくしつつある当時の正直な気持ちを歌ったものだといわれています。ジョンは71年のインタヴューで、「僕がこれまでに書いたなかで、真実を歌っているのは〔ヘルプ！〕と〔ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー〕だけだ」と語っているように、精神的な疲弊を感じながらこの曲を書いたようです。

とはいえ、その苦悩をすっかり覆い隠してしまうほどの歌声とサウンド。アイドルの"ファブ・フォー"が歌う、すこぶるゴキゲンな曲に仕上がっている。

遠山　レコーディングは、映画の撮影開始後およそ2か月たってからおこなわれました。当初、映画のタイトルは『Eight Arms To Hold You』（君を抱きしめる8本の腕）でしたが、ジョンとポールが難色を示したので、『ヘルプ！』に変更、急いでジョンがこの名曲を書きあげました。

「助けて！」という叫びは「じつは本心だった」と、あとになって気づいたそうです。過密スケジュールや過剰すぎる人気ぶりに、ジョンは自己を失いかけていた。ほんとうに辛い時期だったようです。本人みずから「僕の太ったエルヴィス時代」といっているように、ストレスからくる暴飲暴食で、見た目のジ

ョンはちょっと太りぎみ。このころは毎日のようにマリファナを喫って、自堕落な倦怠生活を送っていたようです。

演奏面では得意技を連発。ジョンの12弦アコースティック・ギターのストローク、Won't you please の部分ではジョンとポールが高低を入れ替わったりするなど、とにかく聴きどころが満載。

2. The Night Before

ザ・ナイト・ビフォア

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年2月17日 Ⓛ 2分34秒 Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ポールの、おそらく手もなくさっと書きあげたポップな曲。Last night is the night I will remember you by（僕の記憶のなかの君はいつも昨夜の君）と変調するところなどは、このアルバム以降の、卓越したアレンジ能力を予感させる。

歌詞は貧弱。Now today I find you have changed your mind（きょうになって君が心変わりしたってことがわかったんだ）/ Treat me like you did the night before（きのうの晩のように愛してくれないかい）と、前夜のやさしさとは違う態度を見せる恋人を嘆くというもの。

間奏のリード・ギターは、「ジョージとジョンによる」といわれていますが、ポールがお得意のベンディング（チョーキング）が入っていることを考えると、上がジョージ、下がポールによるオクターヴ演奏ではないですか。

遠山　曲に物語性をもたらすような転調が、ポールはじつにうまくなりました。それからコーラスが冴えています。上がジョージ、下がジョンです。ジョンは、エレクトリック・ピアノ（ホーナー・ピアネット）をはじめて披露しています。コードを弾いていますが、リズム・ギターで見せるのと同様、とてもうまく

ドライヴしている。

間奏のギターですが、クレジットにポールの名はありません。これはポールだといっている人もけっこういますが、ジョンがこの程度のギターを弾けなかったとは考えにくいし、このギターの音はジョンの好んだリッケンバッカー325です。ということで、やはりジョンではないでしょうか。

映画では、ソールズベリー平原での演奏シーン（もちろん疑似演奏）で、〔シーズ・ア・ウーマン〕と交互で使われています。ミリタリー・ルックに身を固めていますが、寒そうな表情をしているのが印象的。

3. You've Got To Hide Your Love Away

悲しみはぶっとばせ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年2月18日 Ⓛ 2分08秒 Ⓥ ジョン

里中　始めから終わりまで、ずっとアコースティックな演奏でとおしている。ドラムスのリンゴは、静かにブラシでスネアをこすっているだけ。

ジョンがボブ・ディランに影響されて書いた曲だといわれていますが、ジョンは他人から影響を受けてみずからの軌道を変える人間ではありません。ジョンは"いいとこ取り"をするだけなんです（笑）。そもそもあらゆるオリジナルは気づかれない剽窃なのですが、正直者のジョンは、ディランに刺激されてこの曲をつくっただなんて発言してしまったために、やたらディランと結びつけて語られてしまう。〔アイム・ア・ルーザー〕もディランの影響を受けた曲だといわれているけど、この曲との共通点はどちらもclown（ピエロ）という単語が入っているだけのこと。この時期、ジョンは自分がピエロに思えたのでしょう

か。

内容は、Hey! you've got to hide your love away と歌っているように、「恋心は自分の胸にしまっておけ」というものですが、どうして邦題は〔悲しみはぶっとばせ〕になってしまったのか。それにしても、ざらざらしたジョンの声がたまらなくリリカルです。

遠山　映画では、4人が室内でくつろぎながら演奏しています。ジョンの歌いっぷりと、ジョージの投げかけるエリナ・ブロン（女優）への視線が印象的です。

この曲は、英国のバスカー（政府公認のストリート・ミュージシャン）たちがもっとも好んで歌うビートルズ・ナンバー。地下鉄の構内を歩いていると、よく耳に入ってくる。歌いやすいのかなあ。それとも恋に悩んでいる人たちが多いと知って歌っているのかな。

フルートを吹いているのはジョン・スコット。ビートルズはこのレコーディングで、〔ラヴ・ミー・ドゥ〕でのセッション・ドラマー、アンディ・ホワイトを除けば、はじめて外部のミュージシャンを使ったことになります。

4. I Need You

アイ・ニード・ユー

Ⓦ George Harrison　Ⓛ 2分28秒　Ⓥ ジョージ（ジョン、ポール）
Ⓡ 1965年2月15・16日

里中　ジョージの曲。〔ドント・バザー・ミー〕（『ウィズ・ザ・ビートルズ』に収録）以来のオリジナル曲。その間、ずっとくすぶっていたのか。いや、おそらく出る幕がなかったのでしょうな。満を持して発表までこぎつけたのがこの曲。ぜんぜん悪くない。

Please come on back to me（戻ってきておくれ）/ I'm lonely as can

be（たまらなくさびしいんだ）/ I need you（そばにいてほしい）というように、歌詞はいたって単純。君が必要だから、ずっとそばにいてくれと懇願するラヴ・ソング。恋人パティ・ボイドのために書いたようですね。

ヴォーカルはジョージによるダブルトラック。コーラスはジョン（低音部）とポール（高音部）が担当。

遠山　やっときましたね。いかにもジョージというナンバー。映画では、ソールズベリー平原で軍隊に見守られながらレコーディングするシーンで使われています。ジョージのうれしそうな顔が印象的。願わくば、ジョージにはこのポップ路線をずっと走ってほしかった。この後、ジョージは方向性を変えてインド音楽に傾倒、ポップな曲からだんだん離れていってしまう。

演奏で注目すべきは、はじめて使用したヴォリューム・ペダル（ギターに接続して足で踏む装置）。ヴォリュームの増減でヴァイオリンのようなギター・サウンドを出す。それで、ヴァイオリン奏法ともいわれている。"嗚咽"のようなむせび泣く音が、この曲に合っています。

リンゴはスネアとバスタムを堅実に叩いている。ポールのベースもかっこいい。目立たないけど、多彩なベース・プレイを披露している。エンディングもおしゃれ。さりげなく、「どうでした、ヴォリューム・ペダルの音色は？」と語りかけているようです（笑）。

CamScannerでスキャン

5. Another Girl

アナザー・ガール

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年2月15・16日 Ⓛ 2分05秒 Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ポールの曲。もちろんヴォーカルもポール。声質に合ったノリのいい曲。映画では、バハマの海辺で演奏していましたね。水着の可愛い子ちゃんをギターに見立てて"弾いて"いました。

歌詞はというと、新しい彼女ができたから、僕のことはあきらめなよ、という身勝手なもの。出だしから、For I have got another girl, another girl（だって、僕には新しい彼女ができたんだから）だなんて、のんきに調子よく歌ってけつかる（笑）。ポールはジェーン・アッシャーという恋人がいながら、ロンドンに秘密のフラットを借りて、アナザー・ガールと遊んでばかりいた。思わずホンネがでたというところでしょうか。

それにしても、ポールはギターがうまい。とくにベンディング・プレイなんかを聴くと、ギタリストとしても一流だなと思う。これ、ワンテイクで録音したようですが、ジョージのリード・ギターが気に入らなかったポールが、翌日、自分で弾いて差し替えたというのはほんとうですか。

遠山　伝えられるところではそうなっていますが、ジョージがヘタだったからではなく、ポールのイメージするサウンドが得られなかったことが原因のようです。ポールの自作曲へのこだわりを伝えるエピソードですね。

ポールはギター、ベース、ピアノ、ドラムとなんでも器用にこなせるようになってきたので、このころからメンバーの演奏が気に入らないと、自分で録りなおしたいと口にするようになる。これをポールの完璧主義と捉えるか、それとも傲慢と見る

か。むずかしいところですね。「涙の乗車券」でもポールがリード・ギターを弾いていますが、察するに、ギタリストの座を奪われつつあったジョージは、内心ちょっと不安だったのではないでしょうか。ジョージがシタールに走ったのは、こうしたことも一因であったように思います。

6. You're Going To Lose That Girl

恋のアドバイス

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年2月19日、3月30日 Ⓛ 2分18秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　この歌を聴いて、あと追いのバッキング・コーラスのパートを真似しなかったというファンはいないでしょうね。ジョンが You're gonna lose that girl（君はあの娘にふられちゃうよ）と歌えば、ポールとジョージがそうしているように、みんなそれにつられてハモりたくなる。頬ずりしたくなるような愛らしいコーラスです。

映画では、スタジオでのレコーディング・シーンで使われていますが、逆光を取り込んだカメラ・ワークに思わず瞠目。光と影が交錯する、その具合がとてもいい。薄いくちびるのジョン、くわえタバコのリンゴ、一つのマイクをはさんで向かい合うポールとジョージ。まことにけっこうなシーンでした。この映画のなかで、いちばん好きな場面。

歌詞は、邦題が示すように「恋のアドバイス」をしているわけだけど、And I will take her out tonight（代わりに僕が彼女をデートに誘って）/ And I will treat her kind（うんとやさしくしてあげよう）という下心もちらっとのぞかせる。

遠山　隠れた名曲の一つ。ジョンのヴォーカルからいきなり入るこのパターン。かっこいい。追いかけるように、入ってくる

コーラスは、ビートルズらしい最良のヴォーカル・サウンドといっていい。ジョンは、メロディ・メイカーとしてもポールに劣らぬポップ・チューンをつくりましたね。

また、ミドル・セクションでの、強引ともいえる転調は、息をのむほど素晴らしい。楽譜を読めないビートルズだからこそできた力技です。

リンゴによるボンゴとポールによるピアノがオーヴァーダビングされていますが、ジョージのギター・プレイにも注目してほしい。ベンディングをうまく使ったシャープなリード・ギター。これもオーヴァーダビングですが、曲にうまくフィットしている。ジョージは目立たぬ貢献をしています。

7. Ticket To Ride

涙の乗車券（ティケット・トゥ・ライド）

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年2月15日 Ⓛ 3分09秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中　大傑作。まずはジョンの歌唱力。声の艶は比類ない。あでやかさ、つつましさ、いじらしさを感じる。

イントロのギターはジョージですが、真ん中とエンディングのリード・ギターはポール。最後のベンディング・プレイも曲にぴったり。エンディングの My baby don't care では、テンポが急に速くなり、フェイド・アウトしていく。テンポをゆっくりさせて終わるパターンはよくあるのですが、その逆をやった。ものすごく新鮮に感じました。

それから、中学生のころ、But she don't care が不思議でならなかった。文法的なことをいったら、she doesn't care となるはずでしょ。のちに、イギリスでもアメリカでも、くだけた英語ではよく使われている用法だと知ることになるのですが……。

遠山 英国ワイト島の、その名もズバリRyde（ライド）という港町でポールのいとこ（ベット・ロビンズ）とその夫がパブを経営していて、この曲はそのRydeにポールとジョンが旅をしたことがモチーフになっている。そう、「Ticket To Ryde」（ライドへの乗車券）でもあったんです。ジョンは、「チケット・トゥ・ライド」とは、ハンブルクの娼婦が取得しなければならなかった健康証明書のことだといっていますけど（笑）。

この曲を聴くと、雪の中ではしゃぐ4人の姿がすぐに思い浮かびます。映画の撮影とはいえ、ほんとうに楽しそう。このシーンを観た人はみんな「かわいい！」と思ったのではないでしょうか。撮影はドイツ国境近くのオーストリア・アルプスのスキー場でおこなわれました。ミュンヘンのハード・ロック・カフェへ行くと、このときの撮影で使われたカチンコやメンバーが着用した衣装がディスプレイされています。

それにしてもうまくできた曲ですね。ひじょうに完成度が高い。コピー・バンドが一流かどうかは、この曲の演奏を聴けば一発でわかります。ちなみにレコーディング曲で、3分を超えたはじめての曲になりました。

8. Act Naturally

アクト・ナチュラリー

Ⓦ Johnny Russell / Voni Marrison
Ⓡ 1965年6月17日 Ⓛ 2分29秒 Ⓥ リンゴ（ポール）

里中 リンゴのヴォーカル。カントリー＆ウエスタンの大御所、バック・オーエンスのナンバー。ビートルズがつくり込んでレコーディングした最後のカヴァー曲。うまくスイングしています。ジョージのギターも軽快にリズムを刻んでいる。ジョージはカントリーっぽいギターがとてもうまい。

CamScannerでスキャン

They're gonna put me in the movies（おいらを映画に出してくれるんだって）/ They're gonna make a big star out of me（大スターにしてくれるんだってさ）/ We'll make a film about a man that's sad and lonely（孤独でさびしい男の映画をつくるんだ）/ And all I gotta do is act naturally（おいらは自然にふるまうだけさ）……映画に出演して、自然体でふるまい、ビッグ・スターになるんだ、という歌詞もこのアルバムのモチーフにうまく溶け込んでいる。

遠山　リンゴのほのぼのしたヴォーカルが曲にマッチしています。LPのB面1曲目をリンゴの曲で飾るのは初めてのこと。もともとは『アンソロジー2』に収録されている〔If You've Got Trouble〕をリンゴ用の曲として収録する予定でしたが、楽曲の出来ばえが気に入らなかったジョンとポールが、これに差し替えたんです。リンゴの人気が高かったアメリカでは、シングル〔イエスタデイ〕のB面として発表。全米ビルボードでは47位を記録しています。

ハーモニーはポールがつけていますが、リンゴとポールの二人がデュエットしているのは、ビートルズが公式発表した全213曲のうち、この〔アクト・ナチュラリー〕だけ。それから、ポールがアメリカ発音でカントリーっぽく歌っているのに気づきましたか。89年にバック・オーエンスがこの曲をリメイクしたとき、リンゴ本人がレコーディングに参加しました。

9. It's Only Love

イッツ・オンリー・ラヴ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年6月15日　Ⓛ 1分56秒　Ⓥ ジョン

里中　ジョンのせつないヴォーカルが聴きどころ。歌詞を見ると、スモーキー・ロビンソン、もしくはスモーキーに影響を受

CamScannerでスキャン

けたボブ・ディランを意識したのか、right / fight / night / sight / bright のような韻を踏む（英語では rhyme という）単語を入れて作詞している。かなり苦心してつくったんじゃないかな。

でも、本人は納得できなかった。ジョンはそのときの気分でいうことがコロコロ変わるから、文字どおりに受けとっていいかどうかわかりませんが、「嫌いな曲。歌詞が最悪」なんだそうです。「純愛」なるものに懐疑的な目を向けていたジョンにしてみれば、自分の気持ちを偽って書いたのかもしれない。たしかに、Just the sight of you makes nighttime bright, very bright（きみを見ただけで、夜の闇も明るくなる、とっても明るく）のくだりは、笑いながらふざけて歌っているように聴こえる。まあ、少なくとも、真剣に取り組んでいなかったことがうかがえます。

遠山　ヴォーカルを聴くと、さすがにジョンだと思わせますが、たしかにいい歌詞とはいえませんね。作詞の技巧に走っているあまり、なんだかウソっぽく聴こえます。空疎。ついでいうと、80年代に発売されたステレオ用のレコードに付いていた歌詞の訳も、直訳っぽくて、ぎこちないものでした。ということで、歌詞は気にせず曲だけに耳を傾けましょう。

演奏で目立つのはギターの音。なんと5本も使用している。イントロのギターはジョンのストローク。2本のアコースティック・ギターのうち、遅れて入ってくるのがジョージのフラマス12弦。フェンダーのストラトキャスターによるリード・ギターが二つ入っていますが、これは両方ともジョージだという説が有力ですが、一つはジョンだとする可能性も否定できません。

ちなみにアメリカでは、キャピトルが編集した『ラバー・ソウル』に収録されました。

CamScannerでスキャン

10. You Like Me Too Much

ユー・ライク・ミー・トゥー・マッチ

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1965年2月17日　Ⓛ 2分35秒　Ⓥ ジョージ（ポール）

里中　ジョージの作品。単純なメロディだけど、いい曲ですね。You'll never leave（君は僕から離れられないんだね）/ And you know it's true（そうだよね）/ 'Cause you like me too much（君は僕のことがどうしようもないほど好きなんだね）/ And I like you（僕も君が好きさ）だなんて歌っている。勝手にほざいていろ、という感じ（笑）。歌詞を読んでいると、語彙が少ないというか、発想がこぢんまりしているというか、ハッとするような刺激的な表現が少ない。この〔ユー・ライク・ミー・トゥー・マッチ〕は、〔アイ・ニード・ユー〕の歌詞とほとんど変わるところがない。タイトルもいまーつ。〔アイ・ニード・ユー〕もそうですが、「キミと僕の物語」から離れられないのはいいとしても、気の利いた表現がないのはいただけない。

演奏のほうは、ポールとジョージ・マーティンがアコースティック・ピアノ（スタインウェイ・グランドピアノ）を一緒に弾き、ジョンがエレクトリック・ピアノ（イントロはこれ）を奏でている。ギター・バンドによるキーボード中心の曲。ビートルズの場合、みんなで相談し合って、誰が何をやるか決めていたのでしょうか。

遠山　どんな曲でも、これでもかというほどつくり込むビートルズですから、アイディアを出し合う話し合いはつねにあったでしょうね。基本的にはアイディアを出した本人が演奏していたのでしょうが、ほかのメンバーに頼んでやってもらうこともよくありました。

さて、5枚目にしてはじめて、ジョージの曲がアルバムに2

曲入りました。この曲もパティ・ボイドとの恋愛を描いたものだといわれています。ザ・ギタリスト、ジョージの曲なのに、鍵盤楽器が主体となっているところが興味深い。それからハーモニーもジョージみずからがつけたようです。

11. Tell Me What You See

テル・ミー・ホワット・ユー・シー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年2月18日　Ⓛ 2分36秒　Ⓥ ジョン、ポール（ジョージ）

里中　Open up your eyes now（目を開けて）/ Tell me what you see（何が見えるか、いってごらん）/ It is no surprise now（驚くことはないさ）/ What you see is me（君に見えるのは僕だけ）というような、たわいのない歌詞。どうといった曲でもないのに、ヴォーカルだけで聴くに値するポップ・チューンに変えてしまうジョンとポール。まるで魔法を使ったかのようですね。ハモり具合が、さすがと思わせる。

これはポールがつくった曲ですが、ポールにはめずらしくメロディの際立った転調がありません。あわててつくって、さっさと録音したのでしょうか。

遠山　うーん、箸休めって感じですかね。ビートルズは曲をつくり込むいっぽう、これはこのままのノリでいこうと判断するや、一発録りでビシッと決める演奏力をもっていました。これなんか、一発で決めた曲っぽいですよね。ライヴのノリを意識したのかなあ。ビートルズは傑出したソングライター・チームであり、アレンジャー集団であると同時に、最高のライヴ・バンドでしたから。

演奏はエレクトリック・ピアノがいい味をだしている。これはポールが弾いています。リム・ショットを効かせたドラムは

CamScannerでスキャン

もちろんリンゴ。それから、タンバリンもいい。ラテン系の音楽で使われるギロ（ひょうたんに刻み目をつけて棒をこすって音をだす南米の打楽器。英語ではグィアロゥの発音に近い）なんかも使用しています。ここでは一転、ギター奏者たちがパーカッショニストになっています。めずらしく間奏にリード・ギターがなく、エレクトリック・ピアノ（ポール）とドラムス（リンゴ）で軽快に演奏している。好奇心旺盛なビートルズが、いろんな楽器に手を出しはじめたことがわかる曲です。ビートルズは次のアルバム『ラバー・ソウル』でサウンドづくりに没頭するようになりますが、この曲はそこに至る過渡期であることを象徴する曲といってもよいでしょう。

12. I've Just Seen A Face

アイヴ・ジャスト・シーン・ア・フェイス（夢の人）

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年6月14日　Ⓛ 2分04秒　Ⓥ ポール（ポール）

里中　早口言葉にも似た、言葉の速射にまずニンマリさせられます。どこで息つぎをしているか考えるより、ポールの作風がだんだん翼を広げていることのほうに注目したい。

ミドル・セクションの Falling, yes, I'm falling（落ちていく、そう、恋に落ちていく）/ And she keeps calling me back again（あの娘はいつも僕をふりむかせる）は、音の類似（falling と calling）と意味の離反（falling と calling back）を効果的に用いて、これまたニンマリさせられます。

ポールは、カントリーもうまく歌いこなしますね。卓越した才能の片鱗をうかがわせる。ポールの向上心がなければ、ジョンに牽引された初期のビートルズのままで終わっていたかもしれない。また、本人みずから「自分はベーシストというよりも

ギタリストだと思っている。なかでもアコースティック・ギターがいちばん好き」というだけあって、ポールはアコースティック・ギターがうまいですね。

遠山 アコースティック・ギター3本(ポール、ジョン、ジョージ)とリンゴによるスネアとマラカスだけで録音されています。

中学生のころ、この曲を何度も歌いましたよ。最初の数小節が歌えるようになっただけで、英語をきわめたような錯覚を覚えました(笑)。ポールは、ウイングスの時代から現在にいたるまで、ずっとライヴでとりあげています。お気に入りの曲なんです。

ポールは、楽器のなかで一つだけ選べといわれたら「迷わずアコースティック・ギターにする」と語っているほど、アコースティック・ギター好き。たしかに、フィンガー・ピッキングがひじょうに巧み。イントロのアルペジオは、ジョージではないかと思っている人もいるようですが、間違いなくポールです。

13. Yesterday

イエスタデイ

Ⓜ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年6月14・17日 Ⓛ 2分04秒 Ⓥ ポール

里中 作曲家としてのポールの、天才的な才能を世に知らしめた作品。あまりにも不用意に曲想が浮かんだので、自分がつくった曲ではなく、誰かの曲ではないかと心配になったようですね(笑)。ところが、誰に聴かせても、はじめて聴くメロディだというので自分のオリジナルだという確信がもてたというのですが……。ということで、曲想が浮かんでから録音するまでに1年半以上も経過している。

昨日までいた「彼女」が、理由もいわずに去っていってしま

CamScannerでスキャン

った、という歌詞は、14歳のときに死別した母（メアリー）を偲んで書かれたものだといわれています。

遠山　音楽の教科書にも登場するビートルズの楽曲中もっとも有名な作品であり、世界でいちばん親しまれているポップ・チューンです。史上最多のカヴァー・ヴァージョン（3000種類を超えている）を誇っています（「ギネス・ブック」でも認定を受けている）。ポール本人も80年のインタヴューで「僕の最高傑作」だと語っている。

ポールは、63年の冬の「ある朝、目ざめたら、曲が浮かんでいて、すぐにピアノに向かって完成させた」と述べています。当初は〔スクランブルド・エッグス〕(Scrambled Eggs)というタイトルをつけていました。そして、あとから詞をつけ、ポールのアコースティック・ギター（エピフォン・テキサン）と弦楽四重奏だけで仕上げました。クラシックの要素を入れることを進言したのはジョージ・マーティン。というわけで、レコーディングに参加したのはポールだけ。あとの3人はまったく手を貸していない。

信じられないことに、6月14日のセッションで、ポールはまず〔アイヴ・ジャスト・シーン・ア・フェイス（夢の人）〕を6テイク歌い、次に〔アイム・ダウン〕を7回もシャウト、そしてこの名曲に取りかかった。さすがポール、というしかありません。

14. Dizzy Miss Lizzy

ディジー・ミス・リジー

Ⓦ Larry Williams
Ⓡ 1965年5月10日　Ⓛ 2分54秒　Ⓥ ジョン

里中　ジョンの大好きなラリー・ウィリアムズ（アメリカ人のロッカー）の曲。キャヴァーン時代（60年から62年）にやっていた

ロックンロール。65年の全米ツアーやBBCラジオのセッションでも取りあげている（『ライヴ!! アット・ザ・BBC』収録）。ライヴでは、さぞ盛りあがったでしょうね。

でも、このアルバムには合いませんね。ビートルズは、もはやキャヴァーン時代の粗野なロック・バンドじゃない。アーティスト集団になりつつあった。だから、往年のロックンロールがこうしてアルバムに入ると、ひどく違和感をおぼえます。だから、ジョンの魅力ある声を聴いても、「絶叫」「けたたましい」「やけっぱち」「投げやり」「勝手にしやがれ」「自暴自棄」「オーヴァーヒート」などの言葉が頭のなかを飛び交ってしまう。

ジョージもよくない。ギター・リフは単調だし、おまけに失敗を繰り返している。ジョージ・マーティンはよくこれで「オーケー」を出しましたね。うーん。少なくとも、このアルバムには入れないほうがよかったのではないでしょうか。

遠山　ラリー・ウィリアムズが58年に発表した曲。B面には、これもビートルズがカヴァーした〔スロー・ダウン〕が入っています。ジョンは解散後のトロントでのコンサートでも、プラスティック・オノ・バンドを率いて演奏している。演奏もよくないし、録音にも感心しませんね。もっと丁寧につくり込みをやってほしかった。この曲だけが不完全なままに収録されたという感じがします。

これを最後にビートルズはカヴァー曲を録音しなくなりますが（『レット・イット・ビー』収録のジャム・セッションでの〔マギー・メイ〕は除く）、このことが意味するのは、オールディーズではもはや彼らの創造的な野心を満足させることができなかったということでしょう。

CamScannerでスキャン

We were learning the technique on *Rubber Soul*.
We were more precise about making the album, that's all.

『ラバー・ソウル』で僕たちはテクニックを身につけた。
アルバムづくりに熟練したんだ。それだけのことさ。

—John Lennon

That was Paul's title, it was like 'Yer Blues'.
I suppose, meaning English Soul, just a pun.

『ラバー・ソウル』はポールが考えついたタイトルで、
〔ヤー・ブルース〕みたいなやつだよ。
英国版ソウルといったらいいのかな。ダジャレだよ。

—John Lennon

CamScannerでスキャン

Beatles Album
6

RUBBER SOUL

ラバー・ソウル

1965年12月3日リリース

Ⓛ 35分50秒　Ⓟ ジョージ・マーティン　Ⓢ アビイ・ロード・スタジオ　Ⓒ ロバート・フリーマン

SIDE A	SIDE B
1 Drive My Car	8 What Goes On
2 Norwegian Wood (This Bird Has Flown)	9 Girl
3 You Won't See Me	10 I'm Looking Through You
4 Nowhere Man	11 In My Life
5 Think For Yourself	12 Wait
6 The Word	13 If I Needed Someone
7 Michelle	14 Run For Your Life

CamScannerでスキャン

最高のレコーディング・バンドへ

『ア・ハード・デイズ・ナイト』以来のオリジナル作品集。世界のアイドルから脱皮して、クリエイティヴなアーティストとしての道を歩み始めたことを印象づけた。ツアーや映画撮影の合間に収録されたこれまでのレコーディングとは違い、スタジオ・ワークがもたらすサウンドづくりをメンバーたちは大いに楽しんだ。それが、ジョンとポールのパートナーシップや、グループとしての結束感を高め、ひいてはアルバム全体にトータル性をもたらすことになった。結果、『ラバー・ソウル』を「最高のアルバム」と賞賛するファンを数多く生み出した。

タイトルの「ラバー・ソウル」とは、ゴムの靴底のこと。「黒人ソウルが本革の靴底なら、さしずめ僕たちのソウルはゴム（ラバー）の靴底にすぎない」という自嘲とも挑発ともつかぬユーモアを感じさせる。あえて訳せば、"ビートルズのソウル"というところか。

多くのミュージシャンを啓発したことでも有名。ビーチ・ボーイズのブライアン・ウィルソンは、このアルバム（ブライアンが聴いたものはオリジナル盤とは曲目が多少異なる）に触発されて『ペット・サウンズ』の制作に取りかかり、フランク・ザッパは『フリーク・アウト！』を世に送り出している。

ジャケット写真を撮ったロバート・フリーマンは「ウェイブリッジにあったジョンの自宅で撮った」と述べているが、背後の灌木などからサリー州のボルダミア湖（Boldermere Lake）のほとりで撮影されたのは明らか。また、偶然が生んだ「歪んだ写真」は、メンバーの精神状態や音楽的な変容を象徴するものとして価値がおかれている。

CamScannerでスキャン

1. Drive My Car

ドライヴ・マイ・カー

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1965年10月13日
Ⓛ 2分27秒 Ⓥ ポール、ジョン（ジョージ）

里中　1曲目から、これまでのビートルズとはまったく違う印象を受けますね。何が違うんだと問われれば、「歯切れ（演奏）が違う。綿密さ（アレンジ）が違う。視点（歌詞）が違う。ゆえに全部（世界観）が違う」というしかないんだけど……。

ビートルズは、新しいビートルズとして変貌を遂げた。ライヴ・バンドからレコーディング・アーティストとなったビートルズの強烈なメッセージがこの曲にあるような気がします。車のクラクションをイメージした Beep, beep'm, beep, beep, yeah のシャウトも曲にぴったり。ポールが弾く、間奏でのスライド・ギターが冴えている。そして、黒っぽいヴォーカルとブンブンうなるベース。ポールの勢いを感じます。

歌詞の内容は、映画スター志望の女の子が Baby you can drive my car（あたしの車を運転させてあげる）というものですが、自分の体を車にたとえてもいる。歌詞も上出来。

遠山　ひじょうに歯切れのいい演奏です。加えてミキシングも素晴らしい。曲がつくられる過程でのおもしろい話を一つ。ポールは歌詞にてこずっていた。なんでもはじめは You can buy me diamond rings だったそうです。これじゃ〔キャント・バイ・ミー・ラヴ〕の歌詞とほとんど変わらない。そこで、ジョンが Baby you can drive my car にしたらどうかと提案。これで、いっきに官能的な歌詞になった（笑）。

印象的なベース・ラインは、オーティス・レディングの〔リスペクト〕のベース（奏者はドナルド・ダック・ダン）にヒントを得ている。

僕がこの曲のライヴ演奏を初めて観たのは、92年2月、ドックランズのロンドン・アリーナでおこなわれたワールド・ツアーのリハーサルのとき。ポールがいきなりこの曲を演奏しはじめた。即、感電（笑）。93年の来日公演のオープニングもこの曲でした。

2. Norwegian Wood (This Bird Has Flown)

ノーウェジアン・ウッド（ノルウェーの森）

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年10月12・21日 Ⓛ 2分03秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中　名曲というにふさわしい。哀愁のメロディにのった、ジョンのせつない声。そして、ジョージが奏でるシタール。シタールというインドの弦楽器の存在を知ったのはこのときがはじめてでした。以後、ジョージはシタールを多用するけど、これを超える効果を発揮したことは、残念ながらありませんね。

のちにジョンはこの曲の歌詞に言及して、「ほかの女性と浮気したことを妻シンシアにさとられないように書いたもの」と述べている。We talked until two（話し込んでいたら2時になってしまった）/ And then she said, "It's time for bed"（すると彼女が「ベッドの時間ね」といった）と歌ったあと、間奏に入る。そして、She told me she worked in the morning（彼女は朝から仕事があるといって）/ And started to laugh（おかしそうに笑いだした）とつづく。つまり、間奏が情事の時間だったってわけ。そう思って聴くと、よりいっそう味わい深くなる（笑）。

遠山　ジョージは、ザ・バーズのデイヴィッド・クロスビーからシタールとインド音楽を紹介され、ジョンのすすめでシタールを奏でることになった。このシタールのおかげで、曲全体に薄もやのかかったような神秘的な雰囲気が漂った。彼女（ジャ

CamScannerでスキャン

ーナリストだといわれている）の部屋のなかの、寒々とした様子も音色からなんとなく想像できる。

歌詞はジョンが書いたとされてきましたが、のちにポールは「大半は一緒につくった」と主張、最後に火をつけて彼女の部屋を燃やしてしまうアイディアも自分だといっている。タイトルの〔Norwegian Wood〕は、ノルウェー産の家具をはじめとするスカンディナヴィア産のインテリア家具（おもにパイン材）を指す言葉で、当時（60年代半ば）、そうした木製の家具はロンドンをはじめとする都会の人たちに人気があった。副題の「This Bird Has Flown」の bird ですが、これは「鳥」ではなく、「女の子」を指す俗語。「小鳥ちゃんは飛び去っていく」という感じ。

3. You Won't See Me

ユー・ウォント・シー・ミー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年11月11日 Ⓛ 3分19秒 Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ポールの曲。凡作あつかいする人もいるようですが、名作とまではいえないにしても、かなりの秀作であると思います。ポールのヴォーカルもいいけど、ジョンのタンバリンとコーラスが全体にいい味つけをほどこしている。それにしてもビートルズのコーラス・ワークは素晴らしい。とくに2回目のコーラス"ウーウラララ"は、ジョンとジョージによるスキャット。見事なハモリを披露している。

歌詞は、恋人がかまってくれない心境がつづられている。タイトルにもなっている　You won't see me は「僕に会おうともしないんだね」という意味。When I call you up, your line's engaged（電話をかけても、話し中）/ I have had enough, so act your age（もううんざりだ。その子どもじみた態度はどうにかならないのか）と、冒頭

から嘆いている。

遠山　ポールのベースに工夫がなされている。コーラスの音程が上がっていくときに、だんだん音を下げていくなど、意表をつくベース・ラインを思いついている。かっこいい。モータウンを代表するベーシスト、ジェームズ・ジェマーソンの雰囲気をもったプレイだとポールは述べています。

ピアノにも耳を引き寄せられる。ポールはだんだんピアノにも自信をもってきましたね。というわけで、この曲はポールのひとり舞台という印象があります。

こまかな情報を一つ。リヴァプール時代からの友人で、ロード・マネージャーをつとめていた巨漢マル・エヴァンズがハモンド・オルガンで参加しています（2分30秒あたりからフェイド・アウトで消えるまで）。といっても、Aの音を指一本で押さえているだけですけど。

4. Nowhere Man

ひとりぼっちのあいつ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年10月21・22日　Ⓛ 2分42秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　いやあ、名曲中の名曲。何年、いや何十年も聴いてきたのに、聴き飽きない。仮に私がかなり才能のあるミュージシャンであったとしても、この曲だけは書けない自信がある(笑)。

「ノーウェア・マン」とは、「どこにも居場所のない人間」というような意味。これ、ジョンの造語です。Nowhere man, please listen（ノーウェア・マン、よくお聞き）/ You don't know what you're missing（きみは自分が失ったものがわかっていないのだよ）/ Nowhere man, the world is at your command（ノーウェア・マン、世界はきみの思うとおりになるのに、それに気づかないのかい）とジョンが歌う。

CamScannerでスキャン

歌詞を読んでいると、柔和な哀しみをたたえたブライアン・エプスタインの顔がいつも浮かぶ。いま手にしているものでは満たされない男の虚無感が漂っている。いずれ自分もそうなるかもしれない恍惚と不安。Isn't he a bit like you and me? は「ブライアンって、あなたや僕に似たところがない？」とつぶやいているように聞こえます。

遠山　コンサートをやらなくなったビートルズにとって、ブライアンはもう必要な存在ではなくなった。この時期のブライアンは、Now Here Man（現実にここにいる男）でしたが、Nowhere Man（どこにも居場所のない男）でもあった。里中さんが指摘するとおり、ジョンの頭にはブライアンのことがよぎったのかもしれません。

　さて、曲のほうは、いきなりアカペラの美しいヴォーカル・ハーモニーで始まる。いっきに寓話的な世界に引き込まれます。武道館公演が貴重なのは、この名曲をライヴで演奏しているからだといっても過言ではありません。ぜひ観ていただきたい。

　アニメーション映画『イエロー・サブマリン』の主要キャラクター、ジェレミーのテーマ・ソングとしても使われています。

5. Think For Yourself

嘘つき女

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1965年11月8日　Ⓛ 2分18秒　Ⓥ ジョージ（ジョン、ポール）

里中　ジョージの曲。邦題は〔嘘つき女〕ですが、ジョージは「特定の誰かを歌ったものだけど、誰だったのか覚えてない。政治家だったかな？」と発言している。ここで使われている「ユー」（you）は恋人ではなく、政治家だったのですね。

　Think for yourself（頭を使ってみろ）や Try thinking more if just for

your own sake（自分本位でもいいから、自分の頭でもう少し考えてみろ）などの歌詞には、ジョージのイギリス政府への憤懣やるかたない気持ちが込められている。有名になってお金が入ってくるいっぽうで、税（タックス）政策のことが気になり始めたのでしょうか。

遠山　翌年に発表される次作『リヴォルヴァー』の〔タックスマン〕もそうですが、ジョージは政治や世の中の風潮を題材にした曲を早い時期からつくっています。政治のことならジョンというイメージがありますが、じつはジョージのほうが先に手をつけているんです。

演奏のほうですが、ポールのファズ・ベースに注目していただきたい。ファズというのはギターやベースの音を歪んだようにするエフェクターのことですが、ポールはひじょうに効果的にファズを用いている。ちなみにファズを"考案"したのはフィル・スペクター（アルバム『レット・イット・ビー』のプロデューサー）で、偶然に生みだされた歪んだ音をレコーディングに採用したところ、それが評判になって「ファズ・ボックス」という装置がつくられた。

それから、バタバタと叩くリンゴのドラムも印象的。ハイハットをまったく使っていない。スネアとバスドラだけ。これもリンゴの勘なのでしょうね。歌詞にひそむ怒りのメッセージを不気味に際立たせている。

リハーサル・テイクの一部（コーラスの練習をしているところ）を、映画『イエロー・サブマリン』で聴くことができます。

6. The Word

愛のことば

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1965年11月10日 Ⓛ 2分42秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　めくるめく説教世界に連れ去られていくような感覚があります。とくにジョンがひとりで歌うパートは、さながら"教組降臨"といった趣がある。愛の伝道師たちをひきつれたジョンの素晴らしいヴォーカルが聴きどころ。

In the beginning I misunderstood（最初のうちは誤解していた）/ But now I've got it, the word is good（でも、いまはわかっている。あの言葉が素晴らしいということが）の「あの言葉」とはもちろん love のこと。60年代半ばから盛りあがるヒッピー・ムーヴメントや「ラヴ&ピース」のメッセージと並走している。後半の Give the word a chance to say（あの言葉に一つのチャンスを与えよう）/ That the word is just the way（あの言葉こそが未来を開く手立てだ）の部分に注目。のちにジョンが書くことになる〔Give Peace A Chance〕で使われている give～a chance という言いまわしを用いている。

遠山　ジョンは、陽気なラヴ・ソングにはもう興味を失ってしまったようですね。「ラヴ」というものを人類愛にまで拡げようとしている。

このころのジョンは歌詞のほうに興味をもち、ポールは依然としてメロディのほうに関心を示している。この曲に関する二人のコメントを読むと、ジョンは詞の内容、ポールはメロディと演奏について語っている。このあたりから二人の曲づくりにおける関心がだんだん乖離（かいり）してきたようです。

演奏のほうですが、メロディに変化がないぶん、アレンジのほうに力を入れている。とくにエンディング近くで入ってくるジョージ・マーティンのハーモニウムがいい。絶妙のタイミン

グで、しかも単音からだんだん音を増やして和音にもっていく音色といったら……もう見事というほかない。ここだけでもくりかえし聴く価値があります。

7. Michelle

ミッシェル

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年11月3日　Ⓛ 2分40秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　いいバラードですね。コーラスにしびれます。カヴァー・ヴァージョンがたくさんあるけど、どれもよくない。それはおそらく、ビートルズの洗練されたコーラスに匹敵するものがないということでしょう。

ポールが「ベースもなかなかおもしろい楽器だ」と思うようになったのは、この〔ミッシェル〕だそうですね。ベース音で曲調を変えることができることに気づいたらしい。Michelle, ma belle（ミッシェル、僕の美しい人）/ Sont les mots qui vont très bien ensemble（よく響き合う言葉だ）/ Très bien ensemble（美しい響き）……ファンなら、みんな歌えるこのフランス語。この部分がほかの言語、たとえば日本語だったらという仮定は愉快ですが、どうしてポールはフランス語にしようと思いついたんでしょうか。ビートルズのひらめきというか"思いつき"は、ことごとく「ビンゴ！」でしたね。

遠山　歌詞にフランス語を入れたのは、ポールのアイディアです。英語国民はたいていフランス語の響きに憧れをもっています。歌詞はおもにポールが書いて、ミドル・セクションのI love you, I love you... とくりかえす箇所はジョンが手伝ったようです。

これはあまり知られてはいませんが、フランス語の歌詞を書くにあたって、ジョンにポールを紹介したアイヴァン・ヴォー

ン（二人の共通の友人）の奥さんで、フランス語の教師をしていた妻のジャンが協力しています。発音も彼女に教わったようです。

演奏では、ポールのベース（リッケンバッカー4001）に耳を傾けてほしい。それまでの「ベースは地味だ」という固定観念を見事に打ち破ったメロディアスなベース・ライン。それからジョンによるアコースティック・ギター。クリシェ奏法といわれる半音ずつ下降していくプレイ。これはかなり高度なテクニックが必要。イントロから聴かせてくれます。

8. What Goes On

消えた恋

Ⓦ Lennon / McCartney / Starkey
Ⓡ 1965年11月4日 Ⓛ 2分47秒 Ⓥ リンゴ（ジョン、ポール）

里中　リンゴの名がはじめてソングライターとしてクレジットされた曲。レノン=マッカートニー=スターキー（リンゴの本名は、リチャード・スターキー）となっていますが、リンゴが書いたのはわずか5語だったといわれています（笑）。リンゴのゆるみきった……もとい、しまりのない、もとい、温かみのあるカントリー&ウエスタンふうのヴォーカルが、聴く者をなごませてくれます。

What goes on in your heart（どういうつもりなんだい）/ What goes on in your mind（何をたくらんでいるんだい）/ You are tearing me apart（僕の心をかき乱したりして）という冒頭の歌詞にも見えるように、内容は失恋のつらさをつづっている。リンゴの軽快な歌いっぷりとはイメージが違いますね。

コーラスがいい。リンゴには悪いけど、ジョンとポールが入ってくると、自然とそっちのほうに耳が吸引されてしまう。

遠山　前のアルバム（『ヘルプ！』）と同様、2回連続してリンゴの歌がB面のトップを飾ります。ジョンが10代のころに原型を書いたもので、2年前（1963年）にレコーディングしようとしたこともあった。でも、お蔵入りになった。そして、このアルバムの制作中に、ふたたび引っぱり出して、ポールとリンゴが手をくわえて完成させました。リンゴは後半の歌詞「the tides of time」（好機）の4語を書いたようです。5語も書いていない（笑）。

ジョージのギターが渋い。フェンダーのストラトキャスター。イントロからちゃんと曲に合った入り方をしている。忙しいリフを始終やっているけど、ちっとも邪魔じゃない。間奏では、チェット・アトキンスふうの軽快なフィンガリング。これもいい味を出している。ジョージはこうしたギター奏法を好んでいたはずなのに、シタールに夢中になると、まったくカントリー・タッチのギターを弾かなくなってしまう。ホントに惜しい。

9. Girl

ガール

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年11月11日　Ⓛ 2分30秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　ハスキーな声で歌うジョンのラヴ・バラードは、物憂げなせつなさが漂いますね。でも、遊び心というかイタズラ心があって、悲愴感だけで塗り込めていないのがいい。たとえば、バッキング・ボーカルの tit, tit, tit, tit, tit, tit, tit... の tit は「乳首」のこと。ジョンは71年のインタヴューで、「僕たちはいつもレコードで、ちょっとした下ネタをやっていた。〔ガール〕ではバックでおっぱい、おっぱい、おっぱい、おっぱい……と歌っていたけど誰も気づかなかった」とコメントしている。

そして、このコーラスに加え、Girl と歌ったあとに大きく息

を吸い込む音まで入っている。ヨダレをすすっているのか。マリファナを吸っているのか。あまりにもみだらで挑発的。でも、そうしたおふざけを洗練されたクオリティの高い作品に変えてしまう。まさにマジックです。

遠山 ジョンによれば、〔ガール〕に描かれている女性は、現実の誰かではなく、理想の女性だといっている。ジョンはアルバム『ダブル・ファンタジー』を発表した際、収録曲の〔ウーマン〕に言及して、「80年代の〔ガール〕だ」と表現していました。やっと理想の女性（妻ヨーコ）に出会ったということでしょう。

ジョンはまた、そのころ反感を感じていたカトリック的な要素、苦難を経験しなければ天国へは行けないという考え方に懐疑的な見方を提示したとも語っている。Was she told when she was young that pain would lead to pleasure（苦しみは喜びにつうじると、子どものころに教わったのだろうか）という歌詞にそれはあらわれている。この曲の背後には、絶望と欲望、苦難と歓喜といったものが漂っている。

演奏のほうは、ビートルズがもたらしたといわれるハイテク技術をいっさい使ってはいない。でも、アンサンブルの妙がある。こうしたことをやれるのも、またビートルズ。

10. I'm Looking Through You

君はいずこへ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年10月24日、11月6・10・11日 Ⓛ 2分25秒 Ⓥ ポール（ジョン）

里中 1曲目の〔ドライヴ・マイ・カー〕と共鳴するかのようなノリがある。ポールの、やさしくなだめすかすような声とがなりたてるようなシャウトが交互に出てきて、ヴォーカルそのものを堪能できる。

CamScannerでスキャン

歌詞は、I'm looking through you（目の前にいるキミはキミじゃない）/ Where did you go（あのころのキミはどこへ行ったんだい）……すっかり変わってしまった恋人に不満をぶつけるという内容。ポールにしてはめずらしい歌詞。明るさがない。アルバム『アンソロジー2』に別ヴァージョンが収められていますが、あっちのほうが演奏がおもしろい。あちらを好む人もいるんじゃないかなあ。

遠山　ポールがライヴで演奏したことがあるんですけど（2007年7月のロンドン・ハイドパーク）、とてもかっこよかった。ライヴ向きの曲ですね。

歌詞は、個人的なメッセージ。当時の恋人ジェーン・アッシャーとケンカをした際に、彼女に対する思いをつづったそうです。ジェーンは女優として売れっ子でしたから、ロンドンを離れていることがよくあった。ポールも忙しかったから、二人のあいだにはすれ違いがよくあった。そこでYou're not the same（いまの君は、僕の知っていた君じゃない）と不満をいうわけですが、ポールはジェーンがいない際に、複数の女の子たちとよろしくやっていた。「率直な気持ちがあらわれている」とか「不満を吐き出すことで胸のつかえがとれた」とポール本人は満足げに回想していますが、反論できないジェーンがかわいそう。

『アンソロジー2』のヴァージョンですが、あれもけっこうイケますね。アコースティック・ギターとマラカスの音がフィーチャーされていて……あっちのヴァージョンが好きだという人もたくさんいます。でも、サウンド面のアレンジを考えると、この『ラバー・ソウル』には合わないような気がします。

11. In My Life

イン・マイ・ライフ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年10月18・22日 Ⓛ 2分25秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　これが「私の1曲」です。なにからなにまで好き。10代のときも、20代のときも、30代のときも、40代のときも……50代になっても、ずっと好き。じっくりと聴いていると、泣いてしまいそうになる。街を歩いているときなどに、どこからか聞こえてくると、不意をつかれて思わずたたずんでしまう。

There are places I'll remember（忘れられない思い出の場所がある）で始まるこの名曲は、シンシアのいちばんのお気に入りでもあるそうです。故郷リヴァプールのことやジョンと仲のよかったころのことをきっと思い出すのでしょう。

ジョンはこの曲について、「意識して自分の体験をつづった最初の曲」だと述べて、自分にとって意味のある作品だと位置づけている。

遠山　僕のいちばん好きな曲もこれです。人を慰撫（いぶ）する力がある。いつ聴いてもジーンときます。

ジョージ・マーティンが間奏で弾くバロック調のピアノにもしびれます。マーティンは最初、ハモンド・オルガンで弾いてみたけどうまくいかなかった。次にピアノでやってみると、今度はテンポが合わず……窮余の策として、ハーフ・スピードで録音して、倍速で再生した。結果、素晴らしい音色とメロディを生みだすことができた。

この曲は、ポールのインタヴューで構成した『ポール・マッカートニー／メニー・イヤーズ・フロム・ナウ』（バリー・マイルズ）が出版されるまでは、すべてジョンが書いたとされてきました。ところが、その本のなかでポールは、ジョンが書いたのは最初

CamScannerでスキャン

の部分だけで、メロディを含めほとんど自分が書いたと発言。ジョンが亡くなったあとの出版だったので（1997年）、真相はわからないままになってしまった。これについては、前著『ビートルズの真実』で私たちの見解を述べていますので、興味のある方はお読みになってください。

12. Wait

ウェイト

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年6月17日、11月11日 Ⓛ 2分13秒 Ⓥ ジョン、ポール

里中　リズムの雨あられ。「リズムの奔放」に圧倒されます。聴けば聴くほど、彼らの埋蔵量を感じないではいられません。

ジョンの澄ました歌いっぷり。ポールの転調のうまさ。ジョージのヴォリューム・ペダルを使ったギター・プレイ。リンゴの多彩なドラミング。みんなで仲よく演奏しているという雰囲気が立ちのぼっています。大切な人が待つ家にやっと帰ることができるうれしさを歌っている。とくにポールが歌う I feel as though you ought to know（わかっているよね）/ That I've been good, as good as I can be（君を裏切るようなマネはしなかった）/ And if you do, I'll trust in you（信じてくれるなら、僕も君を信じるよ）/ And know that you will wait for me（僕の帰りを待っていてくれると）のミドル・セクションは「いかにもポール」という出来ばえ。ほかの誰にも真似できないノリがある。

遠山　前作『ヘルプ！』のレコーディング・セッションの際にすでに録音されていました。でも、『ヘルプ！』の選曲から外され、ここへ持ってきました。いや、持ってきたというよりは、曲が足らないから、ちょっと手を加えてここに押し込んだといったほうがいいかな。でも、仕上がりは上々。最初の音源にオ

ーヴァーダビングを重ねることによって、『ラバー・ソウル』にしっくり収まる楽曲になっている。

リンゴのドラミングがいい。忙しいノリだと単調になってしまいがちですが、とてもメリハリがある。シンバル、タムタム、バスドラ、スネアをうまく使い分けている。加えて、タンバリンとマラカスがほどよく味つけをしている。けっして派手なドラマーではありませんが、リンゴは曲の解釈がじつに繊細。リンゴの技巧を軽く見る人がたまにいますが、不器用ではビートルズでやっていけませんよ。リンゴはただ派手なドラミングが嫌いだっただけ。

13. If I Needed Someone

恋をするなら

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1965年10月16・18日 Ⓛ 2分21秒 Ⓥ ジョージ（ジョン、ポール）

里中 ジョージの歌声を聴くと、「か細い」「か弱い」「可憐」などの言葉が頭をよぎりますが、あとの3人がちょっと協力すれば、あら不思議、とたんにビートルズの楽曲になってしまう。とくにコーラスのハーモニーが美しい。

歌詞の内容は、冒頭の If I needed someone to love（恋をしたくなったら）/ You're the one that I'd be thinking of（真っ先にキミのことを思い出すだろう）から、だいたい推測できますね。

サウンド面では、やはりジョージの12弦ギターでしょう。きらびやか。でも、これを最後にジョージは12弦ギターは弾かなくなってしまう。

遠山 ザ・バーズの〔The Bells Of Rhymney〕（リムニーのベル）で、ロジャー・マッギンが弾いた12弦ギターのリフに影響を受けてジョージが書いた曲。ビートルズがシングル・カットしなかっ

Most of my songs, on the sheet music,
have always been incorrect.

僕の曲かい、ほとんどが楽譜になったらおしまいさ。

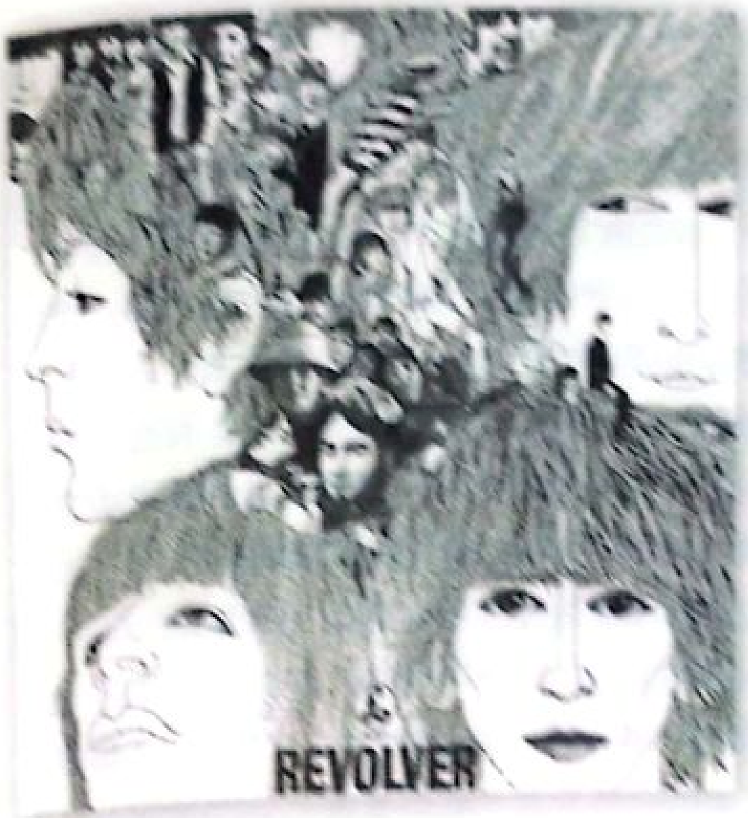
—John Lennon

I don't get any set formula.

（曲づくりの）公式なんてないさ。

—Paul McCartney

Beatles Album
7



REVOLVER

リヴォルヴァー

1966年8月5日リリース

35分13秒　ジョージ・マーティン　アビイ・ロード・スタジオ　クラウス・フォアマン
ロバート・フリーマン

SIDE A	SIDE B
1 Taxman	8 Good Day Sunshine
2 Eleanor Rigby	9 And Your Bird Can Sing
3 I'm Only Sleeping	10 For No One
4 Love You To	11 Doctor Robert
5 Here, There And Everywhere	12 I Want To Tell You
6 Yellow Submarine	13 Got To Get You Into My Life
7 She Said She Said	14 Tomorrow Never Knows

CamScannerでスキャン

ギミックとコラージュのめくるめく世界

「リヴォルヴァー」は回転式連発銃のことだが、タイトル候補として、「マジック・サークルズ」「ペンデュラム（振り子）」「アブラカダブラ」などが挙げられていたことから考えると、"ぐるぐる回る"というのがアルバムのコンセプトだったようだ。

結果、ギミック（仕掛け）とコラージュを駆使した実験的なアレンジがほどこされ、音楽的冒険に満ちた万華鏡のようなアルバムがつくられた。その革新的なサウンドは、きわめてソリッド感の強い、さらに創造的なものへと変貌、フォーク・ロックの隆盛に寄与するなど、多くのミュージシャンに多大なる影響を及ぼした。

とりわけ、テープのお尻とアタマをつないで同じ演奏がずっと繰り返されるようにしたテープ・ループ（エンジニアのジェフ・エメリックが開拓）や、人工的にダブルトラッキング（二重録音）を可能にするＡＤＴ（エンジニアのケン・タウンゼンドが開発）といった手法が導入されたことは、サウンドに厚みをもたらしただけでなく、音の持つ情緒的側面に関心を抱かせることにもなった。当時をふりかえって、ポールは「制作や編集作業で決断をするのは、僕ら自身であるべきだと思った。そうしたことに立ち会えるのは魅力的だった」と述べている。

アルバムのジャケットは、ハンブルク時代からの友人で、のちにベーシストとしても活躍したクラウス・フォアマンによってデザインされた。硬い描線で描かれた４人の顔。ビアズリーの影響がみてとれるが、なによりサイケデリックなポップさが際立っている。コラージュをほどこした写真のなかにはクラウス本人もいる。

1. Taxman

タックスマン

Ⓦ George Harrison　Ⓡ 1966年4月20・21・22日、5月16日
Ⓛ 2分37秒　Ⓥ ジョージ（ジョン、ポール）

里中　オープニングを飾るジョージの曲。「ワン、トゥ、スリー、フォー、ワン、トゥ」……。私にはお札を数えているように聞こえるんですが（笑）。この歌は、税金（タックス）のことで悩むようになったビートル（ジョージ）の、政府に対する皮肉とあてつけ。歌詞に登場するミスター・ウィルソンは税務署員になっていますが、これは当時の労働党党首で首相のハロルド・ウィルソンのこと。ミスター・ヒースは保守党党首のエドワード・ヒースのこと。ジョージは精神世界に没入していると思ったら、世俗的な金勘定にもうるさかったんですね。それにしても、かっこいい曲です。

　ポールのベースも見事だけど、リード・ギター（ポール）も冴えています。ギタリストではジミ・ヘンドリックスがいちばん好きだというポールは、この曲のギターを「ジミに触発されて、あんなふうに弾いてみた」と述べている。その出来ばえに本人も大満足の様子。

遠山　アルバムの1曲目にジョージの曲が使われたのはこれがはじめて。このアルバムには、ジョージの曲が3曲も採用されています。歌詞は、いろんなものに税金をかけようとする税務署員（タックスマン）を諷刺的に描いたもの。ジョージの詞作の成長ぶりがうかがえます。ジョンもかなり手を貸したようですが、ジョンの名はクレジットにありません。

　間奏のギター・ソロですが、ジョージがあれこれと試みたのですが、結局うまく弾けず、見かねたプロデューサーのジョージ・マーティンが「ポールに弾かせてみてはどうか」と提案。ポ

CamScannerでスキャン

ールがすさまじい迫力のギター・ソロをほぼ一発でキメたそうです。インド音楽ふうに響くポールのリード・ギターを、ジョージもまたたいへん気に入ったらしい。

ジョージの日本公演（1991年）では、ウィルソンとヒースをメイジャー（英国首相）とブッシュ（米国大統領）に替えて歌っていました。

2. Eleanor Rigby

エリナー・リグビー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1966年4月28・29日、6月6日　Ⓛ 2分04秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ポールの歌唱表現はとても豊かになりましたね。サウンド構成も歌詞の物語性もドラマチックで、ポールはジョンを射程距離内に収めたとの感があります。

歌詞に登場するファーザー・マッケンジー（マッケンジー神父）は、当初「ファーザー・マッカートニー」だったけれど、「これじゃあ、うちの親父みたい」だといってポールが変更をうながしたという話が伝わっています。ここから判断すると、この曲はジョンが書いた可能性もある。歌詞の7割がたは自分が書いた、というジョンの証言もあります。

遠山　メロディをつくったのはポール。でも、歌詞については、二人の証言が食い違っている。たしかなのは、冒頭部分はポールが書いた、ということだけ。

さて、エリナー・リグビーですが、ジョンとポールがはじめて出会ったリヴァプールのセント・ピーターズ教会の墓地に彼女のお墓がある。実在した人物だったんです。でも、ジョンとポールには縁もゆかりもない。不思議です。その名を無意識のうちに記憶していた可能性があるとしながらも、エリナーという

名は映画『ヘルプ！』の共演女優エリナー・ブロンから、リグビーはブリストルの酒屋〔リグビー〕から取ったとポールは述べている。

歌詞のなかに出てくるファーザー・マッケンジーも実在の人物。トム・マッケンジーというリヴァプール人で、ライヴの際に自分たちの出番がきてもワイワイやっていてステージにあがろうとしないビートルズに「おいボーイズ、時間だぞ！」とよく声をかけにきてくれたおじさん。ダンス・ホールなどでMC(司会業)をやったり、イヴェントの企画運営をやっていました。ある日、酔っぱらったジョンが「こんど俺たちのことをボーイズと呼んだら、あんたのことをファーザーと呼ぶぞ」と返したのがきっかけで、ファーザー・マッケンジーと呼ばれるようになりました。しかしポールは、マッケンジーという名を電話帳で探して選んだと証言しており、歌詞の中のファーザー・マッケンジーは、このトム・マッケンジーとは別の架空の人物である可能性を示唆しています。

3. I'm Only Sleeping

アイム・オンリー・スリーピング

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1966年4月27・29日、5月5・6日　Ⓛ 2分58秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　悲しみをにじませている声とでもいうのかなあ。ジョンの声には、どことなく「心の底を叩いて見るとどこか悲しい音がする」(漱石) という感じがする。

リズムとテンポが歌詞にうまく合っている。Please don't spoil my day（ぼくの一日を台なしにしないで）/ I'm miles away（はるか遠くへ行ってしまっているんだ）/ And after all I'm only sleeping（とにかくこのまま眠っていたいんだ）……とけだるい感じでつぶやいてい

る。ドラッグでトリップした感覚を出そうとしたのか。そんな浮遊感覚もある。逆回転のギター（ジョージ）も奇妙な夢世界をつくりあげるのに貢献している。

ビートルズはこれまでレコーディングを終えると、ミキシングはプロデューサーとエンジニアに任せっきりでしたが、このアルバムではそうしたセッションにも顔を出し、自分たちのサウンド世界にそれまで以上のこだわりを見せるようになった。これもまたビートルズがほかのミュージシャンとは違うところ。

遠山　レコーディングにはかなりの時間を費やしました。たとえばジョージのギター・ソロ部分だけでも6時間（9時間という説もあり）もかけています。

デビューからおよそ3年のあいだに、ビートルズはレコーディングに関する当時の常識を大きく変えてしまった。テープの逆回転、ADT（アーティフィシャル・ダブル・トラッキング）など、エンジニアたちの革新的な発明もあって、ビートルズのサウンドは劇的に変化を遂げた。とはいえ、発想のもとはビートルズのあくなき探求心にあったことは強調しておきたい。

ジョンは、時間に追われている現代人の生き方を皮肉る意味でこの曲を書いたそうです。多忙すぎた自分たちへの自嘲でもあったんでしょうね。それをうまくサイケデリックな幻想のなかへ溶かし込んでいる。

4. Love You To

ラヴ・ユー・トゥ

Ⓦ George Harrison

Ⓡ 1966年4月11・13日　Ⓛ 2分58秒　Ⓥ ジョージ

里中　〔ノルウェーの森〕以来の、シタールの登場。もちろんヴォーカルはジョージ。陰気な曲。はじめてこの曲を聴いたと

CamScannerでスキャン

き、友人たちと「これはお経だよな」と笑ったことを思い出します。こう語るのは悲しいのですが、ジョージがシタールを操っているというより、シタールにジョージが"服従"しているような気がする。さらにいうと、ジョージはシタールにこだわりすぎたために、作曲家としての成長を遅らせたのではないでしょうか。また、ほかの3人、少なくともポールはそれに気づいていたと思うんですが……。

シタールのほか、タブラ（インドの打楽器）、タンプーラ（インドの弦楽器）がずっと鳴り響いている。コードは、ほとんどCのみ。退屈な楽曲。レコーディングにジョンは参加していない。その代わりなのでしょうか、インド人のタブラ奏者（アニール・バグワット）が参加している。

歌詞は、求愛をつぶやいている。妻パティへの想いをつづったらしい。Make love all day long（一日中愛し合おう）/ Make love singing songs（歌いながら愛し合おう）と歌っています。

遠山　この時期、ジョージはラヴィ・シャンカールに弟子入りするほど、シタールとインド音楽に入れ込んでいました。異常なほどに加熱したビートルズ現象から逃げたい気持ちや、ジョンとポールとは違う何かをしなければいけないというプレッシャーが、ジョージをインド音楽にのめり込ませたのでしょう。

たしかにジョージの代表曲はシタールとは関係のないものばかり。それどころか、シタールをレコーディングに使わなくなってから（『ホワイト・アルバム』から）は、名曲を数多く生みだしています。でも、シタールというまわり道があったからこそ、そうした傑作がつくられたのだといえなくもない。

ちなみに、イントロは、アニメ映画『イエロー・サブマリン』でジョージが登場するシーンに使われています。

CamScannerでスキャン

5. Here, There And Everywhere

ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1966年6月14・16・17日　Ⓛ 2分23秒　Ⓥ ポール（ジョン、ポール、ジョージ）

里中　数あるポールの名曲バラードのなかでも頂点をきわめたもの。『リヴォルヴァー』のなかでも、とりわけ人気が高い。ジョージがシタールに夢中になっているいっぽうで、ポールは未知の音楽領域を開拓しようと意欲的だった。ポールとジョージ、デビューするころからすでに差はあったけれど、作曲家として大きく水をあけられたのはやはり才能でしょうか。

出だしもいいけど、I want her everywhere（どこにいても彼女にいてほしい）/ And if she's beside me, I know I need never care...（彼女がそばにいてくれたら、何も心配しないですむ……）の部分は、息をのむほどスリリング。ポールのソングライティングの才能を感じないではいられない。

ジョンの力むことのない優美なコード・ストローク。そこに可憐なアルペジオが加わる。I want her everywhere のところではジョージがリフで合流。ギターも、曲に合った風味をだしています。

遠山　屈指の名曲。ポール自身、もっとも気に入っているビートルズ・ソングの1曲だそうです。またジョンも、このアルバムのなかでいちばん好きな曲だと語っている。というわけで、ポールは解散後もさまざまな機会で取りあげている。『ポール・イズ・ライヴ』や映画『ヤァ！ブロード・ストリート』でも聴くことができます。

メロディそれ自体も美しいけど、ジョンとジョージが加わったヴォーカル・ハーモニーが美しい。録音するひと月ほど前にビーチ・ボーイズの『ペット・サウンズ』が発表されていますが、

ポールはこのアルバムに影響を受けて〔ヒア・ゼア・アンド・エヴリホエア〕をつくったと告白しています。転調やコーラスにその影響があらわれていますね。とはいえ、やはり声を大にしていいたいのは、終始、甘さ控えめで歌っているポールのヴォーカル。素晴らしいの一語に尽きます。

6. Yellow Submarine

イエロー・サブマリン

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1966年5月26日、6月1日　Ⓛ 2分37秒　Ⓥ リンゴ（ジョン、ポール、ジョージ）

里中　これまでにリンゴが歌ってきたものとは違う印象を受けるのは、これが"童謡"だから。曲のメロディも童謡なみにシンプル。がしかし、俗にいう童謡とは違うのは、やはり卓越したアレンジがあるからでしょう。

いろんな声や音が入っていて愉快な楽曲として仕上がっています。とくにジョンはノッていたようです。エコー室からリンゴのヴォーカルに合いの手を入れたり、バケツの水をストローで吹いてブクブクという泡の音を立てたりしている。

歌詞は、基本的にポールによるもの。船乗りだった男から聞いた潜水艦での生活に憧れて、「僕たち」もイエロー・サブマリンで気楽な毎日を過ごすようになったというお話。歌詞も意図的に「黄色い潜水艦」「青い空」「緑の海」と、色を組み合わせることによってにぎやかさを出している。とにかく、全体を単色で塗り込めていない音楽的な工夫が出色。

遠山　アニメーション映画『イエロー・サブマリン』の主題歌ということもあって、リンゴのメイン・ヴォーカルのなかでも、もっとも広く親しまれています。作曲はポールの手によるもの。歌詞も、ジョンと友人のフォークシンガー、ドノヴァンの着想

CamScannerでスキャン

をちょっとずつ借りて、ポールが完成させました。

楽しそうにレコーディングしている様子がうかがえます。サウンド・エフェクトをオーヴァーダビングした日なんて、友人、家族、スタッフも参加して大盛りあがりだったようです。最後はみんなでスタジオのなかを歌いながら練り歩いたとか。コーラスには、ジョージの妻パティやマリアンヌ・フェイスフルも参加している。それから、グラスを鳴らしているのはローリング・ストーンズのブライアン・ジョーンズ。

解散後につくったオールスター・バンドのライヴでは、もちろんこの曲がいちばんの盛り上りを見せます。聴衆にウケるし、本人も喜色満面。まさに"イエロー・サブマリン音頭"のノリです（笑）。

7. She Said She Said

シー・セッド・シー・セッド

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1966年6月21日 Ⓛ 2分34秒 Ⓥ ジョン（ジョージ、ポール）

里中　リード・ヴォーカルはジョン。どことなくジョンが失速しはじめたのを感じるんだけど……。それなりに歌っていますが、吐く声にエッジがきいていないし、声音の艶になんとなく翳（かげ）りが感じられる。歌詞もひたすら暗く、ジョンは作曲よりも作詞のほうに重心を移してしまった感がある。

演奏は好き。とりわけベースがいい。ポールが参加していないようですが、だとしたら、このメロディアスなベースは誰でしょう。この当時の写真なんか見ると、おそらくジョージでしょうが、かっこいいベースですね。よくいうのですが、ジョージはベースのほうが合っていたのではないか。映画『レット・イット・ビー』の〔トゥ・オブ・アス〕なんかもそうですが、ギタ

ーのようにメロディアスなベースを弾きこなすことができる。

遠山　65年8月の全米ツアー中、ロサンジェルスでLSDでトリップしているとき、俳優ピーター・フォンダが「死ぬってどういうことか僕はわかっている」(I know what it's like to be dead）と、繰り返しいうので、ジョンが不愉快になったという体験が歌詞のネタになっています。

ジョンはそのときGet this guy out of here（こいつを追い出せ）と応じたそうです。作曲しているときのタイトルは〔He Said He said〕でしたが、のちに〔She Said She said〕に変更されました。

また、レコーディング中に起こったメンバー間の口論で、怒ったポールがスタジオを出て行ってしまったため、ジョン、ジョージ、リンゴの3人で録音したという裏話もあります。というわけで、ベースを弾いたのは、たぶんジョージでしょう。リード・ギターは目立ってしまうぶん、弾くときにちょっぴり緊張したようですが、ベースはリラックスして弾いていたようです。

8. Good Day Sunshine

グッド・デイ・サンシャイン

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1966年6月8・9日　Ⓛ 2分08秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ジョンが陰湿な歌詞をつぶやいたあとの曲。いきなりGood day sunshine（いい日和だね。太陽がいっぱい）ときた。恋人との相思相愛のゴキゲンな気分を歌っている。底抜けに明るい。まるで青空のもとで音のパノラマを聴いているかのよう。

ジョンとポール、なんとも対照的です。内省的なジョンはこういう歌をつくりませんね。だからなんでしょうか、ジョンはこの曲で楽器を演奏していない。コーラスと手拍子だけ。いや、

CamScannerでスキャン

ポールが「なんにも弾かなくていいよ」とジョンにいったのかもしれない。

ビートルズはギター・バンドだったはずなのに、ギターがまったく入っていない。彼らは新たな地平を求めはじめた。ピアノが耳につくと思ったら、なんと3台で演奏している。ポールが2台、ジョージ・マーティンが1台。間奏のホンキー・トンク・スタイルのピアノは、マーティンによるもの。いいアクセントになっている。終始、ポールはトランポリンの上で跳ねまくっている様子ですが、それを一緒に楽しんでいるのが、ジョンではなく、プロデューサーのマーティンであるのがちょっと淋しい。

遠山　夏の日の午後、ポールがジョンの家で書いた曲。日本でもよく知られているラヴィン・スプーンフルの〔デイドリーム〕にインスパイアーされたらしい。うれしくなるほどシンプルですね。でも、これ、なかなか歌えませんよ。ポールの歌のうまさが際立った曲。レナード・バーンスタイン（指揮者）のお気に入りでもあったのがよくわかります。

ご存知のとおり、雨の多いイギリスでは、この曲がラジオでよくかかります。しかも雨の日に。はじめはただの陽気なポップ・ソングとしか思っていませんでしたが、英国に長く住んでみると、陽光への感謝の曲でもあったんだということがわかります。この歌、英国の人々にすごく愛されているんですよ。

9. And Your Bird Can Sing

アンド・ユア・バード・キャン・シング

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1966年4月20・26日 Ⓛ 1分59秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　このアルバムにおけるジョンの傑作といえば、これでしょう。演奏で目立つのは、まずはポールのベース。ドライヴ感があるというか、飛び跳ねている。それからジョージとポールのツイン・リード・ギター。これぞギター・バンドっていう感じ。とても歯切れがいい。いまは稀少ではなくなりましたが、ツイン・リード・ギターを使ったのはポップス史上はじめてといわれている。

しかし後年、またしてもジョンはこの曲を「ひどい」とけなしている。自分のつくった曲をけなす知性がジョンにあるのは認めるけれど、それはメロディでも演奏でもなく、ただ歌詞が気に入らなかっただけなのではないでしょうか。どうもジョンは「歌詞はメッセージであるべきだ」と考えるようになったと思いませんか。

というわけで、歌詞はわけがわからない。部分的に伝わってくるものはありますが、全体的に切り貼りをして言葉を押し込めたという感じがする。聴き手の分析的な思考をあざ笑うかのような歌詞。

遠山　ジョンは「理解される」ことを拒絶していたというか、分析しようとやっきになっている連中をからかってやろうとしていたふしがあります。この歌、もともとは〔You Don't Get Me〕なんです。「君に僕のことはわからない」という意味。ロック・ミュージックの歌詞はメッセージ性とは正反対のところにあったのに、ジョンはメッセージを発信すべきだという考えをもつようになり、その後のロックに新たな方向性が示されます。その

CamScannerでスキャン

意味において、エルヴィスの時代がいっきに遠くなってしまったのは、このアルバムからだということもできる。

それにしても、ギターが歌っている感じで、ほんとうにかっこいい。ディストーションのかかり具合もいい味を出している。これ以後、ツイン・ギターがたいへん流行りますが、ここでもビートルズは先駆者であったわけです。

10. For No One

フォー・ノー・ワン

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1966年5月9・16・19日　Ⓛ 1分58秒　Ⓥ ポール

里中　最初の一節、Your day breaks, your mind aches（夜が明ける、心が痛む）という韻の踏み方は見事です。この歌が流れてくると、思わず瞠目、そして心を奪われる。聴き終わると、感動の言葉がもれる。ポールは、こうしたメロディがあふれるように浮かぶんだろうか。信じられない。まるで魔法のよう。

失恋を予感させる歌。You stay home, she goes out（あなたは家に残る、彼女は出ていく）/ She says that long ago she knew someone but now he's gone（むかしね、ある男を知ってたの、でもいまは別れたの、と彼女はいう）/ She doesn't need him（いまの私にはもう彼はいらないわ）……という歌詞はポールと恋人ジェーンの愛の結末を知っていたかのよう。you がポールで、she がジェーン。そう思いませんか。演奏にジョンとジョージは参加していない。その代わりにフレンチホルンを吹く外部ミュージシャンを入れている。この思いつきは誰？　曲にぴったりですね。

遠山　フレンチホルンのアイディアは、ジョージ・マーティン。演奏しているのはアラン・シヴィルというホルン奏者で、まさしく極上の調べを奏でています。彼は〔ア・デイ・イン・ザ・ライ

フ〕のオーケストラにも参加しています。朗読された物語にメロディをつけたような曲調。ポールはこれ以降、こうした映画的な視点をもった歌詞をわがものにしていきます。

ポールはこれを、ジェーン・アッシャーと一緒にスキー旅行で訪れていたスイスの山荘で書いたらしい(66年3月)。そこでポールは、彼女とロゲンカをした。それがきっかけでこの曲が生まれた、と語っています。口論の余韻がまださめないときに書いたというのに、こんな美しい曲をいともやすやすとつくってしまう。またしても感服です。

11. Doctor Robert

ドクター・ロバート

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1966年4月17・19日 Ⓛ 2分13秒 Ⓥ ジョン(ポール、ジョージ)

里中　ジョンの曲。リード・ヴォーカルもジョン。幻覚剤をビタミン剤に混入して、患者を麻薬中毒にさせていた実在の医師のことを歌った曲。ジョンはその医者のことをウワサに聞いて、みずからの体験と重ね合わせて歌詞をつくった。

ジョンのヴォーカルは……トゲトゲしさは感じられるけど、ちょっと物足りない。テキトーにつくって、テキトーに歌ったように感じられる。

ポールが手伝ったとされるミドルのWell, well, well, you're feeling fine(ほらほらほら、だんだんいい気持ちになっていくだろ)/ Well, well, well, he'll make you(きっと彼が治してくれるよ)のところが、"やさしい悪魔"が耳もとでささやいているようでコワい(笑)。でも、このメロディに助けられて、凡作であることをまぬがれている。

遠山　社会風刺のジョークのつもりで書いたんでしょう。ある

CamScannerでスキャン

ドイツ人医師がモデルになっています。彼はニューヨークで開業していた医者で、ドラッグをすぐ処方してくれることから「スピード・ドクター」の異名をもっていた。それで、名士の患者たちは次々に麻薬中毒者にされてしまった。のちにこれが問題となり、彼は医師免許を剝奪されてしまいました。

ギター・バンドっぽい曲。ジョンのギターがいい。イントロからドライヴ感のあるリフを刻んでいる。ジョンのコード・カッティングは歯切れがよくて、つい耳が引き寄せられます。ポールのベースはシンプルなリズムをとっていますが、出しゃばっていないぶん、小気味よく仕上がっている。リンゴは8ビートを黙々とキープし、ジョージはマラカスとギターで参加している。ジョージのギター、よく聴くと、いろんなテクニックを見せていますよ。

12. I Want To Tell You

アイ・ウォント・トゥ・テル・ユー

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1966年6月2・3日　Ⓛ 2分26秒　Ⓥ ジョージ（ジョン、ポール）

里中　ジョージの曲。サウンドは『リヴォルヴァー』にふさわしいけど、これといった凝ったアレンジはありませんね。もっとアレンジ上のギミック（新機軸）はあってもよさそうなのに……。ジョンやポールの曲には気前よく時間が費やされるのに、ジョージの場合は、手早く片づけられたのでしょうか。

気の弱い男が心のつうじないもどかしさを歌ったラヴ・ソング。その"不協和音"を、ポールの弾くピアノがうまく際立たせている。これでけっこう"渋い"曲になった。このピアノがなかったら、間違いなく地味で平凡な曲になっていたでしょう。イントロのフェイド・インはジョージ。力強いスネアはリンゴ。

とくに最後のところで聞こえてくるタムとのコンビネーションがいい。

遠山 気づきましたか。ジョージの3曲目の歌です。これまでのアルバムのなかでジョージの曲が3曲も占めたのは初めてのこと。と同時に、残念ながら最後のことでもアリマシタ（ただし、2枚組の『ホワイト・アルバム』は除く）。

ジョージの日本公演（1991年）は、この曲で幕を開けました。イントロのギターは、ジョージではなくて、エリック・クラプトンでした。ジョージとエリック。二人がステージに立っている。場内はものすごい歓声につつまれました。それまではべつだん何とも思っていませんでしたが、いまとなってはセンチメンタル・ヴァリューの高い曲になりました。

ポールの曲はポールの曲、ジョンの曲はあくまでもジョンの曲ですが、ジョージの曲はビートルズの曲という感じがしませんか。ジョージがいちばんビートルズ・サウンドを継承している。ジョージこそが、ビートルズの原石ではないか——そんな思いにとらわれました。

13. Got To Get You Into My Life

ゴット・トゥ・ゲット・ユー・イントゥ・マイ・ライフ

Ⓜ Lennon / McCartney
Ⓡ 1966年4月7・8・11日、5月18日、6月17日 Ⓛ 2分28秒 Ⓥ ポール

里中 ノリのいいソウルフルな曲。ブラスは外部のミュージシャンたち。トランペットが3人、テナーサックスが2人という編成。これもポールの思いつきなのでしょうか。柔軟といおうか、好奇心旺盛といおうか、とにかく何かしらのインスピレーションを感じたら、すぐやってみる。そして、それらがあらかじめ練られた計画のように、曲のピースとしてしかるべきとこ

うにちゃんと収まってしまう。

タイトルの「Got To Get You Into My Life」は、「I've got to get you into my life」のことで、「キミをボクの人生に取り込まなくてはいけない」わけだから、「キミなしの人生は考えられない」という意味になる。この「キミ」を「ドラッグ」のことだと思い込んだジョンは、"ポールもその気になれば素晴らしい歌詞を書ける"と喜んだ。この時期、ジョンはもちろんのこと、ポールも"立派な"ドラッグ・ユーザーになっていましたからね。

遠山　のっけからホーン・セクションが躍動感を与えています。ウイングス時代になっても取りあげているところをみると、ポール自身、かなり気に入っていたようです。

ポールは、曲のアイディアを、モータウンとマリファナの影響と語っています。ジョンの深読みはあながち間違っていないかも。僕は Did I tell you I need you（キミが必要だって伝えたっけ）のところが好き。メロディと歌詞が妖しく手をつないでいる。

エンジニアのジェフ・エメリックは、ラッパのベルにマイクを近づけて録音するという方法をとりましたが、それまでこんなことをやった人はいなかった。現在では、管楽器の口の部分にマイクを装着するのはごく当たり前になりましたが、これもビートルズのサウンド工房から生み出されたんです。

14. Tomorrow Never Knows

トゥモロー・ネヴァー・ノウズ

● Lennon / McCartney

● 1966年4月6日・7日・22日　● 2分57秒　● ジョン

藤本　ジョンの曲。本アルバムは"サイケデリックの傑作"といわれていますが、この曲だけじゃないですか、サイケデリックな要素が色濃いのは。ポップスの歌詞なのに、void（空）とか

dying（死）なんていう単語が出てくる。非日常的な暗闇の世界へ放り込まれたような感覚にとらわれます。

この曲で「人生が変わった」という人を、私の住む横浜市で少なくとも2人知っていますが、私にはこの曲の"すごさ"がちっともわからない。新たに開発されたレコーディング技術のことはさておき、楽曲としてさほど興味がない。しいていえば、この異次元空間の奇妙な世界にあって、規則正しくドラムを叩くリンゴのほうに感心してしまうんだけど（笑）。

遠山　この曲の信者なら、おそらく東海道沿線に600人ほどいるんじゃないですか（笑）。この曲にはそれほどのフリークがいます。

僕が感心するのは、「ダライ・ラマが山の頂上から説法しているような感じで」というジョンのムチャクチャな要求にこたえたジェフ・エメリックです。テープ・ループという手法を用いて、グルグルうねるようなサウンドをつくることに成功した。スタジオにいたポールは思わず「ダライ・レノンだ！」と叫んだそうです。カモメの鳴き声のような奇っ怪な音も、ポールのファズ・ギターをテープ・ループでつくっている。それから、人工的にダブルトラッキングを可能にするＡＤＴもはじめて導入された。これはエンジニアのケン・タウンゼントが開発したものですが、その意味においてもたいへん重要な曲です。

タイトルは当初、〔Mark I〕でしたが、リンゴが誤って口走った言葉（リンゴ語）を採用しました。Tomorrow never comes.（明日は決して来ない＝きょうやるべきことはきょうのうちに）の comes が knows に変わってしまった（笑）。歌詞は、ティモシー・リアリー博士らの著作『ザ・サイケデリック・エクスペリエンス』にインスピレーションを受けて書きあげられました。

Sgt. Pepper is the one. It was a peak.

『サージェント・ペパー』は傑作中の傑作だ。ひとつのピークだね。

— John Lennon

Sgt. Pepper for me was great — it's a fine album. But I did learn to play chess on it because I had so much spare time.

『サージェント・ペパー』はいいアルバムだと思うよ。名盤だね。でも、空き時間がたくさんあったので、チェスを覚えたっけ。

— Ringo Starr

CamScannerでスキャン

Beatles Album
8

SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND

サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド

1967年6月1日リリース

Ⓛ35分13秒 Ⓟジョージ・マーティン Ⓢアビイ・ロード・スタジオ、リージェント・サウンド・スタジオ Ⓓピーター・ブレイク Ⓒマイケル・クーパー

SIDE A	SIDE B
1 Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band	8 Within You Without You
2 With A Little Help From My Friends	9 When I'm Sixty-Four
3 Lucy In The Sky With The Diamonds	10 Lovely Rita
4 Getting Better	11 Good Morning Good Morning
5 Fixing A Hole	12 Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise)
6 She's Leaving Home	13 A Day In The Life
7 Being For The Benefit Of Mr. Kite!	

CamScannerでスキャン

世界の頂点に君臨する道化師たち

「ビートルズの最高傑作」といわれるアルバム。グラミー賞では「最優秀アルバム賞」など、4部門で賞を獲得。高い芸術性が評価された。しかしながら、このアルバムにおけるビートルズの狙いは、ロック・オペラっぽい道化じみた「お遊び」をとことんやってみようということにあった。けっして高い芸術性とやらを志向したのではないことを強調しておきたい。

バンドは、ペパー軍曹(サージェント・ペパー)が仕込んだ架空の楽団になりすまし、リンゴ扮するビリー・シアーズが「友だちにほんの少し助けてもらいながら」無邪気に歌い、ジョンは凧男(ミスター・カイト)を紹介し、ジョージは求道者になり、ポールは64歳の自分を描く。それぞれがペルソナ(仮面)をつけ、道化師を演じていたら、結果として、きらびやかなサウンドが織りなす完成度の高い音楽ができあがってしまった。ビートルズはひとつのコンセプトでまとめたアルバムづくりをすることで、従来のアルバムの概念を完全に変え、またしてもポピュラー・ミュージック全体に新たな風を吹き込んだのだった。わずか4トラックの機材で、革新的なサウンドを創出したことにも、いまさらながら驚かされる。

アルバム・ジャケットのなかにいるビートルズの面々も、エドワード朝の軍服を装って、なんだか喜劇役者のような面持ち。各界の有名人に交じって、21歳の若さで夭折した元ビートル、スチュアート・サトクリフ(上段3列目の左端)もいる。

裏ジャケットに歌詞を載せたのも画期的だった。ポップ・ミュージックのレコードに歌詞が付いていることはそれまでなかった。歌詞に注目させたのも、またビートルズだった。

CamScannerでスキャン

1. Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band
サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1967年2月1・2日、3月3・6日　Ⓛ 2分02秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　架空のバンドが演奏していることにすれば、もっと音楽的な自由を手にすることができるのでは……と考えて、ポールはこのアルバムの構想を練った。そのオープニング・ナンバーがこれ。ペパー軍曹のバンドがショーを開くというコンセプトでつくられた。観客の喝采、どよめき、笑い声などが入ってライヴ感たっぷり。短い曲ですが、ポールの才能を感じないではいられません。

野太い声のヴォーカルと迫力あるベースはもちろんポール。エンジニアのジェフ・エメリックによれば、かっこいいリード・ギターもポールが弾いているらしい。ジョージがなかなかうまく弾けないので、イライラしたポールが代わりに弾いてみせた。それも一発でキメたらしい。このアルバムは、ポールがビートルズを牽引しはじめたことを印象づけている。

それはそうと、「サージェント・ペパー」（ペパー軍曹）なる表現はどこから生まれたのですか。

遠山　66年11月、ポールはケニアへ休暇に出かけました。帰りの飛行機のなかで、付き人のマル・エヴァンスが機内食の時間に"S"と"P"の印字がついた調味料の小袋を手に取って、「ソルト・アンド・ペッパー」（塩と胡椒）とつぶやいた。それで「サージェント・ペパー」を思いついたようです。

このアルバムが発売された3日後にジミ・ヘンドリックスがロンドン・サヴィル・シアターでライヴをやったのですが、ショーのオープニングにこの曲を使った。そのとき観客席にいたポールは、ひどく興奮したそうです。また、2005年にロンドンの

ハイド・パークでおこなわれた「ライヴ8」では、ポールとU2のボノがイヴェントの幕開けにこの曲をやった。やっぱり大盛りあがり。It was 20 years ago today（20年前のきょうだった）のです。つまり、「ライヴ・エイド」（1985年）からちょうど20年後の催しだったというわけです。

2. With A Little Help From My Friends

ウィズ・ア・リトル・ヘルプ・フロム・マイ・フレンズ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1967年3月29・30日　Ⓛ 2分44秒　Ⓥ リンゴ（ジョン、ポール）

里中　ベスト盤を聴いても、ビートルズのおもしろさを捉えきれないのは、こうした曲と曲との有機的なつながりを楽しむことができないこと。ビートルズは、ベスト盤のような曲単位で聴くのではなく、アルバム単位で聴いたほうが断然おもしろいね。

歌う司会者のポールが、前曲でビリー・シアーズなる人物が率いる"サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド"を紹介し、リンゴ扮するビリー・シアーズがとぼけた調子で「ぼくが調子ハズレの歌をうたったら、きみはどう思うかな」（What would you think if I sang out of tune）とのんびり歌いだす。この演出の見事さよ。

リンゴは、ビートルズ時代も、ソロになってからも、「友だちにほんの少し助けてもらって」（with a little help from my friends）ずっと活動してきた。タイトルを地でいくような人生。リンゴは、まさしくラッキー・スター。

遠山　ポールの怒濤のヴォーカルから一転して、ほんわかとした曲に流れていくさまは見事というほかありません。つなぎには、64年のハリウッド・ボウル公演で録音された歓声が使われ

CamScannerでスキャン

ています。

曲は、基本的にポールがつくり、歌詞の一部をジョンが手伝った。正式タイトルが決まるまでは「バッド・フィンガー・ブギ」と呼ばれていました。これがのちにアップル（ビートルズがつくった会社）からデビューするリヴァプールのバンド、バッドフィンガーの由来です。楽曲そのものがいいので、ジョー・コッカーもこの歌をヒットさせましたし、88年にはウエット・ウエット・ウエットが、この曲のカヴァーで全英1位に輝いています。

おっしゃるとおり、ビートルズはベスト盤よりもオリジナル・アルバムのほうが聴きごたえがある。ベスト盤の『ビートルズ1』もいいけれど、ビートルズのおもしろさはオリジナル・アルバムにこそある。駄作が一つもない。全部、聴いてほしい。

3. Lucy In The Sky With Diamonds

ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンズ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1967年2月28日、3月1・2日　Ⓛ 3分27秒　Ⓥ ジョン（ジョージ、ポール）

里中　『サージェント・ペパー』の全体的なイメージを象徴しています。「マーマレードの空」の下に「タンジェリンの木」がはえ、「万華鏡の眼をした少女」のあとを追っていくと、「ルーシーはダイアモンドをつけて空のうえ」にいる……。幻想的で、色彩感覚が豊か。聴く者をすぐさま不条理な物語の迷路に引きずり込んでしまう。

60年代のサイケデリックを象徴する曲といわれますが、『鏡の国のアリス』（ルイス・キャロル）の「羊毛と水」の章から歌詞をイメージしたようですね。ジョンのヴォーカルは不思議な魅力をたたえている。もちろん、楽曲自体が素晴らしい。ジョージ・マーティンは「ベートーヴェンが生きていたら書きそうな旋

律」とまでいっている。

曲名の単語の頭文字が"ＬＳＤ"になることから、ドラッグ・ソングとも呼ばれました。ところで、ルーシーって誰？

遠山　ジョンの息子ジュリアン（当時3歳11か月）が通っていた保育園のお友だちルーシー・オドネルです。ある日、ジュリアンが保育園で描いた絵を持ち帰ってきた。不思議なその絵の意味をジョンが尋ねると、ジュリアンはIt's Lucy, in the sky, with diamonds.（ルーシーだよ、ダイヤモンドを持ってお空に浮かんでいるところ）と答えます。そこからジョンのイマジネーションがふくらみ、この曲に結実しました。残念なことに、ルーシーは2009年9月に免疫の病気で亡くなってしまいました。ジュリアンはその年の11月、彼女へのトリビュート・ソング曲〔ルーシー〕を発表しています。

タイトルのイニシャルをとると"ＬＳＤ"になるという説はまったく偶然の産物です。とはいえ、色あざやかなイメージが幻想の言葉に置き換えられたのはＬＳＤのおかげだったという見方もまた疑いの余地がありません。

4. Getting Better

ゲッティング・ベター

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1967年3月9・10・21・23日　Ⓛ 2分47秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　いかにもポールらしい曲。カンカンと信号機が鳴るようなリズム。行進曲のようなリズムのギター（ジョージ）。そのギターにかぶさるピアネット（ジョージ・マーティン）。腹にズシンと響くベース（ポール）。ノリのよい手拍子（ジョン）。そして、ポールの活力のあるヴォーカルにジョンの高音のコーラス。それから、コンガを叩くリンゴ。まさに音の雨あられ。でも、

CamScannerでスキャン

頭に描いたイメージをうまく融合させて、熟成のサウンドに変換している。完成度が高い楽曲です。

「だんだんよくなっていく」(It's getting better) というポールのヴォーカルに、「これ以上悪くならないさ」(It can't get more worse) とか、「まあまあだよ」(no I can't complain) というジョンのコーラスが入る。すぐさま絶妙の合いの手を入れてくれるジョンについて、ポールはあるインタヴューで「こんなパートナーが他にはいるとは思えない」と喜んで語っている。ジョンとポールは、互いが持っていないものに感づいて、うまく補完し合っていたんですね。

遠山 It's getting better. (だんだんよくなっているよ) というのは、ジミー・ニコルの口癖でした。ジミーは、ビートルズの初のワールド・ツアーのときに、扁桃炎の悪化で緊急入院 (64年6月) したリンゴの代役をつとめたドラマー。メンバーが「どうだい?」と尋ねると、ジミーはいつも「だんだんよくなっているよ」(It's getting better) と応じていたそうです。たぶん、リンゴのようにうまく叩けないことがあったのでしょうね。それから2年数か月後のある日、ポールが愛犬マーサを連れて散歩に出かけると、ちょうど太陽が雲の切れ間から顔をのぞかせるところだった。そのとき、ふいに It's getting better. という言葉を思い出し、その日のうちにこれをキイ・フレーズにして曲をつくってしまった。さすがポール、とだけいっておきましょう。

CamScannerでスキャン

5. Fixing A Hole

フィクシング・ア・ホール

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1967年2月9・21日 Ⓛ 2分35秒 Ⓥ ポール (ジョン、ポール)

里中 ポールの曲。ポールの、「サージェント・ペパー」にかける意気込みを感じます。ポールは、耳ざわりのいいポップスをつくらせたら、かならず90点は取る優等生。なかでもこの曲は完成度が高い。文句のつけようのない曲をつくるポールに、文句の一つもいってやりたくなる(笑)。

タイトルの「フィクシング・ア・ホール」は、「穴を修理している」という意味ですが、ポールによれば、「心の隙間を埋めて芸術的自由を得るんだ」という渇望の歌らしい。このことを頭に入れてあらためて歌詞を眺めると、「穴」(a hole)や「ひび」(cracks)が自由な発想を妨げる暗喩として歌われているのがわかる。

イントロの魅力的なハープシコードはジョージ・マーティン。ディストーションを効かせたギターはジョージ。歪みのある音もいいけど、間奏の、裏のリズムをとったギター・フレーズもいい。

遠山 ポールは、スコットランドの農場の屋根を修理しているときにこのタイトルを思いついたようです。それを「雨がたまる道路の穴ぼこの話」にして、心にポッカリあいた穴の隠喩として書いたようです。ところが、fixという単語が「麻薬を打つ」という意味の隠語であることから、ヘロイン中毒のことを歌った曲だと解釈されてしまった。もちろんポールは否定しましたが。ジョンはこの歌詞をたいそう高く評価しました。ジョンは、わけのわからない隠喩それ自体を楽しんだのか、それとも背後にある意味を一瞬にして見抜いたのか、それはわかりませんけ

ど。

楽器から出てくるサウンドそのものがいいですね。ビートルズのセンスのよさが随所に感じられます。とくにジョージのギターの音が曲にピッタリ合っている。

なお、このレコーディングの大半は、アビイ・ロード・スタジオがふさがっていたため、リージェント・サウンド・スタジオでおこなわれました。

6. She's Leaving Home

シーズ・リーヴィング・ホーム

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1967年3月17・20日　Ⓛ 3分35秒　Ⓥ ポール（ジョン）

里中　このレコーディングにジョージとリンゴは参加していない。『サージェント・ペパー』で何を思い出すかと問われて、リンゴは「待ち時間が長かったので、チェスがうまくなったよ」といっている（笑）。使用楽器がふえるにつれて、ギターやドラムを必要としない曲もでてきたんですね。

さて、歌詞は新聞記事をヒントにしてつくられた家出少女の話。じつにうまくできている。とくに、She — We gave her most of our lives（彼女は——あの子のために生きてきたのに）/ Is leaving — Sacrificed most of our lives（出ていく——自分を犠牲にして育てたのに）/ Home — We gave her everything money could buy（家を——お金で買えるものは何でも与えたのに）のところが素晴らしい。ジョンによるバッキング・ヴォーカルは、ミミ伯母さん（ジョンの育ての親）がジョンにいっていた小言だったとか。

遠山　ジョージ・マーティンもレコーディングに立ち会っていません。ちょうど別の仕事が入っていたんです。というわけで、いつもなら自分が担当するはずのストリングスのスコアを書い

CamScannerでスキャン

ていません。なんでも、ポールは、曲が完成すると、すぐに録音したくなったらしい。そこで、マイク・リーンダーというフリーのアレンジャーを呼んで、レコーディングを始めてしまった。自分抜きで仕事がすすめられたことで、マーティンはたいへん傷ついたそうです。

バッキング・コーラスの歌詞ですが、「ミミ伯母さんの小言説」と「新聞記事からの転用説」の二つがあります。

名曲です。『サージェント・ペパー』の発売前にアメリカを訪れたポールは、『スマイル』をレコーディング中のビーチ・ボーイズを訪問。ピアノでこの曲の弾き語りを聴かせた。ブライアン・ウィルソンはあまりの感動に涙ぐみそうになったそうです。それで、レコーディング・セッションは中断。ブライアンは長い休養に入ってしまいます。いまでは、そのときのエピソードを語りながら、ライヴで演奏しています。「こんな美しい曲は聴いたことがなかった」と語ってくれたブライアンの言葉が忘れられません。

7. Being For The Benefit Of Mr.Kite!

ビーイング・フォー・ザ・ベネフィット・オヴ・ミスター・カイト

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1967年2月17・20、3月28・29・31日
Ⓛ 2分36秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中　傑作なのか、凡作なのか。聴くときどきによってその印象が変わる。でも、いつ聴いても素晴らしいと思うのは間奏のところ。音の奔流と融合。目まぐるしく変化するサウンドの質感。そしてその一体感。思わずため息がもれます。

ジョンは「（サーカス場にたちこめる）sawdust（おがくず）の匂いがするような曲にしたい」と注文をつけたそうですが、エンジニアたちはちゃんと幻想的なサウンド・ピクチャーにしてしま

った。

歌詞は、今宵おこなわれるサーカスの宣伝。耳慣れない固有名詞や単語が出てきて、高校生の私は辞書を引きながら大いにとまどったものですが、これはMCなんだと気づいて納得した。なんだかんだいっても、ジョンも、ポールのアルバム・コンセプトに協力していたんですね。

遠山 67年1月31日、シングル用の〔ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー〕のプロモーション・クリップを撮影するためにケント州のセヴンオークスを訪れていたジョンは、たまたま立ち寄った骨董屋で見つけた古いサーカスの宣伝ポスター(1843年2月14日開催)を購入。そこに書かれていた言葉からインスピレーションを受けて、書き始めました。そのポスターのレプリカを見たことがありますが、そこに書かれている名前や単語(カイト氏、ヘンダーソン氏、トランポリンなど)は、ほとんどそのまま歌詞に引用されています。

ジョンはもともと幻想的な物語や非日常的な空間に心を動かされやすいタイプでしたが、サーカスの世界もジョンの好みだったのでしょうね。そういえば、ジョンは、ルイス・キャロル、オスカー・ワイルド、ディラン・トマスなどの幻想的な作品を書いた作家に影響を受けていますが、3人ともアルバム・ジャケットに顔写真が出ています。

8. Within You Without You

ウィズイン・ユー・ウィズアウト・ユー

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1967年3月15・22日、4月3日 Ⓛ 5分05秒 Ⓥ ジョージ

里中 ジョージとインド人ミュージシャンのみ。あとのメンバーはレコーディングに参加していません(レコーディングは見

字している）。

どうしてこの曲をアルバムに入れたのか。誰も「待った」をかけなかったのでしょうか。ジョージがインド音楽に深い造詣があったのはわかります。その理解もまた、私のような素人にはおよびもつかない境地に達していたんだろうとも思う。Try to realize it's all within yourself（すべては己れの内面の問題であるんだ）/No one else can make you change（誰も他人を変えることなんてできないんだ）という洞察力に富んだ歌詞も目をひく。ジョンは「ジョージの考えや音楽の指向性があらわれているベスト・ソングの一つ」と高く評価している。でも、音楽的な感動がない。悪いけど、お経だと思って、私は聴いています。最後の笑い声は何ですか。冗談だよ、という自嘲的な笑いなのでしょうか。

遠山　ジョージはこのアルバム用に「オンリー・ア・ノーザン・ソング」を書きましたが、ジョージ・マーティンによって収録を却下されました。それでこの曲が入ったんです。2度もつづけてダメ出しをしてはいけないと思ったのでしょうか……。

楽曲は、ジョージの師匠、ラヴィ・シャンカールの曲をもとにしてつくりました。しかし、師は「ぜんぜんインド音楽になっていない」という手厳しいご託宣を述べたらしい。イントロの「ビヨ〜ン」と間延びしたような音はインドの楽器タンブーラ。これはジョージが弾いています。タンブーラはドローン（単音で変化のない長い音）をだす専用の楽器で、瞑想を始める際によく使われます。

最後の笑い声はジョージの発案です。「聴いている人が退屈しているだろうから」という理由でインポーズされたようです。さすがジョージ、読みが深い（笑）。

CamScannerでスキャン

9. When I'm Sixty-Four

ホエン・アイム・シックスティ・フォー

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1966年12月6・8・20・21日
Ⓛ 2分37秒 Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中 64歳というのは、定年退職して「老後」を迎える年齢。64歳になっても……と歌うポールはこのとき24歳。そして驚くことに、このボードヴィルふうの曲を、なんと16歳のときに書いている。日本でいえば、高校1年生の少年が、老後の暮らしを想像して歌詞にしているんです。

アレンジが秀逸。キュートで、温かみのある雰囲気をうまく出している。遊び心たっぷりで、のんきに歌っているように感じられますが、テープのスピードを上げてキイを高くするなど（これで若々しい声になった）、いろんな工夫をしている。クラリネットを入れるように指示したのもポール。3本のクラリネットの音色が、静かで穏やかな老夫婦の生活を温かく包み込んでいる。またしてもポールの豊かな想像力に驚きをおぼえます。

遠山 デビューする前のキャヴァーン時代、アンプが故障したりすると、この曲をやっていました。アコースティック・ギターで弾き語りをして、間をもたせていたんです（60年から62年）。当時を知る人たちによれば、「けっこうウケていた」らしい。

ポールは、この年（1966年）の7月7日に父親ジムが64歳の誕生日を迎えたことで、この古い曲を引っぱりだしてきたようです。孫の名前として登場する「ヴェラとチャックとデイヴ」の部分はジョンによるもの。あと Doing the garden, digging the weeds（庭の手入れをしたり、草むしりをしたり）のくだりもジョン。

2006年6月18日に64歳の誕生日を迎えたポールのために、子どもたち（メアリー、ステラ、ジェイムズ）は、この曲を歌ったCDを制作してプレゼントしました。また、このレコーディン

CamScannerでスキャン

グをまとめあげたのは、ジョージ・マーティンの息子ジャイルズ（音楽プロデューサー）。年月を感じますね。ちなみにイギリスでは、結婚式で流れる曲の上位につねにランク・インしているんですよ。

10. Lovely Rita

ラヴリー・リタ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1967年2月23・24日、3月7・21日　Ⓛ 2分42秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　魔法をかけるように曲をアレンジしてしまう。この時期、ポールはスタジオ・ワークやサウンド・メイクなどの手法を身につけつつあった。ソングライティングのパートナーであるジョンさえいれば、「なんでもできる」と思っていたのでしょうか。スタジオは、もはやポールのワンダーランドと化しています。

サウンドのことをいうと、まずポールのベース。指が自在に動きまわっている。それから、間奏のピアノ。これはジョージ・マーティン。見事なピアノ・ソロです。ビートルズのサウンドに関していうと、「5人目のビートル」はやはりジョージ・マーティンであるといいたくなる。それから、トイレット・ペーパーを櫛で叩いたり破いたりする音も入っている。これはメンバー4人がやっている。いったいどんな顔をしてやっていたんだろう（笑）。最後はジョンとジョージがAh da, Ah daと声をあげると、ポールがLeave it（かまうな）と言い放って曲を閉じる。

遠山　リタという名ですが、ポールがロンドンで駐車違反をしたとき、反則の切符をきったのが婦人警官のミータ（Meta）・デイヴィスのことだといわれたことがある。彼女は、ポールに違反切符をきったのは自分だと名乗りをあげ、新聞を賑わしました。ポールに名前を尋ねられた、とまでいった。でも、ポール

は偶然の一致だとコメントして、これを否定しました。「それまでは好きなところに車を停められたのに、パーキング・メーターができて、みんな頭にきていたんだ」(ポール)という発言からわかるとおり、最初は腹いせめいた歌詞内容になるはずでした。しかし、つくっているうちに、Lovely Rita meter maid(素敵なリタは駐車違反を取り締まる婦警さん)なってしまった。

英国では、駐車違反の取り締まりはトラフィック・ワーデン(交通取締官)の仕事ですが、アメリカでは駐車違反を取り締まる女性係官のことを「メーター・メイド」(meter maid)呼ぶことから、歌詞のヒントを得たようです。

11. Good Morning Good Morning

グッド・モーニング・グッド・モーニング

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1967年2月8・16日、3月13・28・29日
Ⓛ 2分41秒 Ⓥ ジョン(ジョージ、ポール)

里中 久しぶりのジョン。サウンドはというと、とっちらかったふうで、うまくアレンジができていない。目覚まし時計の音がけたたましく鳴り響くオープニング。ニワトリ(ケロッグのトレードマーク)の鳴き声。間奏のワイルドなギター(これはポール)。最後は、イヌ、ネコ、ゾウ、ライオンなどの動物たちが参加。にぎやかな曲になっている。

ところが、歌詞を見ると、妻と子(男の子)をもつジョンらしき主人公は、ひどく鬱憤をためている様子。当時、ジョンはロンドンの郊外で暮らしていて、退屈な朝を迎えることが多かった。Going to work, don't want to go, feeling low down(仕事場へ向かおうとするが、どうにも行きたくない、気分がふさぎ込んでいる)/ Heading for home, you start to roam, then you're in town(家へ戻ろうとするが、ぶらぶら徘徊してしまう、いつのまにか街なかだ)だなん

て歌っている。気力が充実していない。

遠山　ケロッグのコーンフレークのCMからインスピレーションを受けて書いたらしい。そのTVコマーシャルには「グッド・モーニング（気持ちのよい朝）はケロッグで始まる」というキャッチ・コピーがついていました。ところが、ジョンはこの時期、「気持ちのよい朝」を迎えてはいなかった。歌の終わりのほうで、Go to a show, you hope she goes（ショーを観に行くとしよう。彼女も来るといいな）と歌っていますが、この「彼女」はおそらく知り合ったばかりのオノ・ヨーコのことでしょう（66年11月9日に彼らは出会う）。退屈な家庭生活のなかで必死にもがくジョン。そして、そんなジョンを誘惑しつづける「彼女」。ジョンはそんな生活のなかでこの歌を書いたのだと思います。

12. Sgt.Pepper's Lonely Hearts Club Band (Reprise)

サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド（リプライズ）

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1967年4月1日　Ⓛ 1分18秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　動物たちの鳴き声がやむ。そして、タイトル曲をくりかえしてショーをしめくくる──この卓抜なアイディア。前曲のニワトリの鳴き声とイントロのギターの音色をうまく嚙み合わせたのはジョージ・マーティン。ポップでクールな手腕です。

レコーディングは、ポールの渡米予定もあって、手早く1日で仕上げた。というわけで、趣向を凝らしたサウンドづくりはしていない。ブラス・セクションもなし。また、本編の再編集をするのではなく、ストレートに演奏して、それをそのまま録音している。ですが、この演奏がたまらなくいい。ロックして

CamScannerでスキャン

いるという感じ。

ここまで聴いてきてあらためて思うことは、このアルバムはポールが中心になってつくられたんだなあということ。曲づくりも、演奏も、アレンジも、愉快でしかたないといったふうです。ポールの台頭がすこぶる目立つ。

そうそう、曲の最初でポールが「ワン、トゥー、スリー」といっている後ろで、ジョンが「アイ」とつぶやいていますが、「アイ」って何ですか。

遠山　あれは「アイ」ではなく、「バイ」(さよなら)です。これでお別れですからね。世話係のニール・アスピノールが「ペパー軍曹がアルバムを紹介して始まるのなら、エンディングも彼がつとめたほうがいいんじゃないか」と提案して、この曲をやることになったらしい。こうして、ポピュラー音楽界を揺るがせたコンセプト・アルバムが完成したんです。

というわけで、大傑作〔ア・デイ・イン・ザ・ライフ〕はアンコール曲という位置づけになる。知ってましたか。ビートルズは、レコード・デビューしてからというもの、コンサートでアンコールに一度もこたえていないんです。

さあ、ショーは終わりました。それではペパー軍曹のバンドによるアンコールを楽しみましょう。

13. A Day In The Life

ア・デイ・イン・ザ・ライフ

Ⓦ Lennon / McCartney　Ⓡ 1967年1月19・20日、2月3・10日、3月1日
Ⓛ 5分05秒+28秒 (サージェント・ペパー・インナー・グルーヴ)　Ⓥ ジョン、ポール

里中　ジョンの曲に、ポールによる未完成の小品をはさみ込んだ作品。始めと終わりがジョンの曲で、中間部がポールの曲。まったく別々につくられた曲を「実験的に」つないで、このア

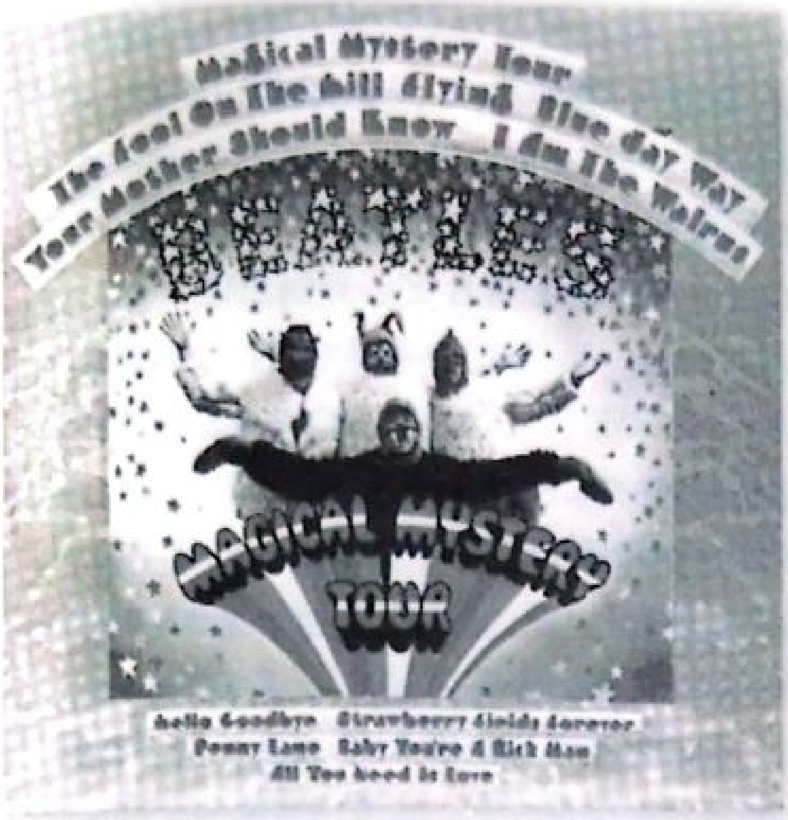
ルバムのエンディングにふさわしい「奇跡的な」作品をつくりだした。ヴォーカル、構成、演奏、録音、アレンジ――どれをとっても圧巻。独創的で魅惑的。遊び心に満ちていながら、あらゆることが水際立っている。

ジョンは、新聞記事や自分が出演した映画『僕の戦争』に着想を得て歌詞を書きあげた。ポールは、目を覚ましてからバスの2階に乗ってタバコを一服するまでを描いている。I'd love to turn you on（いい気分にさせたい）の部分を書いたのはポールだといわれていますが、このフレーズがドラッグによる恍惚状態を想起させるというので、ＢＢＣは放送禁止にしてしまった。

遠山　おそらく英国でもっとも評価の高いビートルズ・ナンバーでしょうね。とくに60年代を知る評論家たちは、こぞってこの曲の衝撃と魅力について語りたがります。

レコーディング風景が、プロモーション・ヴィデオとして発表されました。オーケストラは総勢40名の編成。全員が正装しているにもかかわらず、ハゲヅラとか赤い鼻とか、安物のパーティ・グッズを身につけることを要求させられた。ビートルズは、とにかく"おふざけ"が好きなんです。

サウンドに関していえば、ジョージ・マーティンによるアレンジが大きな手柄でしょうね。あとは、リンゴのドラミング。音色といい、フレーズといい、これしかない、という小気味のいいフィル・インを披露している。まるで、曲と会話しているみたい。そして、最後はピアノの一撃。ジョージを除くみんなで（ジョージの代わりにマル・エヴァンス）3台のピアノを叩いて大団円をむかえる。



Beatles Album **9**

MAGICAL MYSTERY TOUR

マジカル・ミステリー・ツアー

1967年11月27日リリース（アメリカでの発売）

Ⓛ 39分42秒 Ⓟ ジョージ・マーティン Ⓢ アビイ・ロード・スタジオ、チャペル・レコーディング・スタジオ、オリンピック・サウンド・スタジオ Ⓒ ジョン・ケリー

SIDE A	SIDE B
1 Magical Mystery Tour	7 Hello Goodbye
2 The Fool On The Hill	8 Strawberry Fields Forever
3 Flying	9 Penny Lane
4 Blue Jay Way	10 Baby You're A Rich Man
5 Your Mother Should Know	11 All You Need Is Love
6 I Am The Walrus	

CamScannerでスキャン

幅広い音楽的パノラマと際立つ4人の個性

1967年8月、ビートルズを世界に売り出したマネージャーのブライアン・エプスタインが、睡眠薬などの過剰摂取が原因で不慮の死を遂げた。ポールはバンドが結束感を失わないようにと、TV映画『マジカル・ミステリー・ツアー』の完成とそのサウンド・トラックの発表に向けてすぐさま動きだした。『サージェント・ペパー』からわずか半年後のことだった。

ファースト・アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』(63年3月)からここまで、わずか4年半しか経っていない。この間に、「バブル・ガム」(風船ガム)と呼ばれていたポップ・ミュージックは、その地位を大いに高めることになった。幅広い音楽的なパノラマを持つ「ロック」という言葉が台頭、楽曲は「作品」になり、ミュージシャンは「アーティスト」と呼ばれるようになった。これらはすべてビートルズの功績である。

本アルバムは、「ビートルズの4人がバスに乗って、気ままな旅に出る」というポールのアイディアに基づいて制作されたTV映画のサントラ版。イギリスでは新曲6曲を2枚組のEPとして発売した。ところが、アメリカでは、A面にサントラ、B面に1967年のシングル曲5曲を収録して発売したところ、これがすこぶる好評だったため、イギリスでも発売されることになり、アメリカ編集盤がオリジナル・アルバムとして"格上げ"されることになった。

サイケデリック・ポップスの頂点をきわめた楽曲集として、いまも高く評価されている。従来の「様式」を超越しようとする姿勢がメンバーの個性をさらに際立たせ、類型のない傑作ナンバーを生み出すことになった。

1. Magical Mystery Tour

マジカル・ミステリー・ツアー

Ⓜ Lennon / McCartney Ⓡ 1967年4月25・26・27日、5月3日、11月7日
Ⓛ 2分49秒 Ⓥ ポール（ジョン、ポール、ジョージ）

里中 TV映画『マジカル・ミステリー・ツアー』（1967年12月26日、英国BBCが放映）の主題歌で、ポールの作品。ジョンが歌詞の一部を手伝っている。

いきなり Roll up, roll up for the Mystery Tour（寄ってらっしゃい、寄ってらっしゃい、ミステリー・ツアーですよ）のコーラス。まるでサーカスの呼び込みようなノリ。Roll up, roll up! は「寄ってらっしゃい、見てらっしゃい」で、見せ物の呼び込みに使う口上。このフレーズを耳にするだけでワクワクしますね。

とはいえ、日本人にはわかりづらい隠された意味もある。Roll up は「マリファナ煙草を巻く」という俗語でしょ。それに、tour のところを trip（幻覚体験）にして歌っている箇所もある。だから、最後の The Magical Mystery Tour is dying to take you away（マジカル・ミステリー・ツアーは、あなたを未知なる世界に連れていってやりたいのです）/ Dying to take you away, take you today（どうしても、きょう、不思議の世界に連れ出したいのです）の部分は意味深長。

遠山 このタイトル・チューンを聴くと、気分が高揚しますね。ファンファーレのようなトランペットも、歌詞にぴったり。吹いているのは外部のミュージシャン。でも、アイディアをだしたのはポール。ビンゴでした。あと、サウンド面で注目したいのは、リンゴのドラミング。この短い曲のなかで、いろんなパターンのドラミングを見せている。じつに器用というか、巧みですね。目立たないけど、心憎いことをやっている。

2012年6月5日、ダイヤモンド・ジュビリー（エリザベス女王の即位60年祝賀会）のコンサートで、トリとして登場したポール

は、この曲で自身のショーをスタートさせました。ライヴ向きの曲ですね。もちろん大盛りあがりでした。

2. The Fool On The Hill

フール・オン・ザ・ヒル

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1967年9月6・25・26・27日、10月20・25日 Ⓛ 2分57秒 Ⓥ ポール

里中　ポールの曲。なんの教訓も寓意もなく、純粋なおかしみと哀しみだけがある。なんだか、ジョンの世界を取り込んだかのよう。

タイトルの〔The Fool On The Hill〕は「丘の上の愚者」で、「来る日も来る日も、ひとりで丘の上にいて、呆けたように薄笑いを浮かべてじっと動かない男」(Day after day / Alone on a hill / The man with the foolish grin is keeping perfectly still) の話。いったい誰のことを思い浮かべて書いたのでしょう。

この曲を名曲たらしめているのは、もちろん楽曲そのものにあるわけですが、使った楽器もまたこれ以外には考えられないものばかり。孤高と虚無を奏でるピアノ (ポール)。森に住む妖精のテーマ曲のようなリコーダー (ポール)。そして、その後ろから流れてくる嘲笑にも似たフルート (外部ミュージシャン) とバス・ハーモニカ (ジョージ)。

遠山　地動説を唱えたガリレオ・ガリレイのライフ・ストーリーをヒントにしてつくったようです。のちにポールは、ビートルズが傾倒したマハリシ・マヘシ・ヨギ (超越瞑想の提唱者) のような社会から誤解を受けやすい人間について歌った曲だと語ってもいる。しかし、これを書いた当時、ポールはまだマハリシと出会っていないので、これは「後づけ」の感想ということになりますが。

CamScannerでスキャン

とはいえ、清く澄みきった曲調をもつ、美しく感動的なバラードであることに変わりはない。ジョンでさえ、「ポールには完璧な曲を書く能力がある」と語っているほどです。

TV映画『マジカル・ミステリー・ツアー』では、ポールが丘の上で夕日を見つめているシーンで使われました。ということは、愚者は自分自身だったのか(笑)。

南フランスの美しいリゾート地、ニースで撮影されました。

3. Flying

フライング

Ⓦ Harrison / Lennon / McCartney / Starkey Ⓡ 1967年9月8・28日
Ⓛ 2分14秒 コーラス／ジョン、ポール、ジョージ、リンゴ

里中 ＴＶ映画『マジカル・ミステリー・ツアー』で使われたインストゥルメンタル曲。雲の中をめぐっていくシーンで流れましたね。ジャムっぽく10分ちかくも演奏したようですが、最終的には2分ちょっとに縮められた。ビートルズはハンブルクでの巡業時代、一つの曲を即興的に20分ぐらい演奏しつづけることをよくやっていたので、こういうインストゥルメンタルの曲はじつはお手のもの。でも、自分だけを目立たせようとしない控えめな演奏ぶりが、いかにもビートルズらしい。彼らは「効果」は狙うけど、「これみよがし」はやらない。そこに好感がもてます。

作曲のクレジットを見ると、ハリスン＝レノン＝マッカートニー＝スターキーとなっていますが、たんにアルファベット順に並べただけなんでしょうか。

遠山 4人の名前がクレジットされた最初の曲であり、また公式発表した全213曲のなかの唯一のインストゥルメンタル曲です。9月8日の最初のテイクでは、モダン・ジャズふうに演奏し

CamScannerでスキャン

ているところもある。モノ・ミックスされたときは9分36秒に及んだそうです。

これはTV映画『マジカル・ミステリー・ツアー』用につくった曲で、タイトルは当初、〔Aerial Tour Instrumental〕でした。「空中」とか「夢幻」をイメージしていたことがわかります。ご存じのとおり、TV映画『マジカル・ミステリー・ツアー』の視聴率は高かったけれど、評価は低かった。「退屈」で、「クズのような映画」だと酷評された。「ビートルズがはじめて失敗した」とも書かれた。というのも、映画はカラー作品だったにもかかわらず、当時の英国ではカラーTVが普及しておらず、視聴者は白黒で鑑賞するほかなかったからです。色彩が混ざり合った視覚的なおもしろさが伝わらなかった。カラーで観ると、この曲が流れる雲のシーンは、色彩と曲がマッチして、とてもうまくできている。ジョージ色が強い曲ですね。

4. Blue Jay Way

ブルー・ジェイ・ウェイ

Ⓦ George Harrison Ⓡ 1967年9月7日、10月6日
Ⓛ 3分54秒 Ⓥ ジョージ (ジョン、ポール)

里中　ジョージの曲。アルバム『マジカル・ミステリー・ツアー』に収められた唯一の曲。濃い霧の中へまぎれ込んでいくような暗いイメージ。名著として定評のある『ビートルズと60年代』(『キネマ旬報社』)の著者イアン・マクドナルドは、その本の中で「時差ボケでぼーっとしていた作者の混乱した精神状態を見事すぎるくらいに再現している」と皮肉たっぷりに書き、「ひたすら単調な印象を与え、そもそものインスピレーションとなった退屈さを克服するには至っていない」と辛辣に酷評している。正直、私も楽しめる要素をほとんど見いだせない。「眠

想」ならぬ「迷走」をしているような楽曲。
歌詞は、到着の遅い友だちを待ちわびている、というもの。Please don't be long, please don't you be very long（早くしてくれよ、待たせないで）/ Please don't be long, or I may be asleep（待ちくたびれて、眠ってしまうよ）と眠たそうにつぶやいている。

遠山　67年の夏、ジョージは妻パティとロサンジェルスへ休暇に出かけていた。そこで借りていたのが「ブルー・ジェイ・ウェイ」という通りにある家だった。ある夜、ビートルズの元広報で、アメリカ西海岸でプレス・エージェント（アーティストをメディアに売り込む仕事）をやっていたデレク・テイラーが到着するのをジョージは待っていた。だが、その日は霧が深くたちこめていて、デレクの到着が遅れてしまった。そこで、ジョージは待っているあいだにこの曲を書いたというわけ。こうした経緯を知っていれば、霧のようなメロディも、眠たげな歌詞の内容も理解できると思うのですが……。
ADT（アーティフィシャル・ダブル・トラッキング）やテープの逆回転など、さまざまな技術を使って録音しました。作曲をしたのがオルガンだったためか、この作品ではギターが使われていません。チェロが印象的ですね。ジョージは全編ずっとハモンド・オルガンを弾いています。

5. Your Mother Should Know

ユア・マザー・シュッド・ノウ

Ⓦ Lennon / McCartney　Ⓡ 1967年8月22・23日、9月16・29日
Ⓛ 2分27秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ポールの作品。曲想、曲調ともに想像力と創造力に富んでいる。完成度の高い曲。しゃっくりのような、ベースの"ひっかけ"から入るところがしゃれている。いいアイディアです。

ポールがピアノ、ジョンはオルガンを弾いている。コーラスも健在。入り方がいいし、高い声音にもうっとりしてしまう。コーラス・グループとしても健在ですね。

歌詞の出だしは、Let's all get up and dance to a song that was a hit before your mother was born（さあ、みんな、立ち上がって踊ろうよ。きみのお母さんが生まれる前にはやった歌だよ）/ Though she was born a long, long time ago, your mother should know（だいぶお年を召しているとはいえ、きみのお母さんなら知っているはずさ）となっている。大家族が好きな、いかにもポールらしい温かみのあるボードヴィルふうの曲。映画では、1940年代のハリウッド・ミュージカルを思わせるような印象的なシーンで用いられていました。

遠山　ロンドンの自宅に伯父や伯母が訪ねてきたときに、なんとその場でつくったようです。ポールはスイッチを入れたら、その場ですぐに曲ができてしまう。タレント（才能）なのでしょうね。

映画のフィナーレでは、この曲に合わせて、白いタキシードに身をつつんだ4人が、ダンスホールの階段を上り下りしながら、笑顔でステップを踏んでいました。アイドルがやりそうなことをやっている（笑）。というか、世間ではまだビートルズはアイドルだったんですね。3人は胸に赤いバラをさしているのに、ポールだけ黒いバラであることがのちに「ポール死亡説」の"有力"な根拠として挙げられることになりました。

ちなみに、8月23日のセッションは、マネージャーのブライアン・エプスタインが立ち会った最後の録音となりました（27日に死亡が確認される）。

CamScannerでスキャン

6. I Am The Walrus

アイ・アム・ザ・ウォルラス

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1967年9月5・6・27・28日 Ⓛ 4分34秒 Ⓥ ジョン

里中　「ぼくはセイウチだ」がタイトルの意味。ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』のなかにある「すぐ後ろにウォルラス（セイウチ）……ぼくの尻尾を踏んでいる」というナンセンスな詩からヒントを得た曲。ビートルズの歌詞の裏には、隠された意味があるのではないか。リスナーたちは、しきりに歌詞の"深遠な"意味を探ろうとした。でも、ジョンはそういう連中をからかってやろうとばかり、音韻だけを頼りに単語をデタラメに並べただけの悪ふざけをやった。さらには、この歌詞は宗教的な意味合いをもちウンヌン……といい加減な発言をしたりする。困った人です（笑）。『ホワイト・アルバム』に収録されている〔グラス・オニオン〕では、Walrus was Paul（セイウチはポールだった）と歌い、ソロになってからの〔ゴッド〕では I was the Walrus but now I'm John（ぼくはむかしセイウチだったけれど、いまはジョンだ）と叫んでいる。思わず、ウォルラスとは「ビートルズ的なるものの象徴」と解釈したくなるけど、これもジョンのワナでしょう。

遠山　ジョンは「100年経っても通用するサウンド」と語り、ポールは「ジョンの書いた曲のなかでもっとも好きなものの一つ」だと述べている。

　サウンドのことをいうと、ジョンはミキシングを担当するジェフ・エメリックに「声を月から聞こえてくるようにしたい」と注文。ジェフはトークバック用の安いマイクを使ってオーヴァーロード（過入力）させてジョンの声を歪ませた。さらに、ジョージ・マーティンはヴァイオリン、チェロ、ホルンのアレンジを

加えて、不気味な異次元空間の現出に貢献している。Goo, goo, goo, joob のところで、背後から聞こえてくるラジオのダイヤル・チューニングはリンゴによるもの。そのときたまたま放送されていたのはシェイクスピアの『リア王の悲劇』(第4幕第6場)のラジオ・ドラマでした。……わけのわからない傑作ということにしておきましょう。

7. Hello Goodbye

ハロー・グッドバイ

W Lennon / McCartney　R 1967年10月2・19・20・25日、11月1・2日
L 3分28秒　V ポール(ジョン、ジョージ)

里中　ジョンの歌詞には、人生につきまとう不安や苦悶、皮肉や不条理といったものが漂っていますが、ポールの曲には、人生を賛美したり謳歌する歌詞が多い。

「きみはイエスで、ぼくはノー。きみはストップで、ぼくはゴー、ゴー、ゴー」ではじまる歌詞は、日本の中学生にでも書けそうな気がするんだけど(笑)。でも、こうした単純な歌詞をあえて書いたポールのたくらみが感じられないでもない。人生が「ハロー」(出会い)と「グッドバイ」(別れ)の繰り返しであることを考えると、人生の真実をついているようにも見える。「イエス」といえば「ノー」、「ゴー」といえば「ストップ」、「ハイな気分だ」といえば「ローな気分だ」と応じる。人生とは、まことにもってうまくいかない。思いは伝わらず、誠意は誤解される。ひょっとすると奥深い歌詞なのかも。あるいはまた、無邪気な歌詞でもこんな名曲がつくれるんだぜ、といわんばかりの自信をポールは披露しているのかもしれない。

遠山　〔アイ・アム・ザ・ウォルラス〕のA面としてシングル発売されました。ジョンは自分の傑作がB面にされ、この無邪気な

曲がA面になったことをのちのちまで恨んでいた。意味不明の歌詞や隠喩を好んだジョンにしてみれば、この歌詞は論じるに値しないものだった。そのせいで、ジョンの評価はすこぶる低かった。

キャッチー（覚えやすい）なメロディ。バック・コーラスのHello, goodbye, hello, goodbyeなんて、「ドレミファソラシド」ですよ(笑)。単純きわまりない。でも、いろいろな隠し味があって、聴く人によって気に入っている隠し味が違うというところに、ポールの並はずれた才能を感じます。僕はンチャ、ンチャ、ンチャ、ンチャの部分が好き。ポール自身もこの曲が外国で人気があるということを知っていて、ワールド・ツアーになるとよくレパートリーに加えています。

8. Strawberry Fields Forever

ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1966年11月24・28・29日、12月8・9・15・21日
Ⓛ 4分07秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中 ジョンの曲。ストロベリー・フィールドとは、ジョンが育ったミミ伯母さんの家から歩いてすぐのところにあった救世軍（プロテスタント系の社会事業団体）の孤児院の名前。ストロベリー・フィールズと複数形になると、建物やまわりの木立を含む一帯を指す。幼いジョンはここによく忍び込んでは、流れる時間に身をまかせていた。ジョンはここで開かれるガーデン・パーティが好きで、友だちとレモネードを売ったり、救世軍のバンド演奏を聴いたりした。

夢の中でまどろんでいるような感覚があるいっぽう、まるでジョンが耳もとで歌っているかのような生々しさもある。眼を閉じれば、幼いジョンが揺曳している姿が思い浮かぶ。それに

CamScannerでスキャン

しても、この曲には「透明な悲しみ」と呼びたいような雰囲気がありますね。

遠山　宙に浮かんでいるような不確かさのなかに、どこかしら自由を感じます。言葉一つ一つが魔法のような不思議な力をもっている。サウンド自体にも、記憶と幻覚が入り混じったような淡い色彩が感じられる。加えて、ジョンの声も、まるで熟成した芳醇ワインのような幽玄な雰囲気をたたえている。

ジョンは、テンポもキイも異なる二つのテイクをつなげたいと言いだし、エンジニアたちが巧みなテープ編集をおこなった。演奏自体も素晴らしい。イントロでフルートのような音色で美しいメロディを奏でているのは、ポールが弾くメロトロン。それからリンゴのドラミングにも注目。曲への入り方が息をのむほど見事。

ストロベリー・フィールズですが、幼いころのジョンが茂みからひょいっと顔をだしそうな気配があるところ。2005年に孤児院としての役目を終えて、現在では修道施設になっています。残念なことですが、赤いゲートは2011年5月にレプリカに差し替えられました。

9. Penny Lane

ペニー・レイン

Ⓦ Lennon / McCartney　Ⓡ 1966年12月29・30日、1967年1月4・5・6・9・10・12・17日　Ⓛ 3分00秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ポールの曲。ペニー・レインは故郷リヴァプールにあるバス通り。ペニー・レインという名は、「町まで1ペニーのバス運賃で行ける路線」に由来する。

鐘が鳴り、ピッコロ・トランペット（デイヴィッド・メイソン）が高らかに鳴り響き、青空のように澄みきった声が懐かしい街並

をめぐる。トランペットの高音ソロは、バッハの〔ブランデンブルク協奏曲〕の一節をＴＶで聴いたあとにひらめいて入れたそうですが、ポールはそうしたことが瞬時にアイディアとして頭の中で決まってしまう。どんな素材であれ、見事な逸品にこしらえることのできる天才シェフのようです。

残念なのは、〔ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー〕と〔ペニー・レイン〕が両Ａ面のシングルとして発売されたので、人気が二分されてしまって、どちらの曲も全英第１位を獲得できなかったこと。〔プリーズ・プリーズ・ミー〕以来、発表したシングルがすべて１位を続けてきたのに……。ちなみに、これら歴史的名曲を押さえて堂々の１位を獲得したのは、よりによってエンゲルベルト・フンパーディンクの退屈なバラード〔リリース・ミー〕だった。なんたること……。

遠山　当時の英国のビートルズ・ファンになり代わり、お詫び申し上げます（笑）。ジョンが〔ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー〕を書いたことに刺激されて、ポールがつくったのがこの曲。ジョンの幻想的な曲づくりとは違い、ポールがよく知っているリヴァプールを写真のように鮮明に再現しています。ペニー・レインは、ポールが小さいころ、両親に連れられていったお店がたくさん並んでいるエリア。正確には、ペニー・レインは住宅が立ち並ぶ通りの名前ですが、その突き当たりにあるスミス・ダウン・プレイスとスミス・ダウン・ロードには、歌詞に登場する銀行も床屋さんもあります。

10. Baby You're A Rich Man

ベイビー・ユーアー・ア・リッチ・マン

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1967年5月11日　Ⓛ 3分01秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　「トットコ、トットコ、トットコ……」というイントロのリズムが印象的。バグパイプのような音も愉快（じっさいはジョンの弾くモノフォニック・シンセサイザー）。コーラスには、ミック・ジャガーも参加している。注意して聴くと、ミックの声だとわかるところがありますね。

アタマの How does it feel to be one of the beautiful people（ビューティフル・ピープルの仲間入りをするのはどんな気分だい？）という皮肉っぽい歌詞に見えるように、金持ちになって優雅な生活を送っている人たち（ビューティフル・ピープル）を揶揄した曲。彼らが「素晴らしい」という意味で「ビューティフル」という言葉を連発するので、そう呼ばれるようになったらしい。

遠山　ジョンがつくっていた〔ワン・オブ・ザ・ビューティフル・ピープル〕とポールが書いていた〔ベイビー・ユー・アー・ア・リッチマン〕という曲をくっつけて一つにまとめた曲。出だしの部分がジョンで、タイトル・フレーズを連呼するミドルがポール。

アニメーション映画『イエロー・サブマリン』のためにつくられた曲で、映画ではイントロの部分が使われましたが、〔All You Need Is Love〕のB面として発表されることになったので、アルバム『イエロー・サブマリン』には収録されませんでした。

一説には、マネージャーのブライアン・エプスタインをからかった歌だといわれています。ジョンは Baby, you're a rich fag jew（あんたは金持ちでホモのユダヤ人）と歌ったこともあるそうですが、この部分はもともとポールがつくったところなので、ブ

ライアンを中傷するために書かれたというのは当たっていません。いまでも、金持ちをからかったりするときに、TVやラジオでよく流れます。Facebookの創設者たちを描いた2010年のアメリカ映画『ソーシャル・ネットワーク』のエンディングにも使われていました。

11. All You Need Is Love

愛こそはすべて（オール・ユー・ニード・イズ・ラヴ）

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1967年6月14・19・23・24・25・26日
Ⓛ 3分48秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　フランス国歌〔ラ・マルセイエーズ〕ではじまり、All you need is loveとジョンがガムを噛みながら歌い、エンディングはバッハの〔2声のインヴェンション〕、イギリス民謡の〔グリーン・スリーヴス〕、グレン・ミラーがアレンジした〔イン・ザ・ムード〕、そして自分たちの〔シー・ラヴズ・ユー〕で閉じる。「愛があればなんとかなるさ」という夢想的な色調で曲全体が染めあげられている。愛の必要性を深刻な顔をして説いたものではありません。でも、そのあたりのことをうまく掬（すく）いあげた日本語訳（歌詞）も楽曲解説もありませんね。

急いでつくったわりには、さすがビートルズ、瑕疵（かし）が見あたらない。ジョージはこの曲を「パーフェクト・ソング」と形容しています。「アフリカの難民救済」を目的として85年（7月13日）におこなわれたチャリティ・コンサート「ライヴ・エイド」では、ビートルズ・ファンのエルヴィス・コステロがこの曲をエレクトリック・ギター1本だけで歌うのですが、これにもしびれました。

遠山　歌う前にコステロは、"I want you to help me sing this old Northern English folk song." とジョークをかました。それにして

も、「おなじみのイギリス北部のフォーク・ソングをやるんで、一緒に歌ってくれないかい」とは(笑)。

レコーディングの風景が、67年6月25日、宇宙通信衛星を利用した世界初の試みとして世界31か国に同時中継されました。番組のタイトルは『Our World』(われらの世界)です。日本ではNHKで放送されました。アビイ・ロード・第1スタジオには、ミック・ジャガー、キース・リチャーズ、エリック・クラプトン、キース・ムーンなどのポップ・スターなどが応援に駆けつけた。この映像は、67年夏のイギリスの若者文化(「サマー・オヴ・ラヴ」と呼ばれた)の雰囲気を伝えています。

When I say I'm primitive I mean that
I consider myself a primitive musician
just because I never studied music.
Therefore I'll always consider myself
a primitive.

自分をプリミティヴだというのは、音楽教育を受けていない
生粋のミュージシャンという意味だ。これからもずっと
プリミティヴでいたい。

— John Lennon

CamScannerでスキャン

I wasn't a Beatles fan until I listened to the *White Album* and became an instant convert.

ビートルズのファンじゃなかった。『ホワイト・アルバム』を聴いたとたん、僕は回心したんだ。

— Steven Spielberg

YOU ARE
THE GREATEST DRUMMER
IN THE WORLD.
REALLY.

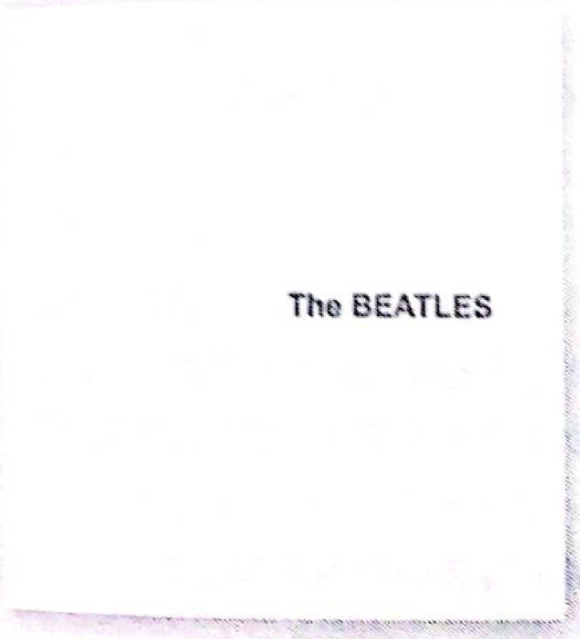
君は世界一のドラマーだよ。ほんとうさ。

— Paul McCartney

1968年、自分がのけ者にされていると感じたリンゴは、ビートルズを脱退すると言いだした。そのときポールはこのような文面の葉書をリンゴに送った。

CamScannerでスキャン

Beatles Album 10



THE BEATLES (THE WHITE ALBUM)

ザ・ビートルズ（ホワイト・アルバム）

1968年11月22日リリース

Ⓛ93分35秒　Ⓟジョージ・マーティン　Ⓢアビイ・ロード・スタジオ、トライデント・スタジオ
Ⓔリチャード・ハミルトン

SIDE A

1 Back In The U. S. S. R.
2 Dear Prudence
3 Glass Onion
4 Ob-La-Di, Ob-La-Da
5 Wild Honey Pie
6 The Continuing Story Of Bungalow Bill
7 While My Guitar Gently Weeps
8 Happiness Is A Warm Gun

SIDE B

9 Martha My Dear
10 I'm So Tired
11 Blackbird
12 Piggies
13 Rocky Raccoon
14 Don't Pass Me By
15 Why Don't We Do It In The Road
16 I Will
17 Julia

SIDE C

18 Birthday
19 Yer Blues
20 Mother Nature's Son
21 Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey
22 Sexy Sadie
23 Helter Skelter
24 Long, Long, Long

SIDE D

25 Revolution 1
26 Honey Pie
27 Savoy Truffle
28 Cry Baby Cry
29 Revolution 9
30 Good Night

CamScannerでスキャン

連帯感を失った4人がつくりだした傑作集

ジャケットの色から『ホワイト・アルバム』(白いアルバム)の名で親しまれている2枚組アルバム。ビートルズが設立したアップル・レコードから発売された最初のアルバムでもある。前作までに見られたような華やかでサイケデリックな雰囲気は影をひそめ、シンプルなミニマル・アートでレコードを包み込んだ。

1968年2月、ビートルズの4人は妻や恋人を伴って、インドのリシケシュへ瞑想の旅に出かけた。このアルバムに収録された多くの曲がそこでつくられている。

レコーディングに入ると、ジョンの関心はヨーコに向けられる。ポールはメンバーにあれこれと指示し始める(恋人ジェーン・アッシャーが、レコーディングが始まる1か月ほど前にポールとの婚約解消を発表。このころからポールが"荒れる"ようになる)。ジョージは、ジョンとポールの勝手なふるまいが気に喰わない。リンゴは疎外感を抱え込んでいる。メンバーは徐々に連帯感を失い、口論といさかいを繰り返しながら、解散に向けて歩み始めた。

8トラックのレコーダーが導入されたことで、4人が顔をそろえてレコーディングをする必要はなくなった。結果、4人が集まって録音した楽曲は、30曲中13曲。「ソロ・ナンバーの集合体のようでまとまりがないアルバム」と評されるゆえんである。

プロデューサーのジョージ・マーティンは、もっと曲を絞って1枚のアルバムにまとめたいとの意向を伝えたが、メンバーの誰からも受け入れられなかった。だが、開けてみたら、多種多様の光彩を放つ、まるで宝石箱のようなアルバムができあがった。ビートルズのマジックが、またしても起きたのだ。

1. Back In The U. S. S. R.

バック・イン・ザ・U. S. S. R.

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年8月22・23日 Ⓛ 2分43秒 Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中 ポールの作品。ヴォーカルもポール。アメリカで暮らしていたソ連政府の関係者とおぼしき男（KGB諜報員？）が母国に戻った喜びを語っている。ノリもいいし、アレンジも秀逸。

タイトルと歌詞はチャック・ベリーの〔バック・イン・ザ・U. S. A.〕のパロディで、ヴォーカルはエルヴィス・プレスリー、コーラス（ジョンとジョージ）はビーチ・ボーイズを真似ている。遊び心が満載の秀作。

冷戦さなかのソ連では、ビートルズは「退廃した資本主義のシンボル」とか「西側のプロパガンダ」と称されて、社会への悪影響を懸念した共産党指導部によって禁止されていた。しかし、若者たちは海賊版を入手して、当局に隠れてこっそり聴いていた。あの時代の若者にとって、ビートルズは「共通言語」であったことがのちに判明しました。

遠山 知っていましたか。ドラムはリンゴじゃなくて、ポールなんです。ドラミングにたびたび注文をつけるポールに対して、リンゴが腹を立て、「もうやめる」と宣言、スタジオを出て行ってしまった（8月22日）。およそ10日間の、非公式かつ一時的な「ビートルズ離脱」でした。でも、このノリです。ポールのピアノも抜群のノリを見せている。リンゴが不在なのに……。思いやりがないというか、プロフェッショナルというべきか。

ポールはこの曲をインドのリシケシュで書いており、一緒にマハリシのもとへ瞑想修行にきていたマイク・ラヴ（ビーチ・ボーイズ）がコーラスのヒントを提供しているそうです。

もちろん、ロシアにおいては、もっとも人気の高いビートル

ズ・ナンバー。2003年5月24日、モスクワの「赤の広場」でおこなわれたコンサートでは熱狂の渦のなかでポールはこの曲を歌いきった。遅れてやってきたプーチン大統領のために、アンコールでふたたび熱唱。会場は興奮のるつぼと化しました。

2. Dear Prudence

ディア・プルーデンス

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年8月28・29・30日 Ⓛ 3分55秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中 ジョンの語りかけるような歌声が印象的。なんということもない平凡な曲でも、ジョンの声にかかるとつい耳が引き寄せられます。

Dear Prudence, won't you come out to play（いとしいプルーデンス、外に出て一緒に遊ばないか）という歌詞はいかにも唐突で、なんのことか見当もつかない読者もいるでしょうが、タイトルにもある「プルーデンス」は、一緒にリシケシュで瞑想修業をしていた女優ミア・ファローの妹の名。彼女（プルーデンス・ファロー）は瞑想に没入するあまり、自分の小屋に閉じこもってしまった。いくら声をかけても出てこない。心配になったジョンがこの曲をつくって部屋の外で口ずさむと、プルーデンスはやっと顔をのぞかせた。

このところのジョンは意味不明の歌詞を書くことが多かったけれど、ここではThe sun is up, the sky is blue（陽が昇り、空は青い）とかThe wind is low, the birds will sing（風はやさしく、小鳥はさえずる）なんていうシンプルな歌詞を書いている。おそらくインドの澄みきった風景の影響でしょうね。

遠山 ジェット機の音と重なるようにして、アコースティック・ギターでイントロがはじまる。ジョンのアルペジオは、自

CamScannerでスキャン

身の声と同じように、いつも哀切をたたえていますね。
リンゴ不在のため、〔バック・イン・ザ・U.S.S.R.〕につづき、ドラムを叩いているのはまたしてもポール。とくに後半のドラミング、スネアとシンバルを強調した組み合わせは見事。ベースもポール。厚い壁を叩いているようなベース音が印象的。プルーデンスは、自分のことが歌になったことを「ビューティフル」だと述べて、たいそう喜びました。彼女はその後、4か月の修行を終え、超越瞑想の最年少指導者になりました。

3. Glass Onion

グラス・オニオン

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1968年9月11・12・13・16・26日、10月10日
Ⓛ 2分17秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　冗談好き、パロディ好きのジョンが全開。歌詞には「ストロベリー・フィールズ」「レディ・マドンナ」「フール・オン・ザ・ヒル」「フィクシング・ア・ホール」など、ビートルズが過去に発表した楽曲名が出てくる。こうしたときのジョンは、ほんとうに楽しそう。ジョンは、歌詞の意味をあれこれと解釈して決めつけている人たちをからかうためにわざと謎めいた歌詞を書いた、と述べています。
タイトルの「グラス・オニオン」（ガラスのタマネギ）は、時計などの精密機器や高価な美術品などの修理をするときに片眼にはめる眼鏡のこと。ジョンが勝手にそう呼んだらしい。そんな「グラス・オニオン」（こまかなところもよく見える眼鏡）をかけて、ビートルズの曲を微に入り細を穿って分析する人たちを煙に巻いてやろうという寸法だったんですね。
サウンドでは、やはりポール。硬く引き締まったソリッド感のあるベースが耳に心地いい。

遠山　いかにもジョンらしいパロディにあふれた曲。You know that we're as close as can be, man（僕たち考えられないほど仲がよかったんだ）/ Well, here's another clue for you all（じゃ、ここでみんなに手がかりをあげよう）/ The walrus was Paul（セイウチはポールだったんだ）と、ジョンの歌詞をあれこれと詮索する人たちを挑発するような悪ふざけをやっている。The walrus was Paul と過去形になっていることから、69年に広まった都市伝説「ポール死亡説」の根拠にもされてしまった。ジョンの術中にハマったってわけ。ジョンの勝ちです（笑）。

3曲目にしてようやくリンゴが登場します。それもパワフルなドラムによるスタート。まるでリンゴが「帰ってきたぞ！」とアピールしているかのよう。ポールのベース、いいですね。ピッキングのアタックを強くして弾くポールのベースは、のちに多くのベーシストが真似しはじめました。

4. Ob-La-Di, Ob-La-Da

オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ

Ⓦ Lennon / McCartney　Ⓡ 1968年7月3・4・5・8・9・11・15日
Ⓛ 3分08秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　単純でありながら独創的、平易でありながら平凡ではない。ふと、こんな表現が頭に浮かぶ。ジャマイカのリズムを取り入れた最初のロック・ナンバー。それにしてもポールは失速しませんね。メロディが跳躍している。あふれるようにでてくる曲想。タイトルも〔オブ・ラ・ディ、オブ・ラ・ダ〕ときた。ナイジェリアの民族語の一つであるヨルバ語で「人生はつづくよ」（Life goes on.）という意味らしい。Ob-la-di, Ob-la-da, life goes on bra……の bra は brother のことで、「仲間」への呼びかけに使われる。歌詞の内容は、Desmond（デズモンド）と Molly（モリー）

という夫婦が、子どもたちに囲まれて幸せな家庭を築いていくというもの。でも、途中から男と女の役割が入れ替わってしまう。間違いに気づいたものの、ポールはこのほうが愉快だということで、歌詞はそのままにしておいたらしい。

遠山 イントロで、景気よくピアノを叩いているのはジョン。何度も繰り返されるリハーサルにうんざりしたジョンがムチャな叩き方をしたら、それが採用されたというエピソードが残っています。レコーディング中、メンバーに「ダメだし」をしつづけるポールに、他のメンバーはかなり辟易(へきえき)していたようです。さらにポールは、プロデューサーのマーティンにまで横柄な態度をとってしまう。それが原因でジェフ・エメリックがエンジニアを降りてしまった。ポールがいうところの「テンション・アルバム」(険悪な雰囲気のなかでつくられたアルバム)を象徴するかのようなレコーディング風景だったようです。

「Ob-La-Di, Ob-La-Da」は、ナイジェリア人のコンガ奏者、ジミー・スコットがよく口にしていた言葉(ジミーの造語だという説もある)。ジミーは、バック・オネイルズというナイト・クラブに出演していて、そこへポールがよく遊びに行っていたので、二人は言葉を交わす仲になったというわけ。

5. Wild Honey Pie

ワイルド・ハニー・パイ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年8月20日 Ⓛ 52秒 Ⓥ ポール

里中 ビーチ・ボーイズの『ワイルド・ハニー』というアルバムをもじって曲名をつけたようです。タイトルもこのアルバムに収められた〔ハニー・パイ〕と似ているけど、なんの関連性もない。本人にいわせれば、即興でつくり、ほとんど自分ひとりで

手がけたというところが「似ている」のだそうです。

歌詞は、Honey pie（いとしい人、もしくは恋人の愛称と思われる）と繰り返し、最後は I love you, yeah, honey pie!（愛しているよ、ハニー・パイ）で締めくくる。

プロデューサーのジョージ・マーティンは、この30曲で成る2枚組のアルバムを精査して1枚にまとめたいと望んだ。でも、ボーイズは自分たちの曲のすべてを収録したがった。のちにマーティンは、このアルバムを「素晴らしい曲もあるが、そうでない曲もある」と評しましたが、おそらく「そうでない曲」のなかに、この曲も含まれていたのではないでしょうか。それにしても、短い曲ですね。1分もない。

遠山　52秒くらいです。僕もこのタイトルを聞くと、ビーチ・ボーイズの『ワイルド・ハニー』がすぐに思い浮かびます。ポールはやっぱり意識していたんだと思いますよ。

作曲からレコーディングまで、すべてポールひとりでこなしている。ヴォーカル、コーラス、アコースティック・ギター、ドラムス……すべて。したがって、あとの3人は不参加。もともとポールは、この曲をアルバムに収録するつもりはなかったそうですが、ジョージの妻パティが気に入ってくれたので、このアルバムに収録したと述べています。

自分ひとりでやれば「こうなる」ということを、ポールはメッセージとしてブライアン・ウィルソンに送っていたんじゃないかなあ。作曲だけじゃなく、演奏もレコーディングもすべてこなせるというところを見せたかったのだと思いますよ、ポールは。

6. The Continuing Story Of Bungalow Bill

コンティニューイング・ストーリー・オヴ・バンガロウ・ビル

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年10月8日 Ⓛ 3分14秒 Ⓥ ジョン（ジョージ、リンゴ）

里中 コーラスにヨーコ（当時、ジョンの恋人）とモーリーン（当時、リンゴの妻）が入っていますね。いくら誘われたからって、断るぐらいの謙虚さがないのでしょうかね。まったく図々しい。ヨーコにいたっては、短いながらリード・ヴォーカルをとっている。ポールをはじめ、他のメンバーがよく許しましたね（ポールはこのレコーディングに不参加）。

ビートルズには、不文律がいくつかあった。その一つは、たとえ家族といえども、"よそ者" をレコーディングに参加させないということ。スタジオはいわば "聖域" だった。それをジョンがまず破った。ジョンがヨーコをスタジオの中へ招き入れた。すると、みんながいっせいに不協和音を奏で始めた。こうして個々のメンバーは自分勝手にふるまうようになる。こうしてみんなの不機嫌がスタジオに充満していった。

遠山 メンバーがマハリシの瞑想修行に参加していたときのこと。あるアメリカ人男性が母親と退屈しのぎにゾウに乗ってトラ狩りに出かけた。めでたくトラを仕留めた男は、その武勇伝をジョンたちの前で吹聴した。それを「やりすぎ」と感じたジョンは、すぐさま彼らことを歌にしてけなした。

タイトルにある「バンガロウ・ビル」は、ウィリアム・コディー少佐のニックネーム「バッファロー・ビル」をもじって付けられました。ご存じのとおり、「バッファロー・ビル」は、アメリカの西部開拓時代のガンマンで、野牛（バッファロー）をたくさん殺したことからこう呼ばれるようになった人物。

というわけで、Hey, Bungalow Bill（おい、バンガロウ・ビル）/

What did you kill（何を殺してきたんだ）/ Bungalow Bill（バンガロウ・ビルよ）と歌っているんです。ヨーコは、その男性の母親のセリフの部分をソロで歌っている。ジョンはその母親の、瞑想をしながら平気で動物を殺す偽善者ぶったところが気に食わなかったとか。

7. While My Guitar Gently Weeps

ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1968年7月25日、8月16日、9月3・5・6日　Ⓛ 4分45秒　Ⓥ ジョージ（ポール）

里中　ジョンの「エイアッ」（Eh, up!）の掛け声を受けて――イギリス北部のスラングで「おや、まあ！」といっているわけですが――ジョージの名曲が始まります。ジョージのファンは随喜の涙を流したでしょうね。

気合いを入れて叩くポールのピアノ（イントロ）。むせび泣くエリック・クラプトンのギター。ガチガチした硬い音を刻むポールのベース（クラプトンはこのベース・ラインを絶賛している）。そして、すすり泣くようなジョージの歌声。余談ですが、アルバムにクラプトンの名がクレジットされていなかったので、「ジョージはギターが上手になった」と感心していた中学生の私は、「あれはクラプトン」と友だちに指摘されて、がっかりしたというか、妙に納得したというか、複雑な気分になったことを覚えています。

遠山　ジョージの傑作といえば、まずこれを挙げるファンが多いのではないでしょうか。『ローリング・ストーン』誌が選んだ「グレイテスト・ビートルズ・ソング」でも、第10位にランクインされました。

ご指摘のとおり、ギター・ソロはエリック・クラプトン。ジョ

ージが「泣きのギター」を表現しようとがんばったけれど、なかなかうまくいかなかった。そこで、クラプトンに白羽の矢を立てたというわけ。最初、クラプトンは「ビートルズのレコーディングに参加するなんておそれおおい」と尻込みしてしたそうですが、ジョージが「これは僕の曲だ。作者たる僕が自分の曲のギターをプレイしてくれと頼んでいるんだ」と説得してスタジオに連れていった（9月6日のセッション）。クラプトンにとってはプレッシャーを感じながらの録音だったようですが、クラプトンがやってきたことで、ジョンとポールはとたんにやる気をだした。これで、メンバー間の険悪ムードも一時的に緩和されたようです。いまさらながらクラプトンが一流のギタリストだと思うのは、ビートルズっぽいプレイをして見せることができるところです。

8. Happiness Is A Warm Gun

ハッピネス・イズ・ア・ウォーム・ガン

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年9月23・24・25日 Ⓛ 2分43秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　まさに天才の仕事。感嘆の声をあげることすら忘れて、ただただ茫然としてしまう。アルペジオから入るジョンのエレクトリック・ギターからして、もうすでに美しい。譜面が読めないジョンは、音楽の基本や規則を知らないので、音楽的秀才が思いつかないようなこのような楽曲をつくりだしてしまう。非凡なミュージシャンだ、と聴くたびに思う。ポールも「アルバムの中でもっとも好きな曲」といっている。

ジョンがヨーコに夢中になっているときに書いた作品。歌詞の中に出てくる Mother Superior（女子修道院長）はヨーコのこと。なんでも知っている、いちばん偉い女性の比喩として使ってい

る（ジョンはヨーコのことを「マザー」ということがあった）。「幸せとは射精したばかりの男性器」と解することもできるタイトル・フレーズ。それから、bang（ズドンと撃つ・性交する）とshoot（発射する・射精する）を交えたコーラス。味つけもお見事。ジョン自身、「この曲はほんとうに好きなんだ。すごく美しい曲だと思うよ」と語っている。

遠山　ジョンは三つのブロックをつなげて、組曲として仕上げた。〔Happiness Is A Warm Gun In Your Hand〕がオリジナルのタイトルでした。「キミの手に握られた温かい銃」……これで性的なイメージを喚起しないほうがおかしい（笑）。「In Your Hand」を取ったとはいえ、歌詞を見れば、英語圏の国々で放送禁止になったのもうなずけます。タイトル・フレーズは、ジョージ・マーティンが持っていたアメリカのとある銃器専門誌に掲載されていた記事からそっくりそのまま拝借したものですが、このフレーズにも元ネタがあります。それは、『Happiness Is A Warm Puppy』（ぬくぬくした子犬を抱いているときが幸せ）と題されたスヌーピーのピーナッツ絵本。

それにしても、ジョンの凄味さえ感じる歌声に、ただただ圧倒されるばかりです。

9. Martha My Dear

マーサ・マイ・ディア

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年10月4・5日　Ⓛ 2分28秒　Ⓥ ポール

里中　イントロのピアノは軽快で、しかも余分な音がない。ドラム・プレイも卓抜。リンゴが叩いているのでは、という説があるようですが、やはりポールであるような気がします。

とはいえ、評価すべきはヴォーカルです。テンポが変わる

Hold your head up, you silly girl, look what you've done（顔をあげて、おバカさん、自分のやっていることを見てごらんよ）/ When you find yourself in the thick of it（そんなことにかまけているんだったら）/ Help yourself to a bit of what is all around you, silly girl（少しは周りに目を向けてごらん、おバカさん）のところは、メロディもいいけれど、ヴォーカルの妙技を見せている。それにしても、このころのポールは、ほかの３人をほとんど必要としていない。あえていうならば、プロデューサーとエンジニアさえいてくれたら、あとはなんでもできたという感じがします。ところで、「マーサ」って誰のことですか。

遠山　「マーサ」っていうのは、ポールの愛犬の名です。ふさふさの毛のオールド・イングリッシュ・シープドッグで、1966年から飼い始めました。ポールはこのマーサをとても可愛がっていたようで、あちこちへ連れていった。自宅近くのリージェント・パーク付近はもちろんのこと、故郷リヴァプールでも多くの人が、マーサを連れて歩くポールを目撃しています。

いい曲ですね。愛犬マーサとの仲睦まじい日常。そして、そこから派生させた素朴な歌詞。これも、ひとりで書いて、ひとりで録音しています。というわけで、ピアノ、ベース、エレクトリック・ギター、すべてポールがやっている。ドラムスもポールでしょうね。ほかの３人は不参加。

ここでひとこと。多くの本に「ジェット」（ウイングス時代の大ヒット曲。74年のアルバム『バンド・オン・ザ・ラン』収録）もポールが飼っていた犬の名前とありますが、それは間違い。Jet はポールが飼っていたポニー（小馬）の名前です。

CamScannerでスキャン

10. I'm So Tired

アイム・ソー・タイアード

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年10月8日 Ⓛ 2分03秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中　インドで瞑想修行をしているとき、同行していた妻シンシアの目を盗み、毎日のようにヨーコからの手紙を受け取っていたジョンは、I'm so tired, my mind is set on you（疲れたよ、君のことしか頭にない）とヨーコへの想いをつのらせていく。その一方で、刺激のない結婚生活に退屈していて、シンシアとの離婚や息子ジュリアンとの離別も考えていた。というわけで、安眠できなくて、悩んでばかりいたジョン。そうしたジョンの心情はさておき、けだるさが声に覆いかぶさっている。歌詞の内容がわからずとも、どんな心境を歌っているのかよくわかる。

この曲を聴いて、すぐに思い浮かべるのは〔アイム・オンリー・スリーピング〕ですが、どちらも倦怠感が充満している。こういう歌い方ができるミュージシャン、なかなかいないよね。ジョン自身、ヴォーカルもサウンドも気に入っていったようで、レコーディングもわずか1日で終了している。

遠山　毎日、瞑想とマハリシの講義。でも、そばには意中の女性（ヨーコ）がいない。心ここにあらずという状態だったのでしょうね。

歌詞に出てくる「サー・ウォルター・ローリー」は、エリザベス一世の寵臣であった英国の探検家。16世紀、英国にタバコを持ち込んだことで有名。Although I'm so tired, I'll have another cigarette（疲れたけれど、タバコをもう一本吸おう）/ And curse Sir Walter Raleigh（そしてウォルター・ローリー卿を呪ってやろう）と歌っています。自分自身の悪癖（喫煙）をローリー卿のせいにしている。といいながら、エンディングでは、「ムッシュ、ムッシュ、

もう一本いかが？」とつぶやいてもいる。また、これを逆回転させると、Paul is dead, man, miss him, miss him.（ポールは死んでしまった。寂しいよ。寂しいよ）に聞こえるとして、これも「ポール死亡説」の根拠になりました。

ちなみに、ジョンはタバコがやめられず、生涯ずっと「愛煙家」でした。

11. Blackbird

ブラックバード

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年6月11日　Ⓛ 2分18秒　Ⓥ ポール

里中　ポールはおおまかなメロディが決まると、どんな楽器が必要で、どんな要素を補充すればいいのか、瞬時にわかってしまう。これもソロ・レコーディングですが、アコースティック・ギター（マーティンD-28）を弾きながら、足もとにマイクロフォンを置き、メトロノームに合わせて靴底でコツコツと床を叩いて打楽器の代わりとしている。この「コツコツ」がツー・フィンガー奏法にぴったり合っていますね。わずか6時間で録音とミックスの作業を完了させてしまったらしい。

Blackbird singing in the dead of night（夜のしじまに歌うブラックバードよ）/ Take these broken wings and learn to fly（傷ついた翼を広げて飛べるようになりなさい）で始まる歌詞には、どのような意図が込められていたのですか。

遠山　英国、とくにリヴァプールなどの北部の町では、女性のことを「バード」（小鳥）と表現します。ポールは「人権問題で苦しんでいる黒人女性（ブラックバード）に捧げたもの」と語っています。

自由を求めて闇夜を飛び立ってゆく黒い鳥は、人種差別撤廃

を求める黒人女性だと考えることができる。当時、ポールは黒人の公民権運動を支持していました。現在では、不幸に見舞われた人々を励ます応援歌として歌っています。2013年の日本公演のときは、東日本大震災の被災地の人々にこの歌が捧げられました。

レコーディングは、夏の夜にアビイ・ロード・スタジオの外でおこなわれた。だから、本物のスズメやフィンチの声も入っているらしい。ブラック・バード（クロウタドリ）のさえずりは、アビイ・ロードのエフェクト・ライブラリーから調達されました。

エンディングのところで聞こえてくる小鳥のさえずりですが、イギリスで早朝に公園を歩いたりしていると、レコードとまったく同じ小鳥たちのささやきが聞こえてきます。はじめて耳にしたとき、「あ、これだ」と思ったことを覚えています。

12. Piggies

ピッギーズ

Ⓦ George Harrison

Ⓡ 1968年9月19・20日、10月10日　Ⓛ 2分04秒　Ⓥ ジョージ

里中　「ピッギーズ」(piggies) とは丸々と太った人たちの蔑称。「ピッギーズ（ブタども）はディナーへ出かけるのさ／ピッギーズの女房を連れてね／フォークとナイフで自分たちのベーコンを食べているのさ」(You can see them out for dinner / With their piggy wives / Clutching forks and knives to eat their bacon) という歌詞は、菜食主義者になったジョージの社会風刺なのでしょうね。

しかしながら、楽曲それ自体を評価しない人もいる。イアン・マクドナルド（音楽評論家）は、この曲はジョージの人間嫌いの性癖が露骨に出たもので、「彼のディスコグラフィの中での汚点ともいうべきレコーディング」と辛辣にけなしている。

CamScannerでスキャン

遠山　この時期、ジョージはベジタリアンになりましたから、肉食に明け暮れる人間、とくに上流階級の太った人たちがブタに見えたのでしょう。『リヴォルバー』に収録された〈タックスマン〉もそうですが、社会の矛盾や不平等を皮肉るのが好きなジョージらしい曲です。でも、共食いの「ベーコン……」ウンヌンのくだりはジョンのアイディアであるようです。

ヴィヴァルディを髣髴とさせる室内音楽など、いろんなアイディアが盛り込まれています。ハープシコードを使用するというアイディアは、エンジニアのクリス・トーマスによるもので、演奏も彼自身がやっています。

91年の日本公演でこの曲を演奏した際、ブタのお面をつけておどけるバンドのメンバーを見て、思わず吹きだしてしまったジョージの無邪気な笑顔が忘れられません。

13. Rocky Raccoon

ロッキー・ラックーン

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年8月15日　Ⓛ 3分32秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ほかのミュージシャンが書いたら「ほう」と感心するような作品なのでしょうが、ポールが書いたとなると、「チャッチャッと、ものの5分ぐらいでつくっちゃったんでしょ」とからかってみたくなる。ポールが頭を抱え込んでつくった歌なんて、この当時あったのかなあ。

ポールが得意とする物語ふうの内容。西部劇のパロディをトーキング・ブルース調のメロディ仕立てにしている。ロッキー・ラックーンという若者が、恋人のマギル（自称リル、通称ナンシー）を奪った恋仇ダニエルという男と対決する。でも、ロッキーは決闘に負けてしまう。傷ついたロッキーが宿に戻ると、そ

CamScannerでスキャン

こには国際ギデオン協会の聖書（日本のホテルなどにも置いてある聖書）が置いてあった。それを見たロッキーは、ギデオンなる人物が自分の再起を祈って残してくれたにちがいないと思い込む。オチのついた、おもしろい歌詞です。そして、上手な歌いっぷり。この曲、英語ということもあるのでしょうが、プロでもなかなか歌えないらしい。

遠山　インド滞在中に、ジョンとドノヴァンの手を借りてつくったようです。ポールがボブ・ディランを真似ると、おそらくこんなふうになるんでしょうね。

ハーモニカはもちろんジョン。うまいですね。でも、残念ながら、これがジョンの最後のハーモニカになりました。ホンキートンク・ピアノはジョージ・マーティン。西部劇ふうの雰囲気がうまく出ています。ベースはポール。ドラムスはリンゴ。ジョージはコーラスのみ（ジョージはその場にいたが、参加していないとの説もある）。

もともとのタイトルは〔Rocky Sassoon〕（ロッキー・サスーン）でしたが、カウボーイらしくしようというアイディアから〔Rocky Raccon〕に変更された。raccoon は「アライグマ」のこと。いかにもカウボーイの愛称らしい。

14. Don't Pass Me By

ドント・パス・ミー・バイ

Ⓦ Richard Starkey

Ⓡ 1968年6月5・6日、7月12・22日　Ⓛ 3分50秒　Ⓥ リンゴ

里中　久しぶりだね、リンゴ。これ、作詞も作曲もリンゴがひとりでやったんですね。はじめての挑戦。で、聴いてみると、やっぱりリンゴ。相変わらず声の表情は乏しいけど、聴いていると愉快な気分になる。リンゴの好きなカントリー調な曲……

CamScannerでスキャン

ゴメン、それだけ（笑）。

遠山 『ラバー・ソウル』に入っている〔消えた恋〕は、ジョン&ポールとの合作なので、ひとりで書いたのはこの曲が最初になります。64年のラジオ・インタヴューで、「曲は書かないのですか？」と問われたリンゴは、〔ドント・パス・ミー・バイ〕（「ぼくを無視しないで」）という曲を書いていると答えているので、じつに4年以上の歳月をかけて完成させたことになります。いかに丁寧につくったとはいえ、少々時間がかかりすぎている（笑）。それも、「家でぼーっとしているときにつくった」と述べている。のんびりしているというか、いい加減というか。

リンゴ（ドラムス）のほかにレコーディングに参加したのは、ポール（ベースとピアノ）とジャック・ファロンというフィドル奏者のみ。ギターはなし（ジョージはパーカッションで参加しているかもしれない）。両チャンネルに入っているピアノの片方はポールでしょうが、もう片方はおそらくリンゴではないでしょうか。というのは、ピアノを弾きながら作曲したのでしょうし（Cコードのみ）、ソロになってからのオール・スター・バンドでは慣れた手つきでピアノを弾きながら歌っていますから。

歌詞は、Don't pass me by, don't make me cry, don't make me blue（僕を無視しないで、泣かせないで、憂鬱な気分にさせないで）/ 'Cause you know daring, I love only you（だって、ダーリン、君だけを愛しているんだから）というラヴ・ソングというか、泣き言をくりかえしている。

CamScannerでスキャン

15. Why Don't We Do It In The Road

ホワイ・ドント・ウィ・ドゥ・イット・イン・ザ・ロード

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年10月9・10日 Ⓛ 1分41秒 Ⓥ ポール

里中 ポールはノッているけど、まったくついていけないなあ。おいてけぼりの感覚。ひややかに聴いてしまう。だって、歌詞は「道路でアレしよう。道路でさ、アレ、しようよ」(Why don't we do it in the road / Why don't we do it in the road) と歌っているだけだよ。ア然。もう一つのフレーズは No one will be watching us (どうせ誰も見てやしないさ) ……ポール、おまえは野獣か (笑)。このときのポールに何があったんだろう？

遠山 ポールはこの曲をインド滞在中に書いています。道端でサルが性行為に及んでいるのを見たのがきっかけだそうです(笑)。リンゴがドラムを叩いているものの、ヴォーカルおよびその他の楽器はすべてポールがやっています。というわけで、ジョンもジョージも不参加。どちらかというと、ジョンが書きそうな曲。事実、ジョンはこれをいたく気に入り、「自分がヴォーカルをとっていたらもっといい曲になっていた」とうそぶいていたらしい。

余談ですが、ポールは初の詩集『ブラック・バード・シンギング』を発売した2001年、本のプロモーションをかねて、リヴァプールのエヴリマン・シアターで、大ヒット・ミュージカル『ブラッド・ブラザース』などの原作者として知られるウィリー・ラッセルや詩人のエイドリアン・ミッチェルらと詩の朗読会に参加した。で、そのときポールは、なんとこの歌詞を朗読したんです。この詩に相当な自信をもっているようです (笑)。

プロデューサーのジョージ・マーティンは、このアルバムを2枚組ではなく1枚のＬＰにしたがっていたわけですが、マーテ

ィンの意見がとおっていたら、間違いなくこの"問題作"は収録されることはなかったでしょう。

16. I Will

アイ・ウィル

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年9月16・17日 Ⓛ 1分45秒 Ⓥ ポール

里中 またまたポールは傑作をいとも簡単につくってしまった。ベースは、ポールの"口ベース"も入っている。また、2本のアコースティック・ギターはともにポールが弾いている。

とどまるところを知らないポールの才能と、オーヴァーダビングをはじめとする録音技術の向上は、明らかにビートルズの解散に拍車をかけましたね。ポールはほとんどの楽器をあやつることができたわけだから、ほかの人の手を借りることもない。ポールがスタジオ内でだんだん傲慢になっていったのも、俺のいったとおりにできなければ自分でやるよ、という意識が強くあったからではないでしょうか。

遠山 このころのポールが必要としていた人間は、ジョージ・マーティン、いやエンジニアのジェフ・エメリック(ポールの名盤『バンド・オン・ザ・ラン』をプロデュースしている)ひとりだったのかもしれません。それぐらい、ポールはなんでもこなすことができた。ポールは、自分がビートルズを牽引しているという意識が強かったし、事実そうでした。ジョンはドラッグのせいで、気分にムラがあった。だから、ポールが指揮権を発動するのもやむをえなかった。まあ、それが他のメンバーの反発を買うことになったのですが。

さて、曲の話ですが、ポール以外では、リンゴがシンバル、マラカス、ボンゴを担当。ジョンは鉄琴(?)で木魚のような音

を出しています（ジョージは不参加）。ポールがのちに妻になるリンダへの愛をつづった最初の曲がこれですが、この恋愛にかけるポールの新たな決意を感じさせます。

『ビートルズ・アンソロジー』の映像に、ポール、ジョージ、リンゴの3人が、ジョージの自宅の庭でくつろぎながらインドでの思い出ばなしをする場面があるんですが、ジョージがウクレレで弾いてポールがこの曲を歌うシーンはなんともうれしかった。互いのわだかまりを忘れて、過ぎ去った日々に思いを馳せる。歳をとるのも悪くない——そう思える瞬間でした。

17. Julia

ジュリア

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年10月13日 Ⓛ 2分54秒 Ⓥ ジョン

里中　タイトルの「ジュリア」は、ジョンの母親の名。ジョンは母親にヨーコを重ね合わせて、自分の心の拠りどころにしようとしている。歌詞には、seashell eyes（貝殻の瞳）、windy smile（風の微笑み）、sleeping sand（眠れる砂）、silent cloud（ものいわぬ雲）など、美しい詩的な表現が出てくる。作詞家としても、やはりジョンは非凡ですね。ジョンはこの曲をひとりでレコーディングした。もちろん、ヨーコを傍らにおいて。赤裸々な心情を際立たせるには、アコースティック・ギターだけのほうがいいと判断したのでしょうね。他の楽器はまったく入っていない。というわけで、レコーディングもミキシングもわずか一日ですませている。

アコースティック・ギターの音色がいい。あるインタヴューで、ポールはジョンの、このフィンガー・ピッキングを「すごくいい」とほめていましたが、いつのまにかジョンはスリー・フィ

ンガー・ピッキングをものにしていたんですね。

遠山 実母ジュリアへのトリビュート曲であり、新しいマザー、つまりヨーコへのラヴ・ソングという二重の意味をもっている。歌詞に出てくる「オーシャン・チャイルド」(ocean child)は、オーシャン=大洋、チャイルド=子、というわけでヨーコ(洋子)のこと。たぶんヨーコはそんなふうに、自分の名をジョンに教えたのでしょう。

特筆すべきは、ジョンのギター。インド滞在時にドノヴァンから教わったスリー・フィンガー・ピッキングが生かされている。ドノヴァンにいわせると、ジョンはたった2日間でこの奏法を習得してしまったそうです。ジョージのチェット・アトキンス奏法、ポールのツー・フィンガー・ピッキング、そしてジョンのスリー・フィンガー・ピッキング。ギター・バンド、ビートルズはテクニシャンの集まりでもありました。

18. Birthday

バースデイ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年9月18日 Ⓛ 2分42秒 Ⓥ ポール(ジョン、ジョージ)

里中 めずらしく4人がそろっています。そして、久々のジョンとポールのツイン・ヴォーカル。だからなのか、気合いを感じるロックンロール・ナンバーに仕上がっています。資料によると、パティ(ジョージの妻)やヨーコもコーラスに参加している。スタジオは、もはや"なんでもあり"状態と化していたようです。

You say it's your birthday(きょうは誕生日なんだってね)/ It's my birthday too, yeah(じつは僕の誕生日でもあるんだ)という歌詞で始まる。「誰かの誕生日だった」(ポール)ので、場当たり的につく

ったようです。

遠山　〔Happy Birthday To You〕に代わる新しいバースデー・ソングをつくろうという発想のもとで4人が集まりました。ポールが中心となって、スタジオで即興的につくられたようです。作詞、作曲、そしてレコーディングまでを、すべて1日でやり終えたというから驚きです。

どうしてそんなにあわててつくったのか。その理由は、その晩、BBCで放送される映画『女はそれを我慢できない』(The Girl Can't Help It) が観たかったから (笑)。レコーディングを中断して、4人はアビイ・ロード・スタジオから歩いて10分の距離にあるポールの自宅 (7 Cavendish Avenue) へ行って、仲よく映画を鑑賞したそうです (エンジニアたちもゾロゾロとついて行った)。この映画には、彼らのアイドルであるアメリカのロックン・ロール・スターたち (エディ・コクラン、ファッツ・ドミノ、リトル・リチャードら) が多数出演しているので、どうしても観たかったらしい。そして、映画が終わると、またスタジオに戻ってレコーディングを再開したそうです。パティとヨーコを含めたコーラスは、このときオーヴァーダビングされました。以上、DVDはおろか、ヴィデオも普及していない時代のお話でした。

19. Yer Blues

ヤー・ブルース

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年8月13・14・20日　Ⓛ 4分00秒　Ⓥ ジョン (ポール)

里中　ジョンの曲。インドの風光明媚な景色のなかで書いたのに、「世にもみじめな曲ができてしまった」とはジョンの弁。「そう、寂しいんだ、死にたい」(Yes, I'm lonely, wanna die) とか「鷲が目玉をつつく」(The eagle picks my eye) とか「ウジ虫がおれの骨

をしゃぶる」(The worm he licks my bone)……口にしたくないほど、陰鬱でおぞましい表現が出てくる。ですが、ジョンはやっぱり聴かせますね。声そのものに吸引力がある。

歌詞に出てくるgirlはヨーコのこと。「死んでしまいたいほど愛している」とジョンは絶叫している。Mr. Jones(ミスター・ジョーンズ)は、ボブ・ディランの〔Ballad of A Thin Man〕(やせっぽちのバラッド)で歌われている厭世的な男。自分自身を「ミスター・ジョーンズ」にたとえている。ジョンのやるせない気持ちがロックしている。

遠山 ブルースがブームになっていた当時の英国のミュージック・シーンを皮肉って書いたものだ、とジョン本人はいっています。ジョンは、ロックな気分だったんでしょう。叩きつけられる言葉が、ロックのリズムに乗っている。編集技術もレヴェルが高い。聴きごたえがあります。

出だしの「トゥー、スリー」というカウントはリンゴの声。レコーディングには全員参加しています……このアルバムではいちいちこう伝えなくてはいけないのがちょっぴり寂しい。

この曲で思いだすのは、なんといってもローリング・ストーンズの『ロックンロール・サーカス』に出演したジョンのこと(1968年)。エリック・クラプトン、キース・リチャーズ、ミッチ・ミッチェルとスーパー・バンド「ザ・ダーティ・マック」を結成し、この〔ヤー・ブルース〕を熱演した。ダーティ・マック……「ずるいマッカートニー」と遠回しにいっているようにも聞こえますが……それはさておき、ジョンがこれを歌うパフォーマンスは必見です。

20. Mother Nature's Son

マザー・ネイチャーズ・サン

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年8月9・20日 Ⓛ 2分47秒 Ⓥ ポール

里中 ポールの曲。Born a poor young country boy, Mother Nature's son（貧しい田舎の家に生まれた、母なる自然の子）/ All day long I'm sitting, singing songs for everyone（一日中坐って、みんなに歌を聴かせているんだ）で始まる歌詞は、自然への慈しみが感じられて、やすらぎを覚えます。抒情性が豊かな、美しいフォーク調の曲。軽快なアルペジオっぽいアコースティック・ギターに心を奪われます。ポールのフィンガー・ピッキングは独特で、まさに「マッカートニー奏法」と呼ぶにふさわしい。

これもまた、ポールひとりで録音している。この時期のジョンは「好きなようにやるからあとは勝手に編集しておいてくれ」であり、気持ちはヨーコの方ばかり向いている。ジョージとリンゴは、とりわけポールとうまくいっていなかった。ジョージは「僕に命令するなよ。もう僕にはかまわないでくれ」という態度だし、リンゴは「必要ならドラムを叩くよ。でも、命令口調でいわないでくれ」といわんばかり。二人ともポールとはギクシャクしていたようですね。

遠山 ポールがジョージ・マーティンらとこの曲に関する打ち合わせをしていたとき、別のスタジオにいたジョンとリンゴがそろって顔を出すと、敵陣営の連中がやってきたかのようにスタジオの空気はいっきに張りつめたらしい。居心地の悪さを察知したジョンとリンゴは、すぐさまスタジオを出ていったそうです。メンバーがそろっているのに一緒にレコーディングしないんだから、もうこの時点でビートルズはかなり分裂状態にあったといえます。

CamScannerでスキャン

この曲は「マハリシの講話にインスピレーションを感じて」(ポール)書かれたのですが、ジョンも同じく、マハリシに感化されて、〔Child Of Nature〕という曲を書いた。それはのちに、歌詞を替えて〔ジェラス・ガイ〕(ソロ・アルバム『イマジン』収録)になりました。

21. Everybody's Got Something To Hide Except Me And My Monkey

エヴリボディーズ・ゴット・サムシング・トゥ・ハイド・エクセプト・ミー・アンド・マイ・モンキー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年6月26・27日、7月1・23日 Ⓛ 2分24秒 Ⓥ ジョン

里中 ジョンが書いたストレートなロックンロール・ナンバー。ベンディング(チョーキング)を多用したギター(ジョージ)が曲の色調を決めている。

歌詞にある Come on is such a joy(カモンは最高の気分だ)は明らかに性的なニュアンスを伝えている。come というのは「性的な絶頂に達する」という意味がありますからね。幸福に浸るジョンとヨーコの周りでは、「なぜジョンはあんな女といるんだ」とか、「ビートルズのレコーディングに、どうして女がスタジオにいるんだ」との声がささやかれ始めた。そこで、ジョンが「みんな陰で俺と俺のモンキー(ヨーコ)のことをコソコソいいやがって」(Everybody's got something to hide except me and my monkey)とわめきながら反撃した。モンキーには「麻薬常習者」の意味もあり、ヘロインに手を出し始めたジョンとヨーコを想像もさせます。それにしても、トゲトゲしい攻撃的な歌いっぷりには魅力がありますね。

遠山 ビートルズの作品群でもっとも長いタイトルがこれ。最

初は〔カモン・カモン〕という題だったのが、結局これに落ち着きました。

ジョンの背中にしがみついている猿（ヨーコ）を描いた風刺漫画への腹いせにジョンが書いたといわれています。「俺たちのジョンが奪われた」と思ったファンや周囲の人たちからヨーコは誹謗中傷されることが多く、ジョンはそのことでいつもカリカリしていた。つとめて冷静に「気楽にいこう」（Come on, take it easy）とか「みんな落ち着けよ」（Let's make it easy）と叫んでいますが、ジョンのイライラが伝わってくるようで、なんとも落ち着かない気分になってしまいます。

22. Sexy Sadie

セクシー・セディ

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1968年7月19・24日、8月13・21日
Ⓛ 3分15秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　ジョンの曲。さすがに鯛。イントロの不協和音っぽいピアノにつづけて、ジョンが哀切をこめて訴えかける。怒りとか悲哀の感情を歌っても、シニカルな包容力を感じてしまう。なんだろうね、この声は。

エフェクト処理をしたワウワウ・ギターのようなコーラスも魅力。ビートルズのかっこよさは、期待を裏切らずに予想を裏切ったサウンドをつくったところにある。その意味でも、このコーラスは抜群にかっこいい。

歌詞をめぐる"真偽"については、あとで解説していただくことにしますが、ジョンの好ましいところは、いうことがコロコロ変わるとはいえ、自分の感じたこと、訴えたいことを素直に表現したところにある。口をつぐんだり、逃げたり、すくんだりしなかった。

CamScannerでスキャン

遠山　アシュラム（瞑想道場）で、導師マハリシがミア・ファロー（映画女優）をはじめとする女性の参加者にけしからぬ行為にでたのではないかということを、友人のマジック・アレックス・マーダス（ビートルズの取り巻きのひとり）から聞かされたジョンは、マハリシに幻滅してこの曲をつくった。はじめは、タイトルをずばり〔マハリシ〕にして、怒りや失望ぶりを皮肉たっぷりの歌詞にのせるつもりだった。でも、アレックスの話を鵜呑みにしなかったジョージは、いかにもやりすぎだとジョンを説得して、タイトルと歌詞の変更を求めた（ポールもまた、あれはアレックスがデッチあげたデタラメだったとのちに発言している）。こうしてできあがったのが〔セクシー・セディ〕。「エッチなセディ」に変えられた。セディとはヒンズー教の「行者」をあらわす「サドゥ」という言葉をくずしたもの。

ちなみに、ビートルズ解散後、ポールもリンゴもそしてヨーコも超越瞑想の運動を支援するチャリティ・コンサートに参加。みんな過去のわだかまりを水に流したようです。

23. Helter Skelter

ヘルター・スケルター

Ⓦ Lennon / McCartney　Ⓡ 1968年7月18日、9月9・10日
Ⓛ 4分29秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ、ポール）

里中　「ヘルター・スケルター」とは、イギリスの遊園地にある螺旋形のすべり台のこと。そこから転じて、「無秩序」や「混乱」を意味するようになった。ポール自身、「クリーンなロックンロールは好みじゃない」といっていますが、こういうメチャクチャな感じの激しい曲が、ポール好みのロックなんですね。

それにしても、ポールは、キレるとコワい。狂乱のヴォーカル。ポールはやさしい声でささやくように歌うのもうまいけど、

こうしたハードでヘヴィなロックもけたたましく歌ってしまう、というか、歌いのめしてしまう。この曲を「元祖ヘヴィ・メタル」という人もいれば、「元祖パンク・ロック」という評者もいます。

遠山　ビートルズの楽曲でいちばん激しい演奏とヴォーカルといったらコレでしょう。たしかに、ぶっとんだときのポールは誰も止められませんね。曲の最後でI've got blisters on my fingers.（指にマメができちゃったじゃないか！）と大声をあげているのはリンゴ。リンゴもまた激しいドラミングを披露している。ポールがギター、ジョンがベースを弾いているのも、おもしろいところ。また資料によれば、ジョンがサックス、マル・エヴァンス（世話役）がトランペットを吹いているとのことですが……残念ながらほとんど聞こえません（笑）。

この曲を聴いて"啓示"を受けたチャールズ・マンソン（社会からドロップ・アウトした若者たちのカルト集団の指導者）と彼の率いるコミューンのメンバーは、「ヘルター・スケルター」を終末戦争の意味に解し、女優シャロン・テートらの惨殺事件（1969年）を引き起こしてしまった。

それにしても、この曲には熱狂的なファンがいますね。エアロ・スミス、U2、ボン・ジョヴィ、オアシス、モトリー・クルーなど、多くのロック・アーティストによってカヴァーされていることからもそれが明らかです。でも、ヴォーカルの迫力といったら、やはりポールに軍配があがります。

24. Long, Long, Long

ロング・ロング・ロング

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1968年10月7・8・9日 Ⓛ 3分03秒 Ⓥ ジョージ（ポール）

里中　アコースティックなワルツ。ジョージの曲。のちに『アビイ・ロード』で書かれることになる名曲〔サムシング〕を予感させます。ボブ・ディランの〔ローランドの悲しい目の乙女〕のコード進行を真似ていますが、作曲家としての才能を開花させつつあることがわかります。

歌詞に出てくる「あなた」は、恋人のことではなく、神のことだとジョージは述べている。It took a long, long, long time（ずいぶんと長い時間がかかってしまったけれど）/ Now I'm so happy I found you（あなたを見つけ出した今は幸福な気持ちでいっぱいだ）と、神とともにいる幸福な気持ちをラヴ・ソングに仕立てている。そして、How can I ever misplace you（もう見失ったりしない）と決意を述べる。ジョージの信仰がますます深化していったことがうかがえます（ジョージは生涯、信仰をもち続けた）。

遠山　〔ヘルター・スケルター〕のあとなので、よけいに心にじんわりときます。〔ピッギーズ〕がバロック音楽ふうで、〔ロング・ロング・ロング〕がワルツふう。ジョージの作曲の幅がだんだん広がってきた。

曲の最後に聞こえる叫び声はジョージ。ハモンド・オルガン（ポール）のスピーカーの上に置いていたワインのボトルが振動で揺れるのを見て思わず声が出てしまったそうです。また、このカタカタという振動音が気に入って再度レコーディングしているのも（それもちゃんとマイクをセットして）、いかにもビートルズらしい。

サウンドのほうは、リンゴのフィルインと、ポールのベー

CamScannerでスキャン

ス・ラインがイカしてる。リンゴのほうは強弱をうまくつけて叩いており、ポールのほうは堅実でいて、しゃれたメロディを奏でている。さすが、ビートルズ。ちなみに、ジョンはレコーディングに参加していません。代わりに(?)、ジョージ・マーティンのアシスタントをしていた若いクリス・トーマスがピアノを弾いています。

25. Revolution 1

レボリューション1

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1968年5月30・31日、6月4・21日
Ⓛ 4分15秒 Ⓥ ジョン(ポール、ジョージ)

里中 「レボリューション」と題された作品は三つある。最初に録音されたのが、この〔レボリューション1〕。2番目が〔レボリューション9〕。3番目が〔レボリューション〕。で、この〔レボリューション1〕ですが、途中まではうまくできている曲だとは思うんですが、後半はもうハチャメチャですね。レボリューション(革命)というやつは、アナーキー状態になって終わるということを暗示しているのでしょうか。

歌詞のほうは、政治的な「革命」を煽(あお)っているのではなく、内面に起こすべき「革命」を歌っている。「革命」が必要なのは、私たち一人ひとりというわけ。それは、You better free your mind instead(代わりに自分の精神を解放してみたらどうだい)/ But if you go carrying pictures of Chairman Mao(でも毛主席の写真を持ち歩いているようじゃ)/ You ain't going to make it with anyone anyhow(革命なんてとてもおぼつかない)などの歌詞にもあらわれている。

遠山 ジョンはシングル・カットを希望しましたが、「曲が長すぎる」とか、「ビートルズっぽくない」などの理由により、他のメンバーたちから却下された。結果、テンポを速めたヴァー

ジョンにして、シングルとしてリリースされた。タイトルは〔レボリューション〕、〔ヘイ・ジュード〕のB面として発表されました。

この〔レボリューション1〕のヴォーカル録りに、ジョンはかなり手こずったようです。いくら歌っても気に入らず、ついには床に寝ころがって歌ったこのテイクが採用されました。寝そべって歌ったためか、腹に力が入っておらず、弱々しいヴォーカルになっています。

曲が始まる前に聞こえる「テイク2」という声はエンジニアのジェフ・エメリックの声。ジョンが消さないように指示したのだそうです。自分がまさに変わろうとしている、その"革命"現場の臨場感を残したかったのでしょうか。

26. Honey Pie

ハニー・パイ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年10月1・2・4日 Ⓛ 2分40秒 Ⓥ ポール

里中 こうして順番に聴いていると、ポールだけが淡々と、しかも着実に名曲を"生産"しているという印象を受けます。冒頭でスクラッチ・ノイズを入れて懐旧の雰囲気をだし、間奏では古きよき時代を思わせるジャズ・ギターを奏でる。そして、最後はクラリネットをフィーチャーして軽快に閉じる。お見事です。

「ハニー・パイ」という名の銀幕のヒロインは以前、北イングランドで働いていた。でも、今じゃ、アメリカで大スターだ。大西洋を渡って会いに行きたいが、面倒くさいので会いには行かない。でも、いまでも愛してるよ——というような歌詞。どうも「ハニー・パイ」は、「僕」の恋人だったみたい。ポールお

CamScannerでスキャン

得意の物語ふうの歌詞もしゃれている。

遠山　お父さん（ジム・マッカートニー）の影響でしょうね。ポールの父ジムは、20代のころにバンド（ジム・マックス・ジャズ・バンド）を結成し、ピアノとトランペットを担当するセミ・プロのジャズマンでした。そういう父親をもったポールは、幼いころからジャズやミュージカルの歌に親しんでいた。ポール自身、「1925年に暮らしていたと想定して」この歌をつくったと告白していますが、おそらく父親たちの世代がどんなふうにアメリカに憧れていたかを思い描いて、当時の音楽と父の世代にオマージュを捧げたのだと思います。

ディキシーランド・ジャズを思わせる小気味よい曲。蓄音機から流れてくるレコードの音のような始まり方も趣があります。

短いソロですが、めずらしくジョンがリード・ギターをつとめている。ぎこちないけど、ジャンゴ・ラインハルトのような雰囲気が出ています。思わず、ポールが「いいよ」（Yeah）と小さな声をだしているので、耳を傾けてください。サックスとクラリネットは外部ミュージシャン。彼らの出す音色も、20年代のムードを高めています。

27. Savoy Truffle

サヴォイ・トラッフル

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1968年10月3・5・11・14日　Ⓛ 2分54秒　Ⓥ ジョージ（ポール）

里中　ジョージがやっと頭角をあらわした。おしゃれないい曲です。でも、資料を見ると、〔ロング・ロング・ロング〕に続いて、この曲のレコーディングにもジョンは参加していない。

ジョンとジョージの仲ですが、68年の10月ごろから「ゲット・バック・セッション」の69年1月まで、ジョンはジョージの

曲にほとんど協力していない。わずかに〔フォー・ユー・ブルー〕にスティール・ギターで手を貸しているぐらい。ポールとジョージの仲が悪かったというのは"定説"になっていますが、ジョンとジョージもしっくりいっていない。「ゲット・バック・セッション」のときには殴り合いのケンカまでやっている。兄弟ゲンカのようなものといってしまえばそれまでですが、それぞれの思惑や気分が複雑に絡み合っていたようですね。

遠山 ジョージの曲にジョンやポールが助言を惜しまなかったら、ジョージはもっとはやく作曲家としての才能を発揮できたのにと悔やまれます。でも、この曲を聴くと、いまやジョージはひとり立ちしたんだという感慨があります。

この時期、メンバーどうしの関係は、愛憎が交錯しています。でも、いっとき憎しみをおぼえても、思いやりだけは決して手放さなかった。それがうれしい。僕は、そっちのほうに目を向けたい。

さて、「トラッフル」というのはチョコレート、バター、砂糖を混ぜて丸め、表面にココア・ナッツをまぶした、いわゆる「トリュフ」のこと。「サヴォイ・トラッフル」は、マッキントッシュ&サンズが販売していたチョコレート菓子の名前。歌詞の中には、ほかにも「グッド・ニューズ」というチョコレート菓子の商品名も登場します。ジョージは、トリュフの入った菓子箱に書いてあった文句と、チョコレート好きでしょっちゅう虫歯で苦しんでいた友人エリック・クラプトンに着想を得てこの曲をつくったようです。

CamScannerでスキャン

28. Cry Baby Cry
クライ・ベイビー・クライ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年7月15・16・18日 Ⓛ 3分01秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中　庶民の暮らしを知ってか知らずか、のんびり優雅に過ごす英国の王室を皮肉った歌。いかにもジョンという歌詞。メロディもいい。

歌詞には、「マザー・グース」（伝承童謡集）の〔Sing A Song Of Sixpence〕（歌おう6ペンスの歌）の影響が見てとれる。もとはThe king was in his counting-house, counting out his money; The queen was in the parlour, eating bread and honey（王様はお蔵でお金のお勘定、女王はお部屋で蜂蜜のついたパン）だった。見比べてみると、おもしろい。わからないのは、最後のところで聞こえるポールの鼻歌。これは何？

遠山　ジョンは「Cry Baby Cry, Make Your Mother Buy」（赤ちゃん、泣きじゃくって、お母さんに買ってもらいなさい）という粉ミルクの広告を見て、このタイトルを思いついた。それで歌詞にもMake your mother sigh（お母さんを嘆かせてやりなさい）というフレーズが使われた。

最後のところで聞こえてくる鼻歌は、ポールが〔アイ・ウィル〕をレコーディングした際に即興で録音した通称〔Can You Take Me Back〕といわれている曲の一部。次に控えている"難解な"作品へのクッションとしてつけ加えられたようです。

クッションといえば、メンバー間のいさかいは、たいていスタッフたちが緩衝材となることで、大きな問題に発展することがありませんでしたが、この時期になると、スタジオ・エンジニアたちとの関係もギクシャクしていました……。要は、ビートルズのとばっちりを受けたわけですけど。優秀で温厚なエン

ジニア、ジェフ・エメリックでさえ、ビートルズの傲慢でわがままな態度に業を煮やして、この曲の制作途中で作業をボイコット、その後およそ半年もビートルズとの仕事を拒否し続けました。

29. Revolution 9

レボリューション9

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年5月31日、6月10・11・20日 Ⓛ 8分21秒

里中 クレジットは「レノン=マッカートニー」になっているけど、ジョンとヨーコでつくりあげている。これは「前衛アート」でも「コラージュ」でもありません。たんなる音を寄せ集めた"アバンギャルド"です(笑)。そもそも、これを音楽とか楽曲というには抵抗があるなあ。ジョンは「革命をサウンドにしたもの」とか、「いや、反革命をサウンドにしたもの」なんていってるけど、すみません、私には理解不可能です。

ポールやジョージ・マーティンはこの曲をアルバムに収録するのに難色を示したそうですが、お気持ち、お察しいたします(笑)。

遠山 僕としては、こういう個人的な趣味を公表するのは、『トゥー・ヴァージンズ』(ジョンとヨーコのアルバム)だけにしておいてほしかった(笑)。

ポールがこれを『ホワイト・アルバム』に収録するのに反対したのは事実ですが、ジョージ・マーティンは「自分はジョンと二人で熱心にあの作品に取り組んだ」と、これまでの"定説"を否定しています。途中から、「やると決めたからには一生懸命にやる」という態度に変わったようです。

おしゃべりの部分は、ジョンとヨーコとジョージの話し声に

CamScannerでスキャン

加え、ジョージ・マーティンとアリステア・テイラー（ビートルズの裏方で、"なんでも屋"の異名をとった人）の会話も入っています。

生前、数字の「9」は、ジョンのラッキー・ナンバーでした。10月9日生まれ。最初に住んだ家がニューキャッスル・ロード9番地。レコード・デビュー前には〔ワン・アフター・909〕をつくり、ソロになってからも〔#9ドリーム〕という曲を書いて、9へのこだわりをみせている。このタイトルもそれにあやかっている。ジョンが凶弾に倒れた日も、奇しくも12月9日（時差の関係で生まれ故郷のリヴァプールでは9日だった）。「9」という数字は、ジョンの人生にずっとついてまわったのでした。

30. Good Night

グッド・ナイト

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年6月28日、7月2・22日　Ⓛ 3分11秒　Ⓥ リンゴ

里中　ジョンが息子ジュリアン（当時5歳）のために書いた曲。でも、ヴォーカルはリンゴ。ほったらかしにしておいて、急に思いだしたかのように子守歌を歌うっていうのは、やはり罪悪感をもっていたのでしょうね。

そのうえに、ジョンはヨーコとの新しい生活を始めた（録音した日は、すでに妻シンシアとジュリアンのもとを離れている）。ジュリアンにはもうめったに会えないかもしれない――そんな思いもあったはず。**Dream sweet dreams for me** は「いい夢を。そうすれば僕の心も安まる」という意味ですが、このフレーズに万感の想いが込められていますね。でも、だったらなおさらのこと、リンゴに歌わせずに、自分が歌うべきだと思うんだけど。

この曲を歌うジョンの声を聴きたかった。じっさいジョンは、

曲を教えるためにリンゴに歌って聴かせたらしい（録音はされていない）。それを見ていたポールは「ジョンがこの曲を歌うのを聴いたけど、素晴らしかった」との感想を残している。

遠山　ジョンは、自分が歌うことに照れと恥ずかしさがあったのでしょうね。でも、やはりうしろめたかったのか、ヨーコとの3枚目の共作アルバム『ウェディング・アルバム』（1969年）のB面の最後あたりで、申し訳なさそうにこの歌をわずかばかり披露しています。

演奏はオーケストラによるもので、ジョンを含め他の3人はスタジオ内にいたけれど、レコーディングにはいっさい関わっていません。オーケストラを入れることを望んだのはジョンですが、のちに「ちょっと豪華すぎたかもしれない」とふりかえっている。サウンド面ではビートルズらしさが感じられません。

コーラスもメンバーがやっていない。〔アイ・アム・ザ・ウォルラス〕にも参加したマイク・サムズ・シンガーズのメンバーがやっています。

CamScannerでスキャン

With 'Yellow Submarine' the whole idea was "If someday I came across some kids singing it, that will be it."

〔イエロー・サブマリン〕のアイディアは、「いつか子どもがそれを歌っているのに出くわしたら、楽しいだろうな」ということだったんだ。

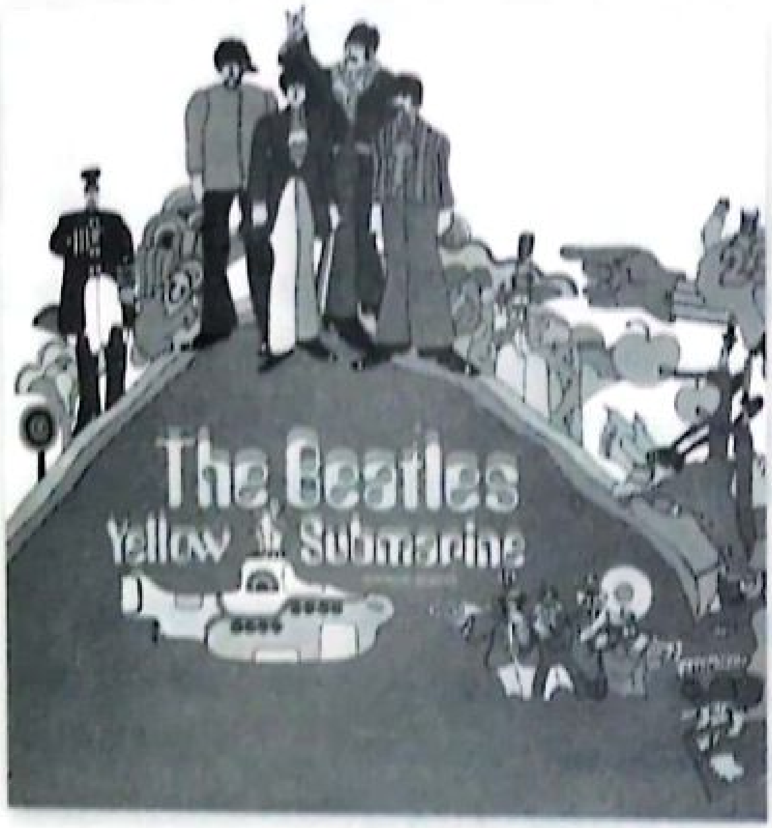
— Paul McCartney

Many people have interpreted it to be a war song, that eventually all the world would be living in yellow submarines. That's not the case.

たくさんの人が、あれは戦争の歌で、そのうち世界中の人たちが黄色い潜水艦の中で暮らすようになるんじゃないかと思っているようだけど、戦争なんかとはぜんぜん関係ないんだよ。

—Ringo Starr

CamScannerでスキャン



Beatles Album 11

YELLOW SUBMARINE

イエロー・サブマリン

1969年1月13日リリース（アメリカでの発売）

Ⓛ40分12秒 Ⓟジョージ・マーティン Ⓢアビイ・ロード・スタジオ、ド・レイン・リー・ミュージック・レコーディング・スタジオ、オリンピック・サウンド・スタジオ

SIDE A	SIDE B
1 Yellow Submarine	7 Pepperland
2 Only A Northern Song	8 Sea Of Time
3 All Togerher Now	9 Sea Of Holes
4 Hey Bulldog	10 Sea Of Monsters
5 It's All Too Much	11 March Of The Meanies
6 All You Need Is Love	12 Pepperland Laid Waste
	13 Yellow Submarine In Pepparland

CamScannerでスキャン

企画モノの悲哀

『ホワイト・アルバム』の2か月後に発表されたオリジナル・アルバム。アニメーション映画『イエロー・サブマリン』(ビートルズは名前とキャラクター・イメージと曲を提供) のサウンド・トラック盤。A面には新曲4曲を含むナンバーが6曲、B面にはジョージ・マーティン・オーケストラによる映画挿入曲 (すべてインストゥルメンタル) が収められた。

メンバーは映画制作にまったく興味を示さず (声の吹き替えも本人たちではない)、在庫処分でもするかのように、"捨て曲"を寄せ集めて提供した。結果、オリジナルで、このアルバムだけが大きな話題にはならなかった。プロデューサーのジョージ・マーティンによれば、「彼らは楽曲のデキが悪いと、『イエロー・サブマリン』に入れるのにちょうどいい、などとジョークをとばしていた」らしい。ジョージは、新曲4曲のうち2曲を提供しているにもかかわらず、「ビートルズのアルバムのなかで、これほどひどいアルバムはない」と酷評している。

しかし、「愛と音楽を武器にして平和な世界をつくる」をテーマにした映画の出来はよく、完成前に試写を観た4人は大いに気をよくして、最後の場面、本物のビートルズが登場するシーンをつけ足すことにした。

「ラヴ&ピース」というメッセージをたずさえたこの映画に、批評家たちは「ただの娯楽アニメではなく、芸術性の高い作品」との評価を与え、ビートルズは『マジカル・ミステリー・ツアー』で着せられた汚名を返上することができた。ジョンとポールは、「だったら、もっといい曲を提供してあげたのに」とつぶやき、プロジェクトに積極的に関わらなかったことを悔やんだ。

CamScannerでスキャン

2. Only A Northern Song

オンリー・ア・ノーザン・ソング

Ⓜ George Harrison
Ⓡ 1967年2月13・14日、4月20日 Ⓛ 3分23秒 Ⓥ ジョージ（ポール）

里中 ジョージの曲。ちまたの評判はあまりかんばしくないけど、私は嫌いじゃありません。演奏はというと、ジョージのギターはないけれど（ジョージはハモンドオルガン）、ポールのメロディアスなベース、リンゴのタイトなドラミングと、随所に聴きどころがある。

ジョージは、What chords I play（どんなコードを弾こうと）/ What words I say（どんな歌詞を歌おうと）/ Or time of day it is（それがいつのことであろうと）/ As it's only a Northern song（それはただのノーザン・ソングになっちまうのさ）とぼやいている。「ノーザン・ソング」というのはどういう意味なのですか。また、歌詞で出てくる「北の町」の「北」というのはどこですか。映画の字幕では「これは悲しい歌だから」と訳されていましたが……。

遠山 ブライアン・エプスタインとディック・ジェームス（音楽出版社の社長）が設立したビートルズの楽曲の著作管理会社ノーザン・ソングスのことです。ビートルズの楽曲の版権は、ここで管理されていました（のちに版権がビートルズの手から離れてマイケル・ジャクソンのもとに渡るなど、ビートルズのメンバーはゴタゴタに巻き込まれることになった）。メンバー全員が英国の北部リヴァプールの出身だからという理由で、ノーザン・ソングスという名前がつけられました（社名を提案したのはディック・ジェームス）。

多くの曲を書いたジョンとポールは、この会社の株主でもありましたが（利益のほとんどが、ジョン、ポール、ブライアン、ディックで分け合うシステムになっていた）、ジョージとリンゴは契約

上のたんなるソング・ライターという扱いで、自作曲をつくってもノーザン・ソングスのものになってしまいました。その怒りをジョージが歌にしたというわけです。68年の11月に契約が切れると、ジョージは『ホワイト・アルバム』に収録した自作4曲の著作権を、自身が設立した管理会社ハリソングスへ移行しました。

3. All Together Now

オール・トゥゲザー・ナウ

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1967年5月12日
Ⓛ 2分10秒 Ⓥ ポール、ジョン（ジョージ）

里中　ポールの曲。映画に使われることをあらかじめ意図してつくられた合唱歌。All togerher now は「さあ、みんな一緒に」という意味。アニメーション・ソングにふさわしい幼稚な歌詞なんだけど、ビートルズの手にかかると聴き入ってしまうから不思議です。パロディ、ジョーク、ギャグ、トリックを止揚して昇華せしめることもやるし、この曲のように、とことん子どもたちと遊びに興じてしまうこともできる。

ジョンが Sail the ship（船を出そう）/ Chop the tree（木を伐ろう）/ Skip the rope（なわとびしよう）と愉快に叫ぶところなど、妙に感動してしまう。この合いの手をジョンみずからが入れたと知ってますます感激してしまった。曲に色づけをしていく能力において、ビートルズの右にでる者はいなかったということがよくわかります。

遠山　ひじょうに楽しい曲。数字、アルファベット、色など、幼児の歌には欠かせないものをちゃんと盛り込んでいる。ポールのサーヴィス精神は、こういうところでも旺盛ですね。〔イエロー・サブマリン〕と同様、4人がはしゃぎながらレコーディ

ングしている様子が目に浮かびます。子どもが気に入れば、大人にも愛される。事実、イギリスのサッカー場では数シーズンにわたって唱和されたと伝えられています。

映画のなかでは2度使われている。まず、ペパーランドの住民たちを助けるために四人が黄色い潜水艦に乗り込む場面。それから、最後に実物の4人が登場して、「オール・トゥゲザー・ナウ」をあらわす世界各国の言葉が画面に映し出されるとき。日本語の字幕は「それでは皆さん御一緒に」でした。

〔All You Need Is Love〕のエンディングのコーラスでも、ポールは「オール・トゥゲザー・ナウ」と周りにいる人たちに声をかけていますが、「自分がリーダーになって、一つにまとまる」というのが、どうもポールの理想のようです。

4. Hey Bulldog

ヘイ・ブルドッグ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年2月11日 Ⓛ 3分09秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中 ジョンによるワイルドなロック。ジョンのヴォーカルが冴えています。イントロからしていい。ピアノ、ギター、ドラム、ベースと順にかぶさっていき、あとはジョンが吠えるという展開。楽器が増えてきてサウンドに厚みが出ると、こっちの気分もいっきに高揚してくる。バックのヴォーカルはポールで、犬の鳴き真似はジョンとポールが二人でやっている。

映画用にジョンが書いた曲ですが、sheep dog（牧羊犬）とbullfrog（ウシガエル）、childlike（子どもらしい）とjackknife（ジャックナイフ）、big man（大男）とwigwam（テント小屋）のように、韻を踏むことを念頭においた言葉遊びをやっているので、けっこう難解というか、ナンセンスな歌詞になっている。本人も

「無意味だ」と述べている（笑）。You can talk to me（僕に話しかけてくれ）/ If you're lonely you can talk to me（寂しいのなら、僕に話しかけてくれ）の部分だけがわかりやすい。

タイトルは、たまたまポールがふざけて犬の鳴き声を真似したところから、〔ヘイ・ブルドッグ〕と名づけられた。もう、いい加減にしてほしい（笑）。

遠山　このアルバムに収録されている曲のうち、もっとも人気があるのがこれ。メンバー全員がノリにノッてます。エンジニアのジェフ・エメリックによれば、「これが4人が力を合わせて全力でレコーディングした最後の曲」だったそうです。

残念ながら、68年に公開された映画では、〔ヘイ・ブルドッグ〕が流れる場面はカットされてしまいました。頭が四つある青い犬（ブルー・ドッグ）がグロテスクであるため、市場では受け入れられないのではないかとの判断からカットされたようです。しかし、98年に発売されたDVDでは、この場面が復活しました。

68年2月11日、この曲のレコーディング風景が撮影され、〔レディ・マドンナ〕のプロモーション・ヴィデオとして使われました。DVD『アンソロジー』に収録されていますので、ぜひご視聴ください。

5. It's All Too Much

イッツ・オール・トゥー・マッチ

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1967年5月25・31日、6月2日　Ⓛ 6分24秒　Ⓥ ジョージ（ジョン、ポール）

里中　ジョージの曲。歌唱力がない。ジョージの声の力の弱さが露呈してしまっている。しかも、ジョージがビートルズのキャリアのなかで書いたもっとも長い曲とか（ビートルズの楽曲の

なかでは4番目に長い曲)。一説によると、本来は8分9秒もあったとか。これでも短くなったのか……。

歌詞の内容もわかりにくい。エンディング近くのWith your long blond hair and your eyes of blue(長いブロンドの髪に青い瞳)の部分は、マージーズ(マージービーツのトニー・クレインとビリー・キンズリーの二人によるデュオ・グループ)のヒット曲からの「無意味な盗用」(イアン・マクドナルド)であるらしい。ジョージの自伝『I ME MINE』によれば、ＬＳＤをやっているときの気分を書いたものらしいけど、そもそもそんな曲を子ども向けアニメに「はい、どうぞ」と差し出してしまっていいのだろうか。ドラッグによる夢うつつ状態で書かれた歌詞を分析するのは、どうも私の仕事ではないような気がしますので、あとは頼みます。

遠山　新曲4曲のうち、2曲を提供しているジョージですら、「これは最悪のアルバムだ」と酷評しています。サウンドも「無意味な寄せ集め」という印象があります。フィードバック・ギターやテープの逆回転も、はっきりいいますが、かっこよくない。そもそも演奏とヴォーカルも合っていない。なにもかもがチグハグ。残念ながら、僕は、このサイケな乱調の中に美を見いだせません。

こうした曲を映画に提供したこと自体、ビートルズのメンバーがこのプロジェクトに興味がなかったことの証左でしょうが、それにもめげず傑作アニメをつくりあげた制作チームは賞賛に値します。彼らはひじょうに団結力の強いチームで、チーム内でカップルが誕生したり、結婚にまで至ったペアもいたそうです。

大のジョージ・ファンを豪語する高橋幸宏は82年に、なんとこの曲をカヴァーしています。頭が下がります、ハイ。

CamScannerでスキャン

Beatlemusic is when we all get together.

ビートルズ・ミュージックというのは、4人が集まったときに
生まれるんだ。

—John Lennon

There isn't a Beatle album
without some Rock and Roll on it, is there?

ビートルズのアルバムで、ロックンロールが入っていない
アルバムなんてあるかい？

—John Lennon

CamScannerでスキャン

Beatles Album 12

ABBEY ROAD

アビイ・ロード

1969年9月26日リリース

Ⓛ47分23秒　Ⓟジョージ・マーティン、クリス・トーマス（補佐）、グリン・ジョンズ（補佐）
Ⓢアビイ・ロード・スタジオ、オリンピック・サウンド・スタジオ、トライデント・スタジオ
Ⓒイアン・マクミラン

SIDE A	SIDE B
1 Come Together	7 Here Comes The Sun
2 Something	8 Because
3 Maxwell's Silver Hammer	9 You Never Give Me Your Money
4 Oh! Darling	10 Sun King
5 Octopus's Garden	11 Mean Mr. Mustard
6 I Want You (She's So Heavy)	12 Polythene Pam
	13 She Came In Through The Bathroom Window
	14 Golden Slumbers
	15 Carry That Weight
	16 The End
	17 Her Majesty

CamScannerでスキャン

ビートルズの金字塔

ビートルズが最後に録音した実質的なラスト・アルバム。「ゲット・バック・セッション」(1969年1月2日〜1月30日)よりもあとで録音されたが、『レット・イット・ビー』が編集作業の停滞などで手間どってしまったため、『アビイ・ロード』のほうが先に発売された。

ポールが「かつて自分たちがやっていたようにアルバムをつくりたい」と提案。『レット・イット・ビー』でプロデューサーをはずされたジョージ・マーティンが復帰することになった。

解散が意識されるなか、最高のアルバムをつくろうということで、ビートルズのメンバーは叡知をふりしぼった。果たして、結果はごらんのとおり、ミュージック・マインドに満ちあふれた偉大なアルバムができあがった。

A面の1曲目からB面の2曲目までは、各メンバーの個性と美点があふれる完成度の高い傑作がバランスよく並んでいる。そして、クライマックスは、B面の3曲目から始まる、未完成の小品をつなげてメドレーで聴かせるところ。まさにビートルズの最後を飾るにふさわしい壮大な組曲として結実した。

こうして、またも大傑作を残した4人は、長く親しんだアビイ・ロード(ロンドン)の横断歩道を渡って、それぞれの道へと歩んでいった。

ジャケット用のフォトセッションは、1969年8月8日の昼近く、アビイ・ロード・スタジオ前の横断歩道でおこなわれた。ジョンとヨーコの知り合いであるイアン・マクミラン(写真家)が、3往復分、計6枚の写真を撮った。ポールが裸足なのは、「気持ちのいい夏の日だったんで、靴なんか履きたくなかった」から。

1. Come Together
カム・トゥゲザー

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1969年7月21・22・23・25・29・30日、8月7日
Ⓛ 4分17秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中 アポロ11号が月に着陸したころ、アビイ・ロードではこの曲が録音されていた。そう考えるとずいぶん遠い昔のように感じられますが、いま聴いても背中がぞくぞくするほどいい声ですね。

チャック・ベリーの〔ユー・キャント・キャッチ・ミー〕に似ていたため、この曲を著作権を管理しているビッグ・セヴンが訴訟を起こしましたが、ジョンのソロ・アルバムにチャック・ベリーの曲を3曲入れることで話がついた。いいアーティストは拝借するけど、偉大なアーティストは自分のものにしてしまう、という恰好の例ですね。

曲の骨格を支えるポールの重量感あるベース。リンゴもいいフレーズを叩いている。ジョージによる間奏とエンディングのギターも素晴らしい。力強いヴォーカルとタイトな演奏は、さすがビートルズだと思わせます。最初に耳にとびこんでくるのは「シュッ」というジョンの声ですが、これはShoot meといっている、つまり「おれを撃ってみな」と挑発しているという解釈があるのですが、ほんとうでしょうか。

遠山 『アンソロジー3』に収録されているヴァージョンを聴くと、Shoot meと歌っているのがけっこうクリアに聞こえます。ジョンはたいへん気に入っていたようで、あるインタヴューでは「自分がビートルズ時代に書いた曲の中でいちばん好きな曲」と発言しています。解散後のライヴでもこの曲を歌っています（アルバム『ライヴ・イン・ニューヨーク・シティ』収録）。

「カム・トゥゲザー」というタイトル・フレーズは、アメリカの

CamScannerでスキャン

心理学者ティモシー・リアリーがカリフォルニア州知事選に出馬するにあたって立てたスローガン。ジョンはその応援ソングをつくってほしいと依頼されたものの、なかなかうまく書けず、代わりに生まれたのがこの名曲でした。

2. Something

サムシング

Ⓦ George Harrison Ⓡ 1969年2月25日、4月16日、5月2・5日、7月11・16日、8月15日 Ⓛ 3分00秒 Ⓥ ジョージ（ポール）

里中　ジョージの代表作。完成度が高い傑作です。ジョージのギターも曲に合っているし、ポールのベースもメロディアス。それからリンゴのドラムスもお見事。イントロのタム（太鼓）からしてかっこいい。なかなかできる技ではありません。高いタムとバスタムの組み合わせがなんともスリリング。聴くたびに緊張する。

ジョージは、ジョンとポールという二人の天才がそばにいたため、それなりの重圧を感じていたのでしょうが、ある意味では理想的な環境にあったともいえます。こうした傑作を生みだせる土壌で育ったのですから。

ジョージが亡くなったあと、ポールはコンサートでこの歌をカヴァーしています。ウクレレで歌うんだけど、これがなかなかいい。ウクレレは、ポルトガル領のマディラ諸島由来の楽器で、1870年代に移民とともにハワイに持ち込まれたといわれていますが、ジョージが大好きだったウクレレとハワイ。ポールは心憎い演出をしましたね。

遠山　ついに傑作をものにしました。バンザーイ。これはジョージが当時の妻パティに捧げた曲。ジョージはこの曲で、ソングライターとしての才能を世に知らしめました。「ジョージの

最高傑作」といわれることが多い。フランク・シナトラは「史上最高のラヴ・ソング」と大絶賛していますが、ジョージ本人も「最高にうまく書けた曲」だと語っています。〔イエスタデイ〕に次いでカヴァーされた回数の多いビートルズ・ナンバーで、レイ・チャールズやシナトラといった大御所もカヴァーしています。

間奏のギターはジョージ。タッチもいいし、フレーズもいい。音色もまた素晴らしい。最初、このギターはエリック・クラプトンが弾いているのではないかといわれましたが、正真正銘、ジョージの手によるものです。

3. Maxwell's Silver Hammer

マックスウェルズ・シルヴァー・ハンマー

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1969年7月9・10・11日、8月6・25日
Ⓛ 3分26秒 Ⓥ ポール（ジョージ、リンゴ）

里中　ポールはノッたらコワイ、と繰り返しいってきましたが、作詞においても狂気の片鱗がうかがえます。医学生のマックスウェル・エジソンは、ジョウンという女性をハンマーでまず殺し、2番の歌詞では学校の女性教師をやっつけ、3番では被告席に立たされたマックスウェルが裁判官をこれまたハンマーで殺してしまう。ジョージが「マックスウェルは何人も殺すんだから、病んでいるというほかない」といっていますが、これがそのころポールが夢中になっていたシュールレアリスムの一端なのでしょう。しかも、のんきな声で歌っている。おまけにですよ、writing 50 times のところではクスっと笑っている。ポール、コワい（笑）。

ジョンは一人称を主語にして書くことが多く、ポールはサージェント・ペパー、エリナー・リグビー、レディ・マドンナ、〔ゲ

ット・バック」のロレッタ・マーティン、そしてこのマックスウェルなど、架空の人物をつくりだして歌うことが多い。ポールは、物語をつむぐのが好きなんですね。

遠山　ポールが得意とするボードヴィルふうのナンバー。映画『レット・イット・ビー』でも演奏風景が撮影されていますから、ゲット・バック・セッションのときに、ある程度できあがっていたことがわかります(『ホワイト・アルバム』の候補曲でもあった)。

歌詞に pataphysical science という言葉が出てきますが、これはいわば「ナンセンス学」という学問の名。歌詞にこうした単語を落とし込むことによって、正気の沙汰ではない歌詞の内容を深刻化させることから免れている。それどころか、逆にのんきな雰囲気を漂わせ、聴き手にホッとひと息つかせる時間を提供している。見事な手腕です。

「バング・バング」のところで「カン・カン」という音が聞こえますが、あれはマル・エヴァンズがカナヅチでカナトコを叩いている音です。

4. Oh! Darling

オー！ダーリン

Ⓦ Lennon / McCartney　Ⓡ 1969年4月20・26日、7月17・18・22・23日、8月8・11日　Ⓛ 3分26秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ポールの野太い声。そのパワフルなヴォーカルは圧巻です。力強いというか、すさまじい。後年、ジョンはポールの歌いっぷりを揶揄(やゆ)して、「オレならもっとうまく歌えたのに」と述べたそうですが、ジョンの「オレならもっとうまく歌えたのに」は、「オレが歌いたかった」と解釈したほうがいい。願望の裏返し。自分の願望を相手への批判の言葉でコーティングする。ジ

CamScannerでスキャン

ョンの悪いクセです（笑）。

歌詞は、恋人に捨てないでくれと懇願する内容。Oh, darling, please believe me（ダーリン、どうか信じてくれ）/ I'll never do you no harm（決して悪いようにはしないから）が冒頭の歌詞。ビートルズに興味をなくしたジョンに向けられたものだと解釈されていますが、ポールは「そうだ」とはいっていません。まあ、そんなことを白状するわけもないのですが。

遠山　これがつくられたのも、ゲット・バック・セッションのころ。映画『レット・イット・ビー』は、この曲から始まります（69年1月27日に撮影）。

何度も歌い直しているところから見ると、納得のいくヴォーカル・テイクを得るのにかなり苦労したようです。でも、その甲斐あって、パワフルな素晴らしいヴォーカルを聴かせてくれている。高いキイなのに、声が細くならないのがポールのすごいところ。それから、ジョン、ジョージ、ポールによるバッキング・ヴォーカルも大いに楽しめます。凝りに凝っています。

サウンド面では、ジョージのコード・カッティングがいい。ミドル・エイトでは小刻みのスタッカートで弾いていますが、この繰り返しはちょっと耳につく。リンゴのドラム・プレイもけっこう忙しい。乱れ打ちをやったり、ハイハットを細かく刻んでいたり、けっこういろんなテクニックを見せている。これは満足です。

CamScannerでスキャン

5. Octopus's Garden

オクトパス・ガーデン

Ⓦ Richard Starkey Ⓡ 1969年4月26・29日、7月17・18日
Ⓛ 2分49秒 Ⓥ リンゴ（ポール、ジョージ）

里中　リンゴがビートルズ時代に発表したヴォーカル・ナンバーは全部で11曲ありますが、これが最後の作品。リンゴは、ビートルズの人間関係においてカタリスト（触媒）のような存在であったと思いますが、リンゴの楽曲もまたアルバム全体に化学反応を起こさせるカタリストのような存在だった。なかでも〔オクトパス・ガーデン〕は最良のカタリスト。この楽曲があるおかげで、『アビイ・ロード』は暗い深刻の淵へ落ちずに済んだ。

　ジョージがちょっと手伝ったそうですが、基本的にはリンゴの曲であることに変わりはなさそう。さらにいうと、この曲は〔イエロー・サブマリン〕をイメージさせる仕掛けにもなっていて、愉快なリンゴの人柄までもしのばせてくれる。というわけで、リンゴの曲なので、みんな張り切っています。まずはジョージによるイントロと間奏の活気のあるギター。輝いていますね。音がキラキラしているし、フレーズも跳躍している。コーラスは、ポールとジョージ。きれいなハーモニー。ジョンは、ドノヴァンに習ったアルペジオで盛りあげる。コップの水をストローで吹いて泡の音を出しているのはリンゴ。みんな、楽しそう。

遠山　リンゴは自分が疎外されていると感じて、いっときビートルズを離脱していたことがありました（68年8月下旬）。サルディニア島で休暇をとっていたのですが、そのときタコ（オクトパス）の生態について教えてくれる船長がいて、タコは石や光る物体を拾い集めて庭づくりをするという彼の話にリンゴは魅了された。自分自身もタコのように海の底に沈んで、のんびり庭

CamScannerでスキャン

づくりをしたいというアイディアはこのときに生まれたんです。まるで絵本に出てきそうな話ですね。

そういえばリンゴは、2013年に『オクトパス・ガーデン』というCD付きの子ども向けの絵本を出版しました。リンゴはいまでも子どもたちの人気者なんです。考えてみれば、スゴいことでよ、これは。

6. I Want You (She's So Heavy)

アイ・ウォント・ユー（シーズ・ソー・ヘヴィー）

Ⓦ Lennon / McCartney　Ⓡ 1969年2月22日、4月18・20日、8月8・11日
Ⓛ 7分44秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　ジョンの作品。ヨーコのことを歌っている。I want you（欲しいんだ）を執拗に繰り返すブルース・ロック。あまりにも長いので（7分44秒）、あまり人気がないようです。ザ・バンドのロビー・ロバートソンはこの曲を「うるさいだけのクズ」と酷評したそうですが、わからないでもない。でも、私は偏愛している（笑）。夢遊病者が暗闇のなかを模索しながら歩んでいるような緊張感がたまらなくいい。

長年夢見ていたエロティックな母親（ヨーコ）がついに目の前にあらわれると、ジョンはその肉欲の深みに飛び込んでいった。ヨーコとのセックスに溺れると、ジョンはますますヨーコに依存していく。またドラッグにも溺れ、このレコーディングの数日後には、スタジオに戻って、ドラッグによる中毒症状を〔コールド・ターキー〕という歌にしてぶちまけている。ジョンはこの時期、ほんとうに心身ともにメロメロであったようです。こうしたことを考えると、同じ歌詞をくどくど繰り返すのは当然といえば当然のこと。だって、ジョンは取り憑かれているのですから。

CamScannerでスキャン

遠山　いくらなんでも長すぎる。ポール的なポップスに対するアンチテーゼであるのはわかるけど、音楽でセックスするのはやめていただきたい（笑）。演奏はブルージー。ジョンのリード・ギターがヘヴィすぎる。イントロのギターはジョージによるものですが、あとはジョンひとりでリードをやっている。飽くことのないDマイナーのアルペジオに、ポールは、なんていったらいいのかな、ジョンの叫びに共鳴するかのような理解あるベースを弾いている。ポールは優柔不断なところがあるから困ります（笑）。

コーラスがまた素晴らしい。She's so heavy のところで、「ヘヴィー」を3人（ジョージ、ジョン、ポール）が声を重ねていくのですが、何度聴いてもしびれる。なんと素晴らしい輪唱でしょう。

7. Here Comes The Sun

ヒア・カムズ・ザ・サン

Ⓦ George Harrison　Ⓡ 1969年7月7・8・16日、8月6・11・15・19日
Ⓛ 3分05秒　Ⓥ ジョージ（ポール）

里中　〔ヒア・カムズ・ザ・サン〕から始まるＬＰレコードのB面をトレースする針先を見ながら、押し寄せてくる感動に、身がつつまれた体験を、昨日のことのように思い出します。こうしてまた聴いてみると、重苦しい前曲〔アイ・ウォント・ユー〕はこの歌の素朴さを際立たせるためにあったのだと、いまさらながら自分の不明を恥ずかしく思います。太陽が雲の切れ目から顔をだす。さあ、これから陽なたぼっこだ。そんなウキウキ感が漂っている。これはまた、ジョージの遅咲きの才能が、陽の目をみたことを告げる曲にもなりましたね。

ジョージは7フレットにカポタストをつけて、Dのポジションでメロディを奏でている。高校生のとき私もやってみました

が、ウソのようにうまく真似できるんです。「7フレット、カポタスト、D」が頭にこびりついている。
遠山 この小さな曲は、心労のつづくジョージが親友エリック・クラプトン邸の庭で陽なたぼっこをしているときに書かれたもの。退屈なアップルの会議をサボってクラプトンの家に遊びにやってきたその日、外は春のようなポカポカ陽気だったそうです。暖かい春の陽光は、当時の行き詰まった状況の真っ只中にいるジョージの願望でもあったのでしょう。日本でも人気が高い曲ですね。知ってましたか、シングル・カットされたのは日本だけなんですよ。

ちなみに、ジョンはまたしても欠席。このときは自動車事故でケガしたため。やむをえない事情がありました。ジョンの名誉のためにつけ加えておきます。

ジョージは、79年のソロ・アルバム『慈愛の輝き』で〔ヒア・カムズ・ザ・ムーン〕という曲を発表していますが、これは〔ヒア・カムズ・ザ・サン〕の姉妹曲です。こちらは、暇だったら、聴いてみてください（笑）。

8. Because

ビコーズ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年8月1・4・5日 Ⓛ 2分45秒 Ⓥ ジョン、ポール、ジョージ

星中 忘れてはいませんでしたか、ビートルズが最高のコーラス・グループであったことを。ジョン、ポール、ジョージの三人が歌う声を3回かさねて9つの声にしたハーモニー。基本的には高音がポール、中音がジョン、低音がジョージですが、パートによっては入れ替わったりして、相変わらず健在ぶりを見せています。『アンソロジー3』にこのアカペラ・ヴァージョン

CamScannerでスキャン

が収録されていますが、クラっとするほどの恍惚感をおぼえます。3人のコーラスが、この曲がもつ冷たい荘厳さを讃えている。ジョージが「ビートルズにおける最高のハーモニー」といっているのも、うなずけます。

演奏も、「おごそか」ですね。冷厳さを感じる。と同時に深さもある。ジョンのアルペジオがその雰囲気を際立たせている。愛について歌った曲だけど、悲しいほどの空の青さを歌った、Because the sky is blue（空が青いので）/ It makes me cry（僕は泣きたくなる）/ Because the sky is blue（なぜって、空が青いから）という最後のヴァースがとくに好き。

遠山　マジカル（魔術的）でルーニック（神秘的）な魅力で満ちています。ヨーコがベートーヴェンの〔月光〕ソナタをピアノで弾いていたとき、傍らにいたジョンがいたずら半分に楽譜を逆さまにしたところ、それに応えて弾いたヨーコのメロディがおもしろく、それがヒントになって生まれたということですが、「逆さま」ではなく「そのまま」の影響を受けているように思います（笑）。おそらく、ジョンは面白おかしくするためにそんなことを口走ったのだと思います。

イントロのエレクトリック・ハープシコードはジョージ・マーティン。そうそう、このアルバムのなかでポールとジョージがいちばん気に入っている曲はこの〔ビコーズ〕だって知ってました？

CamScannerでスキャン

9. You Never Give Me Your Money

ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1969年5月6日、7月1・11・15・30・31日、8月5日
Ⓛ 4分02秒 Ⓥ ポール

里中 〔ビコーズ〕を序章にして、ここから華麗なる極上のメドレーが奏でられる。断片的な未完のピースを集めて、壮大なメドレーをつくろうとしたのはポール。この曲のメロディの美しさといったらありませんね。転調によるめくるめく展開。スリリングな音の響き。3部構成の組曲。歌い方もそれぞれパートで巧みに変えている。

歌詞は、ポールが敵視していたアメリカ人会計士アラン・クラインを皮肉ったものだといわれている。アランは金をよこさず、ヘンテコリンな書類ばかり持ってくる。You never give me your money（あんたは僕に金をよこさない）/ You only give me your funny paper（わけのわからない紙切れを渡すだけ）とは、あまりにも露骨な愚痴。こんな劇的で美しいメロディなのに。

遠山 このレコーディングが開始された直後、アラン・クラインはジョン、ジョージ、リンゴとビジネス契約を結んだ。でも、ポールは断固としてこれを拒否。ポールは、妻リンダの父リー・イーストマンと兄ジョン・イーストマンを推していた。悪化するいっぽうのアップルの財政状態のなかで、アラン・クラインはビートルズとアップルが獲得する総所得の20パーセントをせしめようとしていた。そうしたことに、ポールはカリカリしていた。それがこの名曲をつくらせた。そうした状況にあっても、自暴自棄にならないポールに感嘆のため息をつくしかありません。

ポールのやる気と創造力がなかったら、ビートルズは『サージェント・ペパー』のあとで解散していたというのは間違いの

ないところ。そして、リーダーシップを発揮するポールは、メンバーから辛辣な言葉を浴びせかけられた。ですが、ポールが傷つきながらも楽曲づくりに励んだという事実はやすやすと忘れられてしまった。そのことを、どうしてもここでいっておきたい。

10. Sun King

サン・キング

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年7月24・25・29日　Ⓛ 2分26秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　〔サン・キング〕と次の〔ミーン・ミスター・マスタード〕は一つのシークエンスとしてレコーディングされた。おそらく「ロング・メドレー」というコンセプトがなければ、この曲、スクラップされていたでしょうね。

コオロギの鳴き声にかぶさってジョンの声が聞こえてくる。最後のほうの歌詞はスペイン語あるいはイタリア語のように聞こえるけど、じつはデタラメの言葉の羅列のようです。書き起こしてみると、Quando paramucho mi amore de felice carathon / Mundo paparazzi mi amore cicce verdi parasol / Questo abrigado tanta-mucho que canite carousel になる。まったく大胆なことをするものですね。ちなみに、cicce verdi は故郷リヴァプールの表現で、「ha ha ha」ことだとジョンは述べている。「とりとめのない」という言葉は、こうしたときのためにある（笑）。

これもまたコーラスがいい。重苦しいなかにも透明感がある。このアルバムでは、ビートルズがコーラス・グループであったことを思い出させてくれます。

遠山　いろんな国の出身者たちにたしかめたところ、最後の歌詞はスペイン語とイタリア語とポルトガル語らしきものの合体

CamScannerでスキャン

とのことでした。もう、わけわからん(笑)。「サン・キング」(太陽王)とは、フランスのルイ14世のこと。太陽王がやってきた、という出だしからして意味不明。

ジョンは当初、この曲と次の〔ミーン・ミスター・マスタード〕をつなげて〔Here Comes The Sun King〕にしようと思っていたようです。ジョージの〔ヒア・カムズ・ザ・サン〕をもじっただけ。すべてテキトー。ジョージによれば、このキッチュでスタイリッシュな〔サン・キング〕は、フリートウッド・マックの〔アルバトロス〕(69年に大ヒットした)の影響を受けているとのこと。

11. Mean Mr. Mustard

ミーン・ミスター・マスタード

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年7月24・25・29日　Ⓛ 1分06秒　Ⓥ ジョン(ポール)

『アビイ・ロード』のレコーディングは、69年の2月22日から8月25日にかけておこなわれましたが、この曲は『ホワイト・アルバム』を制作する前にほぼできあがっていた。それをビートルズの面々がアレンジを加えて、このアルバムに放りこんだ。そして、結果はまたしても"大吉"でした。

卑しいマスタード氏(ミーン・ミスター・マスタード)の話。ジョンによると、お札を尻の穴に隠していたホームレスの新聞記事がヒントになったようです。それにしても、ジョンは頻繁に新聞記事から着想を得ていますね。

歌詞では、10シリング札を鼻の穴に突っ込んでいた(Keeps a ten bob note up his nose)ことになっていますが。この曲を収録するにあたって、ジョンは歌詞の一部を書き換え、マスタード氏の妹としてパンという女性を登場させています(もともとは「パン」ではなく、「シャーリー」だった)。これは次の曲〔ポリシーン・

パン〕に合わせたのでしょうね。
遠山　インド（68年）で面白半分に書いたこの曲が、こんなところで活躍するとは本人さえも思いもよらなかったでしょう。小粒（1分6秒）ながらも、いい味を出してます。歌詞に、マスタード氏の妹パンが、彼（マスタード氏）を女王に見に連れ出すというくだり（Takes him out to look at the Queen）がありますが、最初の構想では、これのあとに〔ハー・マジェスティ〕がくることになっていたためです（「ハー・マジェスティ」とは女王陛下のこと）。
　演奏では、ポールのベースに注目していただきたい。この曲に入ると一転、すさまじいファズ・ベースに変わる。まるで唸りをあげているよう。グングンというか、ボボボボと曲を引っぱっていく。このベースがなかったら、曲の魅力も半減でしょうね。

12. Polythene Pam

ポリシーン・パン

Ⓜ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年7月25・28・30日　Ⓛ 1分12秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　ジョンがインドで書いた曲。この〔ポリシーン・パン〕も前曲と同じく、『ホワイト・アルバム』の制作以前に書かれ、ずっと放っておかれた曲です。『アンソロジー3』に最初のヴァージョンが収録されていますが、あっちもけっこう楽しめます。
　「ポリシーン・パン」となっていますが、「パン」じゃなくて、女の子の名前だとわかるように「パム」とすべきでした。タイトルの由来については、遠山さんにお願いします。
　イントロの激しいアコースティック・ギターはジョン。強烈なストロークですね。そして、ジョンの早口ヴォーカル。歌が終わったあとの長いギター・ソロはジョージ。ジョンが早口で

ペチャクチャしゃべると、リンゴのドラムスがそれに追走する。たまらず、ジョンが Oh, look out!（気をつけろ！）と叫ぶと、ポールが She came in through the bathroom window... と引き継いでいく。

遠山 エンジンを吹かせて、ジョンが急にテンポを上げる。息もつかせぬ1分12秒。じつは、このパン（パム）という女性にはモデルとなった人物が二人います。ひとりは、デビュー前から親交のあったビート詩人に紹介されたステファニーという女性で、たまたま落ち込んでいたジョンを元気づけようとしたのか、驚かせようとしたのか、ポリエチレンの袋を身にまとってジョンの前にあらわれたそうです（polythene とは「ポリエチレン」のこと）。もうひとりは、ポリシーン・パンというあだ名の女の子で、キャヴァーン時代のファンだったそうです。彼女はいつもポリエチレンを噛んでいたそうです。歌詞の中に見えるパンはリヴァプールの娼婦となっていますが、じっさいの彼女はグルーピーだったようです。というわけで、ジョンはリヴァプールなまり丸だしで歌っています。

ここまでの3曲はジョンの曲でした。ここからポールがバトンを引き継いで、ゴールに向かいます。

13. She Came In Through The Bathroom Window

シー・ケイム・イン・スルー・ザ・バスルーム・ウィンドー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年7月25・28・30日　Ⓛ 1分57秒　Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中 ジョンからヴォーカルを引きついだポールは、はやくもエンジン全開。そして、なめらかにハンドルを切る。この流れ。この歌声。圧倒的であり、感動的です。And though she thought I

knew the answer（僕が答えを知っていると彼女は思っていたんだけど）のknewのところでは、ファルセットで高く上がる。イカしてる。人はどんな音楽に感動するかということを天才ポールはわかっていたらしい。

ビートルズは一つのジャンル、一つの枠に収まらなかったからこそ、「ビートルズ・サウンド」という自分たちだけのジャンルをつくりだしたわけだけど、この『アビイ・ロード』B面こそ、ビートルズ・サウンドの多面性が凝縮されています。

サウンド面のことをいうと、まずはポールのランニング・ベース。これが印象的。それからジョージのアルペジオのギター。美しい音色です。リンゴは16ビートで手数の多いプレイを見せている。これも聴き逃せない。

遠山　ジョンに「よっしゃ、いけ！」とバトンを渡されたポールは、のっけから飛ばします。やっぱりビートルズっていいなあ（笑）。話していて楽しい。

この曲は、風呂場の窓から空き巣（しかもファンの女性）に入られたポールの体験がもとになっている。She came in through the bathroom window（彼女は風呂場の窓から入ってきた）というのは実話だったんです。家宅侵入をした本人（ビートルズ関係者に近い女性）がいうところでは、浴室の窓が開いていたのでハシゴを使って侵入。玄関にまわって、仲間を中に招き入れたそうです。でも、最初に「風呂場の窓から入ってきた女性」として名が挙がったのはヨーコ。なにせ「前衛芸術家」ですからね。まあ、それぐらいのことは朝飯前だったでしょうから（笑）。でも、ジョンはリンダだと思っていたらしい。ポールを射止めるためにはなんでもやりそうでしたからね。

CamScannerでスキャン

14. Golden Slumbers

ゴールデン・スランバー

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1969年7月2・3・4・30・31日、8月15・18日
Ⓛ 1分31秒 Ⓥ ポール（リンゴ、ジョージ）

里中　いきなり Once there was a way to get back homeward（かつて、そこには家路へとつづく道があった）とくる。ポールは、のどに天然のエフェクターを内蔵しているんじゃないか（笑）。感涙。

golden slumbers（ゴールデン・スランバーズ）とは「黄金の眠り」のこと。イギリスの劇作家であるトマス・デッカー（1572?～1632）がつくった CRADLE SONG（『ゆりかごの歌』）という子守り歌から引用（一部改変）されています。原文は次のとおり。

Golden slumbers kiss your eyes,
（素敵な眠りがお目めにキスをする）
Smiles awake you when you rise,
（にっこり笑顔がちゃんと起こしてくれる）
Sleep, pretty wantons, do not cry,
（おやすみ、甘えんぼうさん、もう泣かないで）
And I will sing a lullaby:
（歌ってあげましょ、子守り歌）
Rock them, rock them, lullaby.
（揺らしてあげましょ、ゆーらゆら、歌ってあげましょ、子守り歌）

〔ゴールデン・スランバー〕の歌詞とよく似てますね。

遠山　ポールは、お父さん（ジム）を訪ねてリヴァプールへ里帰りした際、再婚相手アンジーの連れ子ルース（ポールの義理の妹にあたる）が読んでいた歌集のなかに、いま里中さんが読んでくれた詩を見つけたようです。

とにかく歌詞とメロディが美しい。油断していると泣けてきます（笑）。やさしく歌い出すところはこのうえなく美しいし、ミドル・エイトで雄叫びをあげるところは圧巻というにふさわしい。

でも、残念ながら、ジョンはこのレコーディングに参加していません。ヨーコとキョーコ（ヨーコの娘）とジュリアン（ジョンの息子）を伴って、スコットランドへ旅行に出かけて自動車事故に遭ってしまい、入院していたんです。

15. Carry That Weight

キャリー・ザット・ウェイト

Ⓦ Lennon / McCartney　Ⓡ 1969年7月2・3・4・30・31日、8月15日
Ⓛ 1分36秒　Ⓥ ポール（ジョージ、リンゴ）

里中　これもポールの作品。あまりに劇的な大コーラスに、脳みそが溶けてゆく。リンゴの声がひときわ目立つコーラスがこの曲の聴きどころ。

ポールは、当時のビートルズが抱えていた耐え難い状況についての曲だといっている。インタヴューでは、「僕はたいてい楽天的なんだけど、そうなれないときもある。これを書いているときもそうだった。僕たちはマリファナとドラッグをやりすぎ、そのうえにアラン・クラインとのバカげたやりとりが続いて、もうメチャクチャだった。でも、この圧迫に耐えていかなくちゃ。そんな思いで書いたんだ」（『Paul McCartney: Many Years From Now』Barry Miles）と語っている。

そこで歌詞を見ると、Boy, you're gonna carry that weight（君はその重荷を背負っていくんだ）/ Carry that weight, a long time（これから長い間ずっと）といった表現がある。自分を鼓舞する歌詞にしているんですね。

遠山 前曲の〔ゴールデン・スランバー〕につづけて録音された。ということで、この曲の収録にもジョンは参加していません。リンゴの声がやたら目立ちますね。いい録音です。

ポールはこの時期、ものすごいストレスを感じていたと思いますが、楽曲づくりをすることでストレスを発散していた。ポールにとっても、わたしたちファンにとっても、それはよいことでした。

演奏で注目すべきは、ジョージのベース。〔キャリー・ザット・ウェイト〕になると一転、急に手数が増える。巧み。それからポールのピアノ。〔ゴールデン・スランバー〕のときは静かに弾いていますが、この曲になると一転して激しいピアノになる。そして、オーケストラを加えてクライマックスに達する。〔ユー・ネヴァー・ギヴ・ミー・ユア・マネー〕のメロディを奏でるところなど、見事というほかありません。

16. The end

ジ・エンド

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1969年7月23日、8月5・7・8・15・18日
Ⓛ 2分05秒 Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中 ビートルズによる最後の曲。リンゴによる、最初で最後のドラムのソロ。リンゴはドラム・ソロを嫌っていて、やりたがりませんでしたが、ついにしぶしぶながら伝家の宝刀を抜きました。8小節に及ぶタイトなドラム・ソロ。自信に満ちあふれている。

そして、ポール、ジョージ、ジョンの順でくりひろげられるギター合戦。それぞれリードを2小節ずつ演奏している。ポールはメロディと音を重視したフレーズを弾き、ジョージはクラプトンふうのギター、ジョンは得意とする和音弾きをワイルド

にやっている。西部劇の拳銃使いたちが自分の腕を競い合っているような緊張と気迫を感じます。この間、Love you（愛してるよ）が連呼される。

そして、しめくくりとして、ピアノにかぶさるようにAnd in the end, the love you take is equal to the love you make（結局、君の受けとる愛は、君が与える愛と等価なんだよ）の名文句。こうして大団円をむかえたビートルズの歴史は幕を閉じる。

遠山　こうしてメンバー4人が全員そろったところで、ビートルズは終わってしまう。あらためて、ビートルズは4人で一つのユニットだったんだということを認識させられます。このとき、まだメンバー全員20代だったことにも驚かされます。

最後にふさわしい曲であり、歌詞ですね。タイトルも〔ジ・エンド〕ときた。「ほんとうに終わってしまったんだ」という寂寥感に包まれます。余韻のなかで口ずさみたくなるのはOh, yeah! Alright!（よし、わかった）/ Are you gonna be in my dreams tonight（今夜、僕の夢に出てきてくれるかい）のフレーズ。どうしてこんな歌詞が思いついたんだろう。ファンの気持ちがよくわかっている。感傷的にならざるをえない（笑）。次は、わずか23秒のオマケの曲です。

17. Her Majesty

ハー・マジェスティ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年7月2日　Ⓛ 23秒　Ⓥ ポール

里中　泣いても笑ってもこれでおしまい。閉じた幕の後ろから聞こえてきたのは、ビートルズが捨て忘れたポールのつぶやき。ポールのビートルズに対する未練はまだかすかにあったのかな。

レコード・デビューをしたころ、ジョンは21歳、リンゴは22

歳。ポールはちょうど20歳。ジョージにいたってはまだ19歳だった。解散時もメンバーは全員20代。活動期間はわずか7年半。ほんとうに短い。この間に彼らは213曲の公式録音曲を残した。

それぞれの才能の大きさと方向に違いはあれ、あらためて思うのは、誰が欠けてもビートルズは存在しなかったということ。これに尽きる。

遠山　はじめ、［ミーン・ミスター・マスタード］と［ポリシーン・パン］のあいだに収録されることになっていましたが、メドレーのつながりがよくないとのことで、ポールが外してしまった。でも、「ビートルズが録音したものはすべて捨てずにとっておくように」という会社の方針を忠実に守ったエンジニアが、20秒の空白をおいたあとに、この曲をテープにつないでおいた。しかし、エンジニアがそのことを忘れてしまって、アセテート盤を作成。それを聴いたポールが気に入ったため、そのままレコード化された。というわけで、曲の始めの「ジャーン」というギターの音は、［ミーン・ミスター・マスタード］の最後の音なんです。

余談ですが、2002年、エリザベス女王の即位50周年（ゴールデン・ジュビリー）の記念コンサートで、ポールはなんとこの曲を女王（Her Majesty）の前でライヴ演奏した。驚きましたね。だって、歌詞に Someday I'm gonna make her mine（いつの日か、ものにしてみせるよ）というフレーズがあるんですよ（笑）。どんなときもユーモアを忘れない。これもまたビートルズ！

By the time we got to *Let It Be*,
we couldn't play the game anymore;
we couldn't do it anymore.

『レット・イット・ビー』のころになると、俺たちはもうゲームを続けられなかった。あれ以上はもう無理だった。

—John Lennon

I don't mind, I'll play whatever you want me to play
or I won't play at all if you don't want me to play.
Whatever it is that will please you, I'll do it.

やるよ。ポールがいうように演奏するし、演奏してほしくないのならやめるさ。満足するまで、何だってやるよ。

—George Harrison

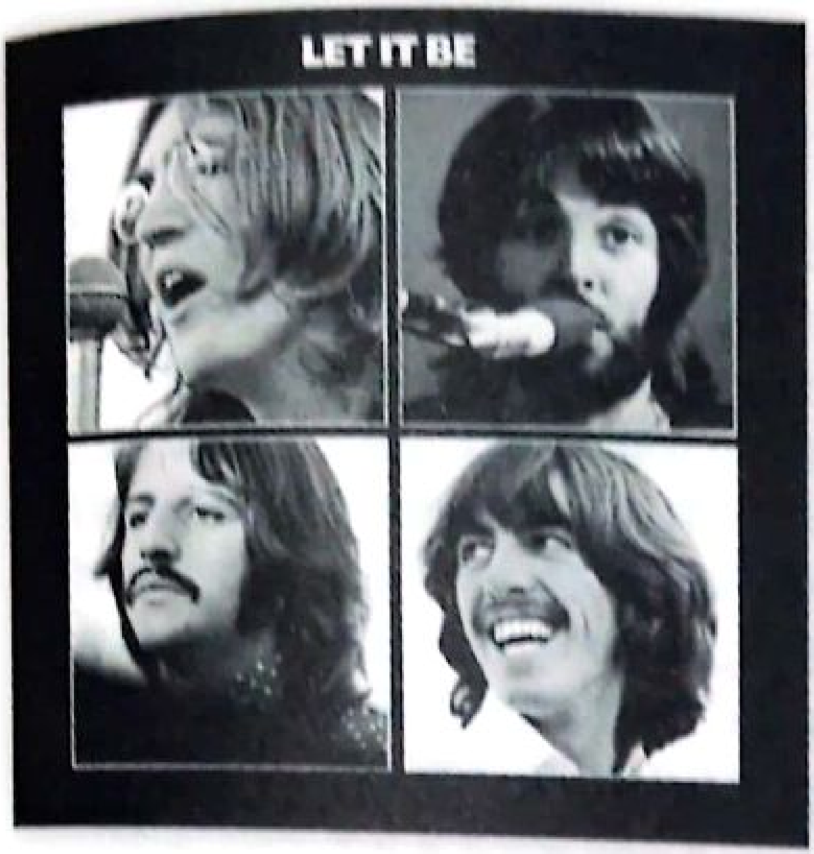
映画『レット・イット・ビー』の1シーン。〔アイヴ・ガッタ・フィーリング〕のギター・フレーズにあれこれ指示を出すポールにむくれて。

It was the most miserable session on earth.

あれはこの世でもっとも惨めなセッションだった。

—John Lennon

CamScannerでスキャン



Beatles Album 13

LET IT BE

レット・イット・ビー

1970年5月8日リリース

Ⓛ47分23秒
Ⓟフィル・スペクター、ジョージ・マーティン（オリジナル・レコーディング・プロデューサー）
Ⓢアビイ・ロード・スタジオ、オリンピック・サウンド・スタジオ、アップル・スタジオ、アップル・ビル（屋上） Ⓒイーサン・ラッセル Ⓓジョン・コッシュ

SIDE A	SIDE B
1 Two Of Us	8 I've Got A Feeling
2 Dig A Pony	9 One After 909
3 Across The Universe	10 The Long And Winding Road
4 I Me Mine	11 For You Blue
5 Dig It	12 Get Back
6 Let It Be	
7 Maggie Mae	

CamScannerでスキャン

寒空のなかに響いた最後の雄叫び

最後に発売されたオリジナル・アルバム。“原点に戻ろう”というポールの呼びかけで、「ゲット・バック・セッション」が始まった。当初は、2年前に中止していたライヴ・パフォーマンスをやろうというものだったが、衝突や不和があって意見がまとまらず、ビルの屋上で生演奏して、そのリハーサル風景を映像化するというプロジェクトに切り替わってしまった。このようにして“完成”した映画『レット・イット・ビー』(監督マイケル・リンゼイ＝ホッグ) は、1970年5月20日に封切られたが、メンバーは誰一人として劇場に顔を見せなかった。

アルバム制作では、ジョージ・マーティンをプロデューサーからはずし、ジョンとジョージの推薦でフィル・スペクターが呼ばれた。彼は、オーヴァーダビングを重ねる「ウォール・オヴ・サウンド」(音の壁) という重厚な音づくりで名が知られている。結果、ギターとベースとドラムというバンド・サウンドに、オーケストラやコーラスが加えられるなど、当初の主旨から大きく逸脱していった。ポールは、このスペクターのアレンジに激怒。4人の気まずい関係は、さらに悪化していった。

ビートルズ最後のライヴ演奏となったアップル・ビルの屋上でのパフォーマンスは、69年1月30日のランチタイムに何の予告もなくおこなわれた。天から鳴り響くビートルズのサウンド。道行く人びとは立ち止まり、近くのビルで働いている人たちは窓から顔を覗かせた。ライヴは、警察に中断されるまで、およそ42分間、テープ交換を待つあいだに即興で演奏したイギリス国歌を含め、6曲10テイクが披露された。ロンドンの寒空に、百獣の王の最後の雄叫びが寂しく響きわたった。

CamScannerでスキャン

1. Two Of Us

トゥー・オヴ・アス

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年1月24・31日 Ⓛ 3分35秒 Ⓥ ポール（ジョン）

里中 「僕たち二人」っていうのは、ポールとジョンのことだとてっきり思い込んでいましたが、自分とリンダのことだとポールは証言しています。でもね、You and I have memories longer than the road that stretches out ahead（僕たちにはこの道よりももっと長い思い出があるじゃないか）という歌詞はどう考えてもジョンに向けたもの。照れくさくて、ポールはいえなかったんじゃないのか。ジョンもそのことがよくわかっていたような気がする。ポールとジョンの声が寄り添ったり離れたりするのを聴いていると、なんだかジーンときますね。

演奏の前に語られる 'I Dig A Pigmy' by Charles Hawtrey & the Deaf Aids. Phase 1, in which Doris gets her oats.（チャールズ・ホートゥリーと聾者協会による『ピグミーにぞっこんだ』をやります。第1部は「ドリスは男とヤッてばかりいる」です）という語りは、ジョンによるかなりきわどい言葉遊び。I Dig A Pigmy は〔ディグ・ア・ポニー〕のもじりでしょうか。Charles Hawtrey（1914～1988）はゲイだと噂されたコメディ俳優。

遠山 もともと〔ピープル・フー・アー・ディファレント〕で名が知られているアップル所属のアーティスト、モーティマーのために書かれた曲ですが、自分たちでレコーディングすることになりました。録音は、ルーフトップ・コンサートの翌日、アップル・スタジオです。

サウンド・ギミックを凝らしているわけではないのですが、やはり聴かせますね。いい演奏です。イントロのアコースティック・ギターはポール。簡単なフレーズですが、なかなか思い

CamScannerでスキャン

つかないリフです。大きなコード・ストロークも巧み。それから、ジョージによるベースふうのエレクトリック・ギター（指弾き）。いいメロディを踏んでいる。We're going home（家に帰るところなんだ）の歌詞にぴったり合っている。

2. Dig A Pony

ディグ・ア・ポニー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年1月22・24・28・30日　Ⓛ 3分53秒　Ⓥ ジョン（ポール）

里中　ジョンの作品。音源はルーフトップ・コンサートのもの。ジョージが「ワン、トゥー」とカウントし、息抜きに吸っていたタバコの火を消していなかったリンゴが「Hold it!」（ちょっと待った！）と制止し、ジョンが鼻をすする。そうとう寒かったようですね。ロンドンの1月30日、真冬の冷たい風、どんよりとした曇り空、気温は摂氏2度ぐらい。ジョンとジョージは厚いコートを着ている。演奏を終えると、ジョンはThank you brothers. My hand's getting too cold to play the chords.（みんな、ありがとう。手がかじかんじゃってコードが弾けないよ）といっている。とはいえ、歌も演奏も素晴らしい。

アタマのI dig a ponyは「ポニーにぞっこんだ」という意味。ponyは「小馬」ですが、ここでは「小馬のように可愛い女の子」のこと。All I want is you（ほしいのはキミだけ）は、ジョンからヨーコへのメッセージ。このころのジョンは、ヨーコのことしか頭になかったようですね。

遠山　意味不明な歌詞もあります。たとえば、Oh, now I roll a stoney / Well you can imitate everyone you knowの部分。「僕は小石（ストーニ）をころがす（ロールする）／何でも真似すりゃいいじゃないか」というような意味。日本語に訳すと、何のことかさ

っぱりわかりませんが、英語で聞くとローリング・ストーンズを意識して歌詞が書かれたことがわかる。ビートルズの真似ばっかりするストーンズをからかったらしい。

ここではリンゴをほめたい。ジョンが Because… (だって……) と叫んだあと、リンゴが絶妙のタイミングで入ってくる。このフィル・インはべつだん難しいフレーズではありませんが、間といい、音といい、とにかくかっこいい。リンゴは曲へ合流していくのが、とても上手。

3. Across The Universe

アクロス・ザ・ユニヴァース

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年2月4・8日、70年4月1日 Ⓛ 3分46秒 Ⓥ ジョン

里中 ジョンの名曲。Words are flowing out like endless rain into a paper cup…「やむことのない雨のように、紙コップのなかに言葉が注ぎ込まれあふれだしていく」というフレーズからはじまるシュールな歌詞。言葉が譜面のうえにこぼれ落ち、空に舞いあがり、壮大な宇宙に消えていくといったイメージがある。そして、それに合った美しいメロディ。天才の仕事です。ジョン本人もすぐれた曲の一つに挙げている。

曲のなかで何度も復唱される Jai Guru Deva Om は、「勝利、グル (導師)、梵天、オーム」を意味するヒンズー教のマントラ (真言)、あるいは祈りの言葉。

遠山 歌詞の内容からマハリシの講義による影響が指摘されますが、レコーディングされたのは、〔レディ・マドンナ〕が録音されたのと同時期、つまりビートルズがインドを訪問する前のこと。ジョンは、自分ひとりで天才詩人になっていたわけです。

ジョンによれば、「ほんとうにいい歌は、メロディがなくても、

歌詞だけでその価値を見いだせる。それに該当する曲が、『アクロス・ザ・ユニヴァース』だ」と、あるインタヴューで語っている。

はじめて発表されたのは、世界野生動物保護基金（WWF）主催のチャリティ・アルバム『ノー・ワンズ・ゴナ・チェンジ・アワ・ワールド』（1969年12月12日）においてでした。イントロとエンディングに鳥の声と羽ばたきの音が入っているので、通称「バード・ヴァージョン」と呼ばれています。これは、ジョージ・マーティンがプロデュースしたもので、アルバム『パスト・マスターズVol. 2』に収録されています。

話は変わりますが、2008年2月4日に設立50周年を迎えたNASAが、その記念行事の一環として、この曲を北極星に向けて発信しました。ニクいことをやりますね。

4. I Me Mine

アイ・ミー・マイン

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1970年1月3日、4月1日 Ⓛ 2分25秒 Ⓥ ジョージ（ポール）

里中　映画『レット・イット・ビー』で、ジョージ本人みずから述べているように、「ヘヴィ・ワルツ」のような曲。しかし、途中から曲調が唐突に変わり、その変わり具合が……素敵じゃない。ポールに手伝ってもらったら、もっといい曲になったのに。

歌詞は「僕、僕、僕」と勝手にいじけているのかと思ったら、そうではないようですね。自己中心的なエゴイストをけなしている。

遠山　「一日中、俺、俺、俺」という歌詞は、横暴で独善的なポールを皮肉ったもの。でも、ポールは、このレコーディングに参加しているんですよ。ポール、偉い。

ジョージは、このセッション中に起きたポールとの口論がきっかけになって、「ビートルズをやめる」といいだした。「責めているわけじゃない。こういうふうに弾いてほしいだけなんだ」というポールに、「いうとおりに弾けばいいんだろ」とふてくされるジョージ。このやりとりは、映画でも見ることができます。ジョージは、天才の道具にされるのが我慢ならなかったんです。

歌詞は、ヒンズー教の経典の一つである「バガヴァッド・ギーター」(神の詩)からヒントを得て書いたと語っています。ところで、リフレインのI me me mineは、なぜ「I my me mine」にならないのか、という質問をよく受けるのですが、それはスカウス(リヴァプールなまり)だからです。スカウサー(リヴァプールっ子)は所有格(my)を目的格(me)で代用するんです(くわしくは拙著『ビートルズの真実』をお読みください)。

映画では、この曲に合わせてジョンとヨーコがワルツを踊っていますが、このシーンがあるということでアルバムへの収録が決まりました。でも、レコーディング(70年1月3日)にジョンは参加していません。デンマークへ遊びに行ってしまったそうで……。

5. Dig It

ディグ・イット

Ⓦ Lennon / McCartney / Starkey / Harrison
Ⓡ 1969年1月24・26日 Ⓛ 49秒 Ⓥ ジョン

里中 これも公認曲ですか。ジャム・セッションにしか聴こえないけど。ジョンの歌っている歌詞も即興ですよね。じっさいのところ、何分ぐらい演っていたんでしょうか。このアルバムでは49秒しか収録されていない。映画『レット・イット・ビー』

では、もっと長くやっていたような気がしますが。

dig it という表現ですが、"Can you dig it?" といえば、「わかったかな?」の意味。"You'll dig it." といえば、「きっと気に入るよ」の意味。共通して漂っているのは「深く味わう」というニュアンス。曲の最後で、That was 'Can You Dig It' by Georgie Wood. And now we'd like to do 'Hark The Angels Come'. (いまのはジョージィ・ウッドの「わかったかな?」でした。次は「はら天使がお出ましだ」をやりましゅ) はジョンの得意のおふざけ。ジョージィ・ウッドはコメディアン。Hark The Angels Come は天使の誕生を祝うクリスマス・ソング。ジョンが少女のような声を出しているのはそのためです。

遠山　レコードではかなり短くカットされて使われていますが、もともとは〔Can You Dig It?〕というタイトルで、およそ12分以上にも及ぶジャム・セッションでした。69年1月26日のことです。歌詞はもちろん即興。いま里中さんが説明したジョンのセリフは、1月24日に録音にしたものです。

映画では、Like the FBI / And the CIA のところで、シェイカーを振るジョージ・マーティンと、思わずニコっとするジョージが映される。みんな楽しそうに見えますね。

サウンド面のことをいうと、唯一ビリー・プレストン（ハモンドオルガン）だけがリズムをとろうとして頑張っている(笑)。真面目に取り組んでいるのはビリーだけで、あとは休み時間のノリ。ジョンのおふざけにテキトーに相槌を打っているという感じ。でも、これで聴かせてしまうのは、やはりジョンの声の魅力でしょうね。

6. Let It Be

レット・イット・ビー

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1969年1月25・31日、4月30日、70年1月4日
Ⓛ 4分03秒 Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ、ポール）

里中 やっぱり名曲です。『パスト・マスターズ』には、ジョージ・マーティンによる〔レット・イット・ビー〕が収録されていますが（シングル・ヴァージョン）、このフィル・スペクターによるものと比べてどうですか。両プロデューサーが素材にした音源は、まったく同じものですが。

曲が書かれたいきさつですが、トラブルつづきのバンドに頭を悩ませていたポールの夢のなかに、子どものころに亡くなった母メアリーがあらわれて、「あるがままにまかせない」(Let it be.) といったとか。

遠山 僕は、フィル・スペクターよりビートルズを理解し、また愛していたジョージ・マーティンのヴァージョンのほうが好きです。サウンドがビートルズらしい。〔レット・イット・ビー〕は、ポールが14歳のときに死別した母へのトリビュート曲といわれています。ポールが子どものころ、弟のマイクとケンカを始めると、母メアリーが「Let it be. Let it be, boys!」(もういいから、おやめなさい) といって叱ったとか。

有名なビートルズ・ツアー・ガイド、エディ・ポーターが「ファザカリー（リヴァプール北部のかなり治安のよくないエリア）出身の女性が、そんなBBCのアナウンサーのような上品な言葉づかいをするかなあ」と首をかしげていましたが、子どもたちにスカウス・アクセント（リヴァプール訛り）を使わせないようにしていたメアリーのことですから、「レット・イット・ビー」といっていた可能性は高いと僕はみています。

ちなみに、父親のジムは「Put it there. Put it there, boys!」(仲よ

く、さあ握手！）と子どもたちをなだめたようです。お父さんへのトリビュート曲〔Put it there〕は、ポールのソロ・アルバム『フラワーズ・イン・ザ・ダート』(1989年) に収録されています。

7. Maggie Mae

マギー・メイ

Ⓦ Trad arr-Lennon / McCartney / Starkey / Harrison
Ⓡ 1969年1月24日　Ⓛ 38秒　Ⓥ ジョン（ポール）

里中　盗みをはたらいた娼婦のことを歌っている。作者は不明。故郷リヴァプールの船員たちのあいだで歌われていた春歌のようですが、ほんとうのところはどうなんでしょう。ジョンが即興で歌いだしているところからみると、もともとあった曲なのでしょうか。

このアルバムに収録されたものは、1月24日のセッションのときに即興で歌われたもの。もともと収録するつもりではなかったことがわかります。歌い方も違いますね。robbin という単語のところでは、巻き舌を思いっきり震わせている。

遠山　スキッフルの全盛時代（1950年代後半）の、はるか以前から歌われていたようです。マギー・メイは実在の人物で、船乗りたちをお客に商売していた、いわゆるストリート・ガールでした。彼女が住んでいたというアパートが、街の中心から少し外れたデューク・ストリートにあります。彼女は売春の有罪判決を受けて、オーストラリアへ島流しとなりました。いまでも「マギー・メイ」といえば、リヴァプールっ子なら、売春婦のことだとすぐにわかる。「マギー・メイ」は娼婦の代名詞なんです。

1997年に再結成された、ジョンのオリジナル・バンド、クオリーメンも好んでこの曲をステージでとりあげています。メンバーのロッド・デイヴィス（ジョンの旧友で、当時もクオリーメンの

メンバー）がいうには、クオリーメンのレパートリーだったそうです。1957年から59年にかけてこの歌をやっていたらしい。そういう思い出の曲なんです。

ビートルズになってからもウォーミングアップのために演奏していましたが、スカウサー（リヴァプールっ子）であることの団結心も確認しあっていたのだと思います。それにしても、スカウス（リヴァプールなまり）丸だしの歌いっぷりです（笑）。

8. I've Got A Feeling

アイヴ・ガッタ・フィーリング

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1969年1月22・24・27・28・30日 Ⓛ 3分36秒 Ⓥ ポール、ジョン

里中 ジョンとポールの共作曲にして、正真正銘のライヴ録音。ジョンのヴォーカルが魅力的なのはもちろんだけど、ポールがキレたらジョンよりコワいということを見せつけている。ソロ・アルバム『ラム』に収録されている〔モンクベリー・ムーン・デライト〕なんかもそうだけど、イッてしまったポールはほんとうに手がつけられない。パワフルすぎる（笑）。

最後にジョンとポールそれぞれがつくった歌詞を同時に歌うところなどは、ビートルズが他のグループをライヴァルとして寄せつけなかった理由がよくわかる。こういう"融合"を、どのグループも真似できなかった。

この曲で思い出すのは、映画の一場面。ブリッジでベンディング（チョーキング）がだんだん下降していくところを、ポールがジョージに教えている。それが、まさに"コーチ"しているという態度なんだよね。

遠山 ポールがつくった〔アイヴ・ガッタ・フィーリング〕（当時のフィアンセ、リンダに捧げた曲）と、ジョンの〔エヴリバディ・

ハド・ア・ハード・イヤー〕（ビートルズの過去を回顧した歌詞）という二つの曲をつないで一つにまとめたもの。ジョンの生涯をつづったドキュメンタリー映画『イマジン』のなかで、ジョンがアコースティック・ギターをつま弾きながら、〔エヴリバディ・ハド・ア・ハード・イヤー〕を歌っているシーンが観られます。

コード進行がともにAとDの繰り返しだったので、そうした「融合」が可能だったんです。最後はポールがつくった部分とジョンがつくった部分を二人が同時に歌いますが、何の違和感もないばかりか、むしろぴったりハマッています。これぞレノン&マッカートニー。

曲が終わったところで、ジョンが「Oh, my soul...（拍手）...so hard」（参ったなあ……難しいや）とこぼしているのが、なんともプロっぽい（笑）。

9. One After 909

ワン・アフター・909

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年1月28・29・30日　Ⓛ 2分52秒　Ⓥ ジョン、ポール

里中　この曲を「駄作」とか「凡作」という人がけっこういますが、私自身、このアルバムのなかでもっとも聴き込んだ曲なんです。高校生のときも、仲間とよく演奏しました。二人（ジョンとポール）のノリもいいし、Picked up my bags, run to the station（荷物を持って駅まで走った）から始まるパートのところなんて、ジョンの魅力的なヴォーカルに思わずウットリしてしまう。しかも、ライヴ演奏ですよ、これ。

最後にジョンが口ずさむ、Oh, Danny boy, the altar man is calling（ダニー坊や、ミサの侍者が呼んでいるよ）は、もとはアイルランドの民謡。現在でも歌われるスタンダード曲〔ダニー・ボー

イ）では、Oh. Danny boy, the pipes, the pipes are calling（愛しいダニー坊や、バグパイプが、召集のバグパイプが呼んでいるよ）と歌われています。

遠山　これもルーフトップ・コンサートからのライヴ録音。ジョンが17歳のころ（ジョンがポールに出会った直後のころ）に書いた作品で、1960年の時点ですでに曲として完成しており、その音源（ベースは故スチュアート・サトクリフ）も残っています。〔フロム・ミー・トゥ・ユー〕をレコーディングした際に一緒に録音されましたが、満足のゆく出来ではなかったので、アルバムにもシングルにも収録されませんでした（アルバム『アンソロジー1』に収録）。そして数年の時を経て、ようやく陽の目を見ました。

演奏はというと、昔から何度もライヴでやっていますから、4人の息もぴったり。やっぱりうまいですね。……いやいや、ライヴでこの曲を演奏していたころはリンゴの加入前だから、3人の息もぴったりです。

〔ワン・アフター・909〕（9時9分発の次の列車、もしくは運行番号909号の次の列車）の「9」はご存知、ジョンのラッキー・ナンバー。そのころからすでに「9」を意識していたんですね。

10. The Long And Winding Road

ザ・ロング・アンド・ワインディング・ロード

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1969年1月26・31日、70年4月1日　Ⓛ 3分37秒　Ⓥ ポール

里中　ポールのバラード曲。いい曲ですが、大仰なアレンジがほどこされていて、どうも鼻白んでしまいます。感動を押し売りされているような気分とでもいうのかあ。大編成のオーケストラはいらないよね。ジョージ・マーティンがやったら、こんなふうにはならなかったと思う。フィル・スペクターがよくな

い（笑）。『アンソロジー3』に収録されたものと比べて、どう思われますか。

歌詞の内容から、なんとかしてビートルズを立て直したいというポールの心情が汲み取れます。「長く曲がりくねった道（the long and winding road）を歩くのだけれど、なかなか君の扉（your door）へ行き着けない。どうしたら君のもとへたどりつけるのか教えてほしい（Let me know the way.）」というようなことを歌っている。

逸山　僕は、ポールのアイディアとイメージが反映されている『アンソロジー3』のヴァージョンのほうが好きです。でも、やっぱり耳になじみがあるのはフィル・スペクターのヴァージョン。

ポールはフィル・スペクターのアレンジがほんとうに気に入らなかったらしく、ビートルズの解散を求める訴状のなかでも理由の一つとしてあげたほどです。しかし、このアルバムのヴァージョンしか知らないファンのことを考慮してか、90年以降のライヴ・ツアーでは、控えめながらシンセサイザーを使ってオーケストラっぽくやっています。そのサーヴィス精神が、やはりポールはエンターテイナーだなあと思わせます。

ソロ・アルバム『ギヴ・マイ・リガーズ・トゥ・ブロード・ストリート』（1984年）に収録された、サックスをフィーチャーしたヴァージョンもいいですよ。また、ウイングス時代には、自分がイメージしていたシンプルなヴァージョンで演奏しています（『ウイングスU.S.A.ライヴ!!』収録）。

CamScannerでスキャン

11. For You Blue

フォー・ユー・ブルー

Ⓦ George Harrison
Ⓡ 1969年1月25日、70年1月8日 Ⓛ 2分30秒 Ⓥ ジョージ

里中 ジョージが書いたラヴ・ソング。ですが、ジャム・セッションふうの演奏のなかで、だんだん形になっていったような印象を受けます。

耳が引き寄せられるのは、ジョンによるスライド・ギター。ちょっと曲を聴いただけで、スライド・ギターを手にとったジョンの直感に感服。

演奏前に聞こえる、The queen says no to pot-smoking FBI members.（FBIのメンバーがマリファナをやるのは「ダメ」だと女王がいってるよ）のつぶやきはジョン。間奏でスライド・ギターを弾くジョンに、Bop, bop, cat, bop. Go Johnny go! There go the twelve bars blues. Elmore James got nothin' on this, baby.（ボップ、ボップ・キャット・ボップ。さあ、ジョニー、行け！ おなじみの12小節のブルースだよ。エルモア・ジェイムズが弾いているんじゃないぜ）といっているのはジョージ。Bop cat bop はブルースでよく用いられる掛け声。Go Johnny go! はチャック・ベリーの〔ジョニー・B・グッド〕に出てくるフレーズ。もちろん、ジョニーはジョンの愛称でもある。スライド・ギターの名手、エルモア・ジェイムズが弾いているわけじゃないぜ、とジョークを飛ばしている。

遠山 原題が〔George's Blues〕だったことからもわかるように、ブルースっぽい味つけがなされている。Because you're sweet and lovely, girl（愛くるしいから）/ I love you（好きだよ）と、歌詞もブルースっぽくて単純。

映画『レット・イット・ビー』では、メンバーがアップル本社に集まってくるシーンで流されます。69年1月9日の「ゲット・

I grew up in Hamburg, not Liverpool.

俺を育ててくれたのはリヴァプールじゃない。
ハンブルクだよ。

—John Lennon

ビートルズはドイツのハンブルクで修業時代を送った。

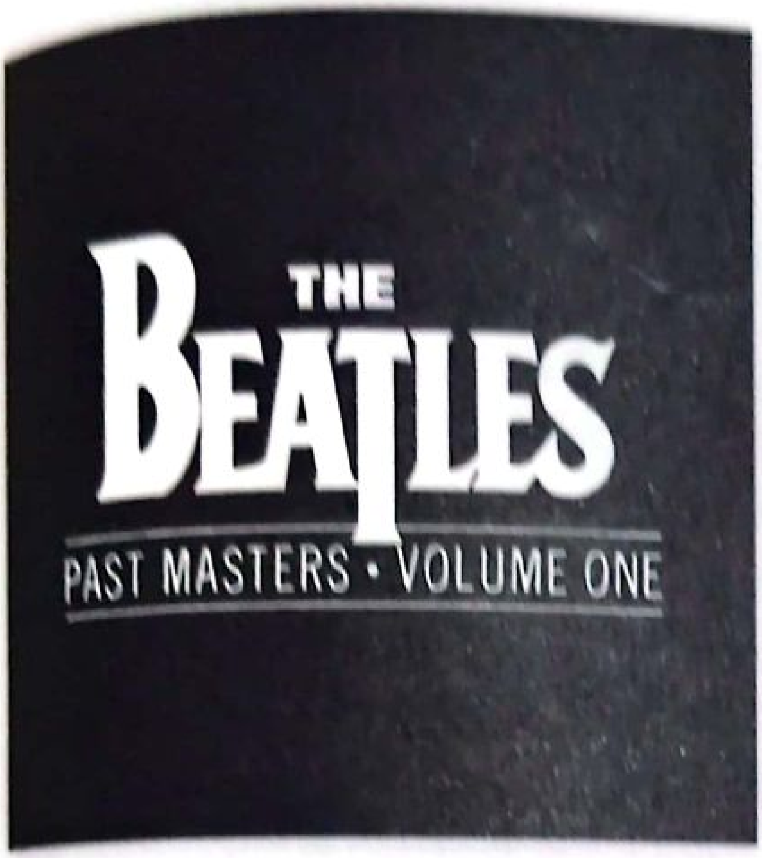
I'd been kingpin up to then. Now I thought, "If I take him on, what will happen?" It went through my head that I'd have to keep him in line if I let him join. But he was good, so he was worth having. He also looked like Elvis. I dug him.

それまで俺はバンドのリーダーだった。で、俺は考えた。
「ポールと組んだら、どうなるか」って。やつを仲間に入れたら、
あいつを手なずけておかなくちゃいけない。でも、ポールは
上手だったから、仲間に入れる価値はあった。エルヴィスにも似て
たんだ。要するに、俺はポールにぞっこんだったってわけさ。

—John Lennon

ポールとの出会いを回想して。

CamScannerでスキャン



Beatles Album 14

PAST MASTERS VOLUME ONE

パスト・マスターズ Vol. 1

1988年3月7日リリース

Ⓛ42分28秒 Ⓟジョージ・マーティン Ⓢアビイ・ロード・スタジオ、パテ・マルコーニ・スタジオ（パリ）

1 Love Me Do
2 From Me To You
3 Thank You Girl
4 She Loves You
5 I'll Get You
6 I Want To Hold Your Hand
7 This Boy
8 Komm, Gib Mir Deine Hand
9 Sie Liebt Dich
10 Long Tall Sally
11 I Call Your Name
12 Slow Down
13 Matchbox
14 I Feel Fine
15 She's A Woman
16 Bad Boy
17 Yes It Is
18 I'm Down

初々しいビートルズの傑作集

アルバム未収録曲を集めた作品集。といっても、目立たぬ曲の寄せ集めではない。過去の（past）傑作集（masters）。編集は、Vol. 1、Vol. 2とも、著名なビートルズ研究家のマーク・ルイソンがおこなった。

ビートルズは、シングルで発表した〔フロム・ミー・トゥ・ユー〕〔シー・ラヴズ・ユー〕〔抱きしめたい〕〔ヘイ・ジュード〕などのヒット曲をアルバムに収録しなかった。ふつうはヒットしたシングルをアルバムにも収録して、売り上げの相乗効果を狙うのが業界の定石だが、ビートルズはそうはしなかった。

『ウィズ・ザ・ビートルズ』が発売された1週間後に〔抱きしめたい〕がシングルで発表されたが、同アルバムに〔抱きしめたい〕は収録されていない。オリジナル・アルバムをすべて持っていても、聴くことのできないヒット曲がたくさんあったのだ。

そこで、アルバム未収録の作品を集めて編集したのが、この『パスト・マスターズ』である。ルイソンがライナー・ノーツで書いているように、「もし、すでに発売されている13枚のＣＤをお持ちなら、この２枚を加えることによって、あなたはレコード史上、もっとも成功を収めた、もっとも偉大なるアーティスト、ビートルズの全作品を手に入れたことになる」わけだ。

この『パスト・マスターズ　Vol. 1』には、1962年のデビュー曲〔ラヴ・ミー・ドゥ〕から65年の〔アイム・ダウン〕までの、初々しいビートルズのヒット曲が収録されている。

CamScannerでスキャン

初々しいビートルズの傑作集

アルバム未収録曲を集めた作品集。といっても、目立たぬ曲の寄せ集めではない。過去の（past）傑作集（masters）。編集は、Vol. 1、Vol. 2とも、著名なビートルズ研究家のマーク・ルイソンがおこなった。

ビートルズは、シングルで発表した〔フロム・ミー・トゥ・ユー〕〔シー・ラヴズ・ユー〕〔抱きしめたい〕〔ヘイ・ジュード〕などのヒット曲をアルバムに収録しなかった。ふつうはヒットしたシングルをアルバムにも収録して、売り上げの相乗効果を狙うのが業界の定石だが、ビートルズはそうはしなかった。

『ウィズ・ザ・ビートルズ』が発売された1週間後に〔抱きしめたい〕がシングルで発表されたが、同アルバムに〔抱きしめたい〕は収録されていない。オリジナル・アルバムをすべて持っていても、聴くことのできないヒット曲がたくさんあったのだ。

そこで、アルバム未収録の作品を集めて編集したのが、この『パスト・マスターズ』である。ルイソンがライナー・ノーツで書いているように、「もし、すでに発売されている13枚のＣＤをお持ちなら、この2枚を加えることによって、あなたはレコード史上、もっとも成功を収めた、もっとも偉大なるアーティスト、ビートルズの全作品を手に入れたことになる」わけだ。

この『パスト・マスターズ　Vol. 1』には、1962年のデビュー曲〔ラヴ・ミー・ドゥ〕から65年の〔アイム・ダウン〕までの、初々しいビートルズのヒット曲が収録されている。

CamScannerでスキャン

1. Love Me Do

ラヴ・ミー・ドゥ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1962年9月4日 Ⓛ 2分22秒 Ⓥ ポール (ジョン)

里中　リンゴがドラムを叩いているヴァージョン。その意味で、ファンには貴重です。アルバム『プリーズ・プリーズ・ミー』に収録された〔ラヴ・ミー・ドゥ〕のところでも述べたように、〔ラヴ・ミー・ドゥ〕には三つのヴァージョンがある。すべて、ドラマーが違う。リンゴが叩いたヴァージョンはデビュー・シングルで使われましたが、アルバムでは使われませんでした。

遠山　62年9月4日にレコーディングがおこなわれた際、プロデューサーのジョージ・マーティンは、スタジオ録音に不慣れだったリンゴに不安を感じたため、セッション・ミュージシャンのアンディ・ホワイトを起用して、ふたたび録音しなおした(9月11日)。結果、リンゴのヴァージョンはデビュー・シングルに使われ、アンディ・ホワイトのヴァージョンはアルバム用に使われることになった。その後、シングルは何度も再発されたものの、初回発売ぶん以外のシングルは、すべてアンディ・ホワイトのヴァージョンに差し替えられた。つまり、リンゴのヴァージョンが聴けるのは、デビュー・シングルとして初回にプレスされたものだけだったんです。そういうわけで、この『パスト・マスターズ』が出たことで、やっとリンゴのヴァージョンが聴けるようになった。リンゴはそのことを恨んでいて、いまでも冗談交じりにジョージ・マーティンにからむようです(笑)。

なお、デビュー直前に脱退させられたピート・ベストのヴァージョン(62年6月6日収録)は、『アンソロジー1』で聴くことができます。

過日、『The Beatles Lylics』の出版記念パーティの席で、著者

のハンター・デイヴィスに「ビートルズの作品で、歌詞がいちばん素晴らしいと思うのは？」と尋ねたところ、その答えはなんと〔ラヴ・ミー・ドゥ〕でした。それも即答。わずか10行ほどの歌詞が与えた衝撃は、身震いするほどすさまじかったようです。

2. From Me To You

フロム・ミー・トゥ・ユー

Ⓢ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年3月5日 Ⓛ 1分56秒 Ⓥ ジョン、ポール

里中　〔From Me To You〕(ボクからキミへ) だなんて……ファンを意識して書かれたのでしょうか。わかりやすいタイトル、覚えやすい歌詞、歌いやすそうなメロディ。でも、じっさいこっそり歌ってみると、音程がこまかく上下するので、素人には歌いにくい。がっかりでした (笑)。

ジョンとポールによるイントロの「ダダダーダダ、ドゥンドゥンダー」。このユニゾンからしてもう耳が引き寄せられる。それからファルセットの「ウー」。首をふってのそれは、女の子たちを完全にノック・アウトした。ポールは、ミドルエイトをつくっているときに「これだ！」と感じたという。オーソドックスなコード進行にしたがうのではなく、モードを変換することで、新たな地平が拓けることに気づいたようです。

演奏面では、ハーモニカが印象的。ジョージ・マーティンのすすめにより、ジョンがハーモニカを吹いてみた。これがドンピシャリ。ポップでブルージーな雰囲気がうまく曲に浸透しています。

遠山　3枚目のオリジナル・シングルで、イギリスでは63年の5月から7週連続で1位を獲得しています。ご指摘のとおり、この曲はファンを喜ばせるために書かれました。また同時に、フ

CamScannerでスキャン

ァンに対する感謝の気持ちの表明でもありました。じっさい、ライヴではフロム・アス・トゥ・ユー（ボクたちからキミたちへ）と歌われることも多かった。BBCラジオでもっていた番組もズバリ『フロム・アス・トゥ・ユー』でした。『ライヴ!! アット・ザ・BBC』では、主題歌となった替え歌ヴァージョンが収録されています。

ジョンとポールは、ヘレン・シャピーロの前座をつとめた全英ツアーの移動中、バスの中でこの曲を書き上げました。この時期、ジョンとポールは、滞在中のホテルの一室とか、移動中の乗り物の中とかで、じつに多くの曲を書いています。まるでヒット曲の法則を知っているかのように次から次へと。

3. Thank You Girl

サンキュー・ガール

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年3月5日、3月13日 Ⓛ 2分02秒 Ⓥ ジョン、ポール

里中　シンプルというより、曲自体が弱い感じがする。でも、ジョンとポールのヴォーカルでうまく持ちこたえている。デュエットするジョンとポールは、ユニゾンでも和音でも、とてもうまく融合しあっていて、つくづくうまいなと思う。

歌詞は、You've been good to me, you made me glad when I was blue（なんてやさしいんだ。沈んでいた僕を元気づけてくれた）/ And eternally I'll always be in love with you（これからもずっと君を愛しつづけるよ）/ And all I gotta do is thank you girl, thank you girl（君への感謝の気持ちでいっぱいさ）といっているように、これも前曲同様、ファンへの感謝の歌なんですね。

演奏面では、リンゴのドラミング。耳をそばだてると、リンゴはやっぱり上手だったんだなあと思う。それからジョンのハ

ーモニカ。曲のいい香辛料になっている。
遠山　「シングル用に書き始めたものの、うまくいかなかったのでB面にもっていった」とはジョンの弁。結局、「フロム・ミー・トゥ・ユー」のB面として発表された（1963年4月11日）。ライヴでは63年の春から夏にかけて演奏されています。

〔フロム・ミー・トゥ・ユー〕同様、この曲もファンへの感謝の気持ちがあらわれています。もともとは〔Thank You, Little Girl〕で、せっせとファンレターを送ってくれるファンへの「返事」であったようです。

すでにこのころの楽曲には、たんに「マージー・サウンド」というカテゴリーには収まらない、ビートルズにしか創造しえない独特のテイストがあります。それはリンゴのドラミングにもあらわれているのですが、イントロのフロアタムの連打からメロに入るときのあざやかなフィル。リンゴは、誰も思いつかなかったことを、平気な顔をしてやっている。

4. She Loves You

シー・ラヴズ・ユー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年7月1日　Ⓛ 2分20秒　Ⓥ ジョン、ポール（ジョージ）

里中　この曲はさまざまな魅力に満ちあふれています。曲名を〔アイ・ラヴ・ユー〕ではなく、〔シー・ラヴズ・ユー〕とした発想にまず脱帽。ジョンとポールのヴォーカルにも舌を巻く。それからリンゴのドラム・プレイ。最初から最後まで耳を離せない。バスドラの多用は、ライヴを意識してのことでしょうか。ジョージのキラキラしたギターの音色にも耳を奪われる。余分な音がまったくない仕上がり。聴き終えると、自分がさっきいた場所とは違う場所にいることに気づく。連れ去られた快感がある。

CamScannerでスキャン

傑作とはこれです。

最良の時期の最高の曲。ミリオンセラーになったのもわかります。3か月でなんと100万枚のレコードを売っている。あきれるね（笑）。すべてがキラキラしているように見える。ジョンが生涯をつうじて愛した曲というのもわかります。

亀山 4枚目のオリジナル・シングル。ビートルズといったら、まずこれ。63年6月26日、公演で訪れていたニューカッスルのホテルの一室で書かれました。3人称（彼女）を主語にしたのはポールのアイディア。

ポールの父ジムは「とてもいいよ。でも、一つだけ気にかかることがある。She loves you, yes, yes, yes と歌うわけにはいかないのかな」といったそうです（笑）。それくらい"Yeah! Yeah! Yeah!"は衝撃的なものでした。このリフレインで、当時の重苦しい社会の空気が一掃され、ビートルズはヨーロッパ全土で「ザ・イェー、イェー、イェーズ」と呼ばれることになった。「Yeah! Yeah! Yeah!」がポップ・ミュージックのアイコンになったのは、この曲が大ヒットしたからなんです。

僕もこの曲にしびれて、ビートルズのファンになりました。ジョンとポールの完璧なハモり、なんとなく遅れて入ってくる感じのリンゴのドラム、歌にからんでくるジョージの見事なギター。すべてが爽快で、初めて聴いた日から数日間、ずっと頭から離れなかった。

5. I'll Get You

アイル・ゲット・ユー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年7月1日 Ⓛ 2分04秒 Ⓥ ジョン、ポール（ジョージ）

里中　シングル〔シー・ラヴズ・ユー〕のB面としてリリースされました。ジョンとポールの共作。ヴォーカルも、ジョンとポールのツイン・ヴォーカル。「キミをものにしてみせる」というタイトルどおりの求愛ソング。ジョンの評価は低いけれど、ポールは気に入っている様子。まあ、ポールは「好きだ」ということはあっても、露骨に「嫌いだ」と語ったことはないけどね。

この時期（初期のビートルズ）、とくに目立つのはコーラスのうまさ、ジョンの比類なきヴォーカル、それから哀しげなハーモニカ。ここでも全編ずっとハーモニカの音色を聴いていられる。リンゴのドラミングも忘れてはいけません。リンゴのドラム・プレイがビートルズの楽曲にどれほど貢献したのか、もっと評価されていい。

遠山　リンゴのドラムとジョンのハーモニカは、初期ビートルズの屋台骨。この曲では、ともに厚みのあるヘヴィな音を出していますね。

ライヴでジョンがよく歌詞を間違えるのは有名な話ですが、ここでも Well, there's gonna be a time when I'm gonna change your mind（キミがボクになびくのはもうすぐさ）となるべきところを、...I'm gonna make your mind と歌っています。間違えて歌っているヴァージョンをそのまま採用している。まったくいい加減というか、「これのほうがいい」と思ったのか。

『アンソロジー1』には、63年10月13日にロンドン・パラディアムで録音されたライヴ・ヴァージョンが収録されています。この日、ビートルズは英国でもっとも人気のあったテレビ番組

CamScannerでスキャン

「サンデー・ナイト・アット・ザ・ロンドン・パラディアム」に出演。これがビートルズを英国全土に知らしめるきっかけとなった。その日、パラディアムの周辺に集まった熱狂的なファンを、メディアは「ビートルマニア」と命名。ビートルズが、一つの"現象"となっていきました。

6. I Want To Hold Your Hand

抱きしめたい

Ⓜ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年10月17日　Ⓛ 2分25秒　Ⓥ ジョン、ポール

里中　全米にビートルズ旋風を巻き起こすきっかけとなった大ヒット曲。ジョンとポールの共作。文字どおり、「鼻を突き合わせるようにして」つくった。ヴォーカルも二人でシャウトしている。イギリス国内の予約注文は、なんと100万枚を突破。予約注文でこの数字。もはやビートルズが"革命勢力"であったことがよくわかる。

いきなり Oh yeah, I'll... で始まりますが、英米の女の子たちに聞くと、好きな子に恥ずかしながらも勇気をだして声をかけようとしている、恋に未熟な男の子のぎこちなさが凝縮されていて可愛いという。

Oh yeah, I'll tell you something（あ、そうそう、いっておくね）/ I think you'll understand（わかってくれると思うんだけど）/ When I'll say that something（告白するときには）/ I wanna hold your hand（キミの手を握っていたいんだ）ぐらいの感じかなあ。タイトルを直訳すると「キミの手を握りたい」ですが、本音は「抱きしめたい」んですね。いいタイトルをつけてくれました。求愛のシャウトを聴いていると、「抱きしめたい」気持ちがよくわかる（笑）。

遠山　未開拓のアメリカ市場を"射程"に入れて書かれた曲。

最終的にアメリカでは500万枚を売り上げた。異常事態が発生していたことがわかります。「スゴい」というより「コワい」(笑)。

注目すべきは、録音機材がそれまでの2トラックに代わって、4トラックになったこと。これによって、サウンドづくりの幅が広がった。現在では、48トラックなんて当たり前。でも、たった4トラックで、ビートルズはこうしたサウンドをつくりだした。

もう一つ。ビートルズはたった2分25秒で、アメリカに「文化大革命」を起こしたということ。白人黒人を問わず、アメリカのミュージシャン、アーティスト、そしてティーンエイジャーたちに与えた影響力といったら、この曲以上のインパクトをもった曲はほかにないでしょう。

7. This Boy

ジス・ボーイ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1963年10月17日　Ⓛ 2分15秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　むかしの邦題は、なんと〔こいつ〕でした。「こいつ」って(笑)。せめて、「この僕が」ぐらいにならなかったのか……。でも、いつのまにか〔ジス・ボーイ〕という表記になりました。

ジョンとポールが、スモーキー・ロビンソンの曲調を意識して、ツアー中のホテルの一室で書いた。歌詞は、僕の恋人を横取りした「あいつ」(that boy)が、いずれ彼女を泣かしてしまうであろうから、「この僕」(this boy)が取り返してみせる、というもの。

やはり3声ハーモニーが素晴らしい。曲自体も悪くはないけど、コーラス・グループとしての本領が発揮されています。低

音部がジョン、中音部がジョージ、高音部がポール。ジョージの声は、ジョンとハモってもいいし、ポールに寄り添ってもうまく融合する。ジョージのハーモニーがなかったら、ビートルズの楽曲がもつ美しさは語れない。

遠山　ジョージには手厳しい里中さんが、そういってくれると、わがことのようにうれしいです（笑）。たしかに、ジョージのハーモニーは美しい。ソロよりも、コーラスになるとうまさが際立つ。それだけでもA面になる価値がある。

ライヴでは、ジョン、ポール、ジョージの3人が1本のマイクに向かって顔を寄せ合って歌っていました。『エド・サリヴァン・ショー』の生演奏の映像（64年2月16日収録）でも、それを観ることができます。『アンソロジー1』に収録されているライヴ音源は、63年12月2日に収録されたTV番組「マーカム・アンド・ワイズ・ショー」に出演したときのもの。

イントロでは、ジョンがお気に入りだったギブソンのJ-160Eを4分音符で小刻みにストロークしている。ジョンはこのギターをデビュー前から愛用。なんと3本も持っていました（最初の1本目は盗まれてしまった）。ジョンといえばリッケンバッカー325が有名ですが、レコーディングではギブソンJ-160Eのほうを多く使っています。

8. Komm, Gib Mir Deine Hand

抱きしめたい（ドイツ語ヴァージョン）

Ⓦ Lennon / McCartney / Jean Nicolas / Heinz Hellmer
Ⓡ 1964年1月29日　Ⓛ 2分25秒　Ⓥ ジョン、ポール

里中　これ、早くも中学1年生のときに聴いているんです。『ビートルズNo. 5』というアルバムに収録されていた。日本で企画構成されて発売されたアルバムです（1965年5月5日発売）。

タイトルの〔Komm, Gib Mir Deine Hand〕は、英語に訳すと〔Come, give me your hand〕(こっちに来て、手を取って)になる。メロディに乗るように、歌詞はかなり意訳されていますね。

こうして改めて聴いてみると、発声やハーモニーがなんだか粗雑な感じがする。そもそも、なぜビートルズはドイツ語ヴァージョンを録音したのですか。下積み時代にお世話になったハンブルクのファンへの感謝の意を込めてレコーディングしたのでしょうか。

遠山　ドイツ語ヴァージョンのレコーディングは、ＥＭＩ西ドイツ支部(オデオン)からの、「ドイツでは、歌詞がドイツ語でないとヒットしない、だから、ドイツ語ヴァージョンをつくってほしい」という要請によって実現しました。というわけで、〔シー・ラヴズ・ユー〕(ドイツ語版)とともに、64年1月29日にパリのパテ・マルコーニ・スタジオでレコーディングされました。パリで録音されたのは、ちょうどそのとき長期にわたるパリ公演の真っ最中だったからです。

ビートルズは、このレコーディングに気乗りしていませんでした。レコーディングの当日、予約していたスタジオへ出向かず、ホテルの部屋でゴロゴロしていたそうです。プロデューサーのジョージ・マーティンから大目玉を喰らったのはいうまでもありません。まるで、ダダをこねて叱られる中学生のようだったとか(笑)。というわけで、「やっつけ仕事」になってしまいました。

ドイツ語への翻訳は、ルクセンブルク出身のタレントであるキャミロ・フェルゲンが担当しました。訳詞者としてクレジットされている Jean Nicolas も Heinz Hellmer も彼のペンネームです。

CamScannerでスキャン

9. Sie Liebt Dich

シー・ラヴズ・ユー（ドイツ語ヴァージョン）

Ⓦ Lennon / McCartney / Jean Nicolas / Heinz Hellmer
Ⓡ 1964年1月29日 Ⓛ 2分18秒 Ⓥ ジョン、ポール

里中 前曲につづいて、〔シー・ラヴズ・ユー〕のドイツ語ヴァージョン。同じ日に録音されました。なんと、この2曲のドイツ語ヴァージョンは、イギリスでは、解散後の1978年12月2日に発表されている（『レアリティーズ』収録）。日本では65年に発売されていますから（『ビートルズ No. 5』収録）、イギリスのファンよりも日本のファンのほうが早くドイツ語ヴァージョンを聴いていたことになります。

ところで、遠山さんはドイツ語も堪能ですが、どうです、彼らの発音は？ ドイツ人もびっくり？ ドイツ語がいちばんうまかったのは誰なのかも知りたい。

遠山 堪能だなんて、とんでもありません。ちょこっとだけです。以前、友人のウルフ・クルーガー（ミュージシャン。現在はビートルズおよびハンブルク・サウンドを研究している）に尋ねてみたところ、彼らのドイツ語は歯ぎれがよくて、とてもよい発音だとのこと。メンバーのなかで、いちばんドイツ語が上手なのは、ポールだそうです。

〔Sie Liebt Dich〕は、英語に訳すとそのまま〔She Loves You〕になる。〔抱きしめたい〕のドイツ語ヴァージョンと比べると、歌詞も比較的、英語に忠実です。でも、ジョンのやる気のなさが伝わってきますね。ポールはいつもどおり張り切っていますけど（笑）。

〔抱きしめたい〕はベーシック・トラックに合わせて、いわばカラオケのように歌って録音したわけですが、この〔シー・ラヴズ・ユー〕は、英語版のトラック・テープがすでに処分されてし

まっていたため、4人はすべてレコーディングし直さなければなりませんでした。ジョンのうんざりした顔が目に浮かぶ(笑)。というわけで、よく聴くと、残念ながら、演奏にきらめきもタイトさも感じられません。

10. Long Tall Sally

ロング・トール・サリー

Ⓦ Enotris Johnson / Richard Penniman / Robert Blackwell
Ⓡ 1964年3月1日 Ⓛ 2分02秒 Ⓥ ポール

里中　以前は〔のっぽのサリー〕と呼ばれていましたが、いまは〔ロング・トール・サリー〕になりました。

アルバム『ア・ハード・デイズ・ナイト』のセッションでレコーディングされましたが、全曲オリジナルでまとめることになったので、『ア・ハード・デイズ・ナイト』には収められませんでした。

すさまじいヴォーカル。"ぶちかまし度"の計測器があったら、おそらく針を振り切ってしまうだろうね。〔イエスタデイ〕のポールとはぜんぜん違う。たぶんポールには、「静穏」とか「狂乱」とかのスイッチがあって、自由自在にそういう状態になれるのでしょう(笑)。ポールの魅力は、高音になっても声が細くならないこと。じっさい高音でシャウトできるヴォーカリストはほとんどいない。それにしても圧倒的な迫力。血管が切れたことはないのかなあ。

遠山　リトル・リチャードの大ヒット曲で、スタンダード中のスタンダードとなったロックンロール・ナンバー(56年3月発表)。いろんなミュージシャンがカヴァーしていますが、ジョンの〔ツイスト・アンド・シャウト〕と同様、ポールのヴォーカルを超えるヴァージョンは見当たりません。というか、オリジ

CamScannerでスキャン

ナルさえも超えていると思う。

クオリーメン時代（ビートルズの前身）から歌っている曲で、ライヴでは"締め"の曲として演奏されていました。ビートルズの最後のコンサート（66年）でも演奏していますから、10年ちかくもずっと歌い続けてきたことになる。だから、ワン・テイクで収録している。

ドライヴ感を出しているのは、ギターとドラム。間奏は2回ありますが、1回目はジョンのワイルドなギター。2回目はジョージのノリのいいギター。それから、リンゴによる巧みなドラミングにも注目。ピアノを弾いているのはジョージ・マーティンです。

11. I Call Your Name

アイ・コール・ユア・ネーム

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年3月1日　Ⓛ 2分07秒　Ⓥ ジョン

里中　ジョンは、曲の前半を15歳ぐらいのとき書いたようですね。ミミ伯母さんの家の自室で。ませたガキというか、天才の片鱗をうかがわせるというか……。

いなくなった人を思って、僕はひたすら「あなた」の名を呼ぶという歌詞。「あなた」は僕の恋人なのか。いや、ひょっとすると、「あなた」はジョンの母、あるいは父だったのではないか。ポールはたぶん後者であろうといっています。

Don't you know I can't take it（僕が耐えられると思うのかい）のところの、前のめりのリズムがとてもいい。それと、リンゴの叩くカウベル。曲調をうまく捉えている。

遠山　ジョンはこの曲をビリー・J・クレイマー＆ザ・ダコタスにプレゼントしましたが、自分たちでもレコーディングをしま

した。おそらくポールのいうとおりでしょう。心変わりがして「やっぱり取り返したい」という気持ちがジョンのなかに芽ばえたんだと思います。というのは、ジョンは彼らに「バッド・トゥ・ミー」という曲もプレゼントしているんですが（これは全英1位を獲得した）、A面の「バッド・トゥ・ミー」には見向きもせず、B面の「アイ・コール・ユア・ネーム」のほうにこだわった。というわけで、他人に譲った曲をあとから取り戻してレコーディングした唯一の例となりました。

特筆すべきは、間奏部分でテンポが変わり、かなりスウィングした曲調になっているところ。ジョンは、スカのリズムを使ってみたかったらしい。この時期、こうした曲調をロックンロールに取り入れるミュージシャンはいなかった。なんでも吸収してしまうビートルズの巨大な胃袋には驚くばかりです。

リンゴはソロになってからカヴァーしていますが、リンゴがI call your name（僕はあなたの名前を呼ぶ）というときの「あなた」は、間違いなくジョンのことでしょう。

12. Slow Down

スロー・ダウン

Ⓦ Larry Williams
Ⓡ 1964年6月1・4日　Ⓛ 2分55秒　Ⓥ ジョン

里中　ジョンが好んで聴いていたラリー・ウィリアムズのナンバー。ライヴでもよく演奏していた（60年〜62年）。スピード感のあるジョンのヴォーカル。ジョージのギターが、その迫力にビビッっているように感じられるんだけど（笑）。ダブルトラッキング（ひとり二重唱）で歌っているので、迫力にさらに拍車がかかっている。

歌詞は、ストーカーのつぶやき。まるで恋愛ひとり相撲。

CamScannerでスキャン

Slow down（ゆっくり歩いてくれよ）/ Baby now you're movin' way too fast（なんでそんなに急ぐのさ）だなんていいつつ、自分は猛烈な早口でまくしたてている。

ビートルズはラリー・ウィリアムズの曲を6曲レパートリーにしていますが、公式発表曲でも3曲レコーディングした。この〔スロー・ダウン〕は、〔ディジー・ミス・リジー〕（ラリー・ウィリアムズの曲）のB面として発表されている。ラリー・ウィリアムズ（1935～1980）は、R＆Bのシンガーというよりむしろロックンローラー。白人の若者に人気があった歌手ですが、60年代にはすでに姿を消し、80年にハリウッドで自殺している。

遠山　当時、多くのリヴァプールのバンドがカヴァーしました。初期ビートルズのライヴァル・バンドだったジェリー＆ザ・ペイスメーカーズもそのうちの一つ。ジェリーは、いまだにこの曲を歌っています。彼によれば、「歌詞もよく、メロディもおもしろいので、歌っていて気持ちがいいんだ」とか。

『ライヴ!! アット・ザ・BBC』に収録されているヴァージョン（63年7月16日収録）は、ずいぶん荒削りですが、これも迫力満点。ジョージ・マーティンのピアノが入っていないぶん、よけいにワイルドに感じられます（ラジオ番組『ポップ・ゴー・ザ・ビートルズ』の音源）。

13. Matchbox

マッチボックス

Ⓦ Carl Perkins

Ⓡ 1964年6月1日　Ⓛ 1分57秒　Ⓥ リンゴ

里中　ロカビリーのシンガー、カール・パーキンスの曲（1957年発表）。ビートルズでは、まずピート・ベスト（リンゴの前のドラマー）が歌い、次はジョンが自分のレパートリーにした。そ

して、最後はリンゴが持ち歌とした。ビートルズに愛された歌なんですね。ジョンの「マッチボックス」を聴いてみたい。

録音はダブルトラッキングですが、一つの声にはエコーをかけていて、それがハモっているように聞こえるため、曲に深みと奥行きが出ている。リンゴのソロ・ヴォーカルのなかでは出色だと思います。

I said I'm sitting here watchin'（ぼんやり坐って）/ A matchbox hole in my clothes（服にあいたマッチで焦がした穴を見つめている）が冒頭の歌詞。内容は、放浪の旅をするみじめな男の話。

遠山　レコーディングでは、リンゴはいつになくハイでした。というのも、たまたまロンドンに来ていたカール・パーキンスの立ち会いのもとで、レコーディングがおこなわれたからです。リンゴはパーキンスの大ファンだったから、興奮と緊張に包まれたことは想像に難くありません。当日、リンゴはカール・パーキンスに話しかけるとき、かしこまって「ミスター・パーキンス」と呼ぶものだから、カール・パーキンスが「カールでいいよ」といっても、リンゴは緊張しながら「あなたのことを、とてもそんなふうには呼べませんよ」と答えたという微笑ましいエピソードが残っています。リンゴはカール・パーキンスのことを、それぐらい敬愛していたんです。でも、ビートルズが取り上げたことで、カール・パーキンスには莫大な印税が入り、ビートルズがカールに感謝されたことはあまり知られていません。

リンゴはこの曲をドラムを叩きながら歌い、さらに追加のヴォーカルを重ねました。イントロのギターはジョン、間奏はジョージ。ピアノはジョージ・マーティン。

14. I Feel Fine

アイ・フィール・ファイン

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1964年10月18日 Ⓛ 2分18秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

畠中 8枚目のシングル。ジョンによる、最初のフィードバックの音が印象的ですね。かつては電気系統のトラブルだといわれましたが、現在では偶然に得られた音をヒントにして意識的につくられたことがわかっている。ギターのピック・アップをアンプに向け、5弦の開放弦を弾くと同時に絞っていたヴォリュームをいっきにあげることで簡単に得られるので、コピー・バンドもよく真似しています。

特徴のあるギター・リフはジョンが考えついたもので、全編にわたってほぼユニゾンでジョンとジョージが弾いている。とかくこの曲はギターの話ばかりになりがちですが、ジョンのノリのいいヴォーカルとリンゴのラテンふうのドラミングも素晴らしい。

ビートルズがほかのミュージシャンと違うのは、曲づくりの方向性を、意外性へと向けたこと。このフィードバック奏法しかり、Gメジャーから不安定なEマイナーへの移行しかり（〔抱きしめたい〕に見られる）。結果、そうした自由気ままな奏法と戯れることで、ビートルズ・サウンドといわれる独自のスタイルをつくりあげた。感心します。

遠山 ジョンは、意図的にこのフィードバックによる"ノイズ"を生みだそうとしました。それは、最初のテイクからこの"雑音"が入っていることから明らかです。

後年、ジョンは「ジミ・ヘンドリックスやザ・フーよりも先にやった」と威張っていましたね（笑）。日本武道館での映像（66年7月1日の公演）を観れば、この音をつくっているジョンの姿

が確認できます。『アンソロジー2』や『ライヴ!! アット・ザ・BBC』にも収録されているので、ぜひ聴き比べてみてください。

ビートルズの大ファンとして知られるオアシスのノエル・ギャラガーは、ライヴの最後で、ギターをアンプに立てかけてフィードバックの音を残したままステージを去っていきますが、あれはビートルズへのオマージュなんです。

15. She's A Woman

シーズ・ア・ウーマン

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1964年10月8日　Ⓛ 3分02秒　Ⓥ ポール

里中　ポールの曲。ヴォーカルもピアノもポール。アビイ・ロード・スタジオへ行く途中で曲想が浮かび、スタジオでジョンの助けを借りて仕上げ、その日（64年10月8日）のうちに収録した。脱帽。

タイトルにgirl（女の子）ではなく、woman（女）を使っていることからもわかるように、ブルースっぽさを匂わせている。出だしは土くさい歌い方していますが、She's a woman who understands（彼女はできた女さ）/ She's a woman who loves her man（ひとりの男を愛するのさ）のパートはじつに軽快に歌いこなしている。

また、Turn me on when I get lonely（僕が沈んでるときは、元気づけてくれる）の「元気づけてくれる」(Turn me on）の部分は、「グループがマリファナに改宗したことのしるしとして」ジョンによって挿入された（イアン・マクドナルド）といわれている。ジョンの、オン・ビートで始まるタイトなリズム・ギターはあまりに単調だけど、そのぶんポールのシャウトが楽しめます。こうした独特な歌唱法を、ポールは早くから身につけていたんですね。

遠山　シングル〔アイ・フィール・ファイン〕のB面に収録され

ました。4枚目のアルバム『ビートルズ・フォー・セール』をレコーディングしているころに収録されたので、映画『ヘルプ！』でも聴くことができます。

ポールはこの曲が大のお気に入り。アルバム『ライヴ!! アット・ザ・BBC』にも収録していますし、66年の武道館公演でも2曲目に演奏している（6月30日のライヴを『アンソロジー2』聴くことができる）。また、91年に発表した『公式海賊盤』でもアコースティック・ヴァージョンが収録されています。これだけしつこく演奏しているのに（笑）、日本での人気はいま一つ。というか、好きだという人はめったにいない。なにがダメなんでしょうね。

16. Bad Boy

バッド・ボーイ

Ⓦ Larry Williams
Ⓡ 1965年5月10日 Ⓛ 2分19秒 Ⓥ ジョン

里中　ビートルズが公式発表したカヴァー曲は25曲。そのうち、〔ディジー・ミス・リジー〕〔スロー・ダウン〕、そしてこの〔バッド・ボーイ〕の3曲は、ラリー・ウィリアムズの曲で、いずれもジョンがヴォーカルをとっている。

勉強をサボって、ロックンロールに夢中になっている少年のことを歌っている。He don't wanna go to school and learn to read and write（奴は学校に行くわけでもないし、読み書きを覚えるわけでもない）/ Just sits around the house and plays the rock & roll music all night（家にいて、毎晩ロックンロールをがなり立てている）という"バッド・ボーイ"の話。まるで、学生時代のジョンみたい。

遠山　知ってましたか。ジョンがビートルズ時代にレコーディングした最後のカヴァー・ナンバーがこれなんです。アメリカ

のキャピトル・レコードが「アメリカ市場用に2曲用意するように」と要求してきたために、〔ディジー・ミス・リジー〕と一緒に、急遽レコーディングされました。ですが、〔バッド・ボーイ〕は、アルバム『ヘルプ！』の選曲に漏れてしまいます（〔ディジー・ミス・リジー〕は『ヘルプ！』に収録された）。というわけで、〔バッド・ボーイ〕はアメリカでの発表のほうが早く、イギリスでは1年以上も遅れて発売されました。

歌い慣れた曲とはいえ（60年から62年にかけて演奏している）、ジョンの絶叫ヴォーカルはいつ聴いても素晴らしい。キング・サイズ・テイラー・アンド・ザ・ドミノスのテッド・テイラーは当時をふりかえって、「とにかくハンブルク時代が最高だった。あんな熱気は後にも先にも経験したことがない。あのとき、あの場所に居合わせた人間にしか理解できないよ」と語ってくれたことがある。ハンブルク時代の、若きビートルズを、ホントに見たかった。

17. Yes It Is

イエス・イット・イズ

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年2月16日 Ⓛ 2分41秒 Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　ジョンの曲。聴き込むほどに、好きになりました。ヴォーカルに魅力がある。歌詞もわからずに聴いていたころでさえ、もの哀しい気分になり、意味もなく自分がいとおしい存在に思えたことを覚えている（笑）。

I could be happy with you by my side if I could forget her（彼女を忘れることができれば、キミと楽しく過ごせるのに）/ But it's my pride（でも、プライドが邪魔するんだ）/ Yes it is（ほんとうのことさ）……イアン・マクドナルドは、「ここに喚び起こされた幻想の女性は、

おそらくレノンの亡くなった母親、ジュリアだろう」と分析していますが、ジョンが若くしてこうした自己告白的な歌詞が書けたことに驚きますね。

それにしても、なにが素晴らしいかって、このコーラス。ジョンとポールのあいだにジョージが入ると、こうも素敵なコーラスになってしまう。ウットリとしてしまいます。

遠山 9枚目のオリジナル・シングル〔涙の乗車券〕のB面として発表されました。ジョンが〔ジス・ボーイ〕みたいな曲をもう一つ書いてみようと思ってつくった曲です。でも、本人は満足しなかった。ジョンは自分が書いた作品のなかで「もっとも嫌いな曲の一つ」だと語っている。いっぽうポールは「素晴らしい曲」と述べ、まったく逆の評価をくだしています。

おそらくジョンは、女性に対する理想が粗雑な形で書かれていることに我慢がならなかったのでしょう。「キミが赤い服を着ると、彼女を思い出してしまうから、赤は着ないでほしい」という幼稚な歌詞は、のちのジョンを赤面させるのに十分だった。でも、いい曲ですよね。

コーラスは、ビートルズの作品中、もっとも複雑だといわれています。3声になったり、2声になったり、ユニゾンになったり、高低が入れ替わったりしている。ジョージのうまさが光っています。

18. I'm Down

アイム・ダウン

Ⓢ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年6月14日 Ⓛ 2分31秒 Ⓥ ポール（ジョン、ポール、ジョージ）

里中 ポールの作品。10枚目のシングル〔ヘルプ！〕のB面として発表されました。ポール（ヴォーカル）もジョン（オルガン）

もリンゴ（ボンゴ）も荒れ狂っています。でも、そうしたなかでジョージだけが津軽三味線のようなリード・ギター（グレッチのテネシアン）を真面目に弾いている。まるで高橋竹山みたい。

歌詞の内容は、恋人のつれない態度に落ち込んでしまった男の嘆き。I'm really down（お手あげだ）/ I guess I'm down（もう手も足も出ない）/ Down on the ground（すっかりノビちゃった）と歌っている。down は「倒れて」でもあるし、「精神的にヘコんで」という意味でもある。

遠山　ポールが書いたリトル・リチャードふうの曲。「ロング・トール・サリー」に代わるオリジナル曲がほしくて書きました。ポール、自慢の1曲。この歌が発表されてからというもの、コンサートでのラスト・ナンバーが〔ロング・トール・サリー〕から〔アイム・ダウン〕に代わっていく。シェイ・スタジアム（アメリカ）でも武道館でも、ライヴの"締め"を飾ったのはこのナンバーでした。

65年6月14日、ポールは軽いタッチの〔夢の人〕、狂乱の〔アイム・ダウン〕、デリケートな〔イエスタデイ〕の3曲をレコーディングしました。まったく違うタイプの3曲をいっきにレコーディングしてしまえるなんて。ヴォーカル・スタイルの多彩さを裏書きしていますが、ありあまる情熱と体力に感心しないではいられません。それから、やっぱり、のどの強さ。ビートルズがライヴ・バンドとして成功したのも、ポールによるところが大きいですね。

オルガンを担当しているのはジョン。シェイ・スタジアムでのライヴ映像（映像版『アンソロジー』に収録）では、肘でオルガンを弾くなど、ノリノリで演奏しています。

As far as I'm concerned,
there won't be a Beatles reunion
as long as John Lennon remains dead.

僕にいわせれば、ジョン・レノンが死んでしまったいま、
ビートルズの再結成なんてありえないよ。

— George Harrison

CamScannerでスキャン

Well, obviously we can't keep playing
the same sort of music until we're about forty.

40歳になっても同じような音楽をやり続けるだなんて
できっこないよ。

— Paul McCartney

1963年のインタヴュー。60歳をこえてからは
「引退しなくちゃいけないのかい？」と逆に問うている。

What we generated was fantastic,
when we played straight rock,
and there was nobody to touch us in Britain.

俺たちのノリは最高だった。ストレートなロックをやらせたら、
俺たちにかなう連中なんてイギリス中どこを探してもいなかった。

— John Lennon

デビュー前のビートルズを回想して。

CamScannerでスキャン

Beatles Album 15

PAST MASTERS VOLUME TWO

パスト・マスターズ Vol. 2

1988年3月7日リリース

Ⓣ51分01秒 Ⓟジョージ・マーティン
Ⓢアビイ・ロード・スタジオ、トライデント・スタジオ、アップル・スタジオ

1 Day Tripper
2 We Can Work It Out
3 Paperback Writer
4 Rain
5 Lady Madonna
6 The Inner Light
7 Hey Jude
8 Revolution
9 Get Back
10 Don't Let Me Down
11 The Ballad Of John And Yoko
12 Old Brown Shoe
13 Across The Universe
14 Let It Be
15 You Know My Name (Look Up The Number)

永遠なれ、ビートルズ！

1965年の〔デイ・トリッパー〕から70年の〔ユー・ノウ・マイ・ネーム〕までを収録。なお、〔ストロベリー・フィールズ・フォーエヴァー〕や〔ペニー・レイン〕など、1967年のシングルが1曲もないのは、アルバム『マジカル・ミステリー・ツアー』(もとはアメリカ編集盤)にそれらが収められたことによる。

『マジカル・ミステリー・ツアー』は、アメリカのキャピトル編集盤がオリジナル・アルバムに昇格したのは前述の通り。また、〔ゲット・バック〕〔アクロス・ザ・ユニヴァース〕〔レット・イット・ビー〕の3曲は、オリジナル・アルバム『レット・イット・ビー』に収録されているが、ここに収められているヴァージョンはアルバム・ヴァージョンとは異なるものである。

彼らのレコード・デビュー（1962年10月5日）から解散宣言（1970年4月10日）までの活動期間はたったの7年半。その間に、ビートルズはさまざまなモチーフと遊び戯れることで、音楽の世界に革命を起こし、ポピュラー・ミュージックに新しい歴史をつくりあげた。

このアルバムは、主としてビートルズの中期から後期に至るシングル・ヴァージョンを集めたものだが、ビートルズが「偉大」であることを、わずか51分という短い時間のなかで、余すところなく伝えている。と同時に、聴き手は、ビートルズがいまも「旬」であることをあらためて実感するであろう。

CamScannerでスキャン

1. Day Tripper

デイ・トリッパー

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年10月16日 Ⓛ 2分48秒 Ⓥ ジョン、ポール（ジョージ）

里中 〔恋を抱きしめよう〕とのカップリングで、ビートルズ初の両A面シングルとして発売された。両A面になったのは、この曲をジョンが強く推したことによる。主としてジョンが書き、一部をポールが手伝った。

「デイ・トリッパー」とは「日帰り旅行者」のことですが、そこから転じて、ここでは「いつもはそうじゃないけど、気が向いたらやってみる人」とか「ハマりきってはいないけど、ちょっと興味をもっている人」という意味で使われている。明らかに、ドラッグを意識した使われ方ですね。

この曲がドラッグ・ソングであることはジョンもポールも認めていますが、性的なニュアンスをほのめかす表現も織り込まれている。She's a big teaser（彼女は男をじらす）の a big teaser は、a prick teaser（オチンチンをもてあそぶ女＝ヤラせてくれそうでヤラせてくれない女）の意味で使っている、とポールはほのめかしている。

遠山 この時期、ジョンは"立派な"ドラッグ・ユーザーになっていた。だから、週末だけ花柄のシャツを着てバンダナを巻き、面白半分にドラッグをちょこっとやって、アシッド・ロックに聴き入る「日曜ヒッピー」（＝デイ・トリッパー）が気に入らなかった。ジョンは当時、この曲について、「若者が聴けば、すぐにわかるはずだよ」と発言している。ジョンの妻シンシアがドラッグでトリップしてしまったときの様子をヒントにして書かれたともいわれています。

イントロのギターがいい。このリフのアイディアはジョンに

よるものですが、ジョージがダブルで弾いています。ノリがいいので、ジミ・ヘンドリクス、オーティス・レディング、ホワイト・スネイク、チープ・トリック、ELOなど、多くのミュージシャンがカヴァーしています。

2. We Can Work It Out

恋を抱きしめよう

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1965年10月20・29日 Ⓛ 2分14秒 Ⓥ ポール（ジョン）

里中　ポールが「すべてはうまくいくさ」(We can work it out) と軽快にさえずれば、ジョンが「人生は短いんだから、くだらないことでケンカなんかしている暇なんかないよ」(Life is very short and there's no time for fussing and fighting, my friend) とぶっきらぼうにつぶやく。そして、それら二つを結ぶポップな感覚。その「融合」が見事です。

1曲に二つの貌がある。ジョンとポールの貌。それが陰と陽、楽観と悲観、ジキルとハイド、聖と俗という二つの異なる要素になって楽曲のなかに立ちあらわれる。また、そうした相反するものを接合させるとき、そのセグエ（一つの曲からもう一つの曲へと自然につながること）のところで、ジョージとリンゴが巧みな仕事をする。そこに独特の変拍子が生まれ、それまで聴いたことのないような転調の美しさが生まれた。それがビートルズ・サウンドの本領だと思うのですが、いかがでしょう。

遠山　ジョンとポールという二つの個性がうまく握手した、「これぞビートルズ」という作品。ジョンであれ、ポールであれ、ソロになってからは……言いづらいのですが……誰一人としてビートルズを超えられなかったのは、そうした「融合」がなかったからでしょう。

11枚目のシングル。ジョンとポールの共作。ヴォーカルはポール。マイナー調のメロディになる中間部の Life is very short... のところからジョンが入ってくる。ジョージのタンバリン、リンゴのシンバル、ジョンのハーモニウム（足踏みオルガン）も、曲が最良であることに貢献しています。

アメリカ映画『招かれざる客』（1967年）で歌われる場面があるのですが、この歌がいかに多くの人たちに親しまれていたか、よくわかりました。僕も、この歌を聴いて人生の軌道修正をしたという元不良少年（英国人）に会ったことがありますが、この曲には落ち込んでいる人を鼓舞するパワーがありますね。

3. Paperback Writer

ペイパーバック・ライター

Ⓦ Lennon / McCartney

Ⓡ 1966年4月13・14日　Ⓛ 2分17秒　Ⓥ ポール（ジョン、ポール、ジョージ）

墨中　12枚目のシングル。ポールの作品（ジョンが歌詞の一部を手伝っている）。ヴォーカルもポール。ディストーションを効かせた大音量のギター（ポールだと思われる。このフレーズを考案したのもポール）と、重量感のあるベース（これもポール）に、ビートルズ・サウンドの奥行きの深さを感じます。武道館でも10曲目（最後から2番目）に演奏されました。そのときの様子はDVD『アンソロジー』で観ることができます（このときのギターは、ジョンとジョージの二人が弾いている）。

ペイパーバック・ライター志望の男が出版社に宛てた手紙の文面を歌詞にしている。「ペイパーバック」とは、硬い表紙（hardcover）が付いていない、安手な大衆小説のこと。And I need a job so I want to be a paperback writer（どうしても仕事が必要で、なんとかしてペイパーバック作家になりたいのです）と請うている。

CamScannerでスキャン

遠山　ジョンの家へ向かう車の中で、その日の朝に読んだ新聞記事をヒントにして曲をつくろうと思い立ち、ジョンの家へ着くと、ジョンの前で歌詞を書き、あとでメロディをつくった、とポールは述べています。

3声コーラスも見事ですが、リッケンバッカー4001による、迫力があって、しかもメロディアスなベース・プレイがまた素晴らしい。

すでにお気づきでしょうが、ステレオを意識して録音されています。イントロ、コーラス、ドラム・パートのところでは、音が左右を行ったり来たりして、ワイドなステレオ効果をぞんぶんに楽しめる。

DVD『アンソロジー』で、この曲のヴィデオ・クリップを観ることができます。ロンドン南西部にあるチズウィック・ハウスで撮影されたものです。ところで、ポールの前歯が一本ないことに気づきましたか。バイク事故に遭ったんです。それを見せないようにがんばっていますが、残念ながら隠しきれていません(笑)。

4. Rain

レイン

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1966年4月14・16日　Ⓛ 3分00秒　Ⓥ ジョン（ポール、ジョージ）

里中　〔ペイパーバック・ライター〕のB面になったジョンの作品。「これはビートルズの最高傑作だ」という"少数意見"がありますね(笑)。たしかに、瑕疵（かし）が見当らない。

まず、ドラムスが素晴らしい。リンゴは、このときのドラム・プレイを「レコーディングされたもののなかでは、最良の演奏だ」といっていますが、なるほど自画自賛するだけのことは

CamScannerでスキャン

あります。次に、ポールの、高音を強調した、創意に富んだベース。ハンマリングを多用して、曲をブンブン"煽動"している。

歌詞は、人生哲学的な含蓄をたずさえながらも、説教くさいくない。「雨が降ろうが、太陽が照ろうがどうでもいいことだ。すべては心の持ちようだ」とやさしく諭している。

遠山 『リヴォルヴァー』のレコーディング・セッションのときにつくられました。新しいサウンドづくりのための実験を繰り返していた時期です。たとえば、録音するときはテープ速度を上げ、再生するときは通常の速度へ戻す。すると、音色が変わることにジェフ・エメリックは気づいた。こうして、スタジオは"サウンド工房"と化していった。この〔レイン〕でも、テープの速度操作がおこなわれています。

逆回転の手法を取り入れた最初の曲としても有名。エンディングでわけのわからない言葉を発していますが、これがテープの逆回転で、レコードをターンテーブルに載せて指で逆回転させると（CDではそれができません）、If the rain comes they run and hide their heads（雨が降ってくると、みんな頭を覆って逃げていく）と、歌詞の冒頭と同じフレーズが聴こえてくる。

熱狂的なファンが多いですね。「最高のB面曲」ともいわれている。イギリスのロック・バンド、オアシスの前身は「レイン」でした。この曲から頂戴したバンド名であることはいうまでもありません。

CamScannerでスキャン

とコメントしている。

レコーディングがおこなわれたのは、インドのボンベイ（現在のムンバイ）にあるＥＭＩスタジオ。ジョージは映画『ワンダーウォール』のサントラを録音するためにこの地をおとずれた際（68年1月）、予定よりもレコーディングが早く終わったこともあって、現地のミュージシャンを使ってこの曲をはじめ、インストゥルメンタルの曲を数曲録音しています。

7. Hey Jude

ヘイ・ジュード

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1968年7月31日、8月1・2日
Ⓛ 7分07秒 Ⓥ ポール（ジョン、ジョージ）

里中　ポールの曲。レコーディングは、8トラックの機材のあったトライデント・スタジオでおこなわれた。気品がある。美しい曲です。しかし、「ナ〜ナナ、ナナナッナー」は長すぎやしませんか。7分7秒の演奏時間のうち、半分以上がこれですから。『アンソロジー3』に収録されているぐらい（4分19秒）がちょうどいいと思うんだけど。

ジョンの息子ジュリアンに向けて書かれた。ジョンとシンシアが離婚寸前だったころ、幼いジュリアンを励まそうとしてつくったといわれている。ポールは子どもと遊ぶのが好きで、ジュリアンもポールによくなついていたそうですね。

遠山　もともと〔ヘイ・ジュールズ〕（ジュールズはジュリアンの愛称）というタイトルでした。96年、この曲のレコーディング用の楽譜がオークションに出品された際、2万5千ポンドで落札したのが、ジュリアン・レノン本人でした。

おもしろいエピソードがたくさんあります。まず、ジョンはこの曲を自分自身とヨーコに向けられた励ましの曲だと勝手に

思い込んだ。二つめはリンゴのドラム。2番になってようやくドラムが入ってきますが、トイレから戻ってきたリンゴが叩き始めたのがたまたまそこだった(笑)。三つめは歌詞。The movement you need is on your shoulders (自分でなんとかするしかない)の部分を変えたいとポールがジョンにいったところ、「そこがいいんだ」といわれて、そのまま残すことになった。ポールはいまも、ライヴでこの部分を歌うたびに、ジョンのことを懐かしく思い出すそうです。四つめはポールのつぶやき。Remember to let her under your skin (心を開いて彼女を受け入れるんだぞ)のあと、ポールの「Fuckin' Hell」(くそっ)と声をあげるのが聞こえてきます。ピアノをとちって、思わず口をついた出たこの言葉を、ジョンが「消さずにとっておけ」といったので、そのままに残しておいたそうです。

8. Revolution

レヴォリューション

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1968年7月10・11・12日 Ⓛ 3分23秒 Ⓥ ジョン (ポール、ジョージ)

里中　ジョンの自信作。「レヴォリューション」という表現がついた三つの曲のうち、最後に録音されたのがこのヴァージョン。

最初にレコーディングした〔レヴォリューション1〕では、「破壊活動に走るというのなら、俺を仲間から外してくれ……やっぱり入れてくれ」(But when you talk about destruction / Don't you know that you can count me out... in) と歌っていますが、〔レヴォリューション〕では「オレを仲間から外してくれ!」(Don't you know that you can count me out) ときっぱり宣言している。"反革命的"というか、まっとうな主張というか。英米の過激派からは批

判を浴びたそうですが、いまとなってはジョンのほうが冷静だったような気がします。破壊的な急進主義を否定した、なんといいましょうか、漸進(ぜんしん)主義を重んじる知性を感じます。政治の季節だった1968年に、自分が「過激」でないことを告白することは勇気のいることだったでしょうね。ましてや、彼は世界でもっとも影響力のあるジョン・レノンだったわけですから。

遠山　18枚目のオリジナル・シングル〔ヘイ・ジュード〕のB面としてリリースされた。激しく攻撃的なファズ・ギター（エピフォン・カジノ）と、割れ気味の音を奏でるエレクトリック・ピアノ（ニッキー・ホプキンス）が印象的ですが、これは「革命」について歌った曲ではなくて、「革命」を叫ぶ人たちに対するジョンの返答なんです。

ジョンは、社会システムを変革するうえで暴力に訴えることの是非を周囲から問われていた。里中さんが指摘したように、〔レヴォリューション1〕の段階では、破壊活動の仲間に入れてくれ（in）と歌うか、外してくれ（out）と歌うかで、気持ちが揺れ動いた。でも、最終的な結論は、このヴァージョンで聴くことができる「外してくれ」だった。こうしてジョンは「非暴力の平和愛好者」への道を歩んでいきました。

9. Get Back

ゲット・バック

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年1月28日　Ⓛ 3分11秒　Ⓥ ポール（ジョン）

里中　19枚目のオリジナル・シングル。ポールの曲。アルバム『レット・イット・ビー』に収録されているものと、このシングル・ヴァージョンに使われている音源はまったく同じ（1月27日にスタジオで録音されたもの）。

CamScannerでスキャン

こちらはジョージ・マーティンがプロデュースしたもので、アルバムのほうはフィル・スペクター（プロデューサー）の手によるもの。こちらのエンディングには、アドリブのヴォーカルがつけ加えられている。私はどっちも好きだけど、こっちのほうがノリがいいと感じるのは、リンゴのドラム・プレイと、ビリー・プレストンのエレクトリック・ピアノのサウンドをフィーチャーしているからでしょう。

ジョンが、インタヴューで興味深いことを述べています。この曲は、「ヨーコとばかり一緒にいないで、バンドに帰っておいでよ」というポールからのメッセージだ、と語っている。だから、ポールはGet Back to where you once belong（もと居た場所に戻れよ）のフレーズを歌うとき、にっくきヨーコのほうをやたらと見ていたらしい。

遠山　アルバム・ヴァージョンもシングル・ヴァージョンも、ともにスタジオで録音されたもの。それに屋上ライヴでの「語り」を入れたりして、ともにライヴ感を演出している。1月30日のアップル・ビル屋上ライヴで録音されたものは、アルバム『アンソロジー3』に収められています。

ヴォーカルはもちろんですが、ビリー・プレストンのエレクトリック・ピアノがいい。シングル発売されたときのクレジットに「The Beatles with Billy Preston」とあるように、ビリー・プレストンは公式にクレジットされた唯一の外部ミュージシャン。とてもいい仕事をしている。

ゲット・バック・セッションの支柱となるナンバーで、歌詞を見れば、ジョンに「昔に戻ろう」と訴えていたのは間違いありません。

10. Don't Let Me Down

ドント・レット・ミー・ダウン

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年1月28日 Ⓛ 3分33秒 Ⓥ ジョン(ポール、ジョージ)

里中　ジョンの作品。〔ゲット・バック〕のB面としてリリースされました。アップル・ビルの屋上でこの曲を演奏するシーンが映画『レット・イット・ビー』にあるのに、どういうわけかアルバム『レット・イット・ビー』には収録されなかった。これは、屋上ライヴ(30日)の2日前、28日にスタジオでレコーディングされたもの。屋上ライヴのものはアルバム『レット・イット・ビー…ネイキッド』に収められている。

ジョンのヴォーカルが素晴らしい。コピー・バンドがよくこの歌を演奏するのですが、イントロが終わって、Don't let me down(がっかりさせないでくれ)と声をふり絞るのですが、その声があまりにも貧弱で、ほとんどの場合、「がっかり」させられます(笑)。

名演奏ですね。ビリー・プレストンのエレクトリック・ピアノ(フェンダー・ローズ)からつむぎだされるメロディが、このうえもなく美しい。とくにエンディングの部分がなかったら、曲の魅力は半減ですね。それから、ポールのベース(ヘフナー500/1)。即興で弾いているように聴こえるけど、丁寧にチェックしていくと、じつに計算し尽くされたフレーズであることがわかる。いいテイストです。

遠山　この曲はジョンがヨーコに捧げたもの。素直な愛情をストレートに歌いあげている。僕の大好きな曲。後期ビートルズのなかでも、傑出したナンバーといえる。

ビリー・プレストンの演奏が素晴らしい。途中、ジョンの叫び声やつぶやきが入りますが、これも含めてそこが最良のパー

トでしょう。
あまり知られてはいませんが、ジョンはビリー・プレストンをビートルズのメンバーに加えたがった。ジョンは本気だった。そのテープも残っています。でも、ポールの反対によって実現しなかった。ジョンがビリー・プレストンの人柄と才能に惚れ込んでいたのはたしかです。

11. The Ballad Of John And Yoko

ジョンとヨーコのバラード

Ⓦ Lennon / McCartney
Ⓡ 1969年4月14日 Ⓛ 2分58秒 Ⓥ ジョン（ポール）

里中　ジョンとヨーコのハネムーンの顚末（てんまつ）を歌った曲。ジブラルタルでの結婚式、平和のための「ベッド・イン」、偏見のないコミュニケーションを訴えた「バッグ・イン」、各国の指導者にドングリの実を送った「平和のためのドングリ運動」などが歌い込まれている。歌詞の中に出てくるピーター・ブラウンは、アップルの重役で、二人の結婚式の立会人。
これ、ジョンとポールだけでレコーディングしています。ジョンがギターと打楽器、ポールがドラムス、ピアノ、ベース、マラカスをやっている。それにしては、というべきか、二人だからこそというべきか、ひじょうに巧みにつくり込んでいます。曲調もいい。
でも、なんだかビートルズの曲らしくない。タイトルからして、「ビートルズから離れたジョン」というイメージが強い。ソロで発表したほうがよかったように思います。まあ、そうなるとポールの演奏が聴けなくなってしまうわけですけど。
遠山　ジョンが「早くレコーディングしたい」と駄々をこねて、ポールと二人で完成させてしまった。4月14日、ジョンはポー

ルの家をいきなり訪れ、ポールを説得して、そのままアビイ・ロードのスタジオに行き、レコーディングに取りかかった。このときリンゴは、ピーター・セラーズ主演の映画『マジック・クリスチャン』に出演中で留守。ジョージも休暇中で英国を離れていた。リリースも早かった。前作のシングル『ゲット・バック』から2か月も経たないうちに、20枚目のシングルとして発表された(69年5月30日)。せっかちなジョン。でも、2週間もしないうちに全英1位。やることが、かっこよすぎる。

ジョンとポールが険悪な関係にあったとされている時期ですが、録音中にジョンが「リンゴ、もっとテンポをあげて」というと、ポールが「OK、ジョージ」と答えるなど、和気あいあいのムードの中でつくられました。それも1日ですべてを録り終えている。

12. Old Brown Shoe

オールド・ブラウン・シュー

Ⓦ George Harrison

Ⓡ 1969年4月16日　Ⓛ 3分17秒　Ⓥ ジョージ(ジョン、ポール)

里中　ジョージの作品。愛する人に贈った歌。人を半眼で見るようなアイロニックな歌詞は、いかにもジョージらしい。Now I'm stepping out this old brown shoe (履き古したこの茶色い靴はもう脱ごう)は、ビートルズ脱退の決意ともとれる。

ヴォーカルもジョージ。前曲〔ジョンとヨーコのバラード〕のB面として発表されました。悪い曲じゃないと思うけど、いかんせんジョージのヴォーカルが弱い。ジョンが歌えば、いい出来ばえになったんじゃないかな。

この時期、ジョンがジョージの曲に参加するのはめっきり減っていましたが、ここではリズム・ギターで参加しています。

CamScannerでスキャン

でも、ジョンが弾いたリズム・ギターのパートは消され、最終ミックスではジョージのハモンド・オルガンに取って代えられた。これは、ジョージの腹いせでしょうか（笑）。

リンゴのドラミングが素晴らしい。一度、このプレイだけに絞って耳を傾けていただきたい。すごく複雑で、それがまたピッタリ曲に合っている。ベースもいい。誰ですか、ポールがこんなベースを弾くかなあ。ジョージ？

鈴木　スピード感のある曲ですね。パワフルなベースを弾いているのはポールでしょう。ジョージがオクターヴ・ユニゾンで弾いている箇所もあるのでわかりにくいですが、僕はポールだと思います。でも、グラフィックなフレーズには、ジョージのアイディアが入っていると思われます。イントロから聴こえるピアノは、もちろんポール。

91年の日本公演では、オープニングが〈アイ・ウォント・トゥ・テル・ユー〉、2曲目がこの曲でした。ヒット曲で聴衆の心をつかむのではなく、僕はこういう曲が好きなんだ、といわんばかりの演出でした。職人ジョージの趣味を覗き見るようで、とってもうれしくなりました。

13. Across The Universe

アクロス・ザ・ユニヴァース

● Lennon / McCartney　● 1968年2月4・8日、69年10月2日
● 3分48秒　● ジョン（ポール、ジョージ）

藤本　ジョンの曲。ジョンのアコースティック・ギター（マーティンD28）がいいですね。ワウワウをかけたエレクトリック・ギター（エピフォン・カジノ）もジョン。ということで、2本のギターはともにジョン。

このヴァージョンには、鳥が鳴いたり羽ばたいたりする音、

CamScannerでスキャン

それから女性だけのコーラスも入っていますね。女性のコーラスっていうのが、ビートルズらしくない。ジョンも気に入らなかったようですが、どうしてこんなことをやったのですか。

遠山　これはジョージ・マーティンのアイディアです。喜劇俳優スパイク・ミリガンが企画したWWFのチャリティ・アルバム『ノー・ワンズ・ゴナ・チェンジ・アワ・ワールド』のために提供したものなので、自然と人間の調和という観点から見た場合、足りなかったのは女性の声だったというわけです。なんと、このコーラスを担当したのは、その日たまたまスタジオの前でたむろしていた二人の女性ファン。わざわざプロの女性ヴォーカリストに依頼するのが面倒だったらしく、ポールがスタジオの外に出ていって、彼女たちを招き入れた。そうして、Nothing's gonna change my world（なにも僕の世界を変えることはできない）と歌ってもらった。そんなことってあるんですね。ちなみに、その幸運な女の子の名前は、リジー・ブラヴォーとゲイリーン・ピース。

このバード・ヴァージョンは、もとの音源から回転数をやや上げ、キイをEに近いDシャープにしてアレンジされました。完成度は、アルバム『レット・イット・ビー』に収録されたヴァージョンのほうが高いと思われますが、歌詞のニュアンスをうまく伝えているのは、ジョージ・マーティンによるこのヴァージョンでしょう。

14. Let It Be

レット・イット・ビー

W Lennon / McCartney　R 1969年1月31日、4月30日
L 3分50秒　V ポール（ジョン、ポール、ジョージ）

里中　シングルの22枚目。70年3月6日に発売されました。ビートルズ最後のシングル。

アルバム・ヴァージョンと比べると、ポールの声にエコーがかかっているし、間奏のジョージのギター・ソロが違いますね。周りの人たちに、どっちのヴァージョンが好きかと尋ねてみると、ちょうど半々というところ。ビートルズらしさを重視するファンはこのシングル・ヴァージョン（プロデューサーはジョージ・マーティン）を、演奏の重厚さや生々しさに注目している人たちはアルバム・ヴァージョン（プロデューサーはフィル・スペクター）を評価しているみたい。

また、この曲に、宗教性を帯びた高い啓示を感じる者がいるいっぽう、たんなる一人よがりの高揚感とみなす人たちもいます。カトリックの見せかけの信心深さを嗅ぎとったジョンは、1月31日のセッションで、「で、俺たちはソロのあいだ、クスクス笑っていればいいのかい？」と冷淡な口調でポールに問いかけたらしい。ジョンの意図やポールの真意はともかく、歌詞も演奏も素晴らしい。

遠山　ポールはもともとゴスペル調にしようという構想を持っていたようで、ビリー・プレストンにアイディアを求めています。結果、ゴスペルっぽいコーラスとオルガンのサウンドを入れることにより、宗教的な荘厳さが漂いました。

ジョージのギターですが、アルバムのほうは「うまさ」を感じますが、こちらのほうは「落ち着き」を感じます。全体的にアルバム・ヴァージョンは「大げさ」で、シングル・ヴァージョ

CamScannerでスキャン

ンは「控えめ」です。オーケストレーションの問題ですね。で、どちらがビートルズらしいかというと、もちろんシングル・ヴァージョンのほう。とにかくバランスがいい。バランスといえば、『レット・イット・ビー…ネイキッド』もバランスがよくない。でも、ジョージのギターがオーヴァーダブじゃなく、ライヴで弾いたものであるのがうれしい。

15. You Know My Name (Look Up The Number)

ユー・ノウ・マイ・ネーム

Ⓦ Lennon / McCartney Ⓡ 1967年5月17日、6月7・8日、69年4月30日、11月26日 Ⓛ 4分19秒 Ⓥ ジョン、ポール

里中　ふざける。からかう。すかす。とぼける。ぶちかます。騒ぐ。狂う。調和させる。ビートルズはこうしたことを徹底的にやりまくったバンドでした。名声と名誉だけを欲したグループじゃない。そのことはこの歌を聴けばわかる。でなければ、「20世紀でもっとも偉大なポップ・グループ」が、こんなわけのわからない「お遊びソング」をつくるはずがない(笑)。それも解散寸前のときのレコーディング。いいなあ、ビートルズ。You know my name (わたくしの名を知っていますよネ) / Look up the number (だったら電話番号を調べてネ) とずっとこんな調子……。やはりビートルズは偉大でした。

遠山　シングル〔レット・イット・ビー〕のB面に収録されたのがこれ。『マジカル・ミステリー・ツアー』のセッション中に録音がスタートしましたが、未完のまま2年ほど放置されました。

　曲の最後で聴こえるサックスはローリング・ストーンズのブライアン・ジョーンズ。楽曲にぴったりのプレイを披露してくれましたが、残念ながら、このシングルが発売されたときには故人となっていました。

CamScannerでスキャン

ポールが「この曲のレコーディングは最高に楽しかった」と発言しているとおり、みんなノリノリだったようです。ある意味、僕がいちばんビートルズらしさを感じる楽曲。曲のクリエイティヴな生成過程がよくあらわれている。ビートルズって、こんなふうにして曲をつくったんだということを如実に伝えている。いわば、楽屋裏を生々しく見せている曲。彼らの"本性"を永久に保存しているという点で、もっともビートルズらしい曲だといえるのではないでしょうか。そういう視点でこの曲を眺めたとき、僕はビートルズの真実が見えてきた気がした。それにしても、これを最後のシングルにするだなんて、ビートルズは最高にイカしたバンドですね。

CamScannerでスキャン

The Beatles were then just four lads
on that rather dimly lit stage.

ビートルズはそのとき、薄暗いステージに立っている
4人の若造にすぎなかった。

—Brian Epstein

ブライアンがビートルズを見つけたのは1961年。彼らはそのとき
キャヴァーン・クラブ（リヴァプール）のステージで演奏していた。

CamScannerでスキャン

あとがき ――「私の好きな曲」対談

里中　ビートルズのファンにとって、「好きなビートルズ・ナンバーは？」と聞かれることほど愉快な気分になることはありません。ほんとうに楽しいお遊びです。そのときどきで曲も順位も入れ替わるのをあらかじめ告白しつつ、私たちも遊びに興じてみましょうよ。

遠山　里中さんからそういわれて、準備してきたんですけど……大いなる共感と侮蔑を受けるのを覚悟して、披露させていただきます。

里中　では、僭越ながら、私のほうから。〈Twist And Shout〉〈Rock And Roll Music〉〈Please Mister Postman〉のような名カヴァー曲もありますが、ビートルズのつくった楽曲に限定して15曲選びました。

里中哲彦の15曲

1. Please Please Me
2. She Loves you
3. We Can Work It Out
4. A Hard Day's Night
5. Help!
6. You're Going To Lose That Girl

CamScannerでスキャン

7. Ticket To Ride
8. Norwegian Wood
9. Nowhere Man
10. In My Life
11. The Fool On The Hill
12. A Day In The Life
13. Happiness Is A Warm Gun
14. Two Of Us
15. I've Got A Feeling

遠山　ジョンの曲が多いですね。
里中　やっぱり、声に惚れちゃうとねぇ。
遠山　僕のほうは、次の15曲です。僕はビートルズらしさがでている曲をいろいろと考慮して……。
里中　つべこべいわず、早くだして(笑)。
遠山　あ、はい。ときに15曲というところが鋭いですね。10曲では少なすぎて選ぶのが難しい。しかし20曲では読むほうが少々疲れる……。15曲は、じつにいい数字。
里中　能書きはいいから、さっさと披露してください。
遠山　それでは発表します。

遠山修司の15曲

1. Ask Me Why
2. It Won't Be Long
3. She Loves You
4. Tell Me Why
5. No Reply
6. I Need You

CamScannerでスキャン

7. In My Life
8. For No One
9. With A Little Help From My Friends
10. Magical Mystery Tour
11. Penny Lane
12. I Will
13. Don't Let Me Down
14. Here Comes The Sun
15. You Know My Name

里中　えっ、「You Know My Name」が入りますか。

遠山　楽曲解説のところでもしゃべりましたが、ビートルズというバンドの、曲づくりにおけるクリエイティヴなプロセスが如実にあらわれている曲なんです。

里中　「I Will」に「Here Comes The Sun」かあ。見かけによらず、可憐な歌が好きなんですね。

遠山　心やさしき武道家なんです（笑）。

里中　次は、この本をつくるにあたって、こまごまとした編集作業を手伝ってくれたヨシダ・アナソウルくん（学習院大生）です。

ヨシダ・アナソウルの15曲

1. She Loves You
2. I'll Cry Instead
3. I Don't Want To Spoil The Party
4. Eight Days A Week
5. I Need You
6. Norwegian Wood
7. You Won't See Me

8. Paperback Writer
9. For No One
10. Strawberry Fields Forever
11. She's Leaving Home
12. Something
13. Octopus's Garden
14. You Never Give Me Your Money
15. Two Of Us

遠山　〔I'll Cry Instead〕や〔I Don't Want To Spoil The Party〕を入れているところがニクいね。若いのに、苦労しているのかな。「ネアカなのにネクラなふりをする青年」という気がします（笑）。

里中　次は、本書の企画・編集をすべてやってくださった中央公論新社の学芸局長・郡司典夫さんです。選曲にあたって、メンバー個々人の才能・魅力が横溢している曲よりもビートルズというグループの魅力がでているという曲に重きをおくという条件をつけたとのことです。

郡司典夫（編集担当者）の15曲

1. Please Please Me
2. She Loves You
3. All My Loving
4. I Want To Hold Your Hand
5. I'll Be Back
6. Things We Said Today
7. Help!
8. Run For Your Life
9. I'm Only Sleeping

CamScannerでスキャン

10. Here, There And Everywhere
11. A Day In The Life
12. Strawberry Fields Forever
13. Revolution 1
14. Get Back
15. Two Of Us

森山　5、6のつながりがない。「それでも絶望を求めるポストモダニスト」という気がします。

筆者　「それでも」というのは何？（笑）　さて、4人が共通に選んだのは「She Loves You」のみ。

森山　「She Loves You」、イェイ！

筆者　森山さん、ハイですね。

森山　だって、楽しいですもん。

筆者　それから、私たちの原稿をいつも丁寧に校閲してくれる水山明子さん。ビートルズのファンで、彼女が挙げてくれたのは次の3曲です。

1. Twist And Shout
2. Helter Skelter
3. The End

森山　一瞬目を疑いました。

筆者　私もそう（笑）。ある意味、究極の3曲かもしれない。

森山　肉食系才女という印象。実際はどうなのでしょう。

筆者　前著『ビートルズの真実』につづいて、本書の装丁をしてくれた細野綾子さんもビートルズが大好きとのこと。彼女は、この3曲です。

1. A Hard Day's Night
2. And I Love Her
3. I Want You (She's So Heavy)

遠山　「I Want You」が入っていますね。
里中　永山さんといい、あらためて女性がコワくなってきました。
遠山　細野さんはおそらく、情熱の人ですね。
里中　ところで、イギリスの人たちはどんな曲が好きなんだろう。おみやげがあると聞いたんですが。
遠山　英国から持ってまいりました。僕の友人や知人たちに「私の好きな1曲」を選んでいただきました。
里中　ワクワクします。
遠山　一覧表を作成してきました。どうぞ。

アラン・ウィリアムズ Allan Williams デビュー前のビートルズのマネージャー	The Fool On The Hill
トニー・バーロウ Tony Barrow ビートルズの広報担当／『ビートルズ売り出し中！』の著者	I Feel Fine
トニー・ブラムウェル Tony Bramwell 元アップル・コープスのマネージャー	いま聴いている曲。
フリーダ・ケリー Freda Kelly ビートルズ・ファン・クラブの会長／ビートルズ4人の秘書	選べません。

CamScannerでスキャン

アストリット・キルヒヤー
Astrid Kirchherr
ハンブルク時代からのビートルズの友人／女性写真家
Norwegian Wood

メイ・パン
May Pang
ヨーコが"公認"したジョンの愛人／ヨーコのアシスタント
There's A Place

ピーター・アッシャー
Peter Asher
ピーター＆ゴードン／ポールの恋人ジェーン・アッシャーの兄
I Want To Hold Your Hand

ジョー・フラナリー
Joe Flannery
ブライアン・エプスタインの友人／音楽プロモーター
The Long And Winding Road

サム・リーチ
Sam Leach
ビートルズの元プロモーター
In My Life

ピート・ベスト
Pete Best
ビートルズの元ドラマー
I Saw Her Standing There

ロリー・ベスト
Rory Best
ピート・ベストの弟
Taxman

ローグ・ベスト
Roag Best
ピート・ベストの弟
All You Need Is Love

ジェニー・ボイド
Jenny Boyd
ジョージの元妻パティの妹
Things We Said Today

ハンター・デイヴィス Hunter Davies 『ビートルズ』の著者	Eleanor Rigby
バリー・マイルズ Barry Miles 著述家／ポールの自伝的『メニー・イヤーズ・フロム・ナウ』の著者	A Day In The Life
ウルフ・クルーガー Ulf Krueger ミュージシャン／ハンブルク・サウンド研究家	Please Mister Postman
ピート・ナッシュ Pete Nash 『ブリティッシュ・ビートルズ・ファン・クラブ・マガジン』編集長	I Saw Her Standing There
ケヴィン・ローチ Kevin Roach ビートルズおよびリヴァプール研究家	I Call Your Name
アンマリー・トレイス Anne-Marie Trace 『[illegible]』誌編集長	Birthday
レン・ギャリー Len Garry クオリーメン	I'll Be On My Way*
ロッド・デイヴィス Rod Davis クオリーメン	Penny Lane
ジェリー・マースデン Gerry Marsden ジェリー&ザ・ペイスメイカーズ	Please Please Me

＊公式未発表曲だが、『ライヴ・アット・ザ・BBC』に収録